

## 自然会話分析と会話教育

—統一的モジュール作成への模索—

## 目 次

学長挨拶	池端 雪浦	3
言語運用を基盤とする言語情報学拠点	川口 裕司	5
まえがき	宇佐美 まゆみ	9
1. 『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語 2』の解説		
1 挨拶をする	関崎 博紀	13
2 感謝する	李 恩美	15
3 注意をひく	黄 瓊芸	17
4 自己紹介をする	金 銀美	19
5 あやまる	施 信余	22
6 何かをあげる	李 恩美	25
7 さよならを言う	李 恩美	27
8 情報を求める (金額)	朴 銀南	30
9 情報を求める (経験)	朴 銀南	32
10 予定を言う	鈴木 卓	46
11 情報を求める (程度)	朴 銀南	49
12 情報を求める (時間)	朴 銀南	59
13 情報を求める (数字)	朴 銀南	74
14 何でどのようにするかを言う	木林 理恵	79
15 技能・能力について尋ねる	鈴木 卓	81
16 情報を求める (存在と場所)	木林 理恵	84
17 情報を求める (属性)	木林 理恵	86
18 意見を言う	木林 理恵	87
19 嗜好について述べる (もの)	木林 理恵	90
20 嗜好について述べる (行動)	木林 理恵	93
21 手順と順序について述べる	木林 理恵	95
22 どうしているかを尋ねる	李 恩美	97
23 ある条件での行動を言う	林 君玲	98
24 比べて述べる (比較と最上級)	謝 韞	100
25 提案する	謝 韞	102
26 理由を述べる	李 恩美	105
27 依頼する	謝 韞	108
28 例をあげて述べる	カチマレク・ミロスワバ	110
29 妥協する	鈴木 卓	116
30 許可を求める	謝 韞	118
31 義務を確認する/肯定する	木林 理恵	121
32 禁止する	李 恩美	123

33	指示する	謝 韞	125
34	非行為を依頼する	謝 韞	127
35	義務を確認する/否定する	木林 理恵	130
36	招待する	木林 理恵	130
37	助言する	木山 幸子	130
38	要求する	謝 韞	134
39	希望を述べる	張 鈞竹	137
40	人を紹介する	木林 理恵	139
<b>2</b>	<b>『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1』を用いた研究</b>		
	親しい日本語母語話者同士による悪態	関崎 博紀	141
	—会話教育への示唆—		
	日本語の雑談における不同意の様相	木山 幸子	165
	—会話教育への示唆—		
	教師と学生のインターアクションにおける言語行動分析	カチマレク・ミロスワバ	183
	—日本語とポーランド語の対照研究への試み—		
	携帯電話の会話における開始部と終結部	黄 瓊芸	199
	—日本人同士と台湾人同士の比較研究を通して—		
	談話レベルからみた依頼に対する「断り」の言語行動について	施 信余	223
	—日本人大学生と台湾人大学生との比較—		
<b>3</b>	<b>『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話2』を用いた研究</b>		
	接触場面におけるコミュニケーション調整行動	金 銀美	243
	—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話より—		
	台湾人学習者の初対面日本語会話における	林 君玲	261
	スピーチレベルの使用実態		
	台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用	張 鈞竹	281
	—コミュニケーション機能を中心に—		
<b>4</b>	<b>資料編</b>		
	本報告書に用いた記号凡例		301
	索引		305
	資料		
	2004年度 講演会		309
	2003年度 講演会		310
	2004年度 第1回研究会—第12回研究会		310
	2003年度 第1回研究会—第21回研究会		313
	2002年度 語学研究所定例研究会 第1回—第6回		318
	出版物		321

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

## 学長挨拶

池端 雪浦  
(東京外国語大学学長)

2002年度から開始された文部科学省の「21世紀COEプログラム」は、我が国の大学に、世界最高水準の研究教育拠点(Center of Excellence)を学問分野毎に形成し、研究水準のいっそうの向上と世界をリードする創造的な人材の育成をめざしています。本学は、「人文科学」と「学際・複合・新領域」の2つの学問分野にそれぞれ1件の申請を行い、人文科学では「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、学際・複合・新領域では「史資料ハブ地域文化研究拠点」が採択されるというすばらしい結果をえました。本学大学院地域文化研究科の、個性ある研究教育のポテンシャルが高く評価されたことを嬉しく思います。これら二つの拠点は、言語研究と地域文化研究における世界的な教育研究拠点を目指そうとする本学の将来構想の主要な推進力・両輪であると考えられています。拠点活動の開始から2年を経過し、それぞれの拠点の活動は、すでに大きな成果と波及効果を生みだしつつあります。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、「TUF5言語モジュール」と呼ばれるインターネットを活用した17言語の多言語ウェブ教材を開発していますが、これは情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を統合させた「言語情報学」という新しい学問領域からの研究であり、拠点形成の中心的な学術的成果です。この拠点を全学的見地から支援するために、学長直属の「21世紀COEプログラム運営室」を設置しています。この運営室は、学長、副学長、研究科長、拠点リーダーをはじめ、大学院を支える学部ならびにアジア・アフリカ言語文化研究所の長、さらに事務局長以下事務局幹部から構成され、部局横断かつ事務局・教員が文字通り一体となった組織です。運営室は、拠点の支援のために学内諸組織間の連携体制を構築するとともに、総計300平米におよぶスペースの提供や在外調査研究旅費などの学内予算措置をはじめとする支援を行っています。

今後もさらに推進メンバーの方々が精力的にプロジェクトに取り組み、大きな研究成果をあげ、言語情報学拠点から次世代のわが国の言語研究と外国語教育を担う人材が多数輩出されることを願ってやみません。21世紀COEプログラムの成功のために、本学の叡智を結集し、大学全体として協力してゆく所存です。

2004年12月24日

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

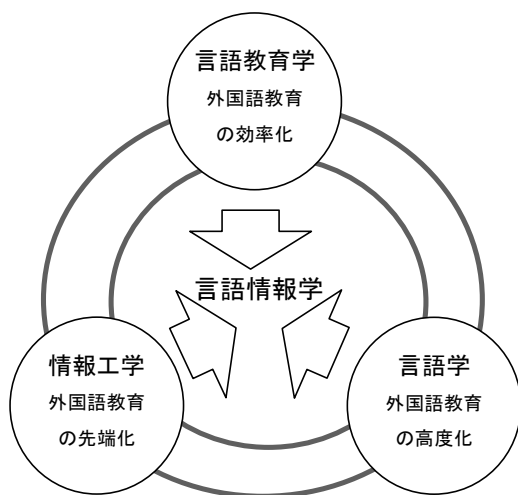
# 言語運用を基盤とする言語情報学拠点 Center of Usage-Based Linguistic Informatics (UBLI)

川口 裕司  
(COE 拠点リーダー)

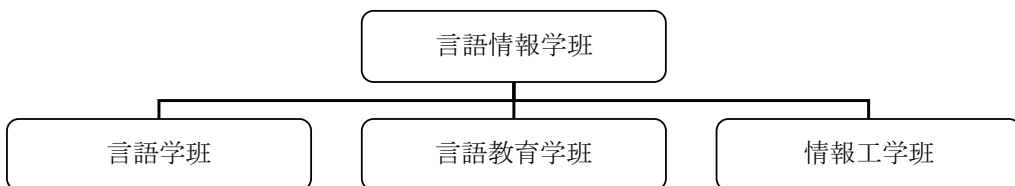
## 言語情報学

情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を有機的に統合し、「言語情報学」という新たな学問分野の世界的な研究拠点を創成することが、このプロジェクトの目的です。ボーダレスな多言語時代に入った現在、言語教育においても情報技術に裏づけされた多言語 e-Learning システムを構築し、高度で効率的な教育を行なうことが望まれます。

この COE 計画では、4 つの研究班が組織され、各班は緊密な連携をとりつつ研究が進められています。



## 研究組織



言語情報学班は言語情報学の研究全体を統括し、COE 計画において中心的な役割を担う研究班です。この班のもとに言語学班、言語教育学班、情報工学班の 3 つの班が形成され、個々の専門分野における研究のほかに、言語情報学的研究を推進するための基礎研究を行なっています。

研究組織の全体を統括するのは、21 世紀 COE の事業進担当者のうちの 7 名からなる統括班で、年次計画の遂行に関わる重要な意思決定は統括班会議でなされます。さらに各班の連携がより緊密になるように、連絡班も設置されています。連絡班の会議も頻繁に開か

れ、プロジェクトの進捗がお互いに報告されます。

統括班： 在間 進, 高垣 敏博, 敦賀 陽一郎, 芝野 耕司, 峰岸 真琴,  
宇佐美 まゆみ, 川口 裕司

連絡班： 浦田 和幸, 黒澤 直俊, 海野 多枝, 吉富 朝子, 佐野 洋,  
林 俊成

冒頭にも述べたように、この COE 計画によって創成される新たな学問分野である言語情報学は、情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を統合した学問分野です。言語情報学の最も目にみえる成果は、17 の言語を対象とするインターネット上の言語学習システム、「TUF5 言語モジュール」です。

### TUF5 言語モジュール (TUF5 Language Modules)



<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>

TUF5 言語モジュールは 2003 年 4 月 25 日に内部公開が始まり、字句の修正や誤植の訂正が行なわれました。まず最初に外部公開されたのは、IPA (International Phonetic Alphabet, 国際音声字母) モジュールです。続いて公開されたのが発音モジュールで、2003 年 9 月に一挙に、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、フィリピン語、ベトナム語、日本語の 11 言語が公開されました。

そして 2003 年 12 月 12 日に、後で述べます国際会議の開催に合わせて、会話モジュールが 17 の全ての言語で公開されました。

TUFS 言語モジュールの 17 言語

<p>英語 ドイツ語 フランス語 スペイン語 ポルトガル語 ロシア語</p>		<p>中国語 朝鮮語 モンゴル語 インドネシア語 フィリピン語 ラオス語 カンボジア語 ベトナム語 日本語</p>
<p>アラビア語, トルコ語</p>		

モジュールと通言語的発想

TUFS 言語モジュールは今までにない新しいタイプのウェブ教材です。その名のとおり、「モジュール的発想」に基づいて作られています。TUFS 言語モジュールでは、言語学習は発音、会話、文法、語彙の 4 つのモジュールに分解され、それぞれのモジュールはある程度まで互いに独立しながら、全体として一つのまとまりをもった言語教材を構成すると考えます。もちろん言語学習が一つの統合された一体性のある営みであることは言うまでもありません。しかしモジュール化によって、「どのモジュールからでも」自由に好きなところから言語学習を始めることができることは、少なくともデメリットではありません。それどころか改訂や修正が容易なことはモジュール教材のメリットと言えるでしょう。

ところで TUFS 言語モジュールにより、より自由な学習設計が可能になるわけですが、学習の達成度や到達度を知るには、やはり何らかの統一的な物差しが必要になります。この COE 計画では、さらに一歩進んで、TUFS 言語モジュールを用いた、東京外国語大学独自の言語能力記述モデルを追求し、将来的に一つの統一的モデルを提案する予定です。17 の言語にわたって、ある程度まで共通に言語能力を記述することが可能になれば、中等・高等教育における言語教育に一時代を画することになるでしょう。ヨーロッパやアメリカではこれまで多言語に共通の言語能力記述の研究が地道に行なわれてきているだけに、日本でも同様の取組みに、今、着手することは大変重要だと思います。

多言語による双方向モジュール

一つの同じ教材をいろいろな言語で学ぶことができたらどうでしょうか。それを実現しようというのが TUFS 言語モジュールの多言語版です。今のところ、英語とモンゴル語と中国語（繁体字）のわかる人が、日本語の発音モジュールと会話モジュールを学習できる

ようになっています。今後もさらにモジュールの多言語化を推し進めていきます。

インターネット上の素材は取りかえがとても簡単です。TUFS 言語モジュールも同じです。まず言語素材が作成され、次にそれがウェブ化されます。そして実際に教材が使用され、評価が戻ってくると、もとの言語素材に修正や改訂が加えられ、新たなモジュール教材として生まれかわります。

## 第1回言語情報学国際会議

21世紀COEが採択されるとすぐに、国際会議の準備が進められました。2002年末に会議の輪郭を決定しました。こうして2003年12月13・14日の両日に、東京外国語大学で第1回言語情報学国際会議（The First International Conference On Linguistic Informatics）が開催されました。

従来から言語理論とコンピュータ科学が言語教育や言語習得に影響を与えてきたことは周知のことです。しかしながら、これら三つの研究領域の統合と協働は必ずしも行われてきていません。このCOE計画が目指すのはそれらの学問領域の有機的な統合です。

言語情報学の創成により、従来の言語学と応用言語学の成果は情報工学の基盤の上に統合されます。この国際会議では言語情報学という新しい統合的学問領域の現状を認識し、将来の可能性を考えます。会議は三つのセッションからなります。

1. コンピュータ言語学・・・コンピュータ科学と言語学の協働の可能性
2. コーパス言語学・・・・・・・・コーパス言語学の現状
3. 応用言語学・・・・・・・・第二言語習得と言語理論との関連性

会議には海外や国内の研究機関より多数の研究者をお招きし、2日間で延べ300名の出席者があり、活発な議論が交わされました。本学からも教員と大学院生が複数の報告を行いました。言語情報学という統合的学問分野は、コンピュータ言語学、文献学、方言学、コーパス言語学、語用論、応用言語学、e-Learningなどの多岐にわたる研究分野と関連します。そのため会議の参加者がそれぞれの報告や議論の内容を理解できるように、事前に予稿集を出版して会議に臨みました。この会議報告集を通して、言語情報学の裾野の広さを認識するとともに、その現状と課題が明らかになることと思います。

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

## まえがき

宇佐美 まゆみ

(事業推進担当者, 言語教育学班－談話グループ)

本報告集『自然会話分析と会話教育－統合的モジュール作成への模索－』は、平成 14 年度 (2002 年度) に文部科学省によって採択された 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の「言語教育学班, 談話グループ」の研究成果報告集である。

本研究に先立っては、また、併行して、以下の 2 つの科学研究費補助金による研究が進められてきた。

平成 13～14 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』研究代表者 宇佐美まゆみ (東京外国語大学外国語学部教授)

平成 15～18 年度 (予定) 科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2)) 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』研究代表者 宇佐美まゆみ (東京外国語大学外国語学部教授)

また、1997 年度から 2003 年度現在に至るまで、東京外国語大学外国語学部言語社会心理学・日本語教育学研究室 (宇佐美まゆみ教授) では、当研究室にて修士論文、卒業論文を執筆した学生たちの多くが寄贈してくれた貴重な「話し言葉データ」を、研究室にこつこつと整備し、保存・蓄積してきた経緯がある。

2002 年 10 月に本 COE 拠点が発足した際、これまでの下地に支えられて、本研究室の大学院生たちを中心に「東京外国語大学 COE 言語教育学班談話グループ」が構成されたのは、単なる偶然ではない。その後「言語教育学班談話グループ」は、2002 年度には、これまで「言語社会心理学研究室」にて蓄積してきた「自然会話データ」の中から、「TUFUS 会話モジュール」にある 40 の見出し機能に対応する「自然談話」を一つひとつ抜き出していき、1 つの試作版コーパスを作成した。しかし、「機能に基づく談話コーパス」の構築は、そんなに容易なことではなかった。談話の最初と最後を何によって同定するか、形式と機能をいかに扱うか、複数の機能をどう扱うか等々、いずれの場合も、妥当、且つ、客観的な機能の認定基準を設けることの難しさを改めて痛感した。

この試作版談話コーパスの作成にも約 1 年を要したが、この経験を生かして、2003 年度末に、ようやく、より精練された基準に基づいて、まずは、「TUFUS 会話モジュール」にあ



る 40 の見出し機能に対応する「自然談話」を集めたコーパスを構築することができた。地道で、予想以上に時間と労力がかかる作業であった。しかし、その着実なプロセスから、今後の話し言葉コーパスの構築とその分析に示唆できる貴重な知見が得られたことは確かである。この話し言葉コーパスの作成過程自体についての分析、及び、談話の基本情報の分析については、21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の報告集のひとつである『言語情報学Ⅲ 第 1 回言語情報学国際会議報告集 言語情報学—現状と未来—』の中の、関崎他（2004）にまとめてある。

TUFS 会話モジュールの見出し機能に対応させたコーパスに加え、新たに収集した自然会話データを中心にまとめたものも含め、2003 年度には、以下の 3 種類の自然談話コーパスを構築した。

① TUFS 会話モジュールの 40 の見出し機能に対応させた自然会話データである『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』（2002 年度作成の『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 1』をさらに精選したコーパス）

② 2003 年度に収集した談話データからなる『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 1（日本語母語話者同士の会話）』

③『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 2（日本語母語話者と学習者の会話）』である。

本報告集は、機能ごとにまとめた話し言葉コーパスについての解説、及び、これらのコーパスを使用した研究をまとめた諸論文を、「東京外国語大学 COE 言語教育学班、談話グループ」の成果の一つの区切りとして収めたものである。以下に、本報告集の構成と内容について簡単に説明しておく。

## 1. 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』（TUFS 会話モジュールの 40 の見出し機能に対応）の解説

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』は、創作された会話である「TUFS 会話モジュール」のスキットと自然会話との比較対照研究を行うために作成された。このコーパスには、TUFS 会話モジュールで扱われている 40 の各見出しに相当する談話を、自然会話データ（全 186 会話・約 643 分）から抽出したものが収録されている（全 786 談話：8527 発話文）。ここでは、各機能を含む自然談話の特徴と、その中における各機能の実現についてまとめ、各機能の特徴をいかに会話教育に取り入れていくことができるかという観点から解説した。

## 2. 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 1（日本語母語話者同士の会話）』を用いた研究

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 1（日本語母語話者同士の会話）』は、副題が示すとおり日本語母語話者同士の 2 者間会話を収録したコーパスである。これらの

コーパスを用いた研究として、以下の5篇を収めた。そのうち2篇は日本語データに基づく研究である。「親しい友人同士のコミュニケーションー日本人大学生による悪態を中心にー」(関崎博紀)では、同性の親しい間柄における遠慮のない雑談を分析し、悪態と言われるものの持つ対人関係上、肯定的な効果について指摘している。「日本語の雑談に見られる不同意の様相ー会話教育への示唆ー」(木山幸子)では、初対面の会話と友人同士の会話中に起こる不同意を比較・分析し、儀礼的な不同意(ほめを否定する等)と実質的な不同意を分けて考察している。他の3篇は日本語と他言語との対照研究である。「教師と学生のインターアクションにおける言語行動分析ー日本語とポーランド語の対照研究ー」(カチマレク・ミロスワバ)は、面接指導場面におけるスピーチレベルや代名詞の使用などについて、日本語とポーランド語との対照研究を行っている。「携帯電話の会話における開始部と終結部ー日本人同士と台湾人同士の比較研究を通してー」(黄瓊芸)では、携帯電話における会話の特徴を、また、「談話レベルからみた依頼に対する「断り」の言語行動についてー日本人大学生と台湾人大学生との比較ー」(施信余)では、依頼に対する「断り」の談話について、日本語と台湾中国語との対照研究を行っている。

### 3. 『BTS による多言語話し言葉コーパスー日本語会話 2 (日本語母語話者と学習者の会話)』の分析

『BTS による多言語話し言葉コーパスー日本語会話 2 (日本語母語話者と学習者の会話)』は、副題が示すとおり日本語母語話者と学習者の2者間会話を収録したコーパスである。これらのコーパスを用いた研究として、以下の3篇を収めた。まず、「接触場面におけるコミュニケーション調整行動ー日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話よりー」(金銀美)では、韓国人の上級学習者が日本語母語話者と話す際、どのようにコミュニケーション上の問題を解決するかという調整行動を分析している。「台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態」(林君玲)では、留学経験がない台湾人学習者と日本語母語話者の接する場面におけるスピーチレベルの使用実態を、日本語母語話者同士の接する会話場面におけるスピーチレベルの使用実態と比較し、考察を行っている。「台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用ーコミュニケーション機能を中心にー」(張鈞竹)は、学習者にとって習得が難しいと言われている終助詞「ね」の機能を先行研究に基づいて分類し、台湾人学習者と日本人学習者の「ね」の使用傾向について考察している。

### 4. 資料編

最後に、資料編として、本報告集で用いた話し言葉の「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」に基づく記号の説明を、宇佐美 (2004) より抜粋して付した。話し言葉の文字化は、様々な困難や複雑な問題を含んでおり、種々の議論がある。興味のある方は、宇佐美 (2004)、木山他 (2003)などを参照されたい。

近年、様々な種類の「コーパス」が世に出るようになってきてはいる。しかし、未だ、形態素や構文の分析、音声学的な分析のためではなく、人間の相互作用としての「言語運

用」の分析に適した形で文字化され、蓄積された「日本語の話し言葉のコーパス」というものは、ほとんどないのが現状である。そういう状況の中、2002年10月の本COE拠点の発足以来、膨大な時間と労力を投入して、人間の相互作用としての「言語運用」を分析するための「話し言葉」のコーパスとして、『BTS (Basic Transcription System) による多言語話し言葉コーパス』の構築に取り組んできた。本報告集に続き、先に説明した3つのコーパスは、近々CD版の形で公開される予定である。いずれも、まだまだ多くの不備を含む完全とは言えないものであるが、それ故に、皆さんからの建設的なご意見・ご叱責を乞いたいと思う。

最後に、本報告集が、本プロジェクト推進のための核となって膨大なデータの文字化作業などに時間と労力を投じてくれた研究協力者としての院生の皆さん\*、及び、本書の執筆には加わっていないが、原稿のピアチェックや日本語のネイティブチェック作業に協力してくれた松本剛次さん（東京外国語大学博士後期課程・国際交流基金派遣日本語教育専門家（北スマトラ大学））、そして、これからの談話研究発展のために貴重なデータを提供してくださったインフォーマントの皆様には、この場を借りて感謝の意を表したい。

最後に、体裁などの編集には、木林理恵（東京外国語大学博士後期課程）、高森絵美・蘇玉萍（東京外国語大学博士前期課程）が関わったことを付記しておく。

2004年12月末日

## 引用文献

宇佐美まゆみ（2004）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C（2）（研究代表者：宇佐美まゆみ）、研究成果報告書、4-21頁。

木山幸子、関崎博紀、木林理恵、施信余、金庚芬（2003）「先行研究におけるトランスクリプト・システムの概観と『基本的な文字化の原則-Basic Transcription System for Japanese（BTSJ）』の意義」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C（2）（研究代表者：宇佐美まゆみ）、研究成果報告書、52-71頁。

関崎博紀、木林理恵、木山幸子、李恩美、施信余、宇佐美まゆみ（2004）『「BTSによる多言語話し言葉コーパス-日本語2」の作成の過程と整備の結果から示されること-会話教育教材開発への示唆-』『言語情報学Ⅲ 第1回言語情報学国際会議報告集 言語情報学-現状と未来-』21世紀COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科、301-322頁

---

\* 本報告書に記載された所属は、プロジェクト遂行当時（2003年度）のものである。

# 1. 『BTS による多言語話し言葉コーパス —日本語 2』の解説

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

## 1. 「挨拶をする」

会話の冒頭で儀礼的に言葉を取り交わすこととする。典型的な言語形式は、「はじめまして」「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」とする。

初対面会話から抽出された談話がほとんどであった。たいていの場合、双方の話者が挨拶を交わしている。その中には、挨拶の発話が重複しているものも見られた。

## 例 1

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	YF01	はっ、<はじめまして>{<}。
2	2	*	BF11	<はじめまして>{>}<2人笑う>。
3	3	*	YF01	あの…。
4	4	*	BF11	「BF11 姓」と（あっ）申します（はい）。
5	5	*	YF01	あの、「YF01 姓」と申します。
6	6	*	YF01	あの、「学科名 1」の技術助手、です<笑い>。
7	7	*	YF01	はい、わたくしは「学科名 2」科のほう（はい）なんですけど。

上の例 1 を見ると、BF 11 は相手の挨拶を聞き終わってから挨拶をするのではなく、相手である YF 01 が挨拶をしているところへ挨拶を重ねている。こうした例から、「はじめまして」などの挨拶は儀礼化していることが伺われる。中には、一人の話者が、「こんにちは」「はじめまして」の両方を使って挨拶する場合も見られた。

## 例 2

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JFB	こんにちは。
2	2	*	JMO	こんにちは。
3	3	*	JMO	「JMO」と申します。
4	4	*	JFB	「JFB」と申します。
5	5	*	JFB	はじめまして。
6	6	*	JMO	はじめまして。

多くは、上の例 2 の様に、「挨拶をする」機能に典型的な言語形式を使った挨拶は双方の話者がすることが多いが、ときには、例 3 のように、片方の話者のみがすることもあった。

## 例 3

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	OF01	こんにちは、よろしくおねがいします。
2	2	*	JBM01	はい、今日は暑いところ…<笑い>。
3	3	*	OF01	はい、とても暑いですね。

このような場合、挨拶をされた側の話者は、「よろしくおねがいします」という言葉や、上の例のように相手をねぎらう言葉によって応えるという特徴が見られた。この例から、初対面会話の冒頭における挨拶場面では、挨拶言葉が儀礼化しているために、場合によっては、実質的に相手を配慮する言語行動が必要になることが明らかになる。

初対面会話において、当該の機能に典型的な言語形式やそれに続く名乗りや自己紹介に笑いが伴う場合が見られた。宇佐美（1999）は、この現象を「お互いに『笑い』によって緊張を解くようにしている」と解釈している。

## 例 4

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF03	どうもはじめまして<笑い>。
2	2	*	OF01	はじめまして<笑いながら>。
3	3	*	BF03	「BF03 姓」と<申します>{<}。
4	4	*	OF01	<あ、「OF01 姓」と申します>{>}<2人笑い>。

これまで見たように、挨拶の多くは会話の冒頭でなされている。文字化開始語 1, 2 ラインの間に「挨拶する」に典型的な言語形式を用いた挨拶が始まっているのは、40 談話中 35 談話（88%）に上っている。また、「よろしくおねがいします」という言葉から始まっている談話を合わせると、全談話の 9 割以上が、定型的な挨拶によって開始されていることになる。このような傾向は、「儀式的な挨拶には、個人的な関心は薄く、役割・立場に見合った手順を踏み、その場の流れが淀みなく、一定のかたちを作ることにある」とする大坊（1999）の指摘に通じている。その一方で、抽出された談話の中には、自己紹介をしてから挨拶をするという場合も見られた。

## 例 5

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	SM01	あの、事務局の方ですか?。
2	2	*	BF03	いえ、わたしは「学科名」学科というところに所属しております「BF03 姓」と言います。

3	3	*	SM01	あ、学生さん?。
4	4	*	BF03	いえ、あ、いえ、あの教員です。
5	5	*	SM01	あ、先生なんですか。
6	6	*	BF03	はい。
7	7	*	BF03	えっとお名前は?。
8	8	*	SM01	わたしはあの、オープンカレッジの、あの、執行委員をやってます「SM01 姓」と言います。
9	9	*	BF03	「SM01 姓」さんですか。
10	10	*	SM01	はい、よろしく<お願いします><{/>。
11	11	*	BF03	<はじめまして><{/>。
12	12	*	BF03	そうですか、えーと、そうですね…。
13	13	*	BF03	オープンカレッジの方には、ほとんどわたし、縁がないので、<伺うこともないんですけど><{/>。

上の例5は、相手の素性をまず確認しようとした SM01 の質問から始まっていて、BF03 の所属に関するやりとりや、SM01 の名前に関するやりとりが続いている。そして、それらが終わった後に、「よろしくお願いします」「はじめまして」といった言葉が交わされている。この例から、初対面会話の挨拶は、冒頭から「はじめまして」「こんにちは」などの言葉を儀礼的に交わすことのみによって成立するのではなく、状況に応じて、会話参加者同士の相互作用によって作り上げられていることが分かる。

引用文献：

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』第 44 卷 6 号, 学燈社, 83-89.

大坊郁夫 (1999) 「あいさつ行動と非言語コミュニケーション」『国文学』第 44 卷 6 号, 学燈社, 28-33.

(執筆者：関崎博紀)

## 2. 「感謝する」

40 機能の中で「感謝する」は、話し手が聞き手から恩恵を受けたと感じ、それを表明していることとする。その典型的な言語形式は、「ありがとう (ございます)」とする。以下では、「感謝する」という発話機能を取り上げ、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に収録されている談話を分析することによって、その結果の会話教材への示唆を探ってみる。

「感謝する」の機能をもつ談話は全体で 18 談話があった。そのすべてが、当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話のタイプ 1 に分

類された。

18 談話の情報をみると、14 談話が「依頼場面」で、2 談話が「ほめ場面」で、後 2 談話は雑談場面である。そして、相手が年上の場合が 5 談話、相手が同年齢の場合が 9 談話、相手が年下の場合が 4 談話あった。

年上に対しては、目上の方が相手であるだけに、「じゃ、ありがとうございます」「あ、ありがとうございます」「はい、どうもありがとうございます」「あ、どうもありがとうございます」「ありがとうございます」というように、すべての談話において「ありがとうございます」という丁寧な言語形式が使われている。その例を一つ提示する。

例 1：BF03（女性）、OM58（女性）、大学生友人同士、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF03	今日の「先生名」の授業でした？。
2	2	*	OM58	いや、でてない。
3	3	*	BF03	えー、じゃ、先週とかでてますよね。
4	4	*	OM58	あ、先週でてる。
5	5	*	BF03	じゃ、先週のノートみせてもらいたいで、きょう借りて帰ってもいいですか？。
6	6	*	OM58	先週のノート、あっ、人に借り、貸してるから。
7	7	*	BF03	あ、そうなんですか。
8	8	*	OM58	たぶん、2、3 日後帰ってくるから。
9	9	*	BF03	じゃ、つぎわたしかりてもいいですか？。
10	10	*	OM58	あ、いいよ。
11	11	*	BF03	じゃ、ありがとうございます。
12	12	*	BF03	つぎの授業までに、絶対かえます。
13	13	*	OM58	あ、どう致しまして。

例 1 は、BF03 が OM58 に自分が欠席した授業のノートを借りる場面で、OM58 が自分の依頼を受けてくれたときに、「じゃ、ありがとうございます。」と OM58 に対しての感謝の気持ちを表している。

そして、同年齢と年下の相手に対しては、各談話において、以下のような発話があった。「ありがとう」、「うん、ありがとう」「あ、ありがとう」「ありがとう、じゃ、借りてきます」「じゃ、ありがとう、バイバイ」「あ、ありがとう、じゃ、いい？/わーい、ありがとう」「あ、よかった、ありがとう、本当に助かる/ありがとう、じゃ、お願いします」「<笑い>ありがとう、(んー) うん」というように、すべての談話において「ありがとう」という言語形式が使われている。以下にその例を一つ提示する。



## 例2：BF03（女性）、SF56（女性）、大学生友人同士、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF03	「人名」ちゃん、きのうの、「授業名」の授業のプリント貸してほしいんだけど。
2	2	*	SF56	え、いいよ。
3	3	*	BF03	ありがとう。
4	4	*	SF56	じゃ、あした持ってくるね。
5	5	*	BF03	うん。

例2は、BF03がSF56に授業のノートを借りる場面で、SF56が自分の依頼を受けてくれたときに、「ありがとう」とSF56に対する感謝の気持ちを表している。

例1では、相手が年上であるだけに「ありがとうございます」と丁寧な言語形式を使っているのに対して、例2では、相手が親しい友達であり、「ありがとう」と普通体で、感謝の気持ちを表している。

(執筆：李恩美)

## 3. 「注意をひく」

40機能の中で、「注意をひく」は、話し手がこれから何らかの行動をとろうとしていることを、相手に気づかせる言語行為とする。その典型的な言語形式としては、発話の冒頭に現れる「あのう」「ねえ」「ちょっと」「すみません」などである。以下では、「注意をひく」という発話機能を取り上げ、『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』に現れた談話の特徴を考察してみたいと思う。

## 〈タイプ1〉例1：大学生、友人同士、親しい間柄

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BM04	あの、金曜の、5限の授業の、あのー、発表者がつくったやつ、プリント、貸してもらえる?。
2	2	*	SF18	えーと、先週の?。
3	3	*	BM04	うんうん。

例1は、親しい男子大学生と女子大学生同士の会話で、男子大学生は女子大学生の授業のプリントを貸してほしいという話題である。BM04は、SF18のプリントを借りたいという話題を持ち出そうとする際、「あの」を用い、相手の注意を引こうとしている。「あのう」は、親しい間柄であるか、初対面の会話であるかに関わらず、相手の注意を引こうとするときに、発話の冒頭でよく使われ、これから何らかの行動をとろうとしていることを、相

手に気づかせる言語行為である。

〈タイプ1〉例2：大学生，女性同士，親しい間柄

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF18	あ、ねーねー、悪いんだけど、あの一、この前の授業のノートって、貸してくれないかな。
2	2	*	YF54	この前の授業でなかったんですか？。
3	3	*	BF18	うん、実は、あ一、ちょっとサボっちゃって。

例2は，女性の親しい先輩と後輩の会話である。先輩が後輩のプリントを貸してほしいという話題をしている。BF18は，「ねーねー」を使って，YF54に自分から何か言おうとしているということに相手に気づかせ，注意を引こうとしている。堀口（1997）では，知っている人で聞き手になる可能性のある人へ話しかける場合，「ねえ」や「あのね」などを使って，話題を切り出そうとしていると述べている。ここでも同じような場面である。親しい間柄同士の発話の冒頭で，「ねえ」などを用いている例はよく見られたが，初対面の会話では見られなかった。従って，「ねえ」の使用は，親しい間柄に限定されていると考えられる。

〈タイプ1〉例3：大学生，先輩後輩，親しい間柄

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BM11	すみません、この間、あの一、授業ちょっと休んで、この授業のプリントもらわなかったんで、ちょっと「OM23」さん、<今日ちょっと借りたいんですけど>{<}。
2	2	*	OM23	<あ、はいはいはいはい>{>}。
3	3	*	BM11	いいですか？。
4	4	*	OM23	あ、いいよいいよいいよ。

例3は，後輩の男性が親しい男性の先輩に授業のプリントを貸してほしいと話す内容である。BM11は先輩の注意を引こうとする際に，改まった「すみません」という表現を用い，これから何らかの行動をとろうとしていることを，相手に気づかせる行動を採っている。「すみません」という表現は，初対面の会話や目上との会話でよく使われる。

引用文献

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

（執筆者：黄瓊芸）

#### 4. 「自己紹介をする」

40 機能の中で、「自己紹介をする」は、ここでは初めて会った人に自分の名前を知らせているものを自己紹介と見なす。その典型的な言語形式としては、「姓（またはフルネーム）と申します。」「姓（またはフルネーム）です。」などが挙げられる。

談話は、機能と形式の観点から、当該の機能に典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されている談話（タイプ1）、当該の機能に典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されている談話（タイプ2）、当該機能に典型的な言語形式を伴っているが、当該の機能ではなく、別の機能が実現されている談話（タイプ3）に分類する。

「自己紹介をする」機能を持った談話は、全て、上記の3つの分類のうち、タイプ1の典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されているものに分類されている。なお、抽出した談話から、以下のような形式がみられた。

##### 1) 「名前」と申します。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	SM01	あ、<こんにちは>{<}。
2	2	*	JBM03	<よろしく>{>}お願いします。
3	3	*	SM01	よろしくお願いします。
4	4	*	JBM03	あじゃ私から、えーと「JBM03 姓」と申します。
5	5	*	SM01	あ、「JBM03 姓」さん。
6	6	*	JBM03	ええ。
7	7	*	SM01	あ。
8	8	*	JBM03	どもよろしくお願いします。
9	9	*	SM01	わたくし「SM01 姓」と申します。
10	10	*	SM01	よろしくお願ひいたします。

##### 2) 「名前」といいます。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JFB	こんにちは。
2	2	*	JMS	こんにちは。
3	3	*	JFB	はじめまして。
4	4	*	JMS	はじめまして。
5	5	*	JFB	えーと、「JFB のフルネーム」と言います。
6	6	*	JMS	「JMS のフルネーム」って<言います。>{<}。
7	7	*	JFB	<JMS>{>}君。
8	8	*	JMS	はい。

## 3) 「名前」です。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JFY	こんにちは。
2	2	*	JFB	こんにちは。
3	3	*	JFY	はじめまして。
4	4	*	JFB	はじめまして。
5	5	*	JFY	えーと、名前。
6	6	*	JFB	あ、はい、「JFB 姓」です。
7	7	*	JFY	あ、「JFB 姓」さん。
8	8	*	JFY	はい「JFY 姓」です。
9	9	*	JFB	「JFB 姓」です。
10	10	*	JFY	よろしく<お願いします>{<}。
11	11	*	JFB	<よろしく>{>}お願いします<2人で笑う>。

「自己紹介をする」機能を持った談話は、主に初対面の会話で現れている。本コーパスに含まれる機能に限っていえば、使用された言語形式は上記の3つにまとめることができる。

上記の3つの形式は、話者の仕事や所属を明らかにしてから使用される場合も見られる。例えば次のような例が挙げられる。

## 4)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
8	8	*	OF04	<わたしはあの一>{>}ここの(え)「学科名1」学科の(はい)「OF04 姓」と申しますけど。
9	9	*	BF11	はい、わたくしは「学科名2」学科の方'ほう'の助手の「BF11 姓」と申します。
10	10	*	OF04	BF11 さん…、どうも一<笑い>。
11	11	*	OF04	###けどね、どうぞよろしく<お願いします>{<}。

OF04 は自分の名前を名乗る前に、「「学科名1」学科の「OF04 姓」と申しますけど。」と OF04 の所属を述べている。それを受けて、BF11 は「「学科名2」学科の方'ほう'の助手の「BF11 姓」と申します。」と自己紹介している。

さらに、ここで注目できるところは、OF04 は「名前」と申しますと言い切らずに「…申しますけど。」と、「けど」を伴った発話になっている。自然会話ではこのように「(名前)と申します」に終助詞的用法の接続助詞が伴う発話も見られる。

次は、自己紹介が二人の話者のやり取りの中でどのように展開されるのかについて会話例を通して分析してみる。日本人の名前は漢字になっているのがほとんどである。場合に

よっては、音声だけでは、どのような字で表記するかわかりにくい。そのようなとき、名前の漢字についてのやりとりが見られることがある。自分の名前の漢字について質問された話者は、自分の名前が含まれている言葉を挙げるなどして説明を加えることによって、相手の理解を助けることがある。次の例をみてみよう。

5)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	OM01	あ、こんにちは。
2	2	*	JBM03	どうもこんにちは。
3	3	*	JBM03	はじめまして。
4	4	*	OM01	えっ「OM01 姓」と申します。
5	5	*	JBM03	あっ「OM01 姓」?。
6	6	*	OM01	はい。
7	7	*	JBM03	はい?。
8	8	*	OM01	「OM01 姓」。
9	9	*	OM01	「漢字 1 を含む言葉」の「漢字 1」にですね、(あっ)「漢字 2 訓読み」と書くん<ですね>{<}。
10	10	*	JBM03	<あ、なるほど>{>}。
11	11	*	OM01	あんまりない名前<かもしれないですね>{<}。

OM01 が自分の名字を言いながら自己紹介をしているが、その直後、JBM03 は「OM01 姓?」のように聞き返して確認している。それに OM01 は「はい」と簡単に答えているが、JBM03 が依然として分かっていない反応（「はい?」）を見せると、自分の名字が入る他の言葉の例をあげながら、具体的に説明している。相手の反応に応じて説明を加えるなど、会話の相手との相互作用の中で自己紹介がなされていることが分かる。

以上のことから自己紹介には 3 つの形式と、実際の会話からは文末を言い切らないで終わる発話があることが分かった。さらに、談話のやり取りの中から、相手の理解が得られなかった場合は、名前に対する具体的な説明が加えられることが考察できた。

(執筆者：金銀美)

## 5. 「あやまる」

「あやまる」とは、相手に不利益や迷惑を与えたことを認め、それを相手に対して表明することである。その典型的な言語形式としては、「すみません」「ごめんなさい」などが挙げられる。

TUFS 会話モジュール日本語スキット（以下、D モジュール）における「あやまる」のなかでは、学生が教師からレポート提出の遅れを注意されたことに対して、「遅れてすみま

せん」と謝っている。学生自身が、レポートの提出が遅れたことの非を認め、「すみません」といって許しを求める会話例があった。実際に、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に扱われているデータを見てみると、「すみません」や「ごめんなさい」が含まれている談話は 20 あった。そのうちの 16 例は、自分のした行動に対して相手に謝っているものである。例えば、例 1 では、YM07 は、すでに BF01 に渡したと思っていた修論の計画書が実はまだ渡されていないことに気づき、それに対して何度も謝っている。例 1 を含む 16 の談話例では、話し手が相手に不利益や迷惑を与えたことを認め、それを相手に対して表明するために典型的な言語形式が使われている。すなわち、これらの例に現れた「すみません」「ごめんなさい」などは「あやまる」の機能を果たしているものである。

例 1：BF01（女性 20 代）、YM07（男性 20 代）、二人とも大学生、友人同士、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-1	/	BF01	そう、おじさん[渾名]、あれ、この間の修論の計画書を<#####>{<}、
2	2	*	YM07	<すみません>{>}。
3	1-2	*	BF01	いや、お借りしたいなあ…。
4	3	*	YM07	えっ、渡さなかったっけ?。
5	4	*	BF01	いや、もらってない。
6	5	*	YM07	うそ。[驚くように]
7	6	*	BF01	ほんとう。
8	7	*	YM07	えっ、渡したつもりなのに。
9	8	*	YM07	えっ、ほんとうですか?。[探し始める]
10	9	*	YM07	ごめんなさい<笑う>。
11	10	*	BF01	いいんだよ、べつに<笑う>。
12	11	*	YM07	ご、ごよん。
13	12	*	BF01	いいんだよ、べつに。[小声で]
14	13	*	YM07	来週、来週必ずもってきます。
15	14	*	BF01	来週。
16	15	*	BF01	うん、あの、いただければ、大変幸いに存じます。
17	16	*	YM07	あれ、おれ、先週来ましたよね。
18	17	*	BF01	遅れてね。
19	18	*	YM07	遅れてきて、帰り際、渡した気になってて、ごめんなさい。
20	19	*	BF01	いいえ、<ぜんぜんかまわない>{<}。
21	20	*	YM07	<あー、もってくればよかった>{<}。
22	21	*	YM07	おれ、絶対渡した気になったの。
23	22	*	YM07	いや、渡したような気がする。

24	23	*	YM07	あっそうか、すみません。
25	24	*	BF01	いいえ、来週で全然構わないから。
26	25	*	YM07	うん、じゃ、来週、もってまいります。
27	26	*	BF01	はい。
28	27	*	YM07	いや、ややや。

当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話例を詳しく見てみると、D モジュールでは先生に対して「すみません」という言語形式が使われていたのに対し、友人同士による会話では、「ごめん(ね)」の多用がみられる(例2, 例3)。また、例1と例2, 3を比べてみると、友人にかけた「すみません」「ごめんなさい」「ごめんね」などのことばの間に、反省の意の強さや丁寧度の差があることがわかった。そして、「ごめん(ね)」に付随して「笑い」が現れる傾向も目立って見られた(例2, 例3)。

例2 : YM09 (男性 10代), YM10 (男性 10代), 2人とも高校生, 友人同士, 雑談

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
211	201	*	YM10	腹減った。
212	202	*	YM09	ねーはまってるものとかは?、自分。
213	203	*	YM10	ありません。
214	204	*	YM09	話はずまないなー。
215	205-1	/	YM10	ねー,,
216	206	*	YM09	うん。
217	205-2	*	YM10	質問ないんだったら帰るよ。
218	207	*	YM09	えー、帰らんといて、お願いしますよ、もうちょっと。
219	208	*	YM10	あんた、だれ?。
220	209	*	YM09	<笑い>パンチ君、パンチ君。
221	210	*	YM10	##ちた、はいどうぞ。 [叫ぶ声が聞こえる]
222	211	*	YM09	パンチあほ、あほ<笑いながら>。
223	212	*	YM10	何が?。
224	213	*	YM09	だって、人間と猿がしゃべってるみたいだもん<YM10 笑い>。
225	214	*	YM10	<笑いながら>俺ごめんね。
226	215	*	YM09	あい、間途中、あー、ゆうてるもんね。
227	216	*	YM10	また、じゃあ、じゃあ、もうもうもうー。 [歌うような声で]
228	217	*	YM09	訳わかんない動物が、俺の目の前に。

229	218	*	YM10	超 MM。
230	219	*	YM09	なつかしいなまたそれ、超 MM。
231	220	*	YM10	って、なんだっけ?。
232	221	*	YM09	使ったことないしね、俺。

例 3 : YM09 (男性 10 代), YM10 (男性 10 代), 2 人とも高校生, 友人同士, 雑談

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容
318	298	*	YM09	ここは、茶道、茶道とかか、茶道するとかか。
319	299	*	YM10	いったことある=。
320	300	*	YM10	=まんじゅう食って、帰った。
321	301	*	YM09	あー、部活紹介ね。
322	302	*	YM10	そう。
323	303	*	YM09	うん。
324	304	*	YM10	あのババウゼイよ。
325	305	*	YM09	<笑い>。またか、おまえは。
326	306	*	YM10	##ってさ。
327	307	*	YM09	あー屁こいた。
328	308	*	YM10	<笑いながら>うるせえ。
329	309	*	YM09	<笑いながら>ごめんごめん<笑い>。
330	310	*	YM10	<笑いながら>あ、くせー<YM09 笑い>。
331	311	*	YM09	ええ?。
332	312	*	YM10	あーなんか、今、変な声出しちゃうとこだった、マジ。
333	313	*	YM09	さっきから出してるからなあ<YM10 笑い>。
334	314	*	YM10	<笑いながら>え、出して…。[咳き込む]

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に見られた、「あやまる」の機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、当該の機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話例は 4 つあった。例えば、例 4 のライン番号 1 の発話の冒頭に現れた「すみません」は、「注意をひく」という機能を果たしているものであり、ライン番号 4 の末尾の「すみません」は、相手に迷惑をかけたことを謝っていることばと解釈するよりは、相手から恩恵を受けたあとに感謝のことばとして使用されていると言えるであろう。これらの例から、「あやまる」機能の典型的な言語形式である「すみません」は、「注意をひく」場合にも使われているし、「感謝する」場合にも使われていることがわかった。



例4：BM12（男性）、OM45（男性）、2人とも大学生、友人同士、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BM12	すみません、このまえの、英語のプリント貸していただきたいのですけど。
2	2	*	OM45	あ、いいよ、これでしょ?。
3	3	*	BM12	あ、ありがとうございます。
4	4	*	BM12	明日には返しますんで、すみません。

実際、「注意をひく」場合に使われる「すみません」については、Dモジュールでも具体例が示されている。それは、学生が学生課に在学証明書を取りに行くときに、なかなか姿を見せない学生課の職員に「あのう、すみません」と声をかける場面であった。Dモジュールにおいて、他人の注意をひくために使われる「すみません」は、談話の冒頭に現れる点で、例4と共通する特徴があることがわかった。こうしたことから、「すみません」が現れる位置は、それが「注意をひく」機能を果たすものかどうかを判断する際の手掛かりだと考えられる。また、『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』の中の「依頼場面」には「感謝する」機能をもった「すみません」が多く現れた。他人に対して感謝の意を表明するために使用される「すみません」の用法については、現段階のDモジュールでは触れられていない。「感謝」のことばとして使われる「すみません」については、いくつかの先行研究でも言及されており（西原1994、三宅1994など）、今後の会話教育教材においては、この点についてもさらに追究していくことが期待される。

#### 引用文献：

- 西原鈴子（1994）「感謝に関する一考察」、『日本語学』、7月号、明治書院、4-9。  
 三宅和子（1994）「感謝の対照研究—日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動—」、『日本語学』、7月号、明治書院、10-18。

（執筆著者：施信余）

## 6. 「何かをあげる」

40機能の中で「何かをあげる」は、相手に物品を渡す行為に伴う発話とする。ここには、相手にものを貸すものも含める。典型的な言語形式は、「どうぞ」とする。以下では、「何かをあげる」という発話機能を取り上げ、『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』に収録されている談話を分析することによって、その結果の会話教材への示唆を試みる。

「何かをあげる」の機能をもつ談話は全体で10談話があった。その中で3談話が、当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話のタイプ1に分類された。そして、7談話は当該の機能を表す典型的な言語形式はないが、当該の機能が実現されている談話のタイプ2として分類された。

10 談話の情報をみると、9 談話が「依頼場面」で、1 談話は友たち同士の雑談場面である。そして、相手が年上の場合が 2 談話、相手が年下の場合が 4 談話、相手が同年齢の場合が 3 談話あった。

以上のように、この機能は、「依頼場面」におけるやり取りから多く見られた。また、相手との関係、具体的には同期、先輩・後輩関係によって少し異なる表現が用いられている。

タイプ 1 の 3 談話は、すべてが相手が年下の場合に見られた。そして、「あっ、はい、どうぞ」「じゃ、どうぞ」「はい、どうぞ」のように三つとも「どうぞ」という典型的な言語形式が使われていた。以下にその談話例一つ提示する。

例 1：BF06（女性 20 代）、OM17（男性 20 代）、二人とも大学生、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-1	/	BF06	あの一、5 限の、
2	2	*	OM17	はい。
3	1-2	*	BF06	授業の教科書、ちょっと借りたいんだけど…。
4	3	*	OM17	あっ、はい。
5	4-1	/	BF06	私、あの一、1 ページとか、2 ページ、私、買えなくて、コピーしたんですけど、
6	5	*	OM17	はい。
7	4-2	/	BF06	1 ページか、2 ページちょっと抜かして、
8	6	*	OM17	あっ、はい。
9	4-3	/	BF06	コピーしちゃたんで、
10	7	*	OM17	はい。
11	4-4	/	BF06	そこの部分を、
12	8	*	OM17	あっ、はい。
13	4-5	*	BF06	コピーしたいんで、貸してください。
14	9	*	OM17	あっ、はい、どうぞ。
15	10	*	OM17	えーと、いつぐらい返してもらえるんですか？。
17	11	*	BF06	/沈黙 5 秒/あっ、あの、ごめんなさい、火曜日の 5 限の。
18	12	*	OM17	あっ、火曜の 5 限。
19	13	*	BF06	はい、すみません。
20	14	*	OM17	あっ、はい、わかりました。
21	15	*	OM17	じゃー、<どうしよう?>{<}。
22	16	*	BF06	<本当は>{>}その場でコピーしてもいいですし、本当の 1、2 ページなんで、抜かしたとこが。

例 1 は、BF06 が OM17 に授業の教科書を借りる場面で、ライン番号 14 は、OM17 が BF06

に教科書を貸してあげる発話文であり、「あっ、はい、どうぞ。」という相手に何かを貸すときよく用いられる「どうぞ」が現れている。

タイプ2では、年上に対して2談話（「あ、いいですよ、これですね。」「あげる。」）、同年齢に対して3談話（「44 ページのこれかな?、はい」「これ」「それじゃ、貸すね。」）、年下に対して2談話（「あ、いいよ、これでしょ?」「うん、いま持ってるから、貸してあげるよ。」）あった。タイプ2に分類されているこれらの談話は、「どうぞ」という、「何かをあげる」の典型的な言語形式は使われていないが、談話の流れを追うと、実際に「何かをあげる」の機能をしていると考えられる。以下にその例を一つ提示する。

例2：BM12（男性20代）、YM46（男性20代）、二人とも大学生、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BM12	ねえ、この前の英語のプリント貸して。
2	2	*	YM46	あ、いいですよ、これですね。
3	3	*	BM12	あ、ありがとう。
4	4	*	BM12	じゃ、明日返すから。

例2は、BM12がYM46に英語のプリントを借りる場面である。「ねえ、この前の英語のプリント貸して。」というBM12の発話に対して、YM46は「あ、いいですよ、これですね。」と答えている。談話の流れを追うと、YM46が英語のプリントをBM12にあげるとき、「あ、いいですよ、これですね。」と話していることが分かる。YM46の「あ、いいですよ、これですね。」の発話は「どうぞ」という「何かをあげる」という機能の典型的な言語形式は使われていないが、談話の流れから、当該の機能を果たしていると判断される。そのため、例2は、「どうぞ」という、「何かをあげる」の典型的な言語形式は使われていないが、当該の機能を果たしていると判断されるため、タイプ2として見なされる。

（執筆者：李恩美）

## 7. 「さよならを言う」

40機能の中で「さよならを言う」は、別れのときに儀礼的に言葉を取り交わすこととする。典型的な言語形式は、「さようなら」「またね」「バイバイ」とする。以下では、「感謝する」という発話機能を取り上げ、『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』に収録されている談話を分析することによって、その結果の会話教材への示唆を試みる。

「さよならを言う」の機能をもつ談話は全体で4談話があった。そのすべてが、当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話のタイプ1に分類された。

4談話の情報をみると、すべての談話が「依頼場面」である。そして、相手が年上の場合が1談話、相手が同年齢の場合が2談話、相手が年下の場合が1談話あった。以下にそ

それぞれの例を提示する。

例1：BF08（女性20代）、YF27（女性20代）、二人とも大学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF08	えー、先週授業出た？。
2	2	*	YF27	うん、出た、出ました。
3	3	*	BF08	あ、そう、何かプリントもらった？。
4	4	*	YF27	あはい、もらいました。
5	5	*	BF08	えっ、ちょっと見せて、いまある？。
6	6	*	YF27	あはい。
7	7	*	YF27	これですけど…。
8	8	*	BF08	あ、これ？。
9	9	*	BF08	うん、あちょっとこれコピーしてもらっていいかな？。
10	10	*	YF27	いいですよ。
11	11-1	/	BF08	あ、じゃ、ちょっと、あの一、借りるから、
12	12	*	YF27	うん。
13	11-2	*	BF08	ここにいと、いる？、しばらく。
14	13	*	YF27	はい、います。
15	14-1	/	BF08	じゃ、コピーしてすぐに戻ってくるから、
16	15	*	YF27	はい。
17	14-2	*	BF08	ちょっと待ってて。
18	16	*	YF27	はい。
19	17	*	BF08	ごめんね。
20	18	*	YF27	どうぞ、###てください。
21	19	*	BF08	/沈黙 [コピーに行っている間] /ありがとう。
22	20	*	YF27	あっ、いいえ、<どう致しまして>{<}。
23	21	*	BF08	<笑い>{>}。
24	22	*	BF08	じゃ、またね。
25	23	*	YF27	はい、さようなら。

例1は、BF08が後輩にプリントを借りてコピーした後、それぞれ帰る場面である。先輩であるBF08は「じゃ、またね」と別れの挨拶をしているのに対して、後輩のYF27はより丁寧な「さようなら」と応じている。

## 例2：SF42（女性20代）、BF（女性20代）、二人とも大学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
27	25	*	SF42	5限終わったら、ロビーとかで。
28	26	*	BF19	うんうん。
29	27	*	SF42	コピーして帰る?。
30	28	*	SF42	うん、じゃ、それでいいんなら貸すよ貸すよ。
31	29	*	BF19	じゃ、ありがとう。
32	30	*	SF42	うん。
33	31-1	/	BF19	じゃ、5限だから、6時ぐらい、
34	32	*	SF42	6時ぐらいに。
35	31-2	*	BF19	<ロビーで>{<}。
36	33	*	SF42	<ロビー、うん>{>}。
37	34	*	BF19	じゃ、お願い<しまーす>{<}。
38	35	*	SF42	<うん、うん>{>}。
39	36	*	SF42	じゃ、またね、<バイバイ>{<}。
40	37	*	BF19	<じゃね>{>}。

例2は、SF42がBF42に資料などを貸してあげることにして、次に会う約束をしてから別れる場面である。この談話では別れの挨拶ことばとしては「またね」「バイバイ」「じゃね」が使われている。

## 例3：BF18（女性20代）、OM52（男性20代）、二人とも大学生、依頼場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF18	あ、先輩すみません、あの一、先週の授業ちょっとでなかったんですけどでも、あの、ノート貸していただけないんでしょうか?。
2	2	*	OM52	うん、別にいいけど。
3	3	*	BF18	え、ほんとうですか。
4	4	*	BF18	え、あの、いますぐ、それとも…。
5	5	*	OM52	うん、いま持ってるから、貸してあげるよ。
6	6	*	BF18	ああ、ほんと、助かります。
7	7	*	BF18	いつ返せばいいんですか。
8	8	*	OM52	あの、来週の授業前だから、来週の月曜日に持ってきて。
9	9	*	BF18	あ、どうもありがとうございます、今度お礼しますから。

10	10	*	OM52	うん、おれもう行かなきゃ行けないから…。
11	11	*	BF18	あ、どうもありがとうございます。
12	12	*	BF18	失礼します。

例3は、BF18がOF52に先週欠席した授業のプリントを借りる場面で、その用事が終わってから、BF18がOM52に「失礼します。」とさよならを言っていることが分かる。

相手が年上であり、「失礼します。」と丁寧な言語形式が使われている。

(執筆著者：李恩美)

## 8. 「情報を求める (金額)」

「情報を求める (金額)」は、金額の情報を求めているものを抜き出す。ただし、ここでは、結果として金額に関する情報を引き出している発話も含める。その典型的な言語形式としては、「いくら」「どのぐらい」などを含む質問文がある。以下に、「情報を求める (金額)」の機能を表す発話文を取り上げる。

〈タイプ1〉

例1：【日男08】(男性20代、ほめ手)、日男08(男性20代、受け手)、二人とも大学生、ほめ場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	【日男】08	えー、いいな、この眼鏡。
2	2	*	日男08	そう？。
3	3	*	【日男】08	うん、ここがいい。
4	4	*	日男08	ちょっとこれが大きいのがあれだけど。
5	5	*	日男08	でもこのさ、この辺とかさ、ね？。
6	6	*	【日男】08	うん、これなんかブランドの…？。
7	7	*	日男08	これ何だろう。
8	8	*	日男08	知らない。
9	9	*	日男08	うすっぼい、4年前だから。
10	10	*	【日男】08	うーん。
11	11	*	日男08	でも、そんな高くない、フレーム。
12	12	*	【日男】08	そのフレームいくら？。
13	13	*	日男08	これでも、忘れたけど前部で2万4千円かな。
14	14	*	【日男】08	レンズとか込みで？。
15	15	*	日男08	うんうん。
16	16	*	【日男】08	えー、本当に？。
17	17	*	日男08	安いでしょ。

18	18	*	【日男】08	安いね。
19	19	*	日男 08	うん、これ、結構気に入ってるんだ、この眼鏡。

上の例1で分かるように、「情報を求める（金額）」の談話として、相手のメガネをほめることから始まり、ライン番号11の「でも、そんな高くない、フレーム」という発話によって、さらにそのフレームの値段を聞くことで詳しい情報を求めるものを導いたものである。この例では、金額という情報を求めるものとして、「そのフレームいくら」が使われている。このように親しい友達同士の場合は、金額を求める発話としては直接的な疑問の言語形式が使用される場合が多いと考えられるし、これは、男性のみならず、女性にも同じ傾向が見られると思われる。

以下の例2は20代の友達同士の会話である。

〈タイプ1〉

例2：日女13（女性20代、ほめ手）、【日女13】（女性20代、受け手）、二人とも大学生、ほめ場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	日女13	[相手の名刺を見せたら]なんかいいね。
2	2	*	【日女】13	ね!?
3	3	*	【日女】13	これしかも百枚で50元とか言ってたよ。
4	4	*	日女13	50元っていくら?。
5	5	*	【日女】13	50元って、あれ、10円だっけ。
6	6	*	日女13	うーうん、13か4くらいって聞いてたから。

例2は、例1と同じく、相手の持ち物をほめることから、「情報を求める（金額）」の機能が現れた。日女13が、【日女】13の名刺をほめることから、ほめられた【日女】13は、相手により具体的な情報、金額がいくらなのかを教えている。それに対して、またほめ手は言われた金額がいくらなのかを、相手に聞いている。ほめ場面では、ほめの対象、特に相手の所持物などに対しては、一度ほめてからより具体的な情報を求める発話が多々見られる。この例では、例1のようにほめた対象の金額を単純に聞くものではなく、ほめた対象のものの金額を言われ、さらにその金額を円に換算したものの情報を求める談話である。

以上のように例1、例2では、20代の男女の友達同士の中で、金額に関する情報を求める場合は、相手をほめることから、自分が聞きたい金額の情報をストレートに疑問の言語形式を使い、情報を求めるものであった。

次の例3では、例1、例2とは違って、金額の情報を直接に聞く、疑問の言語形式を使わずに、より婉曲な確認の言語形式を用いて、相手に情報を求めているものである。

〈タイプ1・タイプ2〉

例3：OF9, OF10（女性）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
333	324	*	OF10	前のさ、うちのマンションの前も看板立ってるよね。
334	325	*	OF9	え?。[驚いたように]
335	326	*	OF10	S 整形外科。
336	327	*	OF9	ああ、立ってる立ってる立っ<てる>{<}。
337	328	*	OF10	<ねえ?>{>}。
338	329	*	OF9	うん。
339	330	*	OF10	<##色が素敵>{<}。
340	331	*	OF9	<結構いろんなところに>{>}。
341	332	*	OF10	うん。
342	333	*	OF9	看板ていくらなんだろうね?。
343	334	*	OF10	知らん。
344	335	*	OF10	あ、いーくらだったかなあ…。
345	336	*	OF10	場所によって違うんだよ。
346	337	*	OF9	あ、そう。
347	338	*	OF10	うん。
348	339	*	OF10	こないだテレビでなんかやっ<てた>{<}。
349	340	*	OF9	<じゃ、>{>}駅前は高いとか?。[↓]
350	341	*	OF10	そうそうそう。

上に見られるように、例3は、例1と例2のようなほめの場面ではなく、OF10のマンションの前の看板が話題となり、話を進めているものから「看板ていくらなんだろうね?」の金額の情報を求めるものが現れている。ここでは、ライン番号342では例1、例2のように、タイプ1に当たる例文、「いくら」が提示されているが、ライン番号349では、「じゃ、駅前が高いとか」のように実際の会話では「いくら」の言語形式を持ってはいないが、当該の機能をもっているタイプ2のものであると思われる。

「情報を求める（金額）」では、「いくら」の典型的な言語形式を用いて金額を聞くタイプ1のものが多かった。しかし、全体的な談話の流れから、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ2のようなものも現れることがある。

(執筆：朴銀南)

## 9. 「情報を求める（経験）」

40機能の中で、「情報を求める（経験）」は、経験について情報を求めているものを抜き出す。ただし、ここでは、結果として経験に関する情報を引き出している発話も含める。



その典型的な言語形式としては、「～したことがある」を含んでいる質問文である。以下に、「経験の情報を求める」の機能を表す発話文を取り上げることとする。

〈タイプ1〉

例1：BF03（女性）YF01（女性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
48	46	*	BF03	わたしはまさかこういうところに勤めるようになるとは思いませんでしたが…。
49	47	*	YF01	は一、あ、じゃ卒業、大学院の方を<卒業なさって…>{<}。
50	49	*	BF03	<いえあの>{>}、大学院には行ってなくて、(ええ)、こちらを卒業した後ちょっとよそへ行ってしまったので、(あ、ええ)ちょうどそちらを出るときに、(ええ)あの、美術科の方で助手を採るっていう話がありまして、(ええ)運良く(あ、そうなんですか)ま、とっていただいたようなわけで…。
51	48	*	YF01	へー、そういえばちょうどあの建物が(はい)出来て…。
52	50	*	BF03	ええ、あの図書館の横にできた(ええ)新しい建物に、今年から移らせていただいで…。
53	51	*	YF01	は一、は一、あ、そうなんですか。
54	52	*	BF03	ご覧になったことありますか？。
55	53	*	BF03	いらっしやいました？。
56	54-1	/	YF01	ええ、あの、2、3回、
57	55	*	BF03	ああ、そうですか。
58	54-2	*	YF01	なんですけれども、あのキャンパスガイダンスの時に。
59	56	*	YF01	あの、下の博物館ですか？、(はい)あそこへちょっと、初めて入りまして<2人笑い>。
60	57	*	BF03	あ、そうですか。

例1は、初対面の女性同士の発話であり、BF03の職場の美術館の話が話題となっているもので、YF01がその美術館の建物について分かっている様子を見せると、BF03はYF01に来たことがあるのか、見たことがあるのかのYF01の経験をたずねるために、「ご覧になったことありますか」のように、典型的な言語形式を使っており、以上の例はタイプ1であることがわかる。

〈タイプ1〉

例2：BF08（女性）SM03（男性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
119	108	*	SM03	熊野の方とかは行かれたことがありますか？。
120	109	*	SM03	熊野大社とか、<なち大社とか>{<}。
121	110	*	BF08	<もっと南の方>{>}ですよ、<雨の多い>{<}。
122	111-1	/	SM03	<え、もう和歌山に>{>}、<おませの向こうですから>{<}、。
123	112	*	BF08	<ないです、ないです。>{>}。
124	111-2	*	SM03	非常に男性的なところですね。

例2は、初対面の男性同士の会話であり、どこか行ったことがあるのかと聞くのが中心として進められた会話である。そこで、ライン番号119では、典型的な経験を聞く文型である「～したことがある」を用いている。

〈タイプ1〉

例3：BM02（男性）SM01（男性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
50	49	*	JBM02	九州は、どこですか？。
51	50	*	SM01	あの、北九州の、隣にある、もうがたってところがあるんです。
52	51	*	JBM02	北九州、市…。
53	52	*	SM01	そうですね（ああ）、はい。
54	53	*	JBM02	もうがた…、分かんないな…。[ほとんど消え入りそうな声]
55	54	*	SM01	いったことありますか。
56	55	*	JBM02	いや、小倉、と、北九州、福岡、ちょっといったことあるんですけど。
57	56-1	/	JBM02	最近は何か福岡が、すごいなんていうか、発展して、
58	57	*	SM01	そうですねー。
59	56-2	/	JBM02	北九州市やなんか、の方は、なんか<軽く笑う>、
60	58-1	/	SM01	ちょっとさびれて<いると>{<}、
61	56-3	*	JBM02	<さびれて>{>}。

例3の会話も、例4の発話と同じく、「がた」という場所に行ったことがあるかどうかをたずねるもので、ここでも経験をたずねる「～したことがある」かの言語形式を使い、

相手にその場所に行ったことがあるかどうかのタイプ1を使い、聞くものである。

〈タイプ1〉

例4：YM1（男子高校生）YM2（男子高校生），親しい高校生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
33	31	*	YM1	今度でさ、ケンタッキーのポテトって知ってる?。
34	32-1	/	YM2	あのう,,
35	33	*	YM1	食ったことあるよね。
36	32-2	/	YM2	そう<あのう>{<},,
37	34	*	YM1	<ちよっと>{>}ちよう、太いよね?。
38	32	*	YM2	そう、そう、太いやつでしょう。

例4は親しい友達同士の会話であり、ケンタッキーのポテトを知っているのかのYM1の質問に対して、YM2が答える前に、YM1はもう一回ライン番号35で、「よね」の終助詞を使いながら、相手が経験しただろうと思ひ、確認の感じで相手に「食べたことあるよね」のような発話で、経験を聞いているものである。

以上のような例4は、話し手が質問して聞き手に経験の情報を聞いているのではなく、話し手が聞き手に確認の形式で使われたものである。

〈タイプ1〉

例5：YM7（男子高校生）YM8（男子高校生），親しい高校生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
77	73	*	YM7	フランスはパンだろ、パン。
78	74	*	YM8	え、パン?、あフランスパン [手を一回叩く] <YM7笑い>。
79	75	*	YM8	フランスパンか。
80	76	*	YM7	フ<ランス>{<}パンだろ。
81	77	*	YM8	<こう、>{>}こう、長いやつよ。
82	78	*	YM8	なんだろ。
83	79	*	YM7	あごだよあごだ。
84	80	*	YM8	あごだ<2人笑い>。
85	81	*	YM7	フランス。
86	82	*	YM8	フランスパンね、フランスパン食ったことねえなあ。
87	83	*	YM8	あ、<食った>{<}。
88	84	*	YM7	<笑いながら><食った>{>}ことあるだろう。
89	85	*	YM8	普通にあるかな。

90	86	*	YM7	かったいの。
91	87	*	YM7	<うん><{>。
92	88	*	YM8	<え、>>だっってわれわれはふらっってふ、フランスパンで言うけどフランスで作ったんじゃないぞ。
93	89	*	YM7	<笑いながら>知らねーよう<んなん><{>。

以上の会話は、例4と同じく親しい友達同士の会話で、ライン番号86のYM8の「食べたことねえ」との発話を受け、YM7は、「だろう」を使いながら、相手がおそらく経験しただろうとのことを確認する感じで相手に「食べたことあるだろう」という言語形式を用いて、経験を聞いているものである。

以上で見てきたように、例1～5までは典型的な言語形式を用いて「経験の情報を求める」ものであった。その中でも、例2、例3のように、ある特定の場所に行ったことがあるかどうかを聞く場合は質問形式が多かったが、例4、例5のように、当然、経験しただろうという確信から、相手に確認するために使われた場合には疑問形式というよりは確認を表す「だろう」「よね」が用いられ、さらにタイプ1の形式が多く使われているのが分かった。

以下では、実際の会話では特定の形式を使わずに、当該の機能を表している発話のタイプ2の会話例を見てみることにする。

#### 〈タイプ2〉

例6：BF03（女性30代前半）SM01（男性20代前半），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
38	37	*	SM01	あのオープンカレッジで、(ええ)あの、職員の、(はい)あの、懇親会と言うことで、(はい)その一、等々力渓谷ツアーというのをやったんですよ。
39	38	*	BF03	あっ、そうですか。
40	39	*	SM01	<それで等々力渓谷の><{><笑いながら>。
41	40-1	/	BF03	<笑いながら><じゃあ、遺跡の、>>あの、王穴を見たり、。
42	41	*	SM01	え?。
43	40-2	*	BF03	なさったんですか?。
44	42	*	SM01	そう、あ、王穴を見て、(ええ)で、九品仏'くほんぶつ'ってあるでしょう?。
45	43	*	BF03	ああ、はい、あります。

46	44	*	SM01	九品仏からスタートして、歩いて行って、(ええ)で、そう、野毛大塚古墳が(ええ)再現されたのを(ええ)見て、みんなでその前で写真とったんですよ<笑い>。
47	45	*	BF03	ああ、そう。
48	46	*	BF03	そういうこともなさってるんですか。
49	47	*	BF03	それはじゃあ、どなたがその、そういうコースを考えたんですか?。
50	48	*	BF03	好きな方が、やっぱり<いらっしゃるんでしょう?、そういう>{<}。
51	49	*	SM01	<それは、うちの部長が考えたんですけど>{>}。
52	50	*	BF03	ふうん、そうですか。
53	51	*	SM01	ええ。

例6は、タイプ1のように、BF03は典型的な経験を聞く文型である「～したことがある」を用いてはいないが、質問形式「(前略)あの、王穴を見たり、なさったんですか?」を用いて、SM01の経験の情報を求めていることがわかるし、さらに、次のSM01の応答の内容や全体の会話の文脈から、ライン番号41のBF03がSM01に経験を聞いていることが推測できる。

〈タイプ2〉

例7：BF03（女性30代前半）YF01（女性20代前半），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
12	12	*	BF03	え、あの、わたしは、今「学科名1」学科です。
13	13	*	YF01	「学科名1」学科、あ、あ、そうなんですか。
14	14	*	BF03	ええ、そうなんです。
15	15	*	YF01	何かあの一おみかけしたことある…。
16	16	*	BF03	あ、そうですか?。[↑]
17	17	*	YF01	あ、なんとなく…。
18	18-1	/	BF03	あ、前は「学科名2」学科<にありまして>{<}、
19	19	*	YF01	<え、そうですよね、>{>}。ええええ。
20	18-2	*	BF03	で、えーとー、「学科名1」学科<に移籍して2年目です。
21	20	*	YF01	ああ、そうなんですか。
22	21-1	/	YF01	あの、研究、最初、あの、研究助手を…、
23	22	*	BF03	あ、はい。
24	21-2	*	YF01	なさってたんですよ。

25	23	*	BF03	ええ、そうです。
26	24	*	BF03	あ、じゃ、その時にお目にかかっていますか?。
27	25	*	YF01	は、そうですね、<あのー…>{<}。
28	26	*	BF03	<失礼しました、ちよっ…>{>}。
29	27	*	YF01	はい、お顔を拝見したことがあるんですよ<笑い>。
30	28	*	BF03	あ、そうですか。
31	29	*	BF03	どうもすいません。
32	30	*	BF03	失礼いたしました。

例 7 は、初対面の会話であり、自己紹介をするところで、YF01 の「何かあの一おみかけしたことある…」の発話がきっかけとなっている。これは例 6 と同様に、BF03 は典型的な経験を聞く文型である「～したことがある」を用いてはいないが、次の SM01 の応答の内容「はい、お顔を拝見したことがあるんですよ」から典型的な「～したことがある」との文型を用いて発話をしたのを見ると、BF03 の「あ、じゃ、その時にお目にかかっていますか?。」は経験を聞いていると考えられる。

〈タイプ 2〉

例 8 : BF08 (女性 30 代前半) SM03 (男性 30 代前半) , 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
76	71	*	BF08	/少し間/なんか、知識がないんですけど、かしこ島も三重県ですか?。
77	72-1	/	SM03	ええ、あの一、伊勢からもう少し先いった,,
78	73	*	BF08	はい。
79	72-2	/	SM03	鳥羽の,,
80	74	*	BF08	鳥羽の先<ですよ。>{<}。
81	72-3	*	SM03	<えーかし、>{>}そうですね、<かしこ島…>{<}。
82	75	*	BF08	<そこにも>{>}行きました。
83	76	*	SM03	あー、そうですか。
84	77	*	BF08	っていうか、も一随分たちますけど、あの、鳥羽水族館にラッコが生まれてすごく注目を浴びましたよ<ねー>{>}。
85	78	*	SM03	<ええー>{>}。
86	79	*	BF08	それでとってもそれが見に行きたくて、随分前でしけど一、それを見るために、(ええ)鳥羽に行って、そしてかしこ島まで行きましたねー。
87	80	*	BF08	してっ'そして'、志摩観光ホテルですか?。
88	81-1	/	SM03	ああ、###、<あの>{<},,

89	82	*	BF08	<あそこで一…>{>}。[中断される]
90	81-2	*	SM03	エリザベス女王が泊まれた所じゃないでしたっけ?。
91	83-1	/	BF08	はい、なんか、そんな所で、友達と一緒に、大学の####とか、一泊でしたけどー,,
92	84	*	SM03	ええ。
93	83-2	*	BF08	行ったんです。
94	85	*	SM03	あーそうですか。
95	86	*	SM03	きれいなとこでしたでしょ?。
96	87	*	BF08	すごくきれいな所でした。[雑音]
97	88-1	/	BF08	静かで、真珠が、できるっていう、そのなんかいかだの?,, [声はか細い]
98	89	*	SM03	ええ、そうですねー。
99	88-2	*	BF08	英虞（あご）湾ですか?。[自信なさそうに]
100	90	*	SM03	<英虞湾ですね>{<}。
101	91	*	BF08	<ゴカシ湾ですか?>{>}。
102	92	*	SM03	ええ、英虞湾もゴカシ湾もごさい<ますけれど>{<}<笑い>。
103	93	*	BF08	<###そうですねー、あの>{>} [ほとんど語尾は聞こえない] 行きました。
104	94	*	SM03	へえー。
105	95	*	BF08	それくらいですか、三重県で知ってるのって…。[呟くように]
106	96	*	BF08	あっ、松坂牛<ですか?>{<}。
107	97	*	SM03	<あっ、>{>}松坂牛も、食べられました?。[↑]
108	98	*	BF08	んーん、<有名ですね>{<}。
109	99	*	SM03	<和田きんとか>{>}行かれましたか?<少し笑いながら>。
110	100	*	BF08	あっ、和田きん…、いや行かなかったです。
111	101	*	SM03	そうですか。
112	102	*	BF08	えーえ。
113	103-1	/	SM03	一回行ったらー、数万円は<かかるって>{<},,
114	104	*	BF08	<あっ>{>}<そうなんですか>{<}。
115	103-2	*	SM03	<いうふうな>{>}そんなとこみたいですけどもね。
116	105	*	BF08	支店はたくさんあるんですか?。
117	106	*	SM03	いや、あんまり聞いたことないですね（んー）。
118	107	*	SM03	何箇所かあるかもしれませんが（んーん）。[BF08が何かぼそぼそつぶやいている]

例 8 では、BF08 がかしこ島に行った話しが中心として、会話が展開されている。ここにも、典型的な経験を聞く文型は用いられていないが、ライン番号 107・109 では、そこであったことを聞いているもので、文脈上、かしこ島での BF08 の経験を聞いているものである。

〈タイプ 2〉

例 9 : BF11 (女性 30 代前半) OM04 (男性 40 代前半) , 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
64	57	*	OM04	それはおそらくいままで、あの一、体験っていうか、経験しなかったことが… (ええ)。
65	58	*	OM04	/少し間/ (<ウフッと笑う>) 女子大はじめてなもんですから (ええ)。
66	59	*	BF11	あの、どちらのほうにいらしたんですか?。
67	60	*	OM04	ぼくは、あの一、早稲田の高等学院…というところが、(えっ) あの一、大学の付属にあるんですよ、(ええ) 早稲田大学の (はい)。
68	61	*	OM04	それが神石井寺にありまして、そこんところと、(ええ) よその共学の大学で、(ええ) あの一、非常勤で、やりましたんで…。
69	62	*	BF11	ああ、<そうですか>{<}。
70	63	*	OM04	<ええ>{>}。

例 9 は、初対面同士の会話である。これは、OM04 の「女子大はじめてなもんですから」の会話に対して、ライン番号 66 では、典型的な「～したことがある」の言語形式は使っていないものの、今までどこで勤務していたのかの質問をすることによって、OM04 の経験を聞いているものであると考えられる。

〈タイプ 2〉

例 10 : BF11 (女性 30 代前半) OM04 (男性 40 代前半) , 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
93	85	*	BF11	あの一、もう出身は、わたしは富山の方なんですけれども。
94	86	*	OM04	はい。
95	87	*	BF11	あの一、大学からこちらの方に…。
96	88	*	OM04	あ一、そうですか。
97	89	*	BF11	はい<かすかに笑う>。



98	90	*	OM04	じゃあ、僕、そういう意味では、ぼくの大先輩みた、なあ。
99	91	*	BF11	いやー、あ、年数だけですねえ<笑い>。
100	92	*	BF11	えー、もう…<笑いながら>。
101	93	*	BF11	/沈黙 3 秒/でも、あの一、じゃあ、学寮とか、ああいう、ああいうのも、<やられましたか?>{<}。
102	94	*	OM04	<ええ、あの一、>{>}もう、2 度経験はしました、<ええ>{<}。
103	95	*	BF11	<ああ>{>}<小さく笑い>。

例 10 は、出身校の話をしている場面で、ライン番号 101 の BF11 の発話では「～したことがある」との文型は使われていないが、後からくる、ライン番号 102 の OM04 の「もう、二度経験はしました」の発話でも分かるように、典型的な文型は使っていないものの、相手に経験を聞くものであることがわかる。

#### 〈タイプ 2〉

例 11 : BF11 (女性 30 代前半) YF01 (女性 20 代前半), 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
9	9	*	YF01	[早口で] 先生…、でいらっしやいますか?。 [いらっしやいますか: 無声化]
10	10	*	BF11	いえ、研究助手です。
11	11	*	YF01	あっ、そうなんですか。
12	12	*	BF11	はい<2 人で笑う>。
13	13	*	BF11	/少し間/<2 人で笑い>もう、最近は、あの一、やはり、建物が違ったり、(ええ、ええ) あの一、科がちがうと全然<分からなくて…>{<}。
14	14	*	BF11	<そうですね、>{>}ええ。
15	15	*	YF01	この前の入試の時もいらしたんですか?。
16	16	*	BF11	えーと、入試は、えーと、はい、東京会場の方の面接 (ええ、ええ) 委員<だったので…>{<}。
17	17	*	YF01	<あっ、面接>{>}だったんですか?。
18	18	*	BF11	はい。

例 11 では、例 10 のように、発話内容で、ライン番号 14 が「経験の情報を求めている」ようなものであることを直接教えてくれるようなものではない。しかし、ここでは、ライン番号 15 の「この前の入試の時もいらしたんですか」は「この前の入試の時もいらしたことがありますか」のように直しても内容的には何の問題もないもので、典型的な文型は使っ

てないものの、全体の文脈からみると、「情報を求める（経験）」のタイプ2であることが分かる。

〈タイプ2〉

例 12：親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
79	78	*	J12	町屋、ってあっちじゃないの?、神奈川。
80	79	*	JB2	え、違うよ。
81	80	*	JB2	それは町田?。
82	81	*	J12	町田<2人笑い>。
83	82	*	JB2	うん、うん<笑い>。
84	83	*	JB2	/少し間/「映画名」見た?。
85	84	*	J12	あのね、あれについては話題がある<2人笑い>。
86	85-1	/	J12	あのね、だってさあれさ、最初CM、一番最初のCMは、(うん)別に普通に宣伝してたけど、(うん)途中からさ、結構、し、あの、映画のシーンがたくさん流れるようになってちゃって、(うん)で、しかも、なんか、なんだっけ、青島カムバックとか言ってさ、なんか青島よ永遠になんか安らかに<眠れ>{<}、
87	86	*	JB2	<眠れ>{>}。
88	85-2	*	J12	みたいに出てきちゃったでしょ。
89	87	*	J12	あれを、あんなんさ、あの時は、なんかもうストーリーばらされちゃったって感じだったのね。
90	88	*	JB2	うん。

例 12 も、タイプ 2 のもので、「「映画名」見た?。」の発話から、JB2 は映画を見たかどうかを聞いているものである。これは、同じく「「映画名」見たことがある」との内容を含んでいるもので、相手に経験の情報を求めているものである。談話 12 では、町屋がどこかという発話から、急に映画の話に話題が展開され、話が進められている。

〈タイプ2〉

例 13：親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
123	119	*	JB2	あ、じゃあ、じゃあ行こうかな、と思ったんだけど、まだ行ってない。
124	120	*	JB2	行った?。

125	121	*	J12	やあ、それでもう2度と見ない、とか言って。<笑い>。
126	122	*	J12	なんか、死ぬってあれほどこう思わせといたのに、死なない<のはね>{<}。
127	123	*	JB2	<だって面白い>{>}。
128	124	*	J12	そう、そうなんだよね。
129	125	*	J12	見に行こうかな、とかもちょっと思ったんだけど<それを聞いて>{<}。
130	126	*	JB2	<まだやってるよ>{>}。
131	127	*	J12	そうだよ、だって、確かに、死んじゃったらなんか救われないよね。
132	128	*	JB2	だって多分あれ売れてるからまた続きを作りたいと思う。
133	129	*	J12	そうだよ、うん。
134	130	*	J12	でもそれは相当ショックだったの、あのCMにだまされたのが。
135	131-1	/	JB2	そうかなあ、
136	132	*	J12	きれいにさくっと<だまされちゃったから>{<}。
137	131-2	*	JB2	<行きたいけどなあ>{>}。
138	133	*	JB2	でもなんか最近映画全然見てないんだけどね。
139	134	*	JB2	見た?。
140	135	*	J12	見てない。
141	136	*	J12	あたしも見に行きたいんだけど…。

例13も、例12と同じく、「いった?。」、「見た?。」の質問形式を用いて、「行ったことがある?」、「見たことがある?」のかを聞いている。このように、自然会話の中で現れる、「経験の情報をもとめる」発話は、典型的な言語形式「～ことがある」というタイプ1を用いるよりは、簡単にポイントとなる単語を使用し、質問形式で相手に聞いているタイプ2のものが多いと考えられる。

<タイプ2>

例14：M6（男性）M1（男性），親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
393	341	*	M6	で、仙台行っちゃったの?。
394	342-a	/	M1	そうそう、で、仙台にい（うん）//,,
395	342-b	/	M1	あの、店を開くって言ってえ（Nうん）//,,
396	342-c	*	M1	あのー、送り込まれたのN（NN）。

397	343	*	M6	あ、うちもそう。
398	344	*	M6	今週仙台支店がオープンして、そんで事務所が(うん)、だから部長が一、仙台に転勤。
399	345	*	M1	おー。

例 14 は親しい友人同士の会話として、M6 部長が仙台に転勤された話について話をしている場面で、ここでは、タイプ 2 の典型的な言語形式疑問の形式を用いて、相手に経験を聞いているものである。

〈タイプ 2〉

例 15 : F2 (女性) F3 (女性) , 親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
181	143	*	F2	ねえナイトダイビングやった?。
182	144	*	F3	やったよ。
183	145-a	/	F2	どう、ナイトダイビングとお(うん) //,,
184	145-b	*	F2	普通の時とお(うん)、どっちがいい?。
185	146-1	/	F3	あたしはねー、普通の,,
186	147	*	F2	ほうが N いい?。
187	146-2	*	F3	日のほう、あの一、おてんと様が出てる時のほうがあ(N うん)、好き、なことは好き。

例 15 は、「ナイトダイビング」が好きかどうかの話題で、ライン番号 15 の「ねえナイトダイビングやった?。」は「やったことがあるのか」を聞いているのと同じもので、F3 に経験を聞いているものであることが分かる。以上のようなもので分かるように、全体の文脈を見て、F2 が F3 に経験の情報を求めているものであるのかも把握できるが、ライン番号 15 の「ねえナイトダイビングやった?」だけを見ても推測できる例文である。

〈タイプ 2〉

例 16 : F3 (女性) F4 (女性) , 親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
4	4	*	F3	あのねー(うん)、F4 ちゃんさーあ、最近さあ、あの一、なんか映画見たとか N、見に行ったりとかした?。
5	5	*	F4	あ、見た。
6	6	*	F3	何見た?。
7	7	*	F4	あのねえ、『交渉人』。

8	8	*	F3	あーあーあーあー、どうだった?。
9	9	*	F4	あのねえ、すっごいよかったよ。

例 16 は親しい友人同士の会話であり、最近どんな映画を見たのかを聞いている。ここでは、典型的な文型「～ことがある」は使われていないものの、「～あの一、なんか映画見たとかN、見に行ったりとかした」の発話と次の F4 の発話の「あ、見た」との発話から、以前どんな映画を見たのかの経験を聞いているものであることがわかる。

〈タイプ 2〉

例 17 : YF7 (女子高校生) YF8 (女子高校生) , 親しい高校生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
254	237	*	YF7	バスケ、あれ、超本当いいあれは<YF8 笑い>。
255	238	*	YF7	泣ける、<最後>{<}。
256	239	*	YF8	<え、最>{>}初の方しか見てない?。
257	240	*	YF7	最初の方より後の方が楽しいよ。
258	241	*	YF8	最初は笑いだよ。
259	242	*	YF7	そう、本当<JF4 笑い>笑い、あれは受ける。
260	243	*	YF8	うーん。
261	244	*	YF7	最後はねもう友情、友情だよ。
262	245	*	YF8	えー、何?チーム内<のこと>{<}。
263	246	*	YF7	<チーム内>{>}。
264	247	*	YF8	ふーん。
265	248	*	YF7	###と超ケンカしてたじゃん (うん)。
266	249-1	/	YF7	だけど、最後ね,,
267	250	*	YF8	うん。
268	249-2	*	YF7	チームワークで勝ったの<YF8 笑い>。
269	251-1	/	YF7	本当に、<なん>{<},,
270	252-1	/	YF8	<あれ、>{>}あれもう,,
271	251-2	*	YF7	泣けるよ。
272	252-2	*	YF8	しっかり終わるんだ。
273	253	*	YF7	終わる、終わる。
274	254	*	YF8	へえー。
275	255	*	YF7	最後は天才ですからって言って、終わるんだよ。
276	256	*	YF7	かっこいい、桜井花道[?]もかっこよくなってきたよ、本当に。
277	257	*	YF8	<笑い>え、高校生、あれは?。
278	258	*	YF7	うん=。

279	259	*	YF7	=ポーズ、になったのは見た?。
280	260	*	YF8	あー、見たことあるかもしれない。
281	261-1	/	YF7	赤井、[無声、溜め息まじり]<あー>{<}、
282	262	*	YF8	<うんうんうん>{>}うんうん。
283	261-2	*	YF7	あれもかつこいい<YF8 笑い>。

例 17 の、YF7 は典型的な経験を聞く文型である「～したことがある」を用いてはいないが、「見た」との動詞を使って、以前の過去の経験を聞いている。さらに、次の YF8 の応答の内容「あー、見たことあるかもしれない」からは典型的な文型「～したことがある」が現れ、ライン番号 279 が経験を聞いているものであることを確認させている。

以上のように、「情報を求める（経験）」の機能を自然会話中の例文から探してみた。そこで、経験の情報を求める機能の発話には典型的な言語形式「～したことがある」を伴って当該の機能が実現されているタイプ 1 (5/17) より、典型的な言語形式を伴わないが、当該の機能が実現されているタイプ 2 (12/17) のほうが多く見られた。

(執筆著者：朴銀南)

## 10. 「予定を言う」

「予定を言う」は、これからする行動について予定を言うこととする。その典型的な言語形式としては、「～する予定だ」「～しようと思っている」や「～するつもりだ」などが挙げられる。

以下に、TUFSS 会話モジュールのスキット（以下、D-スキット）と『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』のそれぞれにおいて、この機能が現れた談話を比較する。

〈D-スキットにおける「予定を言う」の例〉

山田：大学生（吉田の後輩），吉田：大学生（山田の先輩）

状況：学校からの帰り道。その日の気温の話から、話題が夏休みのことになった。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	山田	早く夏休みが来るといいな。
2	2	*	吉田	そうねえ。
3	3	*	吉田	山田君、この夏の予定は?。
4	4	*	山田	友達とヨーロッパを旅行しようと思っています。
5	5	*	吉田	いいわねえ。
6	6	*	山田	先輩の予定は?。
7	7	*	吉田	私は少しバイトをしようと思っているの。
8	8	*	山田	何のバイトですか。
9	9	*	吉田	通訳の仕事。

このように D-モジュールでは、「予定を言う」を学習するユニットにおいて、大学生同士がそれぞれの夏休みの予定を述べる談話を提示している。会話の話題が夏休みのことになった後、まずライン 3 で、先輩である吉田が「山田君、この夏の予定は?。」と明示的な質問によって、山田の予定を尋ねる。ライン 4 の山田の発話文は、この質問の直後に続くという談話内での位置、またこれからの行動の予定であるという内容、の両面から見て「予定を言う」の機能を果たしていると言える。また「～しようと思っている」という対応言語形式を使用していることから、タイプ 1（当該機能を果たし、かつ対応言語形式を持つ談話）に分類できる。ライン 7 では逆にライン 6 の山田の質問に答える形で、やはり同じ「～しようと思っている」という対応言語形式を使用した、タイプ 1 の発話がされている。まとめると、D-モジュールにおいて「予定を言う」の機能を持つ二例は、いずれもタイプ 1 であり、また予定を尋ねる相手の質問の直後に位置する、という共通点を持つ。

一方自然談話においては、タイプ 1 とタイプ 2（当該機能を果たすが、対応言語形式を持たない談話）両方の用例が見られた。なお、タイプ 3（対応言語形式が存在するが、当該機能は見られない談話）はデータ中になかった。まずタイプ 1 の用例を示す。

〈自然談話における「機能 10：予定を言う」の例—タイプ 1〉

YF3：女子高校生、YF4：女子高校生

状況：親しい高校生同士の会話。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
188	181-1	/	YF3	<わか、>{>}若くてえ、貧乏で、あ、式は挙げられなかったけど、30 ぐらいになってさあ、
189	182	*	YF4	あー、<あれね。>{<}。
190	181-2	*	YF3	<挙げる>{>}。人たちってい<るじゃん>{<}。
191	183	*	YF4	<どうです>{>}。か?、ああいうの。
192	184	*	YF3	ヤじゃん、あんなの、だって。
193	185	*	YF4	じゃあ、見るふりして、ちょっと着てみたいんですけどって着て、…それでどう?。
194	186	*	YF4	それ<が為で>{<}。
195	187	*	YF3	<試着>{>}、試着?<笑いながら>。
196	188	*	YF4	どう?、どう?。
197	189	*	YF3	ドレスブラック行って試着しようかなあ、じゃあ。
198	190	*	YF3	だってそれは…ママのあるの。
199	191	*	YF4	じゃ着ちゃえば?。
200	192	*	YF3	んー、卒業式で着る<笑いながら>。
201	193	*	YF4	え<ー>{<}。
202	194	*	YF3	<予定>{>}。
203	195	*	YF4	<笑いながら>ねー、避けるよ。

204	196	*	YF3	<笑いながら>何で?、避け<ないで>{<}>。
205	197	*	YF4	<YF3>{>}、普通に避けるよ。

ドレスについて話している場面で、ライン 198 で YF3 が「ママの（ドレスが）あるの。」と述べると、次のラインで YF4 が「じゃ着ちゃえば?。」と提案する。それに対しライン 200 で YF3 が「卒業式で着る」と答えている。この発話はその内容から、「これからの行動について予定を言う」という定義に当てはまる可能性が高いが、「着る」ことが、ある程度実行の可能性の高い「予定」であるのか、またはその場面で思いついたような、実行可能性を問わない「意志」や「希望」であるのか、この発話だけからは判断できない。ライン 202 で「予定」という発話が添加されてはじめて、ライン 200 の内容が「予定」であったことが遡及的に確定する。

この用例で興味深いのは、「予定」という要素を添加することによって、YF3 は「卒業式で（ドレスを）着る」ことが「未確定の<意志>ではなく、実行の可能性の高い<予定>である」ということを強調するのではなく、むしろ「<予定>とは言っても確定してはならず、実行しない可能性もある」ことを強調しているように解釈できることである。つまり、「予定（だ）」という明示的な対応言語形式が、添加等の形で強調されると、「この予定は確定してはならず、実行しない可能性もある」ことを示すことがある、と考えられる。

次に、同じく自然談話データにおける、タイプ 2（当該機能を果たすが、対応言語形式を持たない談話）の用例を示す。

〈自然談話における「機能 10：予定を言う」の例—タイプ 2〉

YF9：男子高校生、YF10：男子高校生

状況：親しい高校生同士の会話。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	YM9	今日、どこ行くの?、おまえ。
2	2	*	YM10	今日?。
3	3	*	YM9	うん。
4	4	*	YM10	うん、う<2人で笑い>。
5	5	*	YM9	バシーン。[たたくマネ?]
6	6	*	YM10	池袋のビリヤードと、<あれ?>{<}>。
7	7	*	YM9	<ビリ、>{>}ビリヤード?。
8	8	*	YM10	ビリヤード。[ふざけた話し方で]
9	9	*	YM9	訳、わかんね<笑いながら>。
10	10	*	YM10	ゲームするから。[ふざけた話し方で]
11	11	*	YM9	<笑いながら>ふつうにしゃべれ。
12	12	*	YM9	なんのゲームセンター?。
13	13	*	YM10	ってゆうか、マジ超バリバ。[ふざけた話し方で]



ライン1で「今日、どこ行くの?、おまえ。」と尋ねた YM9 に対して、ライン6と8で YM10 が「池袋のビリヤードと、あれ?。」「ビリヤード。」と返答している。いずれのラインにも「する予定だ」や「するつもりだ」などの対応言語形式はないが、「ビリヤードに行く予定」「ビリヤードに行くつもり」のように補った場合に発話文の意味が変化しないと考えられること、またライン1の質問が予定を尋ねる質問であり、ライン6から7はその質問への返答であることが明らかなこと、の二点から、これらの発話文は「予定を言う」機能を果たしていると判断できる。

この用例のように、明示的に予定を尋ねる質問に答えていることが明らかな場合には、「予定だ」「つもりだ」のような対応言語形式を使用しなくても、「予定を言う」という機能が果たせる、と言ってもよいかもしれない。大規模なデータベースにおいてさらに確認が必要ではあるが、もしそう言えるのであれば、日本語（に限らず外国語一般）の授業でよく行われる、「明日は何をする予定ですか?」「～する予定です」のような問答練習においては、返答の際にはかならずしも明示的形式を用いる必要はない、という点に配慮した指導がなされるべきであろう。

(執筆著者：鈴木卓)

## 11. 「情報を求める（程度）」

40機能の中で、「情報を求める（程度）」は、程度について情報を求めているものを抜き出す。ただし、ここでは、距離、時間、頻度などの程度についての情報を求める機能を持つ発話とする。そして、結果として程度に関する情報を引き出している発話も含める。その典型的な言語形式としては、「何」「どれぐらい」「どのぐらい」などを含む発話である。以下に、「程度の情報を求める」の機能を表す発話文を見てみることにする。

〈タイプ1〉

例1：BF11（女性）YM03（男性）、初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF11	こんにちは。
2	2	*	YM03	あ、どうも、こんにちは。
3	3	*	BF11	「BF11 姓」です。
4	4	*	YM03	あ、「YM03 姓」です。
5	5	*	YM03	えっ、も一、何度かお顔は…。
6	6	*	BF11	あ、おかお、お顔だけは…、<2人笑い>はい。
7	7	*	YM03	え、今、教務課で、え（はい）働いております（ええ）<少し照れ笑い>。
8	8	*	BF11	もう、何年か…になりますか?。〔最後の方、ほとんど聞こえない〕

9	9	*	YM03	ええ、今年で4年目、になりますか。 [↓]
10	10	*	BF11	ああ、そうですか。
11	11	*	YM03	はい。

例1は、初対面の社会人同士の会話で、BF11がYM03に教務課でどのぐらい働いたのかを聞くものである。そこで、ライン番号8では「もう、何年か…になりますか?」の発話で「なに」という程度の情報を求める典型的な文型を使って、当該の機能を果たしていることから、タイプ1として分類されるものであると考えられる。

例2：BF11（女性）YM03（男性）、初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
48	48	*	BF11	うち一の、あの、科でも、あの、好きな子がいて、(はい) あの、そんな大きい立派なのじゃないと、思うんですけど、なんてよくわかんない、<笑い> (ええ) あのー、結構あちこちいってるんですよ、バイクで。
49	49	*	YM03	あ、そうですか。
50	50	*	BF11	ええ、それで、あのー、去年も、そうだったんですけど、(ええ) 今年も、あのー、北海道に一人で…、(ああー) <あの…>{<}。
51	51	*	YM03	<一人で行かれたんですか?>{>}。
52	52	*	BF11	うーん。
53	53	*	BF11	あの、フェリーとか使って、向こうまでは(ええ、ええええ、ええ、ええ) 行くんですけど、(ええ、ええ) それで向こうで、北海道の方で、もうあちこち??、(ええ) バイクで回って、で、去年一、行って、すごく楽しくって、(ええ) もう"今年も"ってゆって、今年の夏も真っ黒になって帰ってきましたけど。
54	54	*	YM03	あ、そうですか。
55	55	*	BF11	ええ。
56	56	*	YM03	どれくらい…日数で行くんですか?。
57	57	*	BF11	かなり行ってたんじゃないかしら。
58	58	*	BF11	何日だったかは、よく覚えてないん(ええええ、ええ) ですけど、かなり長い間。
59	59	*	YM03	あー、そうですか。
60	60	*	BF11	ええ。

TUFS 会話モジュールのスキット（以下、D-スキット）で、「情報を求める（程度）」の会話は、海外旅行にどのくらい費用がかかったかという内容であり、例2はD-スキットの設定と似たような状況である。例2では、BF11と同じ科の友達が話題となっており、その子は旅行が好きで結構色々なところに行くという話をしている。そこで、YM03がBF101と同じ科の友達が北海道に行ったという話を聞き、ライン番号56で「どれくらい…日数で行くんですか?。」をたずねている。例2では、「程度」の情報を求める機能をもつ発話の典型的な文型である「どのくらい」が現れている。

例3：BF03（女性30代前半）YM01（男性20代前半），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
3	3	*	BF03	すいません、あのう、あたしは「学科名」学科の「BF03姓」と申します。
4	4	*	YM02	あ、コンピューター室の「YM02姓」です。
5	5	*	BF03	「YM02姓」さんですか、はじめまして。
6	6	*	YM02	どうも、こんにちわ。[照れている感じ]
7	7	*	BF03	はじめてですよ。
8	8	*	YM02	ええ。[はっきりした言い方]
9	9	*	BF03	あたしはコンピューター室には全然ご縁がないもんですから。
10	10	*	YM02	んーそうですか。[無声化発音]
11	11	*	BF03	うん、何年になられるんですか?、勤めて。
12	12	*	YM02	今年で2年目なんですけど。
13	13	*	BF03	あーそうですか。
14	14	*	YM02	はい。

上の例は、初対面の会話でよく現れる、自己紹介の場面である。その中で、YM02がコンピューター室で勤務していると聞いたBF03は、ライン番号11でどのくらい働いたかという期間の長さをたずねるために「うん、何年になられるんですか?、勤めて」の表現を用いている。そこで、「何年」という程度を聞く典型的な表現を用いている。

例4：JBM01（男性30代前半）SM01（男性30代前半），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
55	52	*	JBM01	今日どちらからいらしたん<ですか?>{<}>。
56	53	*	SM01	<あ、>{>}あのう、埼玉県川口市というところから来ました。
57	54	*	JBM01	ほおー[息を吸うように]、キュウポラ。

58	55	*	SM01	そうですね。
59	56	*	JBM01	あー、<あそこ>{<}かあ。
60	57-1	/	SM01	<あの一>{>}、キュウポラは、あの川口の（うーん）町中の（うーん）ほうの話でして、（はい）私の住んでるところはあの、すごい、田舎のところ<笑いながら>,,
61	58	*	JBM01	へー。
62	57-2	*	SM01	あの植木の町、（そうなんですか）と言われてるところなん（はい）ですけど。
63	59	*	JBM01	はー、川口に…な、どのくらいかかりました?、ここまで。
64	60	*	SM01	/沈黙3秒/最後の、多摩、多摩線がなかなかこなかったっていうのがあるので…<笑いながら>。
65	61	*	JBM01	<笑い>確かに。
66	62	*	SM01	そうです。[小声で]
67	63	*	SM01	それ以外ですと、50分ぐらい、1時間以内では、着き<ますね>{<}。
68	64	*	JBM01	<へー、>{>}そうですか。
69	65	*	SM01	はい。

以上の例は、住んでいるところはどこなのかという JBM01 の問いに対して、SM01 は「～埼玉県川口市というところから来ました」という。そこで、本研究の基準となる、程度の情報を求める典型的な文型「どのぐらい」を用いて、ライン番号 63 で、埼玉県川口市がどのぐらいかかるのかをたずねているものである。ここの程度は、距離の程度を聞くものである。

例 5：JBM02（男性 30 代前半）YM01（男性 20 代前半），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
27	26	*	JBM02	/5 秒沈黙/スポーツとか好きですか?、野球とかサッカーとか。[後半無声化に近い]
28	27	*	YM01	<笑って>スポーツは、あの一ー、それはあれですか、あの、やってるように見えますか?<笑い>。
29	28	*	YM01	あの…それはあれですか、あの、やってるように見えますか。
30	29	*	YM01	逆に…。
31	30	*	JBM02	い、やー、うーん、わかん…ないで<すけど>{<}。

32	31	*	YM01	<うーん、>{>}。えーと、スポーツらしいスポーツとかそういうのはあまりやってなくて、あのかろうじてやっているのは、あの一、学生時代のときに年一回だけマラソンに出てたんですよ。
33	32	*	JBM02	あ一。[感心したように]
34	33	*	YM01	で、あの一、あれ##、###、あの一、週1回走ってるとかそういうことは全然なくて。[ちょっと何をいっているかわからない]
35	34	*	YM01	一夜漬けとか1ヶ月漬けとか<笑う>。
36	35	*	YM01	あの一、大会の1ヶ月か2ヶ月ぐらい前から、1日10キロ20キロぐらい走るっていうのを、やってかろうじて…、完走できるかなっていうぐらい。
37	36	*	JBM02	あ一、じゃフルマラソンで。
38	37	*	YM01	フルですね。
39	38	*	YM01	だから別に、タイムは別に、なんか2時間とか3時間、そんな速いんじゃないで、4時間ぐらいかけてゆっくり走るっていう感じですよ。[ゆっくり走るっていうかんじですよ、はかなり小聲で]
40	39	*	JBM02	一回だけ完走したことあるんですよ。
41	40	*	YM01	そうなんですか<笑いながら>。
42	41	*	JBM02	やっぱり4時間30分ぐらいで…。
43	42	*	YM01	や一、それぐらいですよ<ね>{<}。
44	43	*	JBM02	<ええ>{>}。
45	44	*	YM01	初めてんときもそれぐらいかかりましたね。
46	45	*	YM01	どのぐらいですか、も、ずいぶん前ですか?。
47	46	*	YM01	最近…<ですか?>{<}。
48	47	*	JBM02	いや一、うん、20代が終わるときに、(ええ)やっぱり、え一、やっぱ、30代になったら、##を<2人笑う>、なんか、呼吸器系とかあの、なんか不安かなあと思って、まあ、20代なら、ん…いや、いきなりやっても大丈夫かな<笑う>とか思って。

例5は、「情報を求める(程度)」の談話として、好きなスポーツは何かを聞く話題から出発して、YM01の学生の時代にマラソンをやったという話を聞き、そこから話題が発展する。さらに、JBM02もマラソンで完走したことがあると聞き、ライン番号45でYM01が典型的な言語形式の「どのぐらい」を使い、「どのぐらいですか、も、ずいぶん前ですか?」と聞くことでいつたのかという詳しい情報を導いている。

例6：JFB（女性20代前半）、JFS（女性20代前半）、初対面の大学生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
42	40	*	JFS	私はけっこうこの辺がもうずっと大学の私の友達だった子が(うん)会う教室がこの辺だったから(うん)今、久しぶりに来たの。
43	41	*	JFS	すごい懐かしいなとか思って。
44	42	*	JFS	普段だともうこっちの方来ないからめったに、用もないし<2人で笑う>。
45	43	*	JFB	ですよ。
46	44	*	JFB	そう、なんか、語科ごとに教室が分かれているんだと(うん)いうことに気がついたのもけっこう最近、(そう)最近って言うか去年の終わりぐらいで(うんうん)。
47	45	*	JFS	確かにそうかもしれない。
48	46	*	JFS	私はもう大学院の時は、あ、学部の際は(うん)どこが何学科っていうか、そういう位置づけで、もう、覚えてたんだけど、卒業して2年3年目ぐらいからそういうのあんまりなくなっちゃきて、もう、ぜんぜん今は何がなんだか分からないからそう言われればみたいな感じで(え)。
49	47	*	JFS	週、どれぐらい学校来てるんですか?。
50	48-1	/	JFB	えーと、今んとこ週4日、
51	49	*	JFS	<週4日、あ、けっこう>{<}。
52	48-2	*	JFB	<来てるんですけど>{>}木曜日以外。
53	50	*	JFS	あ、けっこう、多いですね。
54	51	*	JFB	そうですね、1個とか2個なんんですけど。
55	52	*	JFS	ああ、その<日に>{<}。
56	53	*	JFB	<うんうん>{>}、1日1個とかなんだけど。
57	54	*	JFB	どれぐらい来てます?。
58	55	*	JFS	私は週1回しか来てなくて(へえ)。
59	56	*	JFS	あの、今度私留学するんですよ(おー)。
60	57	*	JFS	だから、もう、また、戻って来てって感じなんんですけど。

例6も「どのぐらい」を用いて、典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されているタイプ1の談話である。ここでは、ライン番号49の「週、どれぐらい学校来てるんですか?」、ライン番号57の「どれぐらい来てます?」ともに、学校へ来る頻度の程度を聞いて

いると考えられる。

〈タイプ2〉

例7：BF11（女性）OM03（男性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
82	75	*	BF11	なんか、あの一、そういう意味では、ほかにもましてこちらはいろいろとあの(ええ)まあ私学特有(ええ)というか私学のあれなんですけど、ありますから<小さく笑い>。
83	76	*	OM04	もう、助手になられて、じゃあ…?。
84	77	*	BF11	わたしは、長いんです、もう。
85	78	*	OM04	あ一、そうですか。
86	79	*	BF11	ええ、かなり、え一<笑い>。

上に見られるように、例7は、初対面の社会人同士の会話で、仕事の話が話題となっている。OM04の「もう、助手になられて、じゃあ…?」の発話では直接的に、典型的な文型「何」「どのぐらい」「どれぐらい」などは現れていないが、「…」の中に「どのぐらいなるんですか」が省略されているのが、次のBF11の発話「わたしは、長いんです、もう」から推測できる。

〈タイプ2〉

例8：BF11（女性）SF11（女性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
29	27	*	SF04	もう、あの一、助手さんは長くやってらっしゃるんで<すか?><{>。
30	28	*	BF11	<そうですね>><{><笑い>。
31	29	*	BF11	長いんです。
32	30	*	SF04	あ一そうですか一。
33	31	*	BF11	はい。

例8では、助手になられてからどのぐらい経つのかを聞いている会話である。ここでライン番号29では、直接に「何」「どれくらい」「どのくらい」の表現は用いてはいないものの、「もう、あの一、助手さんは長くやってらっしゃるんですか?」のように、程度を表す「長く」の単語を用いて、相手に程度の情報を求めているところから、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ2の談話であると考えられる。

## 〈タイプ2〉

例9：BF11（女性）YF01（女性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
75	69	*	BF11	/沈黙2秒/もう、（ええ）だいぶ、何年か…。
76	70	*	YF01	いえ、あつ、あの、勤めて…?。
77	71	*	BF11	ええ。
78	72	*	BF11	また、2年目なん<ですよ>{<}。
79	73	*	BF11	<あっそう>{>}<ですか。>{<}。
80	74	*	YF01	<去年…、>{>}あっそうですね、2年目で…。
81	75	*	BF11	ええ。
82	76	*	YF01	まだ、まだ、あまり…<2人で笑い>。

例9は、ライン番号75の「もう、（ええ）だいぶ、何年か…」の発話だけでは、程度の情報を求めているように思われぬが、次のYF01の「～あの、勤めて…?」のようにBF11の質問を確認するところで、ライン番号75が「勤めてどのぐらい経つ」のかをたずねるものであるのかが推測できた。このように、典型的だと思われる言語形式は見られなかったが、後で続けてくる発話の内容を見て、ライン番号75が典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されている談話であることがわかった。

## 〈タイプ2〉

例10：BF03（女性30代中半）OF01（女性40代中半），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
27	26	*	OF01	あんなにヨーロッパが面白いとは思いませんでしたねえ。
28	27	*	BF03	でも、普段は、あんまり外国へは?、<出ない…?>{<}。
29	28-1	/	OF01	<えー>{>}、えーっとね、そうですねえ、あれからは、えーっと、イタリア、フィレンツェに（ええ）一週間ぐらい、滞在するっていうのを…,,
30	29	*	BF03	あ、フィレンツェだけですか?。
31	28-2	*	OF01	ええ、しました。
32	30	*	BF03	それは贅沢な旅行ですね。
33	31	*	OF01	うん、あれは良かったですね。
34	32	*	OF01	3人ぐらいで、友達と行ったんですけども。



35	33	*	OF01	それから、あとは一、あとはあんまりヨーロッパへは行かなかったんですけど、この夏にイギリスに行きました。
36	34	*	OF01	スコットランドに…。
37	35	*	BF03	それはなにか目的が…。
38	36-1	/	OF01	ええ、あの、ちょっと調べに行こうとしてたんですけども、あんまりきれいなので<笑いながら>,,
39	37	*	BF03	ああ、そうですか。
40	36-2	*	OF01	景色にばかりみとれてしまったんですけど…、うーん<笑いながら>。
41	38	*	OF01	「BF03 姓」さんはよくいらっしゃるんですか?。
42	39	*	BF03	いえいえわたしはヨーロッパは、あの一大学のヨーロッパ研修の引率で…。
43	40	*	OF01	あー、初めて?。[→]
44	41	*	BF03	ええ、初めてなんです。
45	42	*	OF01	あ、そうですか。
46	43	*	OF01	それまでは、あんまり…?。
47	44	*	BF03	ええ、全然、(ああ、そうですか) 行かなかったですね。
48	45	*	OF01	あー、あー、あー。

例 10 では、頻度の程度を聞いていると考えられる。以上の会話は、旅行話が話題となっている。OF01 が色々な国に旅行に行ってきたことについて話を進めている場面で、そこで、OF01 が「BF03 さんはよくいらっしゃるんですか?」のように、「よく」の頻度を聞くような副詞を使い、典型的な言語形式は使っていないものの、BF03 は外国にどのぐらい行くのかを聞くものであるのかを推測できるものである。

#### 〈タイプ 2〉

例 11 : BF03 (女性 30 代中半) SF01 (女性 30 代中半) , 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
31	28	*	SF01	ご結婚されてんですよ<ね>{<}。
32	29	*	BF03	<ああ、はい>{>}<笑い>。
33	30	*	SF01	それだけは分かっているんですけど<笑いながら><2人笑い>。
34	31	*	SF01	大変、大変ですか?。

35	32	*	BF03	ええ、いやあー、あの一、今2人で生活してますし、(ええ) んー、そうですねー、あの一、うち、比較的 大学から近いところに住んでるんで。
36	33	*	SF01	あ、どこでしたっけ?。
37	34-1	/	BF03	今あの一、川崎なんですけれども、最寄り駅は二子新 地なので、
38	35	*	SF01	あ、じゃあ、いいですよ。
39	34-2	*	BF03	えっ。

例 11 は、初対面の 30 代前半の女性同士の会話で、結婚生活を話題としている。SF01 の「大変、大変ですか」の発話は、典型的な文型は使っていないが、結婚生活の大変さの程度を聞いているタイプ 2 のものと考えられる。

〈タイプ 2〉

例 12 : BF03 (女性 30 代前半) SM01 (男性 30 代前半) , 初対面の社会人同士

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容
1	1	*	SM01	あの一、事務局の方ですか?。
2	2	*	BF03	いえ、わたしは「学科名」学科というところに所属 しております「BF03 姓」と言います。
3	3	*	SM01	あ、学生さん?。
4	4	*	BF03	いえ、あ、いえ、あの一、教員です。
5	5	*	SM01	あ、先生なんですか。
6	6	*	BF03	はい。
7	7	*	BF03	えっとお名前は?。
8	8	*	SM01	わたしはあの一、オープンカレッジの、あの一、執行委 員をやってます「SM01 姓」と言います。
9	9	*	BF03	「SM01 姓」さんですか。
10	10	*	SM01	はい、よろしく<お願いします><>。
11	11	*	BF03	<はじめまして><>。
12	12	*	BF03	そうですか、えーと、そうですね…。
13	13	*	BF03	オープンカレッジの方には、ほとんどわたし、縁が ないので、<何うこともないんですけど><>。
14	14	*	SM01	<わたしも、こっちの大学の中には、縁がないので …><>。
15	15	*	BF03	そうですか。
16	16	*	BF03	あまり門からこっちに入ってもらっちゃるというこ とはないですか?。

17	17	*	SM01	学園本部へはよく行きます。
18	18	*	BF03	ああ、そうなん（ええ）ですか。
19	19	*	SM01	もう先生をやって長いんですか?。
20	20	*	BF03	いえ、わたしはまだですねえ、<笑い>教壇に立つようになってから4年目かな。
21	21	*	SM01	4年目ですか、へえ。

例12は初対面の会話で、自己紹介をする段階で、名前や職業を聞く場面である。このライン番号19では、「もう先生をやって長いんですか?」は「どのぐらい」「どれぐらい」の程度を表す言語形式は直接、現れていないものの、先生になってどれくらい経っているのかを「長い」という形容詞を用いて、その期間の程度を聞いているタイプ2のものであると考えられる。

以上で、「情報を求める（程度）」の機能をもつ会話を見てきた。そこで、程度の情報を求める機能の発話には典型的な言語形式「何」「どれぐらい」「どのぐらい」などを伴って当該の機能が実現されているタイプ1（6/12）と、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ2（6/12）とが同じく現れた。しかし、タイプ2の場合も、例7のように「…」の中に「どれぐらい」の典型的な文型が省略されていたり、程度を表す形容詞「長い」を代わりに使うことによって（例8, 例12）、程度の情報を求めたりするもので、タイプ2のものも、タイプ1の性格に似ているような談話が多かった。

（執筆者：朴銀南）

## 12. 「情報を求める（時間）」

40機能の中で、「情報を求める（時間）」は、時間について情報を求めているものを抜き出す。ただし、ここでは、結果として時間に関する情報を引き出している発話も含める。その典型的な言語形式としては、「何時」「何分」などをその典型的な言語形式とする。以下に、「時間の情報を求める」の機能を表す発話文を取り上げることとする。

〈タイプ1〉

例1：初対面の大学生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
53	53	*	JB2	実習行きました?。
54	54	*	J2	行きました。
55	55	*	JB2	え、いつ行ったんですか?。
56	56	*	J2	えっと、96年。
57	57	*	JB2	96年。

例1は、実習いつ行ったのかを尋ねているものである。そこで、ライン番号55では、直接的に「え、いつ行ったんですか?」のように、時間の情報を求める「いつ」の典型的な言語形式を用いて、相手に情報を求めているものである。

例2：M1（男性）F1（女性），親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
98	73	*	M1	で、何時ぐらいまで行って来たの?。
99	74	*	F1	それでえ、(なにずっと?) 結局夜…N。
100	75	*	M1	夜までいんの? (<笑い>)。
101	76	*	M1	夜までずっと井の頭公園でかき氷ば一っと…。

例2は、親しい友人同士の会話として、「何時ぐらいまで行ってきたの?」のようにストレートにその時間を聞いているタイプ1のものである。

例3：M1（男性）M6（男性），親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	M1	という感じでどうでしょう。
2	2	*	M6	え?<笑い>なに?。
3	3	*	M6	どう…。
4	4	*	M6	え、昨日の帰りは結局なん、何時?、10時?。
5	5-a	/	M1	うーんとねえ、10時一、えーと、あそこ出たのが10時半ぐらいで一(うん) //,,
6	5-b	*	M1	出ようって言ってたんだけど(N)、やっぱずれちゃって、10時、45分ぐらいかな。
7	6	*	M6	あーN。

例3は、例2と同じく親しい友人同士の会話で、直接的に典型的な文型「何時」を用いて、正確に相手に時間の情報を求めている。

以上のように、親しい友人同士は、聞きたい時間の情報を求める場合は、直接的に簡潔に「何時」「何分」のように聞く傾向が高いと思われる。

例4：M1（男性）M6（男性），親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
29	21	*	M1	今日何時ごろ起きたの?。
30	22	*	M6	今日は、7時ぐらいかな。

31	23	*	M1	7時。
32	24	*	M6	うん。

上で見られるように、例4のライン番号29は、「今日何時ごろ起きたの?」のように「何時」という典型的な文型「何時」を用いて相手に時間の情報を求めている。

例5：M3（男性）M4（男性），親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
9	7	*	M3	きよ、今日に備えて、学校の図書館、大学の図書館(うん)。
10	8	*	M3	そしたら休館日じゃあ(うん)。
11	9	*	M4	いつ行ったの?。
12	10	*	M3	昨日。
13	11	*	M4	昨日?。
14	12	*	M3	うん。

例5は、図書館に行ったら休日だったという話をM3がしたら、M4が「いつ行ったの?」のように、「いつ」という時間をはっきり分かるような言語形式を用いて、情報を求めているタイプ1の例である。

例6：M3（男性）M4（男性），親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
9	7	*	M3	きよ、今日に備えて、学校の図書館、大学の図書館(うん)。
10	8	*	M3	そしたら休館日じゃあ(うん)。
11	9	*	M4	いつ行ったの?。
12	10	*	M3	昨日。
13	11	*	M4	昨日?。
14	12	*	M3	うん。
15	13	*	M4	昨日って一…、えー、えー、水曜日?。
16	14	*	M3	うん、だから時間休取って。
17	15	*	M4	あー。
18	16	*	M3	2時間。
19	17	*	M4	時間休って、<笑い>えー、<笑いながら>マジでそんなの…。
20	18	*	M3	わざわざ取ったんだよー。

21	19	*	M4	何時から何時まで?。
22	20	*	M3	3時一から、3時10分から5時10分まで、2時間。
23	21	*	M4	それは終わりまでってこと?。
24	22	*	M3	うん。

例6は、例5の会話の続きで、せっかく、時間休みをとって図書館に行ったM3が、図書館に行ったら休日でいやな思いをしたという会話内容で、ライン番号21では、具体的な時間を典型的な文型を使い「何時から何時まで?」のように聞いているものである。

例7：M3（男性）M4（男性）、親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
133	121	*	M4	何時に待ち合わせ?。
134	122	*	M3	6時。
135	123	*	M4	夕がたN?。
136	124	*	M3	うん。

例7も、M3とM4は親しい友人関係で、夕方に待ち合わせをするために時間を合わせている場面である。そこで、上に見られる会話は、簡潔に典型的な言語形式「何時」を伴って当該の機能が実現されているタイプ1の談話である。

例8：F2（女性）F3（女性）、親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	F3	<二人で笑い>え今度、いつ行くの?、9月。
2	2-a	/	F2	9月、のお(うん) //。
3	2-b	*	F2	171819'じゅうななじゅうはちじゅうきゅう'でえ(うん) …。

例8は、また、「今度いつ行くのか」をストレートに聞く場面である。このときもタイプ1が使われている。

例9：YM1（男子高校生）、YM2（男子高校生）、親しい高校生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
151	134	*	YM1	職人さん、職人さんになりたいね、俺は。
152	135	*	YM2	そんなこと言ったって、まだやったばっかだ。
153	136	*	YM1	今、6分たったよ。

154	137	*	YM2	<笑いながら>あれ?。
155	138	*	YM1	そろそろ交代かな?、ネタ。
156	139	*	YM2	なん、何分だった、今?。
157	140-1	/	YM2	俺、俺はね、
158	141	*	YM1	面を向かって語るよ。
159	140-2	*	YM2	出しておくから。
160	142	*	YM1	学校でもいいよ。
161	143	*	YM2	学校のこと?。
162	144	*	YM1	学校でも、や、ヤノッチの悪口でも。
163	145	*	YM2	ヤノッチー?、<笑いながら>ああヤノッチね。
164	146	*	YM1	別にだれでも、なんでもいいよ。

例 9 は、最初二人の間には、6 分ずつ、話題を出してから話をしようと約束していて、最初に YM1 が自分のバイトの話で 6 分会話をしていたので、次は YM2 の番なので、新しい話題を出すように YM2 に要求する場面である。そこで、ライン番号 153 は「今、6 分たったよ」の時間を知らせるものであり、それを聞き逃した YM2 は、ライン番号 156 で「なん、何分だった、今?」のように、もう一回時間を聞いている。その際、典型的な言語形式「何分」を伴い、当該の機能が実現されているタイプ 1 の形式を選んでいる。

例 10 : YM5 (男子高校生), YM6 (男子高校生), 親しい高校生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
40	39	*	YM6	うー、う、うん、ギャル系がいいだろ?。
41	40	*	YM5	いや、ギャル系もいいし、静かな子もいいし。
42	41	*	YM6	俺ギャル系大好きなんだよ。
43	42	*	YM5	ちょっとヤンキーがキツイみ<たいな>{<}
44	43	*	YM6	<やや、>{>}ヤンキーはちょっとね。
45	44	*	YM5	ヤンキーこわい。
46	45	*	YM6	こわい。
47	46	*	YM6	と、ね。
48	47	*	YM5	ね。
49	48	*	YM6	ね。[咳き込む]
50	49	*	YM5	[息を吸い込む] ちょっと待って、あとじゅう…今何分ぐらいだったろ?。
51	50	*	YM6	うん?、ん、<ん…>{<}
52	51	*	YM5	<ちよ、>{>}ちょっと携帯返せや<YM6 笑い>。
53	52	*	YM5	あ、うそ、携帯ないわ。
54	53-1	/	YM6	うーんとね、

55	54	*	YM5	うん、今、2時、<22分>{<}
56	53-2	*	YM6	<あ2時、>{>}ちよっ、ちよっと、2時22分?。[動揺している様子]

上で見られるように、例10は親しい友達同士での会話で、お互いの理想の女性について語っている場面である。そこで、話を続けていくうちに、時間が気になったYM5は「ちよっと待って、あとじゅう…今何分ぐらいだったの?」のように、相手に時間を直接に聞いている疑問形式ではなく、自分に語っているような言語形式を使い、相手に時間を聞くというよりは自分に聞くような形をとっている。その結果を裏付けるように、ライン番号55で、相手のYM6ではなく、YM5がライン番号50の質問に対する応対を自分でやっている結果となった。このように、相手に時間の情報を求める形式とはちよっと違い、自分に聞き、確認するような内容となっているが、典型的な言語形式「何分」を用いており、タイプ1であるといえる。

例11：YM9（男子高校生）、YM10（男子高校生）、親しい高校生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
310	290	*	YM10	パイプ、パイプ、…パイプじゃだめじゃん。
311	291	*	YM10	ま、いっか。
312	292	*	YM9	ちよっと、怖えし。
313	293	*	YM10	ちよっと、この辺で、シー。[静かにする合図]
314	294	*	YM9	今、何分ぐらいだったのかな。
315	295	*	YM10	何時、今?。[小さい声で]
316	296	*	YM9	2時33分です。
317	297	*	YM10	じゃそろそろだ、[小さい声で] じゃあね。

例11は、録音を依頼した研究者をビックリさせるために、隠れようとする場面である。そのために、研究者が来るといわれた時間に合わせて隠れるために、相手に時間を聞く必要があり、ライン番号315で、「何時、今?」のような表現を用いて、相手に時間を聞いているタイプ1が使われている。

例12：親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	【日女】14	えー、起きるのは何時?。
2	2	*	日女14	起きるのは7時ちよっと前、6時50分<ぐらい>{<}
3	3	*	【日女】14	<あ、そう>{>}なんだ。



例 12 は、親しい友人同士の会話で、朝何時に起きるかをたずねるもので、ここではタイプ 1 の典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されている形式をとっている。

例 13 : BF02 (女性) SF2 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-1	/	JBF02	あのね、<笑い>、そそそ、1 回目の,,
2	2	*	JSF2	うん。
3	1-2	/	JBF02	「人名」さんときプリントをなくしちゃって,,
4	3	*	JSF2	うん。
5	1-3	*	JBF02	「人名」さんもってる?
6	4	*	JSF2	本当になくしたの?
7	5	*	JBF02	うん。
8	6	*	JSF2	<笑い>もってるよ。
9	7	*	JBF02	ほんとう。
10	8	*	JSF2	うん、コピー<する?>{<}。
11	9	*	JBF02	<コピー>{>}。
12	10	*	JBF02	今度貸して。
13	11	*	JSF2	いつ?
14	12	*	JSF2	来週?
15	13	*	JBF02	来週でもいいし。
16	14	*	JBF02	あっ、今度バイトいついく?
17	15	*	JBF02	木曜日いく?
18	16	*	JSF2	水、木。
19	17	*	JBF02	水、木。
20	18	*	JBF02	私も水、木。
21	19	*	JBF02	じゃ、そのときに。
22	20	*	JSF2	うん、うん。

例 13 では、プリントをなくした JBF02 が JSF02 にプリントを貸してほしいと依頼する場面である。そこで、ライン番号 13 と 16 では、簡潔に時間を聞く、典型的な文型「いつ」を使い、時間を聞いている。

例 14 : BF06 (女性) OM17 (男性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-1	/	JBF06	あの一、5 限の,,
2	2	*	JOM17	はい。

3	1-2	*	JBF06	授業の教科書、ちょっと借りたいんだけど…。
4	3	*	JOM17	あっ、はい。
5	4-1	/	JBF06	私、あの一、1ページとか、2ページ、私、買えなくて、コピーしたんですけど、
6	5	*	JOM17	はい。
7	4-2	/	JBF06	1ページか、2ページちょっと抜かして、
8	6	*	JOM17	あっ、はい。
9	4-3	/	JBF06	コピーしちゃたんで、
10	7	*	JOM17	はい。
11	4-4	/	JBF06	その部分を、
12	8	*	JOM17	あっ、はい。
13	4-5	*	JBF06	コピーしたいんで、貸してください。
14	9	*	JOM17	あっ、はい、どうぞ。
15	10	*	JOM17	えーと、いつぐらい返してもらえるんですか？
17	12	*	JBF06	/沈黙 5 秒/あっ、あの、ごめんなさい、火曜日の 5 限の。
18	13	*	JOM17	あっ、火曜の 5 限。
19	14	*	JBF06	はい、すみません。
20	15	*	JOM17	あっ、はい、わかりました。

例 14 では、コピーする際、何ページか抜かしてからコピーしたため、その部分を貸してほしいと依頼する場面である。JBF06 の依頼に対して、JOM17 は貸してあげることを承諾するが、その際、いつ返してもらえるのかの時間を相手に聞くライン番号 15 で「時間の情報を求める」当該の機能を持っている会話から、ここでは「いつ」という典型的な文型を用いているのでタイプ 1 のものであると思われる。

例 15 : BM07 (男性) YM59 (男性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBM07	さきの、2 限の授業の「授業名」の休んじやったんだけど。
2	2	*	JYM59	はい。
3	3	*	JBM07	ちょっとなんかノートとってたりしたら貸してくれない？。
4	4	*	JYM59	あ、でも訳あまりうまくやってないんですけど。
5	5	*	JBM07	あ。
6	6	*	JYM59	あ、いいんですか？。
7	7	*	JBM07	いいいい、そんな気にしない。

8	8	*	JYM59	あ、じゃ、一応いつ渡します?。
10	10	*	JBM07	あ、どうしようかなうん、と、いまちよつと行ってコピーとってくる。
11	11	*	JYM59	あ、はい、<じゃ、ここで待ってます>{<}。
12	12	*	JBM07	<すぐ返すから>{>}。
13	13	*	JYM59	はい、わかりました。
14	14	*	JBM07	そんじゃ。

例 15 も例 14 と同じく、休んだ授業のノートのコピーを貸してくれるように依頼する場面である。そして、ここでも、同じく典型的な文型「いつ」を使い、いつ返してくれるかの時間を尋ねているタイプ 1 の例である。

例 16 : BM11 (男性) SF22 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBM11	この間のさあ、米文学の授業でさあ、あのなんか、プリント配ったらしいんだけどさ、俺ちよつといなかったからさあ、プリント貸してほしいんだけど…。
2	2	*	JSF22	あ、うん、沈黙 1 秒/いいよ。
3	3	*	JBM11	うん。
4	4	*	JBM11	えー、じゃあ、いつ、も、持って来てくれる?。
5	5-1	/	JSF22	したら、次あの授業だから、
6	6	*	JBM11	うん。
7	5-2	*	JSF22	火曜日お休みだから。
8	7	*	JBM11	うん。
9	8	*	JSF22	えっ、ちよつとまって、木曜日…<笑い>。
10	9	*	JBM11	木曜日! <笑い>。
11	10	*	JBM11	え、木曜日でいい。
12	11	*	JBM11	じゃあ、かしてくれる?。
13	12	*	JSF22	いいよ。
14	13	*	JBM11	じゃ、お願いしますね。
15	14	*	JSF22	はい。

例 16 も、例 14, 15 と同じく、友達に休んだ際の、ノートを貸してくれるように依頼するものでタイプ 1 の形式をとっている例である。

例 17 : BF14 (女性) OF37 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBF14	おはようございまーす。
2	2	*	JOF37	おはようございまーす。
3	3	*	JBF14	きのうの1限出ました?。
4	4	*	JOF37	うん、出た。
5	5	*	JBF14	と、先週も出てなくて、ノート貸してほしんですけど、貸してください。
6	6	*	JOF37	あ、わかった。
7	7	*	JOF37	えっ、いつ要る?。
8	8-1	/	JBF14	えーと、じゃ、きょう借りて,,
9	9	*	JOF37	うん。
10	8-2	*	JBF14	来週のこの時間までには返します。
11	10	*	JOF37	あ、はい、わかりました。
12	11	*	JBF14	いいですか?。
13	12	*	JOF37	あ、いいですよ。
14	13	*	JBF14	じゃ、お願いしまーす。

例 17 も依頼の場面で「いつ」という典型的な文型を用いて、相手に時間について情報を求める機能を持つ発話である。

例 18 : BF14 (女性) SF38 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
20	20	*	JBF14	えっ、プリント、何枚ぐらいもらった?
21	21	*	JSF38	なんか、あ、何枚だろうね、ホッチキスでとめて…。
22	22	*	JBF14	あっ、さしになってた?。
23	23	*	JSF38	うんうんうんうん。
24	24	*	JBF14	えー。
25	25-1	/	JSF38	なんかあの、ビジネス中国語検定というのあるみたいで、なんかその<####>{<},,
26	26	*	JBF14	<案内とかも>{>}。
27	25-2	*	JSF38	対策みたいな感じ。
28	26	*	JSF38	受ける人はいないと思うけど…。
29	27	*	JBF14	そうか、じゃ、プリント貸して。
30	28	*	JSF38	いいよ。
31	29	*	JBF14	うん。

32	30	*	JSF38	えっ、いつまでにかえしたらいい？。
32	31	*	JBF14	うーん、まあ<どうせ…>{<?>}。
33	32	*	JSF38	<早い方'ほう>{>}がいいよね。
34	33	*	JBF14	そうだね。

例 18 は、典型的な言語形式「いつ」を伴って当該の機能が実現されている談話である。

例 19 : BF16 (女性) SF32 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBF16	「人名」ちゃん、プリント貸して。
2	2	*	JSF32	なんのプリント？。
3	3	*	JBF16	えーとね、モンゴル語の、「先生の名前」先生のプリント。
4	4	*	JSF32	あっ、この間もらったやつ？。
5	5	*	JBF16	そそそそそそ。
6	6	*	JSF32	あ、わかった、わかった。
7	7	*	JSF32	えーと、あっ、何番目？。
8	8	*	JBF16	えーとね、あっ、ナンバファイブから 8 まで。
9	9	*	JSF32	あ、そうか。
10	10-1	/	JSF32	あ、じゃね、うちにあるから、
11	11	*	JBF16	うん。
12	10-2	*	JSF32	今度持ってくるんだけど…。
13	12	*	JBF16	いつ学校にくる？
14	13	*	JSF32	えーとね、あしたの昼休み。
15	14	*	JBF16	昼休み。
16	15	*	JSF32	うん。
17	16	*	JBF16	うん、じゃ、いつものとこ。
18	17	*	JSF32	じゃ、わかった、持ってくる。
19	18	*	JBF16	じゃ、お願いします。

例 19 も、例 13～18 までの依頼の場面と同じく、友達に授業のプリントをコピーするために、貸してくれるように依頼する場面である。しかし、今までの談話 13～18 の会話では、「いつ」の時間を聞く場面では直接に「いつ返してくれるか」を尋ねるものであったが、上で見られるように、ライン番号 13 では貸してあげる JBF16 が今そのプリントを持っていない、JSF32 「いつ学校に来る？」と聞き、いつ貸せばいいのかを典型的な文型「いつ」を用いて行っている談話である。

例 20 : BF17 (女性) YF19 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBF17	「人名」先生の授業、このまえ、プリントあった?。
2	2	*	JYF19	うーん、でも、今日配ったから、あれだかべつにない。
3	3	*	JYF19	なんか、ずっとまえ、2週間ぐらいまえ。
4	4	*	JBF17	ああああ。
5	5-1	/	JBF17	なんかまえのやつで、わたしが休んだときの授業で,,
6	6	*	JYF19	うん。
7	5-2	/	JBF17	プリントないやつがあるから,,
8	7	*	JYF19	うん。
9	5-3	*	JBF17	かしてもらえる?
10	8	*	JYF19	うん、いいよ。
11	9	*	JYF19	いつ貸そうか?。
12	10	*	JBF17	じゃ、あ、じゃ、明日'あした'持ってきて。
13	11	*	JYF19	うん、わかった。

例 20 でも、貸してほしいという JBF17 の依頼を受け、JYF19 が「いつ貸してほしいのか」の時間を聞いているものである。この例も、典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されている談話で、タイプ 1 にあてはまる。

例 21 : BF18 (女性) OM52 (男性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBF18	あ、先輩すみません、あの一、先週の授業ちょっとでなかったんですけどどれも、あの、ノート貸していただけないんでしょうか?。
2	2	*	JOM52	うん、別にいいけど。
3	3	*	JBF18	え、ほんとうですか。
4	4	*	JBF18	え、あの、いますぐ、それとも…。
5	5	*	JOM52	うん、いま持ってるから、貸してあげるよ。
6	6	*	JBF18	ああ、ほんと、助かります。
7	7	*	JBF18	いつ返せばいいんですか。
8	8	*	JOM52	あの、来週の授業前だから、来週の月曜日に持ってきて。
9	9	*	JBF18	あ、どうもありがとうございます、今度お礼しますから。

10	10	*	JOM52	うん、おれもう行かなきゃ行けないから…。
11	11	*	JBF18	あ、どうもありがとうございます。
12	12	*	JBF18	失礼します。

上に見られるように、例 21 は依頼の場面であり、先輩に授業ノートを借りるもので、借りたノートを「いつ返せばいいのか」の時間を典型的な言語形式「いつ」を用いて聞いているものである。

例 22 : BM18 (男性) SM53 (男性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBM18	ねえねえ、あのさ、この前の授業のノート、貸してくれない?。
2	2	*	JSM53	うん、いいよ。
3	3	*	JBM18	いい?。
4	4	*	JSM53	うん。
5	5	*	JBM18	いつ貸してくれる?。
6	6	*	JSM53	え、明日'あした'。
7	7	*	JBM18	あ、いいの、あした?。
8	8	*	JSM53	うん。
9	9	*	JBM18	で、いつ返せばいいのか?。
10	10	*	JSM53	え、できるだけ早く。
11	11	*	JBM18	うん、いいよ。できれば来週がいいんだけど。
12	12	*	JSM53	なに、来週返すの?。
13	13	*	JBM18	うーん。
14	14	*	JSM53	<うん、いいよ>{<}。

例 22 も今までの依頼場面と同じく、ライン番号 5 の「いつ貸してくれる?」やまたライン番号 9 の「いつ返せばいいのか?」の時間についての情報を相手に求める際に使われたものである。タイプ 1 の形式を選んでいる。

例 23 : BF19 (女性) OF50 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBF19	えーと、<笑い>あ、お久しぶりです。
2	2	*	JBF19	この間、「人名 1」先生の授業のゼミお出になりました?。
3	3	*	JOF50	ゼミ?<笑い>。

4	4	*	JBF19	一緒にとってるあのゼミです。
5	5	*	JOF50	うん、いってるよ。
6	6	*	JBF19	ちょっとあの時、寝坊していけなかったんですけど。
7	7	*	JBF19	あの、何かプリント配られました？。
8	8-1	/	JOF50	あのね、えーと、確かに、2枚ぐらい、
9	9	*	JBF19	あ。
10	8-2	*	JOF50	あったと思う。
11	10	*	JBF19	そうですか。
13	11-1	/	JBF19	えーと、どうしようかな、あの、ちょっと今度まで「人名 1」先生にお会いすることないんで、もしあれだったら、
14	12	*	JOF50	うん。
15	11-2	*	JBF19	それコピーさしていただけませんか？。
16	13	*	JOF50	うん、いいよ。
17	14	*	JBF19	いつ、いらっしゃいますか？。
18	15-1	/	JOF50	えーとね、あの、が、大学に水木金来てるんで、えーと、「人名 2」さんのロッカにでもはっておくので、
19	16	*	JBF19	あつ。
20	15-2	*	JOF50	それ、勝手にコピーしてくれちゃってかまわないので。
21	17	*	JBF19	あ、わかりました。

今まで見てきたように、同じく依頼の場面であり、借りたものを返すためにいつがいいのか時間を聞いているタイプ1の談話である。

例 24 : BF20 (女性) YF49 (女性), 親しい相手との会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	JBF20	あの、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。
2	2	*	JYF49	うん。
3	3	*	JBF20	この間、生活科で配られたプリントってとってある？。
4	4	*	JYF49	うん、ありますけど。
5	5	*	JBF20	あー、ちょっと、おかりしたいなあと思ってるんだけど、あの、レポート書くのに見たいなあと思って…。
6	6	*	JYF49	はい、いいですよ。
7	7	*	JBF20	いいですか。
8	8	*	JBF20	じゃ、都合のいいときでいいんだけど…。



9	9	*	JYF49	はい。
10	10	*	JBF20	え、いつがいいかな?。
11	11	*	JYF49	じゃ、きょうもってきます。
12	12	*	JBF20	あ、そうですか。
13	13	*	JYF49	はい。
14	14	*	JBF20	じゃ、あとで、お願いします。
15	15	*	JYF49	はい。
16	16	*	JBF20	コピーしてすぐ返します。
17	17	*	JYF49	あ、わかりました。
18	18	*	JBF20	よろしくお願いします。
19	19	*	JYF49	はい。

例 24 も依頼場面で、「いつ」を用いてタイプ 1 の形式をとっている。

以上、「情報を求める(時間)」の談話として、タイプ 1 に当たる例文を見てきた。主に依頼する場面には典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されているタイプ 1 の方が多く現れるのがわかった。次に、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ 2 の方の例文を見ることとする。

〈タイプ 2〉

例 25 : JBM01 (男性 30 代前半), SF01 (女性 20 代前半), 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
104	100	*	SF01	けっこうかかりますよね、藤沢からだね。
105	101	*	JBM01	いや、2 時間半ですから。
106	102	*	SF01	2 時間半ですよ。
107	103	*	JBM01	<いや>{<} 【】。
108	104	*	SF01	【】 <私逆に>{>} 仕事で、あの、藤沢に住んでる方 'かた' のところに (はい) 尋ねて行ったとき (はい)、なんとなく、気分としては日帰り出張っていうか…<笑い>。

例 25 は、今までのタイプ 1 とは違って、実際の会話では特定の言語形式がなくとも当該の機能を持っているタイプ 2 の例文である。上に見られるように、例 25 は、初対面の社会人同士の会話で、家から仕事先までどのぐらいかかるのかをたずねる場面である。ここで、今まで見てきたように時間を聞く典型的な文型「どのくらいですか」「何時間ですか」といった疑問詞が付く質問文のような言語形式は見られない。ライン番号 104 のように、「けっこうかかりますよね、藤沢からだね。」と相手により、確認するような尋ね方を取り、実はどのぐらいかかるのかの時間を間接的に聞いている談話である。これは後に出てくる

JBM01 の発話「いや、2 時間半ですから」の答えを見ると、SF01 が時間を聞いたものであるのかがわかる。

以上のように、自然会話の中の例文から、時間の情報を求める機能の発話には典型的な言語形式「いつ」「何時」「何分を」伴って当該の機能が実現されているタイプ 1 (24/25) と、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ 2 (1/25) があることを見てきた。以上の結果からわかるように、時間の情報を求める機能は、主に依頼の場面で多く使われており、さらに、その際は、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ 2 よりも、典型的な言語形式を使うタイプ 1 の方が多く使われることがわかった。

(執筆著者：朴銀南)

### 13. 「情報を求める (数字)」

40 機能の中で、「情報を求める (数字)」は、数字について情報を求めているものを抜き出す。ただし、ここでは、金額と時間以外のものを対象とする。また、結果として数字に関する情報を引き出している発話も含める。その典型的な言語形式としては、「論文何枚書いた?」のように、質問文で「どのぐらい/何」+「基数詞」が現れるものがある。以下に、「数字の情報を求める」の機能を表す発話文を取り上げることとする。

〈タイプ 1〉

例 1

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
38	38	*	【日女】11	あー、えーじゃさー、えー何枚書いたの?。
39	39	*	日女 11	えーとね、A4 で 70 枚<くらい?>{<}。
40	40	*	【日女】11	<すごい>{>}。
41	41	*	日女 11	だけど、グラフとか入ってるから、まー。
42	42	*	【日女】11	あーあー。
43	43	*	日女 11	まーね、グラフ入ったら一気に書けたけど。

例 1 は、論文をどのぐらい書いたのかについてお互いに聞く場面で、ライン番号 38 では、「～何枚書いたの?」のように「何枚」という当該の典型的な言語形式を使っており、次に「～A4 で 70 枚くらい」と答える答えからライン番号 38 は当該の機能を持っていると思われる、ここではタイプ 1 と見なす。

## 例 2

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	【日女】15	(センターの試験の話をしなが) 英語とか何点位?。
2	2-1	/	日女 15	うん、190,,
3	3	*	【日女】15	えー、本当?。
4	2-2	/	日女 15	190,,
5	4	*	【日女】15	すごいすごい、そんなに取れた?。
6	2-3	*	日女 15	193 かなー。
7	5	*	【日女】15	<本当に?>{<}&#92;
8	6	*	日女 15	<それぐらい…>{>}&#92;
9	7	*	【日女】15	そうか、それだけ負けた。
10	8	*	【日女】15	えー、すごいー。
11	9	*	日女 15	ううん。
12	10	*	日女 15	何点だった?。
13	11-1	/	【日女】15	190,,
14	12-1	/	日女 15	か<わっ>{<}&#92;,,
15	11-2	*	【日女】15	<ちょう>{>}どだったの。
16	12-2	*	日女 15	変らないじゃない。
17	13	*	日女 15	変わらないよ、はつきり言って>{<}&#92;。
18	14	*	【日女】15	<変わるよ>{>}、3 点は。

上に見られるように、例 2 は、二人がセンター試験で、英語を何点取ったのかをお互いに聞いているものである。そこで、ライン番号 1 も 12 も「何点」とったかの聞いているもので、その際に「何+基数詞」の典型的な言語形式を用いて、情報を求めているところからタイプ 1 が使われていることがわかる。

## 例 3

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
81	78	*	JB1	なんかね、結構ねえ、なぜか暇なんだって。
82	79	*	JB1	修論はどうしたとか思うんだけど<笑い>。
83	80	*	J11	え今何年生?。
84	81	*	JB1	<4 年目>{<}&#92;。
85	82	*	J11	<4 年目>{>}でしょ?。

例 3 では、ある人物について二人で話している場面である。そこで、その人物が今何年

生かを J11 が聞くものであり、これも「何+基数詞 (年)」を伴って、当該の機能が実現されている談話である。

## 例 4

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
17	14	*	F5	だって「人名 C」さんにも言ってたもん。
18	15	*	F5	"「F6」ちゃんね、すごい「人名 A」くんファンなんだよ"。
19	16	*	F6	<笑い>あやしーい。
20	17	*	F5	なんもなかったんだ。
21	18	*	F6	なんもないよ。
22	19	*	F6	だってみんなでいるじゃん、ああいうのって。
23	20	*	F5	何人ぐらいいたんだっけ。
24	21	*	F6	20 人ぐらい。
25	22	*	F5	そんないたんだあ。

例 4 も以上で見てきた、例 1~3 までのように「何+基数詞 (人)」の典型的な文型を用いている例文で、タイプ 1 に該当するものである。

## 例 5

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
44	30	*	F1	涼しいのよ、公園。
45	32	*	M1	ああ、そうなんだ N。
46	33-1	/	F1	緑が多くてえ (うん) N、<風が>{<}、
47	34	*	M1	<日かげは>{>} (N) 結構涼しいんだあ。
48	33-2	*	F1	NNN そうそうそうそう。
49	35	*	M1	へーえ。
50	36	*	F1	よかった N。
51	37	*	M1	N は一。
52	38	*	F1	うん。
53	39	*	M1	何人ぐらいで行ったの?。
54	40	*	F1	3 人 N。
55	41	*	M1	3 人で N (N) 。
56	42	*	M1	ボートに乗ったの?。
57	43	*	F1	SSSS 乗らない乗らない<笑い>。

二人は F1 が公園に行った話を話題にしている。ここでは同じく、「何+基数詞（人）」の典型的な文型を使い、ライン番号 53 で、「何人ぐらいで行ったの?」かをたずねるタイプ 1 の例文である。

## 例 6

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
217	179	*	F5	あれちょっと待てちょっと待って。
218	180	*	F5	あれ、<笑いながら>って「M2 愛称」って何歳だったっけ。
219	181	*	M2	えーにじゅう一、今度 8'はち'んなる。
220	182	*	F5	てことは一、私なんかの 2 つ上…。
221	183	*	M2	あ。

例 6 は、タイプ 1 で、F5 は典型的な数字を聞く文型である「何+基数詞（歳）」を用いて相手に情報を求めているものである。ここでは「M2 愛称」が何歳なのかを聞く場面で使われた機能である。

## 例 7

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
51	47	*	F6	ん一、えー何人とかで行ってんの?。
52	48	*	F6	大人数で行ってんの?。
53	49	*	M2	ん一 6 人とか。
54	50	*	F6	ん一。

例 7 は、「～何人とかで行ってんの?」との F6 の質問に対して、M2 が答える前に、もう一回 F6 がもう一回「大人数で行ってんの?」と聞いているものである。ここで、ライン番号 51 では、「何+基数詞（人）」の典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されているタイプ 1 の形式をとっている。

## 例 8

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
55	51	*	F6	えーなん、何人乗れたっけ?。
56	52	*	F6	7'なな'?
57	53	*	M2	8 人乗れる。
58	54	*	F6	あーそーかそっかそっかー。

例 8 も例 7 と同じく、「何＋基数詞（人）」のように、「情報を求める（数字）」の機能として、タイプ 1 の形式をとっている例文である。

## 例 9

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
314	242-a	/	M2	んでー、そこに女の子があの一、あとからがーって来てえ（うーん）//,,
315	242-b	/	M2	まあいろいろこー、なんてゆーの、一緒に歌ったりとかあ（NN うんうん）//,,
316	242-c	*	M2	あの一こう果物を（NNN うーん）口うつしで渡してくれたりとかそーゆー感じになったんだあ。
317	243	*	F6	うわーすごいねえ。
318	244	*	F6	えー何人ぐらいで入ってきたのー？。
319	245	*	M2	向こうも 3 人。
320	246	*	F6	あーNN うんうん。

例 9 も例 7, 8 と同じく基数「人」を使い、「～何人ぐらいで入ってきたの？」の数字をたずねている例文である。これもタイプ 1 に当たる例文である。

## 例 10

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
385	300	*	F6	え、海外何回目なの？。
386	301	*	M2	いや、海外はねえ、卒業旅行と 2 回目なの。
387	302	*	F6	あー、でもいい経験したねー。
388	303	*	M2	いい経験した、(<笑い>) N うん。

例 10 は、二人で海外に何回ぐらい行ったことがあるのかを話題としている。ここでは、タイプ 1 である典型的な言語形式「何＋基数詞（回）」を伴って、さらにライン番号 385 の「え、海外何回目なの？」の発話では当該の機能が実現されている談話である。

## 例 11

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
16	15	*	YM7	だ、でもここじゃん？。
17	16	*	YM8	こっちはまた違う先生じゃん。
18	17	*	YM7	<笑いながら>こえー、国語の先生何人いんだよ？。

19	18	*	YM8	けっこういるんじゃない?、国語の先生<YM7 笑い>。
20	19	*	YM7	やだー。

例 11 は上で見られるように、親しい友達同士での会話で、二人が教務課に入り、先生たちの机を見ながら、誰のものなのかを当てている場面である。そこで、話を続けていくうちに、YM7 は「こえー、国語の先生何人いんだよ?」のように、相手に国語先生が何人いるかを直接に聞いている疑問形式をとっているもので、さらに「何+基数詞(人)」の言語形式を使っている。典型的な言語形式「何人」を用いており、タイプ 1 である。

#### 例 12

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
56	56	*	YM03	どれくらい…日数で行くんですか?。
57	57	*	BF11	かなり行ってたんじゃないかしら。
58	58	*	BF11	何日だったかは、よく覚えてないん(ええええ、ええ)ですけど、かなり長い間。

例 12 では、「どれくらい」を使い、何回行ったのかを聞いている例文である。ここにも「どれくらい」という典型的な文型を用いているので、タイプ 1 に属する。

以上のように、「情報を求める(数字)」機能の発話には典型的な言語形式「何+基数詞」を伴って当該の機能が実現されているタイプ 1 (12/12) が多く見られ、典型的な言語形式を伴わないが当該の機能が実現されているタイプ 2 (0/17) はまったく見られなかった。また、典型的だと考えられる言語形式を伴っているが当該の言語形式が当該の機能を表さないタイプ 3 の形式は、まったく見ることができなかった。

(執筆者：朴銀南)

#### 14. 「何でどのようにするかを言う」

この機能の談話抽出基準は以下のとおりである。

どのような手段および道具を用いてある行為を行ったかを述べる発話とする。典型的な言語形式は、「手段/道具+動作(～で+～した)」となっているもので修飾節となっている場合も対象とする。

見出しが「何でどのようにするかを言う」となっていることもあり、抽出された談話はすべてタイプ 1 である。ウェブ上にある TUF5 会話モジュールでは、現在は「手段についてたずねる」という見出しになっている。

ここでは、「何でどのようにするか」に焦点が当たるような発話というよりは、いろいろな話が出てくるなかのひとつ、という場合が多く見られた。

## 例 1

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
60	58	*	OF04	あの一ほら、こう、洋服って綿とか（ええ）ナイロンとかポリエステルとかありますでしょ。
61	59	*	BF12	はい。
62	60	*	OF04	で、そういった素材のことの、物理的性能っていうのかしら。
63	61	*	OF04	こう、汗を吸う力、吸湿性（ええ）とか、吸水性とか（ふーん、はい）そんな性能を調べたり、あとは、そうですねえ、快適に衣服を着るためにこう（ええ）温度湿度を計って、（ええ）人工気候室で温度湿度を測って、（はい）それで、人から出た温度と湿度、こう汗かいたりしたのが、（はい）衣服を通してどう放散するか、とかいうのやったりしてるんです。
64	62	*	BF12	は一ん、<そうですか>{<}。
65	63	*	OF04	<だから>{>}、被服関係は、まあ自然科学的な部分を中心にいろいろやって、もっと、こう、洗濯に関するようなこととかね（ふーん）、洗剤で洗ったときに（ええ）汚れの落ち方とか（はい）そんなことやったりとか…<笑い>。
66	64	*	BF12	あー、そうですかー。 [無声化]

OF04 は、自分の専門について BF12 に説明しているところである。具体的に説明する中で、「洗剤で洗う」という発話が見れている。

「何でどのようにするかを言う」発話が見られた話題は、上記のほか、「おちょうしでお酒を飲む」といった道具に関する事、「バイクで来る」「列車で行く」といった交通手段に関する事、「日本語で書いてある」「英語で授業をする」といった、手段としての言語に関する事があった。以下に、手段としての言語について言及した談話例を示す。

## 例 2

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
156	151	*	JB1	<でも知ってた?>{>}。
157	152	*	JB1	去年、「人名」さんて英語で授業していたらしいよ。
158	153	*	J11	うそ?。
159	154	*	JB1	ほんと。



160	155	*	JB1	までももちろんわかんない人もたくさんいるから(うん)、結局は日本語で言いな、なんか言いかえるようなことも多分いっぱいあったんだと思うんだけど(うん)、なんか基本的には英語でやったとかいって、おっしゃってたよ。
161	156	*	J11	やる?。
162	157	*	JB1	<私にはできない>{<}。
163	158	*	J11	<日本語、>{>}日本語でしょ?。
164	159	*	JB1	もちろん。

この談話では、「何語で授業をするか」ということについて話しているため、手段が話題になっている。ライン 157 及びライン 160 では「英語で授業していた」「英語でやった」というように、「する」という形式がはっきりと現れているが、ライン 163 では「日本語でしょ」というように、「何で」に部分のみが述べられている。

以上で見てきたように、抽出された談話では、「何でどのようにするか」ということが話題の中心になるというよりは、あることについて説明するときに、説明のひとつとして出てくる場合が多かった。

(執筆：木林理恵)

## 15. 「技能・能力について尋ねる」

「技能・能力について尋ねる」は、相手または第三者がどういったことができるか、また、できるとしたらどの程度できるのかなどを尋ねている発話とする。典型的な言語形式は、可能動詞、「技能+いい/悪い」「技能+得意」とする。

以下に、TUFS 会話モジュールのスキット（以下、D-スキット）と『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』のそれぞれにおいて、この機能が現れた談話を比較する。

〈D-スキットにおける「技能・能力について尋ねる」の例〉

斉藤：大学教員， 渡辺：斉藤の学生（大学院生）

状況：授業後，席を立とうとした渡辺に，斉藤が話しかける

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	斉藤	渡辺さんはアメリカに留学していましたね?。
2	2	*	渡辺	ええ、学部の時、半年間ボストンに住んでいました。
3	3	*	斉藤	じゃあ、英語は話せますか?。
4	4	*	渡辺	ええ、少しなら。
5	5	*	斉藤	実は来週の水曜日、アメリカからお客さんが来るんですが、空港まで迎えに行ってほしいんです。

6	6	*	渡辺	ええ、いいですよ。
7	7	*	斉藤	朝の10時までに行けますか?。
8	8	*	渡辺	大丈夫です。
9	9	*	渡辺	車が運転できますから。

このようにD-スキットでは、「技能・能力について尋ねる」を学習するユニットにおいて、依頼場面の談話を提示している。ライン3における斉藤の発話文は、相手が外国語を話せるかどうかを尋ねているという内容から判断して、技能を尋ねる機能を持つものと言える。可能形が使用されていることから、この用例はタイプ1（当該機能を果たし、かつ対応言語形式を持つ談話）に分類される。これに対しライン4で渡辺は、肯定の答えとどの程度話せるかという情報で返答している。ライン7も同様にタイプ1に分類されるが、ここで尋ねている内容は、永続的な能力（技能）ではなく、ある時点における能力を尋ねているという内容面での違いがある。またライン3は、ライン5における依頼の前置きであるが、ライン7はそれじたいがより具体的な依頼にもなっているという、発話の意図・および談話構造上の位置の上での違いもある<sup>1</sup>。

一方自然談話においては、タイプ1とタイプ2の用例が見られた。まずタイプ1の用例を示す。

〈自然談話における「技能・能力について尋ねる」の例-タイプ1〉

状況：初対面の社会人同士による雑談。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
41	39-1	/	OF01	特に初対面の方とお話するのが、
42	40	*	JBM01	あ、<そう><{>ですか?。
43	39-2	*	OF01	<ちょっと><{>苦手なので、(<笑い>) すみません<笑い>。
44	41	*	JBM01	<笑い>なんかご職業はされてる…?。
45	42	*	OF01	あ、あの、小学校で(は一)、今5年生担任してます。
46	43	*	JBM01	え、じゃあ話すのは得意なんじゃないですか?<笑い>。
47	44	*	OF01	それが、なんか職業まちがったかなと思うんですけど、<うーん…><{>。
48	45	*	JBM01	<へー><{>。

<sup>1</sup> ライン7の後に「じゃあ10時までに行ってください」のような明示的依頼がなく、しかしライン8-9の内容から判断すると渡辺はそうすることを受諾していることから、ライン7がその依頼の機能を果たしたと判断できる。

初対面の社会人同士が雑談している場面で、初対面の相手と話をするのが苦手だと述べた OF01 に対し、ライン 46 で JBM01 は（学校教員であるのなら）「話すのは得意なんじゃないですか?。」と述べる。この発話文は、相手が人前で話すことについて高い能力を持っているのではないかと尋ねている、という内容から見て、「技能・能力について尋ねる」の機能を持っていると言える。また「得意（な）」という対応言語形式を使用していることから、タイプ 1 に分類される。この用例の談話は、直接的には能力について尋ねたり答えたりするものであるが、別のレベルでは、「謙遜→打ち消し（相手を持ち上げる）→さらに謙遜」という対人調節的な機能も同時に果たしていると考えられる。

次に、タイプ 2 の用例を示す。

〈自然談話における「技能・能力について尋ねる」の例-タイプ 2〉

状況：大学（院）生の友人同士による会話。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
11	11	*	日女 09	私の集中力（へー）こんなもんだって思っ
12	12	*	【日女】09	へー嘘ー。
13	13	*	日女 09	やばかった。
14	14	*	【日女】09	えーでもさ、すごいー、うーん、準 1 級持ってる
15	15	*	日女 09	あ、でもそれって高 3 のことだから、もう使ってないよ<2 人で笑い>。
16	16	*	日女 09	<笑いながら>今取れないし、そんなの。
17	17	*	【日女】09	フフフ<笑い>。

友人同士の会話において、自分の集中力が低いと述べた話者（日女 09）に対して、ライン 14 で相手の話者（【日女】09）が、「でもさ、すごいー、うーん、準 1 級持ってるでしょう。」と確認している。この発話はその内容から見て、準 1 級という資格の所持を確認することによって、相手の集中力（および英語の技能のレベル）について確認していると解釈できることから、「技能・能力について尋ねる」の機能を持つものと判断できる。また、可能動詞や「得意」などの対応言語形式は用いられていないことからタイプ 2 に分類される。

この用例も、タイプ 1 の用例と同様に、ライン 12-13 で自分の特定の能力が低いと述べた話者（日女 09）に対して、ライン 14 で相手の話者がそれを打ち消す形で能力の高さに言及し、その後最初の話者が再度それを否定する、というパターンを成している。このように、日本語の自然会話においては、相手から自分の（永続的で有用な）能力について尋ねられた話者は、その高さを否定する（謙遜する）内容の発話を行うことが少なくない。このような談話パターンは、それに慣れていない学習者には、認識されなかったり受け入

れにくかったりする可能性もあるため、教授者にとっては指導上注意が必要となろう。

(執筆者：鈴木卓)

## 16. 「情報を求める（存在と場所）」

この談話の基準は次の通りである。

特定の物事の地理的な情報を求めること。ここでは、結果として特定の物事の地理的な情報を引き出している発話も含める。典型的な言語形式は「どこ」「どちら」「どの辺(り)」を含む質問文とする。

この機能が実現されているとして抽出された談話は、タイプ1が26談話、タイプ2が24談話、タイプ3が15談話であった。特に初対面では、相手の住む場所についての話題が多いため、この機能が実現されている談話は、タイプ1・タイプ2が同じくらい表れたのではないかと思われる。

例1はタイプ1の例である。典型的な言語形式である、「どこ」の丁寧形の「どちら」が使われている。

### 例1：初対面雑談，二人とも社会人

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
5	5	*	OM01	今日はどちらからいらっしゃったんですか。
6	6-1	/	JBM02	えー今日は、ここら辺の近くから、
7	7	*	OM01	あ<そうですか>{<}。
8	6-2	*	JBM02	<来たんです>{>}けれども。
9	8	*	OM01	ええ。

タイプ2の談話は、例2のように、結果的に相手が場所を答えてくれるものであった。

### 例2：初対面雑談，二人とも社会人

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
15	15	*	JBM02	/少し間/今日、今日は遠くから…。
16	16	*	YF01	いや。
17	17	*	YF01	近い、ですね。
18	18	*	JBM02	あそうですか。[ほとんど聞こえないくらいの声で]
19	19	*	YF01	吉祥寺…からです。

YF01は、ライン番号19で場所まで言わず、話題を変えてしまう可能性もあるかもしれない。しかし、場所を言うことによって、ライン番号15のJBM02の発話は、結果的に場

所の情報を求める発話となっている。このほかに、「藤沢からですか?」というように、じかに地名を出して尋ねている談話もあった。

例 3 は、タイプ 3 の例である。

例 3：初対面雑談，二人とも社会人

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
3	3	*	YF01	あ、「YF01 姓」と申します。
4	4	*	YF01	よろしく<お願いします>{<}。
5	5	*	BF03	<よろしくお願ひ致します>{>}。
6	6	*	BF03	あの、こちらにお勤めでいらっしゃるんですか?。
7	7	*	YF01	えー、そうですね、はい。
8	8	*	BF03	どちらのご専門…?。
9	9	*	YF01	「学科名」学科です。
10	10	*	BF03	あ、そうなんですか。

「どちら」ということばは、複数のものから特定の一つ指すときにも使われる。ここでは、その用法が用いられている。

例 4 も、タイプ 3 の例である。

例 4：親しい友人同士による誉め場面，二人とも大学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	P03	あっ、「S05」ちゃん、かわいい指輪してるじゃん。
2	2	*	S05	えー、や、何々?<笑い>。
3	3	*	P03	すごいかわいい<指輪>{<}。
4	4	*	S05	<どこがー?、>{>} <どこがー?、どこがー?>{<}。
5	5	*	P03	<すごいかわいい指輪、どうしたの?、>{>} どうしてこんなところにしてるのかな?。

この場合、S05 が聞きたいのは指輪の「特徴」であり、「場所」とは少しずれがある。

「どこ」は対象とする場所や個所が、話し手もしくは聞き手の理解を超えているとき、その不明・未定の場所や位置を指す語（森田 1992：792）である。「私のどこが気に入らないのですか」というように、事柄を問題とする場合もある。また、「どちら」は、「どちらがいいですか」というとき、場所を対象とすれば「どこへ行くのがよいか」に通じ、事物を対象とすれば二者択一の選択を言っていることになる。さらに使い方によっては「誰」を指す場合もあるように、さまざまな意味になる（森田 1992）。言語学習上、注意が必要である。

引用文献：

森田良行（1992）『基礎日本語辞典』角川書店

（執筆者：木林理恵）

## 17. 情報を求める（属性）

この談話の基準は次の通りである。

人の属性についての情報を求めること。属性とは、ここでは、その人の職業や専門とする。典型的な言語形式は「ご職業は?」「ご専門は（どのようなことを...）?」とする。

この機能が実現されているとして抽出された談話は、タイプ1が30談話であった。

例1は、タイプ1の例である。

例1：BF03（女性30代）、SF01（女性30代）、初対面、2人とも有職

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
50	45	*	SF01	何を教えてらっしゃるんですか?。
51	46	*	BF03	わたしはですね、あの一、「学科名」学科で考古学を教えてるんですよ。
52	47	*	BF03	でも、日本が専門なので、非常に、地味なんですけれども<笑い>。

属性を、ここでは、その人の職業や専門としたが、初対面では、そのような属性が話題になることが多かった。また、例1のように、あまり話題が発展せずに終わるものもあれば、例2のように続くものも見られた。

例2：BF12（女性30代）、OM04（男性40代）、初対面、2人とも有職

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
7	7	*	OM04	あなた、この卒業生?。[イントネーション下降↓]
8	8	*	BF12	あ、いいえ、<違います>{<}。
9	9	*	OM04	<全然>{>}。関係ないんですか?。
10	10	*	BF12	はい、そうなんです。
11	11	*	BF12	/沈黙4秒/もう、大学からはなれて随分になりますけれども...<後半笑いながら>。
12	12	*	OM04	ご専攻なんでした?。
13	13	*	BF12	あ、国語です（あ一）。
14	14	*	OM04	あ一、あ一、あ一。
15	15	*	BF12	国、語学<のほう>{<}。

16	16	*	OM04	<あっ、>{>}国語学のほうですか? (はい)。
17	17	*	BF12	こういう調査とかも、あの、以前にこう、普通ではなくて、あの方言の調査なんですけど、(ええ、ええ、はい) 少しやったことがあるんですけども(あー)。
18	18	*	BF12	自分がこう、こーいうふうに、(ふん) あの、こう録音を取られるがわにまわるっていうのは、慣れないんです<笑い>。
19	19	*	OM04	やあ、僕もとにかくはじめてなもんですからね、こういう、こういう、ろっ、あのかたちでは…<照れ笑いしながら>。
20	20	*	BF12	あっ、そう…。
21	21	*	OM04	ええ。
22	22-1	/	BF12	こち<らの…>{<},,
23	23	*	OM04	<ええ、そうです>{>}、<はい>{<}。
24	22-2	*	BF12	<大学のかた、>{>}ですか?。
25	24	*	OM04	はい。
26	25	*	BF12	あー、そうなんですか。
27	26	*	OM04	あの一、僕は国語学と違いまして、(ええ) あの文学なんですけども。
28	27	*	BF12	あー、そうですか (ええ)。
29	28	*	OM04	ええ。
30	29	*	BF12	/少し間/あたしも国文学で、あの、入ったんです<けれども>{<}。
31	30	*	OM04	<ええ、まあ、>{>}普通はそうでしょうねー。
32	31	*	BF12	ええ、最後は結局、語学の方に行ってしまったので…。
33	32	*	BF12	/沈黙 3 秒/今はあの一、中学校で教えてい<るんです>{<}。
34	33	*	OM04	<ああー>{>}そうですか (はい)。
35	34	*	BF12	はい。

タイプ 2、タイプ 3 にあてはまるような談話は見られなかった。

(執筆者：木林理恵)

## 18. 「意見を言う」

ここでは、まず、「意見を言う」という機能の基準と、「意見を言う」機能として談話を抽出する際に定めた一談話の定義を述べてから、実際の談話について考察する。

「意見を言う」という機能の基準：

ある人や物事について述べるときに、自分自身の何らかの判断・考えが入っている発話とする。ここでは、事実の叙述以外のものがほとんど含まれる。このため、他の機能に比べ、指し示す範囲がかなり広いといえる。典型的な言語形式は「～思う」や、「いいですね」といった評価の語彙が使われているものとする。

「意見」というのは、決して一発話によってのみ述べられるものではなく、実際の会話の中では、複数の発話によって構成されることが多い。よって、同じ話題についての、2人の話者の一連の意見をまとめて1つの談話とする。そこで、一談話がタイプ1とタイプ2と両方に入っている場合もある。談話の抽出に当たって定めた、「意見を言う」談話のはじまりと終わりは、以下のとおりである。

「意見を言う」談話のはじまり：

相手に意見を求められたため自分の意見を述べる場合は、その相手の質問を談話のはじまりとする。しかし、相手に意見を求められていなくても自ら意見を述べる場合もあり、その場合においては、ある話題について話者が意見を述べ始めていると判断される発話を談話のはじまりとする。

「意見を言う」談話の終わり：

1人の話者が自らの意見を述べていて、その後もう1人の話者がその相手の発話に対して、「そうなんですか」、「そうですね」などという場合が多い。ここでは、そのような関心や同感を示す発話を談話の終わりとする。また、そのような発話が現れていない場合は、異なる話題に移る直前の発話を談話の終わりとする。

この基準に基づき、『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』では、タイプ1が20談話、タイプ2が26談話、タイプ3が1談話、抽出されている。

ここでは、木林・謝（2003）に基づき、会話参加者が、どのようなことに関して「意見を言」っているかについて述べる。それらは、以下の4つに分けることが出来る。

参加者に関すること：自分のこと・相手のこと

「自分のこと」：自分の状況や、自分自身の考えを述べている発話。

「相手のこと」：相手に関係したことについての発話。

会話参加者に関わらないこと

「その場のこと」：今いる場所、天気など、目の前の共通のものについての発話。

「その他」：以上の3つに当てはまらない談話。日本人と欧米人の違いや、生で聞く音楽の良さ、といった話題。

そして、「自分のこと」について意見を言う場合は、相手から質問され、それに答えるような発話が多いという傾向があった。例1は、「自分のこと」について話している談話であり、「思う」という形式も表れている。相手から自らの職場について意見や判断を求められ、それについて答えている。



## 例1：初対面社会人の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
32	30	*	BF12	職場としてはどうですか？。
33	31	*	SF05	んー、職場としてはー、あの一、それこそ他を知らないのであれですけども、あの一、なんて言うんでしょう…。[考え込んで言いにくそうに]
34	32	*	SF05	まあ環境的にはやはり恵まれていると思うんですけど、ハードと言えばハードだし…、<笑い>なんているいろいろ。
35	33	*	BF12	あっそうなんですか。
36	34	*	SF05	ええ、あの一、いわゆる大学におつとめっていう感覚とちょっと違うような一、ではないんですけども。
37	35	*	BF12	あっそうなんですか。
38	36	*	SF05	ええあの一結構、まっ私学ですので、(ええ)あの一当然なのかもしれないんですけども、(ええ)逆の意味では。

BF12の「職場としてはどうですか」という問いに対し、SF05は自分の職場について意見を述べている。BF12のライン33「あっそうですか」という反応発話があることから、ライン33・34のSF05の発話は「意見を言う」という基準にそったものであるとわかる。このように、「自分のこと」について意見を言う場合は、相手から質問され、それに答えるような発話が多く見られた。

また、「相手のこと」について意見を言う場合は、相手の話を聞いて、それをまとめるような発話が多いという傾向があった。例2は、「相手のこと」について話したものであり、相手の話を聞いて、それを評価するような発話である。

## 例2：初対面社会人の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
28	27	*	BF03	でも、普段は、あんまり外国へは?、<出ない…?>{<}。
29	28-1	/	OF01	<えー、>{>}えーっとね、そうですねえ、あれからは、えーっと、イタリア、フィレンツェに(ええ)一週間ぐらい、滞在するっていうのを…,,
30	29	*	BF03	あ、フィレンツェだけですか？。
31	28-2	*	OF01	ええ、しました。
32	30	*	BF03	それは贅沢な旅行ですね。

33	31	*	OF01	うん、あれは良かったですね。
34	32	*	OF01	3人ぐらいで、友達と行ったんですけども。

OF01のフィレンツェ旅行も話を聞いて、BF03は「それは贅沢な旅行だ」と、その旅行を一言で表すような評価を述べている。このように、「相手のこと」について意見を言う場合は、相手の話を聞いて、それをまとめるような発話が多く見られた。

「その場のこと」「その他」について意見を言う場合は、会話参加者に関わる話題のような談話の流れは、特に見られなかった。似たような内容の意見を互いに述べ合っていたり(例：この大学は広くていい→確かにいい環境・立地だ)、互いの意見を支えるような、関連話題について意見を述べたり(例：生で音楽を聴くこと→ある音楽堂が素晴らしいこと)という相互行為が見られた。

まとめると、以下のことが言えると考えられる。

- 「意見を言う」という機能を持つ発話には、同意や反論の反応発話が伴うのではないか。言語形式だけでは見つけにくい「意見を言う」という機能の手がかりにならないか、さらに検証していく必要がある。
- 「意見を言う」機能が実現されたときの話題は、会話参加者に関わることと、関わらないことがあった(今回用いた初対面の会話が多かった雑談場面では、比較的、会話参加者に関わらないことが多く見られている)
- 話題が会話参加者に関わることであるときは、特定の談話の流れが見られる

「意見を言う」という機能は、まずその機能が実現されている談話を特定することが難しい。ここでは主に雑談の場面を見たが、今後は、さまざまな場面を検討していくことが必要である。

引用文献：

木林理恵・謝韞 (2003) 「日本語の雑談における「意見を言う」という機能に関する一考察」  
第7回外国語教育学会当日配布資料，東京外国語大学，2003年10月11日

(執筆：木林理恵)

## 19. 「嗜好について述べる (もの)」

嗜好について述べることは、日本語の初級教科書において、比較的早くから出てくる言語行動であろう。例えば、『みんなの日本 I』では全25課第9課、『初級日本語』では全28課中14課で扱っている。また、『すきなもの・すきなこと 話しながら学べる生活の日本語』(TIJ 東京日本語研修所，凡人社)という日本語教科書が出版されているように、嗜好について述べることは会話において話題にしやすいものであり、非常に重要なことである。そこで、以下では、実際の自然談話で、話者がどのように自らの嗜好を述べているかを見る。

まず、「嗜好について述べる（もの）」という機能の抽出基準は以下のとおりである。

ものに関する好き嫌いについて述べている発話とする。主に「N. (のほう) が 好き/嫌い/得意/苦手 だ/ではない」のような文型が入っているものを、典型的な言語形式とする。しかし、「得意」「苦手」などは、ものによっては機能 15 の「技能・能力について尋ねる」に入るものもあるため、それらを文脈の中で考えて判断する（例えば、「私、暑いのが苦手なんですよ」はこの機能に入るが、「私、算数が苦手なんですよ」は機能 15 に入る）

この機能が実現されているとして抽出された談話は、タイプ 1 が 18 談話、タイプ 2 が 1 談話、タイプ 3 が 1 談話であった。

ほとんどが初対面場面からの抽出されていることから、初対面でも話題にしやすい事柄であると捉えることが出来る。主に、好きな季節・好きな車・好きな映画などに関する会話が取り上げられている。例 1 は、タイプ 1 の談話である。

#### 例 1：初対面社会人の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
46	45	*	BF03	あー、じゃあ、夏がお好きな<ほうですか?><{<}
47	46	*	OM01	<ええ、夏の方が><{>}好きなんですわ。
48	47	*	OM01	で、僕は、北海道の出身ですから、寒い所の出身なんですけれども、(うーん)う、寒いのが弱いんです。
49	48	*	BF03	ああそうですか。
50	49	*	OM01	<ええー><{<}

BF03 と OM1 は、初対面としては無難だと思われる、季節についての好き嫌いを述べている。初対面同士の会話では、例 1 のように「何々は好きですか」と相手から尋ねられて答えるものが多く見られたが、例 2 は、自ら嗜好を述べたものである。

#### 例 2：初対面社会人の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
59	53	*	JBM03	やっぱりあれですか?、あんまり冷房には強くない<ほう…><{<}
60	54	*	YF01	<そう><{>}ですね、はい。
61	55	*	YF01	よくないですよ、体にあまり。
62	56	*	JBM03	ええ、私は好きなんですけど<笑い>。
63	57	*	YF01	あ、私の上司も冷房大好きな人で、(えーえー) すごい冷蔵庫みたいな中で、仕事しないと頭が冴えないっていう (えー) 人なんですけども。
64	58	*	YF01	だめですね。

65	59	*	JBM03	あー。[小声で、吐息のように]
----	----	---	-------	-----------------

例3は、タイプ2の例である。

例3：【日男】02（男性20代），日男02（男性20代），友人同士，2人とも学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	【日男】02	「相手の名前」くん、お酒飲むよね（うん）、っていうか、よく飲むんだよね。
2	2	*	日男02	<笑いながら>そういうこと言っちゃだめよ。
3	3	*	【日男】02	<笑い>何が一番好きなの？。
4	4	*	日男02	何が好きかなー、たぶん夏の暑いときは（うん）ビールを飲みたい気分だね。
5	5	*	【日男】02	まあ、そうだね。

ここでは「何が一番好きなの」という問い（隣接応答ペア）があったため、「たぶん夏の暑いときはビールを飲みたい気分だね」というように、「好き」ということばを用いずとも嗜好を述べているのだということがわかる。

例4は、タイプ3の例である。

例4：【日女】15（女性20代），日女15（女性20代），友人同士，2人とも学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	【日女】15	私はね（うん）、なんか、理想は（うん）心で、性格で選ぶんだけど、（うん）理想はね。
2	2-1	/	日女15	でも今までやっぱり外見<とかさ>{<}、
3	3	*	【日女】15	<やっぱ>{>}、第一印象は外見だよ。
4	2-2	*	日女15	ね、外見とかさ（うん）、なんか、こう、そういうのが入って総合で（んー）好きになってきたわけだけど。
5	4	*	【日女】15	うん。
6	5	*	日女15	この人は本当に性格って感じ。
7	6	*	【日女】15	性格<だけ?>{<}。
8	7	*	日女15	<だから>{>}（うん）、っていうか、でもね、性格がね、（んー）一応大事かなーと思うんだけど。

「外見が好き」という嗜好ではなく、「好きになってくる」というように、こころの動きを述べたものになっている。

以上みてきた自然談話では、嗜好を述べるのに「好きです」という形式を使っていると

き、「夏の方が好きなんです」や「好きなんですけどね」のように、「のだ」「けど」が付いたり、終助詞「ね」が伴ったりしていた。『初級日本語』では、留学生が絵をほめられ「わたしは えを かく ことが 好きです」と述べる会話例が提示されているが、実際の談話では「好きです」で発話を終わらせることは少なく、助詞や終助詞といったいろいろな要素が伴って発話されることが多いのではないだろうか。『初級日本語』では「好きです」を留学生の発話にしていることや、『みんなの日本語』では「好きです」という形式を使った会話例を示していないことから、「嗜好について述べる」機能は、初級の早いうちに取り上げたいが、自然なかたちで文型を提示するには難しい機能なのではないかと考えられる。

引用文献：

スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語』スリーエーネットワーク

東京外国語大学留学生日本語センター編（1994）『初級日本語』凡人社

広瀬万里子・大森瑛子（1996）『すきなもの・すきなこと（1）話しながら学べる生活の日本語』TIJ 東京日本語研修所，凡人社

（執筆：木林理恵）

## 20. 「嗜好について述べる（行動）」

この機能の談話抽出基準は以下のとおりである。

行動に関する好き嫌いについて述べている発話を指す。主に「V. (る) の (こと) が動作を表す N が 好き/嫌い/得意/苦手 だ/ではない」のような文型が入っているものを、典型的な言語形式とする。ただし、動作を表していなくても、文脈を考慮し、それが動作を表していると考えられる発話は当該機能となる。

この機能が実現されているとして抽出された談話は、タイプ1が15談話であった。ほとんどが自分の嗜好について述べているが、第三者の嗜好について述べている会話も一例あった。

こちらにも、半分近くが初対面場面からの抽出されていることから、初対面でも話題にしやすい事柄であると捉えることが出来る。主に、好きな季節・好きな車・好きな映画などに関する会話を取り上げられている。例1は、タイプ1の談話である。

例1：初対面社会人の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
10	10	*	SM04	/沈黙3秒/なにか、お飲みになりますか？。
11	11	*	BF11	えー<うふふと笑いながら>。
12	12	*	BF11	お酒とかは飲まれるんですか？。
13	13	*	SM04	え、ぼくは、あまり好きじゃないんです、あの一、もともと下戸に近い…。

14	14	*	BF11	あ、甘党のほうでしょうか?<うふふという笑い>。
15	15	*	SM04	甘党ではないんですよね。
16	16	*	BF11	あー、<そうですか>{<}</>。
17	17	*	SM04	<えー>{>}。
18	18	*	SM04	ですから、その一、機会によっては飲むことがあるんですけど。
19	19	*	BF11	はい。
20	20	*	SM04	わざわざ飲もうという気はない。
21	21	*	BF11	あ、そうですか。
22	22	*	BF11	お付き合いはするけれども、っていうぐらいなんですか?。
23	23	*	SM04	そうですね (<うふふという笑い>)。

「好き」という形式が使われているが、「V.(る)の(こと)が」という形式が出てくることは少なく、何か動作に関する話題や発話があり、それに対して「好き」といっていることが多い。また、「煙草好きなんですよ」というように、動作を表す名詞が使われることが多い。

また、初対面は比較的「好き」という形式が出てることが多いが、友人同士では、「大嫌い」という形式も出ている。以下の例2が、そのような談話である。

#### 例2：親しい社会人の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
25	24	*	YM9	ゲームは結構好きな方?。
26	25	*	YM10	大っ嫌い。
27	26	*	YM9	大っ嫌い<笑いながら>。
28	27	*	YM10	大っ嫌い<笑いながら>。
29	28	*	YM9	大っ嫌いなんだ。
30	29	*	YM10	はい。
31	30	*	YM9	自分は好きなんだけど、結構、ゲーム。
32	31	*	YM10	好きですね、<俺も>{<}</>。
33	32	*	YM9	<好きですな>{>}。
34	33	*	YM9	あーそう。
35	34	*	YM10	うん。
36	35	*	YM9	気が合うかもしれない。
37	36	*	YM10	うんーあわないけどね<2人で笑い>。

「嗜好について述べる(もの)」の箇所でも述べたとおり、嗜好について述べることは初

級の比較的早い段階で取り上げられるものではあるが、行動に対する嗜好については、教科書によって扱い方が異なっている。『初級日本語』では「Nが好きです」「Vことが好きです」が同じ14課で提示されている。つまり、嗜好について異なる述べ方があることを、ひとつの課で扱っている。一方、『みんなの日本語』では、9課で「～はNが好きです」、38課で「片付けるのが好きなんです」という会話を提示しているが、38課の学習項目は「Vのは～です（例：絵をかくのは楽しいです）」となっているため、嗜好という視点から扱ったものではない。「Vことは～です」という文型をどこで教えるかという考え方の違いによって、「Vことが好きです」が提示される位置が異なると言える。

本コーパスによると、実際の会話で「V. (る) の (こと) が好き」という形式が出てくることは少なく、動作を表す名詞が使われることが多い。また、談話例1・2ともに、「Vこと」の部分は前の話者が言っている談話であった。このようなことから、「嗜好について述べる（行動）」の場合は、「食べるのが好き」というような、動詞を含めた文型で述べられることはあまり無いのではないかと考えられる。

引用文献：

スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語』スリーエーネットワーク

東京外国語大学留学生日本語センター編（1994）『初級日本語』凡人社

（執筆：木林理恵）

## 21. 「手順と順序について述べる」

この機能を持つ談話の抽出基準は以下のとおりである。

2つ以上の出来事や動作を一定の基準によって並べ、それを相手に伝えることとする。典型的な言語形式としては、「それから」、「それで」などが含まれる発話である。

談話の抽出にあたっては、順序について述べている場合に焦点を当てた。以下にまず、タイプ1の談話例を示す。

例1

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
168	126-a	/	F1	その一、駅の方で食べて一N (NNN おーおー) //,,
169	126-b	*	F1	それから一、公園まで行ってえ (へえ)、NNN。
170	127	*	M1	なーるほどお、駅の方で何食ったの?。
171	128	*	F1	えーとねえ、ケンタッキー<笑い>。

「駅のほうで食べて、それから公園まで行った」という、順序をのべる典型的な言語形式を伴い、その機能が実現されている。

この機能において多く見られたのは、自分あるいはそのとき話題になった人物が、自身

の過去の行動について説明するとき用いられている談話である。談話例 2 は、OM01 本人が、仕事で赴任した土地を順番に述べているものである。

## 例 2

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
60	56-2	/	OM01	でそれから、まー就職して、(えー)で就職してちょ、まーどん何年くらい経ったのかな、あの一広島行きまして、(えー)今度は広島からまた東京戻って、広島 5 年間いて、(あー)で今度はあの一韓国のソウルに、。
61	57	*	JBM03	はあ。
62	58	*	OM01	ええ。
63	56-3	*	OM01	4 年間ほど (えー) いましてね。
64	59	*	JBM03	あ、じゃ結構あれですか、やっぱその転勤が<##して>{<}。
65	60-1	/	OM01	<ええ>{>}、それからまた東京戻って、(えー)いま東京ですから (はー) 2 回、。
66	61	*	JBM03	ああ、<なるほど>{<}。
67	60-2	*	OM01	<だったん>{>}ですね。
68	62	*	JBM03	ええ、ええ。

以下にタイプ 3 の談話例を挙げる。例 3 では、「それから」という形式が使われているが、順序について述べたものではない。

## 例 3

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
39	30	*	OF3	<でもうち>{>}は、友達が、年中遊びにきてたの=。
40	31	*	OF3	=やめた高校の (うん) 友達もね=。
41	32	*	OF3	=それから小学校の中学の、友達がそのへんにいるじゃない、<住んでるから>{<}。
42	33	*	OF4	<ええ、ええ、ええ>{>}。
43	34-1	/	OF3	みんなうちのが、いつもうちにいるって分かってるから、。
44	35	*	OF4	うーん。
45	34-2	/	OF3	全然平気でね、。
46	36	*	OF4	うん。



話は、おそらく OF03 の夫の友人のことである。どのような範囲の友人であるかに対して「高校の友達、それから小学校や中学校の友達」というように、ある物事に追加する意を表している。

手順や順序は、初級教科書では、そのこと自体に焦点が当てられている。例えばしかし、雑談という場面では、手段や順序そのものが話題の中心になることはない。本コーパスに抽出された談話において、手段や順序について述べるときは、自分の体験談つまり過去の話になることが多いようである。機械の使い方のように、手段と順序について尋ねることもありうるが、特定の目的の無い雑談という場面であるため、そのような談話は見られなかったと考えられる。

(執筆者：木林理恵)

## 22. 「どうしているかを尋ねる」

40 機能の中で「どうしているかを尋ねる」は、相手に最近の様子を述べるように働きかける言語行動とする。典型的な言語形式は、「どうかしましたか」「…のほうはどうですか」とする。以下では、「どうしているかを尋ねる」という発話機能を取り上げ、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2 に収録されている談話を分析することによって、その結果の会話教材への示唆を試みる。

「どうしているかを尋ねる」の機能をもつ談話は全体で 4 談話があった。そのすべてが、当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話のタイプ 1 に分類された。4 談話の情報をみると、すべての談話が親しい者同士の会話から抽出されていて、1 談話が「依頼場面」、2 談話が「ほめ場面」、1 談話が「雑談場面」である。そして、相手が年上の場合が 1 談話、相手が同年齢の場合が 3 談話あった。以下に相手が年上の場合と、同年齢の場合の例を一つずつ提示する。

### 例 1：BM04, OM24, 親しい大学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
72	70	*	BM04	えー、へへへ、いいやいいや、えっ、この前の、社会、えっ、言語、言語科学学会は…。
73	71	*	OM24	7月?。
74	72	*	BM04	ええ。
75	73	*	OM24	行っていない、僕、ごめんなさい。
76	74	*	BM04	いやいや、と言うか、別に謝ることじゃないんですけど。
77	75	*	OM24	うん、ドタキャン#よね。
78	76	*	BM04	あの一、見かけなかったんで、どうしたかなあと…。

例 1 は、BM04 が、7月の言語科学学会で OM24 を見かけなかったことについて話している場面である。BM04 は、「あの一、見かけなかったんで、どうしたかなあと…。」と OM24 を学会で見かけなかったことに対して、OM24 がどうしているかを聞いている。BM04 は「どうしたかなあと…。」と最後まで言い切っていないが、このように直接に「どうしたの?」と聞かなくても、相手にどうしているか尋ねる機能が果たされることが分かる。

例 2：日本人女性 09，【日本人女性】09，親しい大学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	日女 09	日曜日さ、(んー) TOEIC だった。
2	2	*	【日女】09	どうだった?。
3	3	*	日女 09	もうね、すごい落ちてた、やっぱ。

例 2 は、日曜日にあった TOEIC の試験について話している場面である。日女 09 の「日曜日さ、(んー) TOEIC だった。」という発話に対して、【日女 09】が「どうだった?。」と聞いているが、日女 09 の「もうね、すごい落ちてた、やっぱ。」という発話から、【日女 09】が「どうだった?。」の発話は、「試験がどうだった?」と尋ねていることが分かる。親しい大学生同士での発話だけであって、「どうだった?。」と普通体の言語形式が使われている。

(執筆者：李恩美)

### 23. 「ある条件での行動を言う」

40 機能の中で、「ある条件での行動を言う」は、ある行動について述べるときに、前提あるいは制約となる事柄とともに発話されるものとする。典型的には、その行動を実現する前提となる事柄は条件節として現れ、その条件節には、「…で」「…たら」「…なら」「…ば」などをともなう形式が考えられる。以下では、日本語の『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に表れた談話から、「ある条件での行動をいう」という発話機能の中に、典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されている談話を取り上げ、分析を試みる。

今回抽出した談話においては、初対面同士の会話、友人同士の会話の二種類の談話に当該機能が見られたが、特に友人同士の会話において、それはより多く観察された。以下より、例を示しながら、考察を行っていく（カッコ内は『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』での談話番号である）。

## 例1：男性同士 親しい間柄

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
172	160	*	M4	とんかつだったらねえ、いい店知ってるよ<2人で笑い>。[人差し指を立ててカメラの方を見る]
173	161-a	/	M4	あのねえあのねえ、俺が黒豚の取材しに行った時教えてくれた店があつてえ(うん) //,,
174	161-b	/	M4	鹿児島黒豚、をお(うん) //,,
175	161-c	/	M4	こう一、東京に持って来て(うん) //,,
176	161-d	/	M4	黒豚一のとんかつをやってる店がね、あるんだよ(うんN、うんN) //,,
177	161-e	*	M4	うん。
178	162	*	M4	その店の名前が、まいせん。
179	163	*	M3	まいせん?。
180	164	*	M4	で、「まい」がね、たしかね、ひらがな。
181	165	*	M3	うん。

例1は、親しい男性同士の会話で、店に関する話題で会話が行われている。ライン番号172において、M4は、豚カツのいい店を知っているという情報を相手に与えている。豚カツ以外店なら、M4はよく知らないかもしれないが、豚カツというものを条件として取り上げ、「とんかつだったらねえ、いい店知ってるよ。」という発話をしている。その後、話題になっている豚カツの店に関する内容を詳しく紹介している。つまり、この例では、「いい店知ってるよ。」ということについて述べる際、「とんかつだったらねえ、」という条件節には、「…たら」を用い、典型的な言語形式を伴って当該の機能が実現されている談話であると考えられる。

## 例2：親しい女性 大学生同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
13	11-1	/	BF19	えーと、どうしようかな、あの、ちょっと今度まで斎藤先生にお会いすることないんで、もしあれだったら,,
14	12	*	OF50	うん。
15	11-2	*	BF19	それコピーさしていただけますか?。
16	13	*	OF50	うん、いいよ。

例2は、親しい女性大学生同士の会話における依頼の場面である。ライン番号13において、BF19は、最近先生と会える機会がないため、OF50に「コピーさしていただけますか?」

か。」という依頼を出している。こういった依頼の行動をいう前に、「もしあれだったら、」という前提を言うことによって、婉曲な言い方になっており、発話を和らげていると考えられる。これは、依頼場面で用いられる機能 23「ある条件での行動を言う」の典型例と思われる。

### 例 3：初対面異性同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
72	71	*	BF12	なんか、来る時バスで、渋谷からバスにのったんですけれど、(ええ) 制服きた小学生ぐらいの子が、お父さんとか (ええ) おばあちゃんとか、(ええ) 一緒にきてるから、(ええ) あー、なんて思ってたんですけども。
73	72	*	OM04	ええ、まあ、あれでしょうね、小学校ぐらいだったら親がやっぱり付き添ってくるってか、見に来るでしょうね。
74	73	*	BF12	そうですね (ええ)。
75	74	*	OM04	ええ。

例 3 は、初対面異性同士の会話で、小学生がお父さんやお婆ちゃんと一緒に学校にきていることが話題の会話をしている。ライン番号 73 において、OM04 は「親がやっぱり付き添ってくるってか、見に来るでしょうね。」という自分の意見を述べる際、「小学校ぐらいだったら」の「...たら」という条件節を用いている。これはある条件での行動をいうという典型的な言語形式を伴って、当該の機能が実現されている談話であると考えられる。

(執筆者：林君玲)

## 24. 「比べて述べる」

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』によると、「比べて述べる」に該当する談話の抽出基準は以下の通りである。

2 つ以上のものについて、その差異や優劣を見て発話すること。典型的な言語形式は「より」「より...むしろ」「...ほうが」とする。

上記の定義にしたがい、59 の談話が抽出された。その談話を場面に分けると、初対面雑談 19、親しい友人 40 である。そして、「比べて述べるという機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」、つまりタイプ 1 の談話が 59 談話中 56 (50%)、「比べて述べるという機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、その機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話」、つまりタイプ 3 の談話が 3 談話 (50%) みられた。

タイプ1として分類された56の談話は、さらに会話参加者の人間関係によって、初対面19と親しい友人同士の37に分かれる。しかし、「比べて述べる」という機能を表す典型的な言語形式においては、会話参加者の人間関係という要素による影響はみられなかった。以下、典型的な言語形式の「より」「...ほうが」それぞれがみられた談話を示す。

例1：タイプ1，言語形式の「...のほうが」が見られた談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
25	23	*	J1	何回か行ったことあってー（へえー）、割と、近い<ですよ>{<}。
26	24	*	JB1	<近い>{>}。
27	25	*	JB1	あそこ、あの、なんかそれこそあれは木場の駅から結構遠いですよ。
28	26	*	J1	うん、歩きますね。
29	27	*	JB1	うん、だからそっちからうちの方が近いくらいで、<うん>{<}。
30	28	*	J1	<あ、そうなんだ>{>}。
31	29	*	J1	へえー、あ、あの辺なんです。
32	30	*	JB1	はい。

例2：タイプ1，言語形式の「より」が見られた談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
4	4	*	【日男】05	でも足速、足速いってまず言われたしさ。
5	5	*	日男 05	だって、もっと速いやつ今のチームにいるじゃん、「友達の名前」とか。
6	6	*	日男 05	「友達の名前」も俺より早く走るし。

一方、「比べて述べる」という機能を表す典型的な言語形式である「より」「より...むしろ」「...ほうが」はみられたが、別の機能が実現される談話が3つあった。例3においては、「より」という言語形式がみられたが、「比べて述べる」以外の機能がなされている。

例3：「より」という言語形式がみられた談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
383	286	*	M3	<なんだよ>{>}、そー、そしたら俺悪いやつじゃん（いやいや）、最低なやつんなっちゃうよ。
384	287	*	M2	そうそうそうそう。

385	288	*	M2	うーん。
386	289	*	M2	まあでもしょうがないよな。
387	290	*	M3	<u>N</u> うん。
388	291	*	M2	しょうがないというよりも、いいことだからいいじゃん。
389	292	*	M3	そうだよな N。
390	293	*	M2	うん。
391	294	*	M3	うん。

M2 による発話である「しょうがないというよりも、いいことだからいいじゃん。」には、「より」がみられた。しかし、ここでは、「...というより...だ」という言い直しまたは訂正として機能していると思われる。

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に収録されている「比べて述べる」という機能に該当する談話を分析した結果、以下のことがわかった。「比べて述べる」という機能に該当する談話のタイプ 1 においては、「より」や「...のほうが」が多くみられた。また、言語形式の「より」が「...というより...だ」として使用された際には、「比べて述べる」という機能が薄れ、言い直しや訂正が機能として機能している場合がある。

(執筆者：謝韞)

## 25. 「提案する」

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』によると、「提案する」という機能の定義は以下の通りである。

それに対する相手の意見や同意を求めるといえるが、働きかける際に、必ずしも聞き手にとって良いと話し手が信じているとは限らず、話し手自身の都合によることもあるはずであるという点が、「助言」と異なる。典型的な形式は、「～[す]れば?」「～[し]たら?」とする。

上記の定義に該当する談話が 5 つ抽出された。そのうち、「提案するという機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」、つまりタイプ 1 の談話が 3 談話 (60%)、「提案をするという機能に典型的だと考えられる言語形式は見られないが、その機能は実現されている談話」、つまりタイプ 2 の談話が 2 談話 (40%) みられた。

タイプ 1 の 3 談話においては、典型的な言語形式である「～[す]れば?」「～[し]たら?」がみられた。その 3 談話にみられた典型的な言語形式が含まれる発話はそれぞれ、「んー、でも会ってみたら?。」、「ちょっと高いけどやっぱり (NN いやあ)、それごちそうしてあげれば…。」、そして「あつ、<直接言えば。><。>」である。この 3 談話においては、提案された行為の動作手が聞き手、または聞き手側であることがわかる。

一方、タイプ 2 に分類された 2 談話においては、「提案する」という機能を実現してい

と思われる発話がそれぞれ、「いいじゃん、で、それで、Nさあ、みんなでバーベキューしに行こうよ。」と「5 限終わったら、ロビーとかで。」である。この発話において、提案された行為遂行の動作者が話し手と聞き手の双方になることがわかった。

以下、例1にはタイプ1の「提案する」談話を示し、例2には、タイプ2の「提案する」談話を示す。

例1：タイプ1の「提案する」談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
232	210	*	M3	名前だけ、で覚えてないんだよ俺、いろんな人としゃべったからさあ。
233	211	*	M4	うん。
234	212-a	/	M3	2、3分かー、多くてもー(うん) //,,
235	212-b	*	M3	10分はしゃべってない(あー) んだよね。
236	213-a	/	M3	だからインパクトがなくてさあ (NN) //,,
237	213-b	/	M3	あれどんな人だったかなあ (あー) =//,,
238	213-c	*	M3	=どんな顔の人だったかなあ (あー) と思ってさあ。
239	214-a	/	M3	どーゆう話をしたかなんてのは (NN んー) =//,,
240	214-b	*	M3	=全然覚えてなくてさあ (んー)。
241	215	*	M3	ただ、背は高かったんだよね (N んー)。
242	216	*	M3	でー、M4 ぐらいあった。
243	217	*	M4	えー、それやめたほうがいいんじゃない?。
244	218	*	M3	うん。
245	219	*	M3	高いよ、すごい。
246	220	*	M4	自分より高いのやめたほうがいいよ。
247	221	*	M3	うん。
248	222	*	M4	ふーん。
249	223	*	M3	背はねえ、すごい高いなっていう、(うん) …思ったんだよねえ。
250	224	*	M4	うん。
251	225	*	M4	そいで?。
252	226	*	M3	うんそれでー、んーでもなー、今こっち、うまくいってるからなーって。
253	227	*	M4	んー、でも会って見たら?。
254	228	*	M3	うん、でも年上だったんだよね (NN)。
255	229	*	M4	どこに住んでんの?。
256	230	*	M3	<u>S</u> いや、わからん。

257	231	*	M4	でもぜん、その一、案内状というか、郵便には、相手の連絡先は書いてないの？。
258	232	*	M3	書いてない書いてない。
259	233	*	M4	書いて、ない。
260	234	*	M3	<u>N うん。</u>

## 例2：タイプ2の「提案する」談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
366	332	*	M4	どうなのその、印象は。
367	333	*	M3	印象はいいよ。
368	334	*	M4	印象いいの？。
369	335	*	M3	うん。
370	336	*	M4	ふーん。
371	337	*	M3	すごいねえ、鍋とか、バーベキューとか、好き、好きだって。
372	338	*	M4	<u>N ふーん。</u>
373	339	*	M4	いいじゃん、で、それで、N さあ、みんなでバーベキューしに行こうよ。
374	340	*	M3	バーベキューしに行こうか。
375	341	*	M4	うん。
376	342	*	M4	で、その人数合わせて俺行くからさ。
377	343	*	M3	友だちも。
378	344	*	M4	そう、あの一、いや、足りてたら俺は別にいいんだけど。
379	345	*	M3	いや、あの一、よく####。
380	346-1	/	M4	そーゆーなんていうの、こー、そーゆーさあ、余暇をさ、楽しまないと、
381	347	*	M3	<笑い>そうだな。
382	346-2	*	M4	仕事やってらんないからな。
383	348	*	M3	うーん。

『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』に収録されている「提案する」という機能として抽出された談話を分析した結果、以下のことがわかった。提案された行為の動作主が聞き手または聞き手側のみである場合は、「～[す]れば？、～[し]たら？」が見られた。しかし、動作主には、提案した話者も含まれる場合は、「～[し]よう」という言語形式が使用されることがわかった。

(執筆：謝韞)



## 26. 「理由を述べる」

40 機能の中で「理由を述べる」は、自分のした（している）事柄について、そのわけを説明している発話とする。典型的な言語形式は、「～から」「～で」「～ので」、また、「なぜですか」（前方に出る）とペアで現れているものとする。以下では、「理由を述べる」という発話機能を取り上げ、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に収録されている談話を分析することによって、その結果の会話教材への示唆を探る。

「理由を述べる」の機能をもつ談話は全体で 20 談話があった。その中で 14 談話が、当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話のタイプ 1 に分類された。そして、6 談話は当該の機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、当該の機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話のタイプ 3 として分類された。

20 談話の情報をみると、14 談話が「初対面の場面」で、6 談話は「依頼場面」であった。タイプ別にみると、タイプ 1 に分類された談話は、初対面で 13、依頼談話で 1 談話が抽出されており、タイプ 3 に分類された談話はすべて依頼談話から抽出されている。

以下では、タイプ別に分類されて各談話を、相手との関係、具体的には、相手が同年齢、年上、年下かによって分類してみる。

タイプ 1 では相手が年上の場合が 3 談話、「直通があるので」「変わってますので」「冬のほうが好きですから」、相手が同年齢の場合が 4 談話（「かかりきりだったもんですから」「非常に珍しい例ですから」「ほとんどないので」「近いところに住んでるんで。二子新地なので」）、相手が年下の場合が 7 談話（「お休みみたいになっているから。学生さん、いませんから」「行き届いてないもんですから」「全然ご縁がないもんですから」「あんまりきれいなので」「どんな文献があるのかなと思って」「あの一、うろうろしているから」「北海道の出身ですから」）あった。以下に年齢に差がある相手との会話と年齢に差の無い相手との会話についてそれぞれ一つずつ例を提示する。

〈タイプ 1〉例 1 : BF03 (女性 30 代), OF01 (女性 40 代), 初対面, 2 人とも有職

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
56	53-1	/	OF01	あの一、で、もう 1ヶ所は、湖水地方っていう（あ、はい）所があるんですよ、
57	54	*	BF03	ええ、ありますね。
58	53-2	*	OF01	あの、イングランドなんですけれども。
59	55	*	OF01	そこのワーズワースっていう詩人がいまして、で、日本の詩人にすごく影響を与えている人なので、まあそこをちょっと…。
60	56	*	OF01	うん、あの、どんな文献があるのかなあと思って。
61	57	*	BF03	じゃ、そのの大学とか図書館<とか…>{<}

62	58-1	/	OF01	<大学はなくて、>{>}あのワーズワースの資料館みたいのが,,
63	59	*	BF03	あ、そうなんですか。
64	58-2	*	OF01	あるんですよね、ええ。
65	60	*	OF01	で、それをまあ見て…。

例1は、初対面同士の会話で、OF01が、イングランドの湖水地方に行ったことについて、BF03に話している場面である。OF01は、湖水地方に行った理由について、「そのワーズワースっていう詩人がいまして、で、日本の詩人にすごく影響を与えている人なので、まあそこをちょっと…。」「うん、あの、どんな文献があるのかなあと思って。」と「ので」「～て」という理由を述べる典型的な言語形式を用いてBF03に話している。このことから、例1は、「ので」「～て」という当該の言語形式を使っており、また、「理由を述べる」という当該の機能を持っていることからタイプ1と判断される。ここでは、また、話し手のOF01がBF03より年上であって、「人なので」「思って」のように「ので」「～て」の前の部分が常体であり、その年齢関係が反映されていると考える。

〈タイプ1〉例2：BF03（女性30代）、SM01（男性30代）、初対面、2人とも有職

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
54	52	*	SM01	ああ、じゃあ、世田谷区 <u>の</u> 古墳についてはいろいろ知ってるんですね。
55	53	*	BF03	というか、そうですね。
56	54	*	BF03	まあ、あの、多少勉強はしましたし、その、野毛大塚の発掘調査が、何年にも渡って <u>続</u> いてるものですから、まあ、ずっとそこに、かかりきりだったもの <u>す</u> から。
57	55	*	BF03	他の遺跡のことあんまり詳しくはないんですけども<笑い>（うーん）。
58	56	*	BF03	まあ、世田谷には、非常に縁が深いんですね。
59	57	*	BF03	ですから、「大学名」の学生さんもあの、野毛大塚の発掘調査なんかに <u>も</u> 随分…。
60	58	*	SM01	ああ、行ってるんですね。
61	59	*	BF03	ええ、関わってたんです。

例2は、初対面同士の会話で、世田谷の古墳について話している場面である。SE01の「ああ、じゃあ、世田谷区の古墳についてはいろいろ知ってるんですね。」という質問に対して、BF03が「まあ、あの、多少勉強はしましたし、その、野毛大塚の発掘調査が、何年にも渡って続いてるものすから、まあ、ずっとそこに、かかりきりだったものすから。」

と「～から」という理由を述べる典型的な言語形式を用いてその理由を述べている。このことから、例2は、「～から」という当該の言語形式を使っており、また、「理由を述べる」という当該の機能を持っていることからタイプ1と判断される。ここでは、また、話し手と聞き手が同年齢であるが、「ですから」と「から」の前の部分が丁寧体になっている。

タイプ3では、同年齢に対して3談話（「では、金曜日にはお返ししますから」「どれでもいいから（自分の名前書いてくれって）」「じゃ、今度あったとき返すから」）、年下に対して2談話（「人名」さんのロッカにでもはっておくので、それ、勝手にコピーしてくれちゃってかまわないので」「じゃ、前の授業でもいいから、（ノート貸してくれる?）」）あった。タイプ3に分類されている談話は、「から」「ので」など、「理由を述べる」の典型的な言語形式が使われているが、談話の流れを追うと、実際に「理由を述べる」の機能はしていないように考えられる。すなわち、これらの談話は、すべてが「依頼場面」であり、前後の文脈から、依頼の成立後、依頼する側から依頼される側に、依頼する側の発話を強調する機能を果たしていると判断される。以下にその例を一つ提示する。

〈タイプ3〉例3：BM12（女性20代）、SM44（男性20代）、友人同士、2人とも学生

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BM12	えーと、先週の、なんだっけ、卒論の執筆手引きみたいなさしあったでしょ？。
2	2	*	SM44	<うん>{<}。
3	3	*	BM12	<それー>{>}も、いまもってる？。
4	4	*	SM44	あ、もってるよ。
5	5	*	BM12	じゃ、それ、ちょっと貸してくんない？。
6	6	*	SM44	あ、いいよ。
7	7	*	BM12	ちょっとなくしちゃって、コピーするから。
8	8	*	SM44	あ、わかった。
9	9	*	SM44	それじゃ、貸すね。
10	10	*	BM12	うん、ありがとう。
11	11	*	BM12	じゃ、今度あったとき返すから。
12	12	*	SM44	あ、よろしく。
13	13	*	BM12	うん、ありがとう。

例3は、親しい友人同士の会話で、BM12がSM44に卒論の執筆手引きみたいなものを貸してくれるように依頼している場面の談話である。SM44から貸してもらうことにした後、BM12は「じゃ、今度あったとき返すから」と発話している。形式上は、「返すから」と「理由を述べる」の典型的な言語形式が使われているが、前後の文脈から、実際に「理由を述べる」という機能をしているというよりは、依頼する側から依頼される側に安心さ

せるために「いつまで返す」ということへの強調という機能を果たしていると判断される。

(執筆者：李恩美)

## 27. 「依頼する」

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』では、「依頼する」という機能の基準を、「相手に何かをしてもらうよう働きかけること。相手に選択の余地を残す形で働きかける点が、要求との相違点である。典型的な言語形式は『～[し]てくれない?』、『～[し]てもらえない?』、『～[し]てください』とする」としている。この基準に従い、「依頼する」が含まれる談話が 60 抽出された。

60 談話中、「～[し]てくれない?」、「～[し]てもらえない?」、「～[し]てください」のような典型的な言語形式が伴う談話、つまりタイプ 1 の談話は 60 談話中 56 (93%) みられ、「依頼発話」が伴わない談話、つまりタイプ 2 の談話は 60 談話中 4 (7%) みられた。

以下に、タイプ 1 とタイプ 2 に該当する談話をそれぞれ示す。

例 1 は、女性の依頼側 BF20 が同級生の親しい女性に授業に関連するプリントを借りる際に交わされた会話にみられた、「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴う談話である。

例 1：「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴う談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-a	/	BF20	あ、「SF47」さん//,
2	1-b	*	BF20	ちょっと聞きたいことがあるんだけど。
3	2	*	SF47	うん。
4	3	*	BF20	この間、生活科の授業でプリント配られたじゃない?。
5	4	*	SF47	うん、うんうん、<そうだね><{>。
6	5	*	BF20	<あれー><{>、とってある?。
7	6	*	SF47	あ、とってある、とってある。
8	7	*	BF20	あ、ほんとほんと?。
9	8	*	SF47	うん。
10	9-1	/	BF20	レポートかくのにさあ,,
11	10	*	SF47	うん。
12	9-2	/	BF20	どうしてもなんか見たいんだけど,,
13	11	*	SF47	うん。
14	12	*	SF47	<えーと><{>。
15	9-3	*	BF20	<ちょっと><{>貸してもらえないかなあ。

16	13	*	SF47	うん、いま、すぐ、ちょっといまないんだけど…。
----	----	---	------	-------------------------

例 1 では、ライン番号 15 の依頼側である BF20 による発話、「<ちょっと>{>}貸してもらえないかなあ。」の直後に、ライン番号 16 の被依頼側である SF47 の「うん、今、すぐに、ちょっと今ないんだけど…」という発話から、プリントを借りたいという意図が被依頼側の SF47 に伝わったことが確認できる。そして、依頼側である BF20 による発話、「<ちょっと>{>}貸してもらえないかなあ。」には、「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式の 1 つである、「～[し]てもらえない?」がみられた。その他の発話と区別するために、色を変えて示す。

次に、「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴わない談話を例 2 に示す。例 2 も女性同士によって交わされた会話の一部である。BF02 が依頼側，SF02 が被依頼側である。

例 2 : 「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴わない談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-a	/	BF02	あのね、<笑い>、そそそ//,,
2	1-b	/	BF02	1 回目の,,
3	2	*	SF02	うん。
4	1-c	/	BF02	「人名 1」さんときプリントをなくしちゃって//,,
5	3	*	SF02	うん。
6	1-d	*	BF02	「SF02 姓」さんもってる?。
7	4	*	SF02	本当になくしたの?。
8	5	*	BF02	うん。
9	6	*	SF02	<笑い>もってるよ。
10	7	*	BF02	ほんとう。
11	8	*	SF02	うん、コピー<する?>{<}<}
12	9	*	BF02	<コピー>{>}。

例 2 では、ライン番号 11 の SF02 の「コピーする?」という発話から、プリントを借りたいという被依頼側の SF02 に伝わったことが確認された。しかし、それまでに発せられた依頼側である BF02 の発話のすべてにおいては、「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式である、「～[し]てくれない?」、「～[し]てもらえない?」、「～[し]てください」がみられなかった。代わりに、ライン番号 4 の発話には、依頼するに至った経緯を述べる発話である、「『人名 1』さんときプリントをなくしちゃって」がみられ、ライン番号 6 の発話には、被依頼側である SF02 にプリントの所有を確認する発話である、「『SF02 姓』さんもってる」がみられた。謝他 (2004) によると、「『人名 1』さんときプリントをなくしちゃって」が、「聞き手にかける負担を実質的にまたは心理的に軽減するための発話で、『依頼発

話』に先行して使用している発話 (p.327)」と定義されている「補助的先行発話」の下位項目である「状況説明」と分類できる。そして、この類の発話は、「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴わない4談話中3談話(75%)みられたという。一方、『SF02 姓』さんもってる?」が、「依頼に踏み切るための見込みやそのための支障の有無を確認する発話 (p.327)」と定義されている「見込みの確認」の下位項目である、「Hearer Orientation」と分類できる。そして、この類の発話は、「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴わない4談話中4談話(100%)みられたという。そのため、本稿で扱った「依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が伴わない4談話において、典型的な言語形式である、「～[し]てくれない?」、「～[し]てもらえない?」、「～[し]てください」が含まれる発話の代わりに、依頼側による発話にみられ「補助的先行発話」や「見込みの確認」が依頼という意図の伝達には役立っているといえよう。

引用文献：

謝韞，木山幸子，李恩美，施信余，木林理恵，宇佐美まゆみ（2004）「TUFS 会話モジュールの日本語スキットと『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』における依頼談話行動の対照研究—会話教育教材開発への示唆—」『言語情報学 3 第 1 回言語情報学国際会議報告集 言語情報学 —現状と未来—』，21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」，東京外国語大学大学院地域文化研究科，323-341.

（執筆者：謝韞）

## 28. 「例をあげて述べる」

機能の中で、「例をあげて述べる」は、話し手は過去または現在の同種類の多くの事項を類推させるために、特にその中から指摘する事項について述べる発話とする。その典型的な言語形式としては、「例えば...」、「...とか」、「...も」、「...たり」などが挙げられる。

以下では、「例をあげて述べる」という発話機能を取り上げ、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に表れた談話の中からタイプ 1 とタイプ 3 の発話を抽出し、分類する。そして、それをもとに会話教材への示唆を探る。

「例をあげて述べる」というタイプ 1 の談話というのは、当該の言語形式が使われており、また「話し手は過去または現在の同種類の多くの事項を類推させるために、特にその中から指摘する事項について述べる」という当該の機能を持っているものである。

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』では、「例をあげて述べる」というタイプ 1 の談話に該当する言語形式は以下のようなものがあつた。

## 1.1. 名詞+「...とか」

例1：BF03（女性）SM01（男性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
22	22	*	SM01	何を教えてるんですか？。
23	23	*	BF03	ええ、わたしは考古学です。
24	24	*	SM01	考古学ですか。
25	25	*	BF03	といってもあの、よくテレビに出てくる吉村作治先生のようにエジプトとかああいう派手なところじゃなくてですね、<笑い>。（ええええ）あの、日本国内のことをやってますもんで、非常に地味なんですけれども。
26	26	*	SM01	ああ、そうですか。
27	27-1		SM01	へえ、じゃあ、この辺りの、東京の<歴史とか>{<}、
28	28	*	BF03	<はい、そうです>{>}。
29	27-2	*	SM01	この、古墳とか（ええ）よく知ってるんですか？。
30	29	*	BF03	いえ、よく知ってると言われるとですね、<笑いながら>あの一、非常にかたよ、知識がかたよってるんですけど、（いえいえ）それも、あの学生の頃から世田谷区の教育委員会の方に入出入り（はい）させていただいてるんで、まあ、世田谷区内の、古墳の、調査なんかには、（はい）関わってます。
31	30	*	SM01	ああ、そうですか。
32	31	*	BF03	ええ。

## 1.2. 形容詞+「...とか」

例2：JBM03（男性）OF01（女性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
37	33-1	/	OF01	私もあの人の名前を（えー）書かなくちゃいけない仕事をしてるので、（えーえー）ときどき指摘されることがあるんです<けど>{<}、
38	34	*	JBM03	<あー>{>}なるほど。
39	35	*	JBM03	<ええ>{<}。
40	36	*	OF01	<ええ>{>}。[かすかに]
41	33-2	*	OF01	「崎」を「大」'だい書くと立っだって（えー）言われたり、（えー）あの、吉田の吉が下が短いとか<言われたりね>{<}。

42	37	*	JBM03	<あーなるほど>{>}。
43	38	*	OF01	うーん。
44	39	*	JBM03	ええ。

## 1.3. 動詞+「...とか」(動詞形は辞書形である)

例3：F2(女性) F3(女性), 親しい友人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
147	121-a	/	F3	タイタニックだと今度あれは、沈潜っていうジャンルに入るからあ (N) //,,
148	121-b	*	F3	沈潜が好きだから沈潜ダイビングをしてみたいとか (N)。
149	122-a	/	F3	地形?? (N) //,,
150	122-b	/	F3	そーゆー、亀裂とか (N) //,,
151	122-c	/	F3	あの一、なんつうの、空洞 (N) //,,
152	122-d	*	F3	穴の中をこう、通り越えて、アーチを通り越えて、向こうっかわの岸に出るとか (N)、そーゆーのをやりたい、地形を楽しみたいったら地形派ダイビング。
153	123	*	F3	それぞれのね、ダイビングスタイルに、だんだん自分にね…。
154	124	*	F2	「F3」ちゃんなに?。

## 1.4. 動詞+「...とか」(動詞形はテ形である)

例4：BF12(女性) OF04(女性), 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
65	63	*	OF04	/少し間/わたしは一、あの被服関係なんです (あっ) <笑いウフツ>。
66	64	*	BF12	あー、そうですかー。 [無声化]
67	65	*	OF04	だからいろんな事やってるもんですからね。
68	66	*	BF12	ふーん。
69	67	*	OF04	そうなんです。
70	68	*	BF12	は一。
71	69-1	/	OF04	でもねえ、基本的に、こう、なんてーんでしょ、自分で計画して実験できるときはいいんですけどね,,
72	70	*	BF12	はい。



73	69-2	*	OF04	あのー、人に頼んでしなきゃいけない、被験者になってもらうとかね、(はい) あのー、洋服着てもらって、(ええ) いろんな人工気候室で、温度湿度測ってとか、(はい) そういうときって大変ですよ。
74	71	*	BF12	あー、そうですよ<ね>{<}。

## 2. 名詞+「...も」

例5：BF11（女性）OM04（男性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
101	93	*	BF11	/沈黙3秒/でも、あのー、じゃあ、学寮とか、ああいう、ああいうのも、<やられましたか?>{<}。
102	94	*	OM04	<ええ、あのー、>{>}もう、二度経験はしました、<ええ>{<}。
103	95	*	BF11	<ああ>{>}<小さく笑い>。
104	96	*	OM04	まあ、ああいうこと一切なかった学校なもんですから(えー)。
105	97	*	OM04	あの、遠足も修学旅行も、運動会も、<一切ない>{<}。
106	98	*	BF11	<あの、>{>}高等学院というのは、(ええ) あの、専門学校みたいの…。
107	99-1	/	OM04	<いや、あの…>{<}、
108	100	*	BF11	<じゃなくて、>{>}<こう…>{<}。
109	99-2	/	OM04	<普通の、>{>}普通の高校…、
110	101	*	BF11	<高校…>{<}。 [小さな声でOM04さんの言った単語を繰り返す]
111	99-3	*	OM04	<なんですけども、>{>} (あ) かなり旧制高校だったもんですから、(ええ) そっちのー、色彩が強いんですよ。
112	102	*	BF11	ああ、<そうですか>{<}。

## 3. 名詞+「...とかも」

例6：BF11（女性）SF04（女性），初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
65	62	*	SF04	なんか、(<笑い>) なんか、調理学って言うのは実際におつくりになったりもするわけですか?。
66	63-1	/	BF11	えー、そうですねー、調理実習とかの関係も(うーん) ありますし、(ええ) あと実験とかも…、

67	64	*	SF04	あっ実験。
68	65	*	BF11	ええ。
69	63-2	*	BF11	=ありますので…。

## 4. 動詞+「…たり」(動詞形は過去形である)

例7: BF11 (女性) OF04 (女性), 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
15	15	*	OF04	でもわたし例の…、なんか薬品のことで、あたしお世話になったんじゃないかしら。
16	16	*	BF11	そうでしたか<笑い>。
17	17-1	/	OF04	なんか…もしそうだったら…、<失礼から>{<}、
18	18-1	/	BF11	<#####>{>}、[二人同時に話し始める]
19	17-2	*	OF04	ごめんなさいね、<なんか…>{<}。
20	18-2	*	BF11	<いえいえ、>{>}<あの一…>{<}。
21	19-1	/	OF04	<薬品を>{>}借りにいったり(ええ)ときどき行ったりで、<あの一うろうろしてるから>{<}<笑い>、
22	20	*	BF11	<会ったことがあるかもしれませんね>{>}<二人で笑う>#####。[笑いによって消される]
23	19-2	*	OF04	科学科の先生に(え一)お世話になることもあったり、ちょっとね(あ一)足りなかったりして(え一)慌てて薬品借りにいったりしたことがあるものですから。
24	21	*	BF11	え一、ええ、ええ。
25	22	*	OF04	でも、あんまりそれ以外は、なかなか、他の科だと…。
26	23	*	BF11	そうですね。

## 5. 動詞+「…し」(動詞形は辞書形である)

例8: BF12 (女性) YF03 (女性), 初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
17	17-1	/	BF12	この大学ほんと、あの一、なんか広々してて(ん一)なんかこう、そうですね、のどかっていうのかな一、
18	18	*	YF03	あっ、そうですね。
19	17-2	*	BF12	<いいな一って>{<}。

20	19	*	YF03	<割と世田谷>{>}の割には(ええ)あの一、いい場所にあるし、(そうですね)で、緑もあるし、(ええ)建物もきれいだし、いいなと思うんですけどね<笑い>。
21	20	*	BF12	そうですねー、交通の便もいいし…。
22	21-1	/	BF12	入ってきたときのイメージがね、中央の通りがすごく広いですよ、
23	22	*	YF03	あつ、はい。
24	21-2	*	BF12	で、講堂もあるし、あすこは有名だし…<笑い>。
25	23	*	YF03	うーん。

さらに、実際の会話では特定の言語形式、「例をあげて述べる」に該当するような言語形式がなくとも、当該の機能をもっている談話、タイプ2の談話が存在する。

『BTSによる多言語話し言葉コーパスー日本語2』では、「例をあげて述べる」のタイプ2に当たる談話は、以下のようなものがあった。

例9：BF12（女性）YM03（男性）、初対面の社会人同士

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
60	57	*	YM03	だいたい、文化の日からめた四日間くらい、(ええ)やるんですけども、(ええ、ええ)も一、四日間ずーっと馬鹿騒ぎですよ。[最後の方無声化]
61	58	*	YM03	うーん夜中じゅう、騒いだりとか…(んー)。
62	59	*	YM03	当然ここ夜とかはやらないじゃないですか。
63	60	*	BF12	うーんまー、(うん?)多分まあそうでしょうね<2人笑い>。
64	61	*	BF12	そうですね、でも、それが楽しいんじゃないんですか?。
65	62	*	YM03	いやあー、もう、ほんとに凄いですねー。
66	63	*	YM03	もう、酒飲んで、歌って、(そーですよ)踊って…、えー。[無声化した声でなつかしように]

「動詞のテ形」というような言語形式には、典型的な言語機能として「動作の連続」であるが、この会話では「動作の連続」ではなく、「例をあげて述べる」というように機能は変換させられたようである。

このように、典型的な言語形式がなくとも、全体の談話の流れを観察することによって、当該の機能は別の言語形式に現れることがあるということを考慮に入れ、会話教材に取り組む必要性が示唆される。

(執筆者：カチマレク・ミロスワバ)

## 29. 「妥協する」

「妥協する」は、自分がした働きかけが、相手にそのまま受け入れられない（かった）ため、両者が合意するように新たな案を提示することとする。典型的な言語形式としては、「でもいいです」「仕方がない」といったものとする。以下に、TUFS 会話モジュールのスキット（以下、D-スキット）と『BTS による多言語話し言葉コーパス－日本語 2』のそれぞれにおいて、この機能が現れた談話を比較する。

〈D-スキットにおける「妥協する」の例〉

山田：大学生，食堂の人

状況：大学生の山田が，食堂でうどんを注文する場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	山田	すみません、天ぷらうどん、お願いします。
2	2	*	食堂	ごめんなさい、天ぷらがもう終わってしまったんですよ。
3	3	*	山田	ああ、そうですか。
4	4	*	山田	うどんは他に何がありますか。
5	5	*	食堂	たぬきかきつねならありますけど。
6	6	*	山田	たぬきかきつねね。
7	7	*	吉田	じゃあ、きつねうどんでもいいです。
8	8	*	食堂	はい、きつねですね。

このように D-スキットでは、「妥協する」を学習するユニットにおいて、大学生が食堂で注文する場面の談話を提示している。注文しようとした品物がもうないと知った山田は、ライン番号 4-6 で他の選択肢に関する情報を得た後、ライン 7 で妥協の発話を行う。この発話は、天ぷらうどんを注文するという働きかけが受け入れられなかった後、代替案を相互に交渉した上で合意していることから判断して、「妥協する」の機能を果たすと言える。また「一でいい」という対応言語形式を使用していることから、タイプ 1（当該機能を果たし、かつ対応言語形式を持つ談話）に分類できる。

自然談話においては、タイプ 1 とタイプ 3 の用例が見られ、タイプ 2 は見られなかった。まずタイプ 1 の用例を示す。

〈自然談話における「妥協する」の例-タイプ 1〉

BF14：大学生，YF39：大学生

状況：BF14 がノートを貸してほしいと依頼する場面。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF14	今日'きょう'1限の授業出た？。

2	2	*	YF39	あ、さぼっちゃった。
3	3	*	BF14	さぼっちゃった?。
4	4-1	/	BF14	えー、ノート貸してほしかったんだけど、じゃ、前 'まえ'の授業でもいいから、
5	5	*	YF39	うん。
6	4-2	*	BF14	ノート貸してくれる?。
7	6	*	YF39	うん、いいけど。
8	7	*	BF14	うん。
9	8	*	YF39	ちょっと、字が汚いから、あまり読めないかもしれない。
10	9	*	BF14	あー、でもいいよ、わたしもっと汚いから、大丈夫。
11	10	*	YF39	<笑い>。

授業のノートを借りたい BF14 は、ライン番号 1 でまず相手が今日の授業に出席したことを確認する。しかし YF39 は出席していなかったため、「今日の授業のノートを貸してもらおう」という BF14 による依頼の働きかけは、前置きの部分においてすでに失敗してしまう。ライン番号 4 で BF14 は、失敗に終わった働きかけを説明したあとで、「じゃ前の授業でもいいから」と妥協の発話を行う。この用例における BF14 の発話は、依頼しようとした行為の実行が不可能とわかったため、新たな案を相互交渉し、両者が合意する、というものであるため、「機能 29：妥協する」の機能を果たすと言える。また「一でいい」という対応言語形式を使用していることから、タイプ 1（当該機能を果たし、かつ対応言語形式を持つ談話）に分類できる。

この例のように実際の談話では、何らかの働きかけをする側が、相手側にその働きかけを受け入れる要件が整っているかどうかを、前置きの発話で確認することがある。その場合、相手側に要件が整っておらず、働きかけが受け入れられないことがわかれば、（働きかけを完了することなく）その時点で妥協の発話へと移行することになる。これは「天ぷらうどんを注文する」という働きかけをまずおこない、それが実際に受け入れられなかった後に妥協の発話へと移行した、D スキットの用例とは対照的と言える。

次に、タイプ 3 の用例を示す。

〈自然談話における「妥協する」の例-タイプ 3〉

YM9：男子高校生，YM10：男子高校生

状況：親しい友人同士の雑談

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
113	111	*	YM9	なんか、行ってみたいところとかある?、国でもいいし。

114	112	*	YM10	国?。
115	113	*	YM9	日本内でもいいし。
116	114	*	YM10	「JM3」家にしようかな。

この用例においては、ライン番号 113 と 115 において、「～でもいい」という、「妥協する」の対応言語形式が用いられている。またライン 113 の前半部では、相手の行ってみたい場所について「情報を求める」という働きかけが、YM9 によっておこなわれている。しかし、ライン番号 113 や 115 における、この働きかけが相手に受け入れられなかったわけではないし、また受け入れられないことが明らかになったわけでもない。したがって、この用例は、妥協するという機能を持っておらず、タイプ 3 に分類される。

(執筆：鈴木卓)

### 30. 「許可を求める」

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』では、「許可をもとめる」という機能は次の通りに定義されている。

相手に対して、自分が行為を遂行することを認めてもらうように働きかけること。

典型的な言語形式は、「～させてください」「～させていただけませんか」「～[し]てもいい?」ものとする。

「許可をもとめる」という機能に該当する談話が 8 例抽出された。『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』では、各談話が当該の機能と、当該の機能を表す典型的な言語形式の有無という観点から、3 つのタイプに分類された。その分類に従うと、「許可をもとめる」という機能に該当する談話においては、「許可を求めるという機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」、つまりタイプ 1 の談話が 8 談話中 4 (50%)、「許可を求めるという機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、その機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話」、つまりタイプ 3 の談話も 8 談話中 4 (50%) みられた。

タイプ 1 の「許可をもとめる」の 4 談話においては、「～[し]てもいい?」という言語形式がみられた。そして、その言語形式が含まれる発話に対して、相手による許可を肯定するまたは否定するといった回答がみられた。なお、この 4 談話はすべて友人同士の会話から抽出されている。

タイプ 1 の「許可をもとめる」に該当する談話の 1 つを例 1 として示す。

例 1: 「許可を求める」として機能する談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	BF15	「人名」ちゃん、「先生の名前」先生のプリントもってる?。

2	2	*	SF31	えっ、なんのプリントだっけ？。
3	3	*	BF15	えーとね、だいぶん前にもらったやつなんだけど、絵がかいてあるやつさあ。
4	4	*	SF31	えーと、文学集のやつ？。
5	5	*	BF15	そそそそ。
6	6	*	SF31	うん、もってるよ。
7	7	*	BF15	あれ、ちょっとかしてほしんだけどさあ。
8	8	*	SF31	うん、いまもってる、<ちょっと待って>{<}
9	9	*	BF15	<いまもってる>{>}。
10	10	*	SF31	うん。
11	11	*	BF15	じゃ、コピーにいてもいい？。
12	12	*	SF31	うん、いいよ、うんうんうん。
13	13	*	SF31	じゃ、使ってください。
14	14	*	BF15	はい。

例1においては、許可を求める側であるBF15が相手のSF31に対し、「じゃ、コピーにいてもいい?。」という発話を発した。それに対し、SF31が「うん、いいよ、うんうんうん。」という許可を与える発話を発した。

一方、タイプ3の4談話においては、「～[し]てもいい?。」という言語形式はみられたが、定められた相手に対して「許可を求める」という機能は実現されなかった。その代わりに、冗談として機能している談話が4談話中1(25%)、引用としてなされた談話が2(50%)、そして、「許可を求める」という機能を持つ発話を発する前に、「許可してほしい」ことを遂行してしまったという談話があった。

まず、タイプ3としてみなされ、引用部においてみられた「許可を求める」談話を例2に示す。

#### 例2：引用部においてみられた「許可を求める」談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
174	148-1	/	OF5	じゃあと思ってお酒だけ買ってきといて、で……どこいった時だっけなあ、なんか奥多摩の方に主人と行って、
175	149	*	OF6	うん。
176	148	*	OF5	あ、わざと用事作ったの=。
177	150	*	OF5	=それで、あの、帰りにね、いったからこっち通ったからって言って、寄ろうって言って。
178	151	*	OF6	はあ。

179	152	*	OF5	でー、もう、前もって、あのう行きますけれど[↑]、(うん) そのあの、ここへ行くから帰りにそっち通るから"おうかがいして (ああ) いいかしら?"って言うといったら、あの、"待ってますから" (ええ) っ。
180	153-1	/	OF5	お父さんとは、あのう、あれなんですよ、こうなんて (ええ) 一緒にしてしゃべってるときは全然、
181	154-1	/	OF6	ああ、気難しくない、
182	153-2	*	OF5	わたしたち、<どものようにね。>{<}。
183	154-2	*	OF6	<感じ?>{>}。[↓]
184	155	*	OF6	あ<あー>{<}。
185	156-1	/	OF5	<でもー>{>}ね、だけれど、その、うちにいらっしやいとかなんか言<うと>{<}、
186	157	*	OF6	<ああ>{>}、あんまりー、いい、<行きたがらない>{<}。
187	156-2	*	OF5	<行きたくない>{>}。

例2では、話者のOF5によって発せられた発話の引用部において、許可を求める発話である「"おうかがいして (ああ) いいかしら?"」と合わせて、許可した発話である「"待ってますから"」もみられた。

次に、「許可を求める」という機能を持つ発話を発する前に、「許可してほしいこと」を遂行してしまった談話を、例3に示す。

例3:「～[し]てもいい?」が含まれるが「許可をもとめる」以外の機能をしている談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
192	190	*	JB1	<えーと、>{>}あたしは、えーとカナダの英語、を、まあ何が違うのかっていうか (うんうん)、そういうことをやろうかなー、と思って…。
193	191	*	J1	へえー、何が、何が違うのか聞いても (<笑い>)、いいですか?<2人笑い>。
194	192	*	JB1	なーんか、そう、そうですね、アメリカ英語、と、ま系統的には一緒なんで (はい)、ていうか、移民がこう来たのが、一部、その、アメリカ独立に賛成しなかった人たちが、まあ (うんうん)、流れていったような所があるんで、でまあ、聞いてだから、カナダ、カナダ英語だねってこう、真っ先にわかる人、多分いないかもしれないんですけど。



例3において、J1による発話「へえー、何が、何が違うのか聞いても (<笑い>)、いいですか?。」には、「～[て]もいいですか?」という言語形式が含まれている。しかし、「許可を求める」という機能の定義は、「相手に対して、自分が行為を遂行することを認めてもらうように働きかけること」であり、つまり、許可を与えてもらう前にその行為を遂行してはいけないのである。しかし、「聞いてもいいですか?」という発話においては、「許可を求める」と同時に、許可なしに「聞く」という行為を遂行してしまっている。そのため、この談話においては、「～[て]もいいですか?」という言語形式が含まれているが、「許可を求める」という機能は事実上無効となる。実際のところ、J1の「へえー、何が、何が違うのか聞いても (<笑い>)、いいですか?。」という発話によって、JB1が違いに関する情報を提示しはじめた。

『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』に収録されている「許可を求める」談話を分析した結果、以下のことがわかった。「許可を求める」という機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている4談話のすべてにおいては、典型的な言語形式として「～[し]てもいい?」が見られたが、同じく典型的な言語形式として定められた「～させてください」「～させていただきませんか」はまったく見られなかった。その4談話がすべて友人同士によるものであるため、友人同士の会話においては、「許可を求める」という機能を表す言語形式として、「～[し]てもいい?」が適切であると言えるかもしれない。

(執筆者：謝韞)

### 31. 「義務を確認する／肯定する」

この機能の抽出基準は以下のとおりである。

一方の話者が何らかの形で義務を確認し、もう一方の話者がその義務を守る必要があることを伝えている発話とする。典型的な言語形式としては、「なければならない」が挙げられる。

この機能が実現されている談話は、タイプ2のみが現れた。それは、初対面同士の会話で、会話を行う際にインストラクションのあった会話である。

#### 例1

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
6	6	*	BF03	でも先生、わたくしのこと、ご存じでいらっしやいますでしょ<うか?>{<}>。
7	7	*	OF01	<そうですね…>{>}。
8	8	*	OF01	あ、あの、うん、いや、だから、顔は、<と名前は知っているという…>{<}>。
9	9	*	BF03	<そうですね…>{>}。

10	10	*	BF03	直接こうやってお話する<ということはないですよね><{>。
11	11	*	OF01	<ことはないですよね>>{>。
12	12	*	BF03	だから、まあ、いいですよね<2人笑い>。

初対面同士で会話をして欲しいとの、実験者からの条件を義務とみなした。ここでは、互いが条件にあっていないことを確認している。義務にそっているため、「義務を確認する／肯定する」に当てはまる談話である。

## 例2

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
9	9	*	BF12	えっとこちらの方ですか?。[咳払いをしてから]
10	10	*	SF05	はいそうなんです。
11	11	*	BF12	あっ<そうですか><{>。
12	12	*	SF05	<こちらの方に>>{>つとめてます、はい。
13	13	*	BF12	あー、そうですか。
14	14	*	BF12	私は外部のものなんで、(えー)なんかこちらの方は、ほんと、あっだめだ[思い出したように](<笑い>) 今までの話をしちゃけないんでしたね。
15	15	*	SF05	いえいえいえ、あの一、初めてですか?、「大学名」にいらしたのは…。

BF12はこの日一日で何人かと会話を行うため、「今までの話をしてはいけない」というインストラクションがあった。ここでは、その確認を、義務の確認とみなした。

今回データとして扱った会話からは、「義務を確認する」機能が実現されていると思われる談話は、以上の2つのみが見られた。目的のない会話である雑談という場面を多く扱ったため、相手に確認をするような「義務」が話題になることはなかったと考えられる。

また、実際の会話において「なければならぬ」を用いるときというのは、かなり厳しい口調になるのではないだろうか。この形式は、相手に向けられる表現では、実質的には命令と変わらない場合もあるとされる(『日本語教育事典』388頁)。雑談以外に、目的のある自然会話からはどのような言語形式が見られるのか、データを拡充し検討することが必要である。

## 引用文献：

日本語教育学会編(1982)『日本語教育学事典』大修館書店

(執筆者：木林理恵)

### 32. 「禁止する」

40 機能の中で、「禁止する」は、相手が行っている、あるいはこれから行おうとしている動作を停止するように働きかける発話とする。その典型的な言語形式としては、動詞の禁止形や、「だめですよ」などが挙げられる。以下では、「禁止する」という発話機能を取り上げ、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』に収録されている談話と TUFSS 会話モジュールのスキット（以下、D-スキット）で提示された談話との比較を通し、その結果の会話教材への示唆を探る。

#### 〈D-スキットにおける「禁止する」の例〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	職員	あ、ちょっと、ちょっと！。
2	2	*	学生	え、何ですか？。
3	3	*	職員	そこに空き缶を捨ててはいけませんよ。[学生が空き缶を捨てようとしたゴミ箱を指差す]
4	4	*	職員	空き缶はこっちに捨ててください。[もう一つのゴミ箱を指差す]
5	5	*	学生	分かりました。[言われたゴミ箱に空き缶を捨てる]
6	6	*	職員	[学生が、雑誌をもう一つのゴミ箱に捨てようとする] ああつ、それはこっちに捨ててください。[もう一つのゴミ箱を指差す]
7	7	*	学生	あ、申しわけありません。[お辞儀をする]

上に見られるように、D-スキットでは、「禁止する」の談話として、ごみの捨て方を間違えた学生を大学職員が注意する場面で、大学職員が学生に「そこに空き缶を捨ててはいけませんよ。」と言っているものが提示されている。この例では、「捨ててはいけませんよ」と、動詞の命令形が否定の形という、当該の言語形式が使われており、また「相手が行っている、あるいはこれから行おうとしている動作を停止するように働きかける」という当該の機能を持っていることから、本発表の基準からみるとタイプ 1 として分類されるものであると考えられる。

D-スキットでは主にタイプ 1 に当たる例文が提示されているが、関崎他（2004）の結果から分かるように、実際の会話では特定の言語形式がなくとも当該の機能をもっている談話（タイプ 2）や、当該の言語形式が当該の機能を表さないような談話（タイプ 3）が存在する。「禁止する」は、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』での基準により分類したところ、タイプ 1（3/13）とタイプ 3（10/13）の二種類の談話が見られた。

まず、自然会話から当該の言語形式と、機能を持っているタイプ 1 の例をみる。

## 〈タイプ1〉例1：高校生，男性同士，親しい間柄

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
160	154-1	/	YM10	これいいよね,,
161	155	*	YM9	うん。
162	154-2	*	YM10	ほしいよね、このマイク。
163	156	*	YM9	ちょっとね、ちょっと、これ、なんか芸能人ぽいって感じで。
164	157	*	YM10	ちょっと、ボタン押したくねえー?。
165	158	*	YM9	<笑いながら>だめだよ、絶対。
166	159	*	YM9	だめですよ。
167	160-1	/	YM10	あー,,
168	161	*	YM9	うん。

例1は、親しい男性高校生同士の会話で、二人の前にある録音機材を話題にしている。YM10の「ちょっと、ボタン押したくねえー?。」という発話に対して、YM9が「だめだよ」という当該の言語形式を使っており、また「相手が行っている、あるいはこれから行おうとしている動作、（ここではボタンを押すという動作）を停止するように働きかける」という当該の機能を持っていることから、タイプ1と見なされる。それは、YM9は「笑いながら」発話しているものの、「絶対」や、その次にまた「だめですよ」と発話しており、「実際ボタンを押すといけない」場面なので、YM9の発話は、実際に「禁止する」の機能をしていると判断されるからである。

それでは、次に、自然会話から、「禁止する」形式を取ってはいるものの、実際には「禁止する」の機能をしていないタイプ3の例を取り上げてもう少し詳しくみてみることにする。

タイプ3に分類されたものの多くは、「<笑いながら>そういうこと言っちゃだめよ。」「聞くな、この野郎って<笑い>。」「<笑いながら>ふざけんじゃねえよ、おい。」「<笑いながら><くっせー、>{}てめえ、ふざけんじゃねえよ。」「[出だし強調] ゆーなよそういうこと (<笑い>) ハッキングしてるって。」と各会話で見られるように、「だめ」「動詞の禁止形「～な」」など、「禁止する」の典型的な言語形式が使われているが、「笑い」を伴っており、談話の流れを追うと、実際に「禁止する」の機能はしていないように考えられる。また、全てが親しい間柄での会話である。即ち、タイプ3に分類されたものは、「禁止する」の典型的な言語形式は使っているものの、笑いを伴っており、前後の文脈から「禁止する」の機能はせず、一つの親しさの表明として使われているのではないかと考えられる。以下にその例を一つ提示する。

## 〈タイプ3〉例2：高校生，男性同士，親しい間柄

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
345	316	*	YM5	<笑いながら>おまえ屁こくな。
346	317-1	/	YM6	<笑いながら>ふざけんじゃねえよって、し、
347	318	*	YM5	ふざけん<なよ>{<}
348	317-2	*	YM6	<おまえ、>{>}おまえ、なに言ってんの、俺ゲップで終わらしたんだろ？
349	319	*	YM5	<笑いながら><くっせー{<}
350	320	*	YM6	<笑いながら><くっせー、>{>}てめえ、ふざけんじゃねえよ。
351	321	*	YM6	おま、おまえマジ最悪だ、おまえ。
352	322	*	YM5	<笑いながら>おめーが最悪。

例2は、親しい男性高校生同士の会話である。YM5とYM6は、ともに「ふざけんなよ。」「ふざけんじゃねえよ。」という、「禁止する」の典型的な言語形式は使っているものの、それらの発話は笑いを伴っており、また、前後の文脈から、実際に「禁止する」という機能しているというよりは、親しい友達同士だから可能な冗談のように使われていると考えられる。

こうしたことから、文法形式の存在のみをその機能のマーカーとするのは不十分な場合が多く、全体の談話の流れをみてこそ、その機能が正しく捉えられるということが示唆された。

## 引用文献：

関崎博紀，木山幸子，李恩美，施信余，宇佐美まゆみ（2004）『『BTSによる多言語話し言葉コーパスー日本語2』の作成の過程と整備の結果から示されることー会話教育教材開発への示唆ー』『言語情報学Ⅲ 第1回言語情報学国際会議報告集 言語情報学ー現状と未来ー』21世紀COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科，301-322.

（執筆者：李 恩美）

## 33. 「指示する」

『BTSによる多言語話し言葉コーパスー日本語2』では、「指示する」という機能は以下のように定義されている。

相手に何らかの行為をするよう、拒否をする選択肢が与えられない形で働きかけること。典型的な言語形式は、動詞の命令形、「～[する]ように。」「～[する]こと。」とする。

上記の定義に従い、14 の談話が抽出された。そのうち、「指示するという機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」、つまりタイプ1の談話が7談話(50%)、「指示をするという機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、その機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話」、つまりタイプ3の談話も7談話(50%)みられた。

タイプ1の7談話においては、動詞「する」の命令形(禁止の命令形)「しろ」がみられた。また、その7談話はすべて親しい高校生の友人同士において行われた雑談から抽出されている。7談話のうち、男性同士の談話が5(72%)、女性同士の談話が2(18%)みられた。

益岡・田窪(1992:223)によると、「相手に動作を求める場合は、女性的表現では、依頼の表現を使う」という。しかし、以下の女性同士の談話において、相手に動作を求める際には、命令形がみられた。

#### 例1：親しい友人同士の雑談における「指示する」談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
161	155	*	YF3	いいな結婚、結婚したいよ<笑いながら>。
162	156	*	YF4	早くしろよー、おま<えら>{<}=。
163	157	*	YF3	<早く>{>}<結婚したいよおー>{<}、あー。
164	158	*	YF4	=<呼んでね、呼んでね>{>}。
165	159	*	YF4	あれでしょう、居酒屋結婚でしょ?<YF3 笑い>。

本稿で取り扱う命令形(禁止の命令形)がみられた「指示する」談話は、すべて高校生によるものである。命令形の使用における男女差がなくなってきたのは高校生のみであるのか。または、その使い方は高校生だけに許されるのかについては、さらなる研究が必要と思われる。

一方、タイプ3の7談話においては、相手に対しでなく、第3者に対して行った「指示する」談話、冗談として機能する談話、そして、からかいとして機能する談話がみられた。

第3者に対して行った「指示する」談話を例2に示す。

#### 例2：第3者に対し行った「指示する」談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
110	97-1	/	YM1	<ずっとマネージャー、>{>}マネージャーはなんかね、
111	99	*	YM2	うん。
112	97-2	*	YM1	作るじゃん、なん、作ってバクっと食ってんの、目の前で。

113	100	*	YM1	うまそうだなーって。[感情がこもっている]
114	101	*	YM2	ただで、それ?。
115	102	*	YM1	食ってんのかなから自分で作って食ってんの(ん)、 お金も何も払わないで。
116	103	*	YM2	うん<笑い>。
117	104	*	YM1	いいのかよって。
118	105-1	/	YM1	俺だって<チキン>{<}、
119	106	*	YM2	<材料>{>}代ぐらい払えよう<みたいな>{<}。
120	105-2	*	YM1	<俺だって>{>}チキンそこであげてんだから、食 いてえよって。

例2においては、第3者に対して行った「指示する」談話がみられた。その指示は別の場にいる聞き手に発したものであるため、タイプ3の談話としてみなされた。

『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』に収録されている「指示する」という機能に該当する談話を分析した結果、以下のことがわかった。従来、女性が相手を求める際に、依頼の表現を使用するといわれているが、高校生である親しい女性同士の会話においては、命令形がみられた。命令形の使用における男女差は、今回のデータにはみられなかったと言えるだろう。

引用文献：

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

（執筆著者：謝韞）

### 34. 「非行為を依頼する」

「非行為を依頼する」に該当する談話の抽出基準は以下の通りである。「相手が行っている、あるいはこれから行おうとしている動作を停止するように、相手に選択の余地を与えている形で働きかけること。典型的な言語形式は、『～ないでくれる／もらえる?』『～ないでください』とする」。

上記の定義に従い、10の談話が抽出された。そのうち、「非行為を依頼するという機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」、つまりタイプ1の談話が5談話（50%）、「非行為を依頼するという機能を表す典型的な言語形式はみられないが、その機能が実現されている談話」、つまりタイプ2の談話が4（40%）、「非行為を依頼するという機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、その機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話」、つまりタイプ3の談話が1（10%）みられた。

まず、タイプ1の7談話においては、『～ないでくれる／もらえる?』『～ないでください』といった言語形式がみられた。タイプ1の「非行為を依頼する」という機能の談話を例1に示す。

## 例1：タイプ1の「非行為を依頼する」という機能に該当する談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
17	15	*	JBM03	で、まず、自分で「JBM03 姓」っていっても、(はい)それがときどき口がまわってなくて、「姓1」さんですとかかですね。
18	16	*	YM01	あー昔好きだった人が「姓1」さん。
19	17	*	JBM03	あーそうですか<2人で笑い>。
20	18	*	YM01	<しまったー><{}>。
21	19-1	/	JBM03	<であと一、>{}>字を見ると、
22	20	*	YM01	やべーとられてる<2人で笑い>。
23	21	*	YM01	はい。
24	22	*	JBM03	まーそれは気にしないで。
25	23	*	YM01	はい。
26	19-2	*	JBM03	であと一字を見ると「姓2」さんですかって、さい、大体最初(はい)聞かれて、で、「姓2」さんですか、(はい)「姓3」さんですか、(はい)で、中には「姓4」さんですか、/少し間/[息を吸い込んで]どれも違うんだけど(うんうんうんうん)とかって思い。

例1においては、JBM03による「まーそれは気にしないで。」という「非行為を依頼する」発話が見られた。それに対し、相手の話者であるYM01が受諾し、「はい。」と発話している。

次に、タイプ2の「非行為を依頼する」という機能に該当する談話を例2に示す。

## 例2：タイプ2の「非行為を依頼する」という機能に該当する談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
74	55	*	M4	まあ「M3」の悪口は、ここらへんで<2人で笑い>。
75	56	*	M4	ちょっと出だしはね。
76	57	*	M2	まあでも一、まあ「M3」悪意持ってやってるわけじゃないからな。
77	58	*	M4	そうよ、それはわかっ…。
78	59	*	M2	えー、鈍いっていうのはあるけどねー。
79	60	*	M4	<u>N うーん N.</u>
80	61	*	M4	どーですか「M2」くん、ヨットのほうは<2人で笑い>。
81	62	*	M2	なんだよいきなり。



82	63	*	M4	えーヨットの話題にしようよ。
83	64	*	M4	この前「M3」とヨッ、あーそうだ、その話を聞こう。
84	65	*	M2	あーそーそーそ [舌打ち]。
85	66	*	M4	そーれをちょっと教えてよ。

例 2 においては、「非行為を依頼する」という機能を表す典型的な言語形式が見られなかった。しかし、話者 M4 による発話の「まあ M3 の悪口は、こちらへんで<2 人で笑い>。」や、「この前 M3 とヨッ、あーそうだ、その話を聞こう。」や「そーれをちょっと教えてよ。」などによって、相手である M2 がとっている「M3 の悪口を言う」という行為を停止して、他の行為に移るように働きかけている。結果的に、M4 によるこれらの発話が、M2 がとっている「M3 の悪口を言う」という行為を止めるように働きかけているといえよう。

最後に、タイプ 3 の談話、典型的な言語形式は見られたが、「非行為を依頼する」という機能が実現されていない談話を例 3 に示す。

### 例 3：タイプ 3 の「非行為を依頼する」談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
290	200	*	M2	もう一、「大学名」大学行けば指差されて…。
291	201-a	/	M3	いやー違う S 違う S 違う、さりげなく、「あー、学生だー、いい、楽しそうでいいなー”って見てたらさあ (うん) //,,
292	201-b	/	M3	その「人名」さんてゆう、一緒に帰ってさあ (N うん) //,,
293	201-c	*	M3	なんか、“そんな一女の子のことばかりじろじろ見ないでー”とかいう (<笑い>)。
294	202-1	/	M3	でも“俺見てませんよ”って言ってさあ,,
295	203	*	M2	いやーお前見てるよ、うーん。
296	202-2	*	M3	うん。

例 3 では、典型的な言語形式を含む発話である「なんか、“そんな一女の子のことばかりじろじろ見ないでー”とかいう (<笑い>)。」が引用部において見られた。そのため、この発話を聞いている聞き手に対して、「非行為の依頼」という機能としての効力がないため、タイプ 3 の談話としてみなされたのである。

『BTS による多言語話し言葉コーパスー日本語 2』に収録されている「非行為を依頼する」という機能に該当する談話を分析した結果、以下のことがわかった。まず、「非行為を依頼する」という機能を表す典型的な言語形式では、「～しないで」が見られた。それから、典型的な言語形式こそ見られなかったが、相手に現在の行為をやめ、その他の行為をするよ

うに依頼や提案する談話がみられた。

(執筆：謝韞)

### 35. 義務を確認する/否定する

『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』を作成するために用いた自然会話資料には、「義務を確認する/否定する」に相当するような談話は見られなかった。それは、抽出のもととなった自然会話資料に雑談が多く、義務を確認するという場面が現れにくかったためではないかと考えられる。

(執筆：木林理恵)

### 36. 招待する

『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』を作成するために用いた自然会話資料には、「招待する」に相当するような談話は見られなかった。これは、主に初対面同士の会話と友人同士の会話をデータとして用いたためではないかと考えられる。初対面の会話では相手を自宅へ誘うことが少なく、また、親しい友人同士の会話ではすでに交流が進んでいるために会話収集の場であえて相手を招待しない、ということが推察できる。

(執筆：木林理恵)

### 37. 「助言する」

助言する (advice) という行為は、Brown and Levinson (1987) によれば、本質的に相手の邪魔されたくないという欲求 (Negative Face) を脅かす行為 (Face Threatening Act) であるということである。具体的には、「聞き手の将来の行為 A を予測し、そうすることで、聞き手が行為 A をするように (もしくはしないように) 圧力をかける行為 (Brown and Levinson, 1987: 66)」になりうる可能性がある」と指摘している。したがって、助言という行為をしなければならない際には、相手を不愉快にさせないように、相手に対する配慮とともにそれをすることが重要だといえる。ここでは、相手に対する配慮という観点から、TUPS 会話モジュールと『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』の比較を行い、自然会話の特徴から会話教育に示唆することがあるかどうかを具体的に検討したい。

『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語2』では、「助言する」という機能は次の通りに定義されている。

相手にとって良いことであると信じ、相手が持っていない (と話者が考えている) 情報・知識・考え方などを伝えること。「提案」(機能 25) と類似した行為であるといえるが、提案は、その情報が必ずしも「聞き手にとって」良いこととは限らず、話し手自身の都合によることもある、ということが異なる点である。典型的な形式

は、「～[する]と/[し]たらいいですよ」「～[する]と/[し]たらいいと思うんです/思いませんよ」とする。

また、上の定義に相当する談話を自然会話から抽出する範囲は、次の通りとなっている。

(助言をしようとするほうの)話し手が、相手に伝えようとする内容を含む話題を導入する発話から、(助言をされる)聞き手が助言に対する何らかの反応を経て、助言の内容とは別の話題に移る直前までを、助言の機能を持つ談話とする。

一方、TUFS 会話モジュールでは、機能 37 番目に「助言する」というスキットが提示されている。このスキットの状況は、「図書館で論文を作成している先輩の具合が悪そうなので、後輩が声をかける」というものである。話者は、山田君という男性と、その先輩の田村さんという女性である。『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』との比較がしやすいように、このスキットも、BTSJ によって文字化資料を作成したうえで、比較することにする。

それでは、まず、自然会話における「助言する」談話を見る。

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』における「助言する」という機能に相当する談話は、合計 7 であった。さらに、当コーパスでは、当該の機能と、当該の機能を表す典型的な言語形式の有無という観点から、3 つのタイプに分類しているが、「助言する」という機能に相当する 7 つの談話は、そのうちの 2 つのタイプに分類された。当該の機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、当該の機能も実現されている談話であるタイプ 1、および、当該の機能を表す典型的な言語形式はないが、当該の機能が実現されている談話であるタイプ 2 であった。タイプ 1 は 5、タイプ 2 は 2 見られた。タイプごとに会話例を提示する。

次の例 1 は、タイプ 1 として分類された談話である。話者は 20 代女性の J2 と、同じく 20 代女性の JB2 であり、知り合って 4 回目の会話におけるやりとりである。

例 1: 「助言する」機能に相当する談話のうち、タイプ 1 に分類された例

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
204	195	*	J2	その訳って見たことあります?。
205	196	*	J2	無いか。
206	197	*	J2	でも長編だから、きっとタイトルにはなってますよね、<その全集で>{<}>。
207	198	*	JB2	<あるんじゃないんですか>{>}>。
208	199	*	J2	ある?。
209	200	*	JB2	なんか、検索して出てきません…?。
210	201	*	J2	あ、あー、そうですね。

211	202	*	J2	図書館とかで。
212	203	*	JB2	図書館で、あの、学術なんとかセンター、学術情報センターにアクセスしたら出てこないでしょうか。
213	204	*	J2	あー、学術情報センター？。
214	205	*	JB2	はい。
215	206	*	JB2	なんかあたしも詳しい…、NAACIS とかなんかそれそう、え、ナクセス、ナクセス…なんかそういうので（うんうん）、あるんですよ、図書館からアクセスできるんですけど。
216	207	*	J2	はあはあはあはあ。
217	208	*	JB2	で、情報センターだと、全国の大学で持ってる本の一覧がばーっと出てくるやつがあるんですけど、それで見れば（おー）、あっという間に出てくると<思うんですよ、あれば、うん>{<}
218	209	*	J2	<あーそっか、そうですね>{>}。
219	210	*	J2	それは、<2人笑い>ありがと、聞いてみるもんだ。

この例では、JB2 から図書に関する情報を求められた J2 が、図書の検索の方法を伝えている。抽出基準に定められている「と思うんですよ」という典型的な言語形式を伴った発話であるため、タイプ 1 と分類されている。

次に、タイプ 2 に分類された談話を示す。例 2 は、20 代の女性 JFB と、それより 5 歳程度年上の男性 JMO との会話である。両者は初対面である。

例 2：「助言する」機能に相当する談話のうち、タイプ 2 に分類された例

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
65	64	*	JMO	非常に、その値段の安いそういう パック料金で行くんで、教習所からするといいお客さんじゃないんですよ。
66	65	*	JFB	あ、なるほど、はい。
67	66	*	JMO	一般のあのまあ、こういうことよくないんでしょうけど、私立大学の女子学生とかが行くと（はい）あいつ達はお金があるんで、講師を指名するんですね（あ）。
68	67	*	JMO	で、講師の方は、やっぱ指名されると、それはそれでいいらしいですよ（はい、はい、はい）。

69	68	*	JMO	だから、そういうのはね、比較的いいし、だから、あれなんだけど、なんか、私たちみたいにまあ、特にこんななんというんですかね、あのむさい男が行くとはですね、けっこうあの、なんだこいつってみたいな感じでこうけっこう態度悪かったりですね。
70	69	*	JMO	その次に若い女子学生かなんかいるとあ、"何とかちゃん元気"とか言って、<2人で笑う>パーとこう変わったりして、やっぱなんかそういうね、非人間的に##頃が若いころだから。
71	70	*	JFB	<あ、若いうちに>{<}</>。
72	71	*	JMO	<うん、だから>{>}ぜひ、若い時にこう、取った方が。
73	72	*	JFB	はい、そうします<笑い>。

この例2では、JMOがJFBに対して、若いときに運転免許を取得したほうが良いということを伝えている。抽出基準として定められている典型的な言語形式は現れていないが、談話の文脈から、「相手にとって良いことであると信じ、相手が持っていない（と話者が考えている）情報・知識・考え方などを伝えること」とであると判断されたため、タイプ2と分類されている。

ライン番号72の発話は、「若い時にこう、(免許を)取った方が」という部分のあとに「いいです(よ)」「いいと思います(よ)」などを補うことができる。すなわち、この発話は中途終了型発話だといえる。

このように、自然会話のデータからは、典型的な言語形式を伴って「助言する」機能を果たす談話もあれば、典型的な言語形式を伴わず、中途終了型発話によって「助言する」機能を果たしている談話もあるということが明らかになった。

それでは、TUFSS会話モジュールのスキットでは、「助言する」機能はどのように提示されているかを見ることにする。

### 例3：TUFSS会話モジュールのスキット「助言する」

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	山田	先輩、どうしました。
2	2	*	山田	具合が悪そうですけど。
3	3	*	田村	うん、スキーの合宿で風邪をひいてしまったみたい。
4	4	*	田村	ゆうべから急に熱が出てね。
5	5	*	山田	それなら、早く病院に行ったほうがいいですよ。
6	6	*	山田	インフルエンザかもしれませんから。
7	7	*	田村	ありがとう。
8	8	*	田村	でも、もうすぐ卒論の締め切りなの。

9	9	*	山田	でも、無理は絶対しないほうがいいです。
10	10	*	田村	うん、そうね。
11	11	*	田村	ありがとう。

TUFS 会話モジュールのスキットでは、体調が悪い先輩を気遣うという状況である。「ほうがいいです (よ)」という言語形式が 2 回用いられていることが分かる。これは、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』の「助言する」機能の抽出基準において典型的な言語形式と定められたものと合致する。したがって、このスキットは、当コーパスにおけるタイプ 1 の分類に相当する。

このように、TUFS 会話モジュールにおける「助言する」機能を持つ発話は、自然会話からのデータと同様、「いいです (よ)」という典型的な形式を伴っているものであった。しかし、本コーパスの自然会話から抽出した談話では、すべて典型的な形式を伴う発話ばかりではなく、中途終了型発話のように、典型的な形式を明示せずに相手に助言をしている談話もあった。

本コーパスにおける中途終了型発話の談話は、自分の考えを相手に認めさせようと働きかけているもの、すなわち Brown and Levinson (1987) の指摘するネガティブ・フェイスを脅かす行為 (FTA) であったといえる。それに対して、TUFS 会話モジュールの状況は、相手の体を配慮した上の助言であり、相手のフェイスを脅かす行為にはあたらない。本コーパスにおいてタイプ 2 に分類された発話は、助言という FTA をする際に、相手のフェイスを脅かす度合いを軽減するように、最後まで言い切らず、間接的に伝えようとした結果だと考えられる。この特徴を利用して、助言する際には、その内容が相手のフェイスを脅かす行為であるなら、中途終了型発話を用いると自然であるということを学習者に提示することが考えられる。

今後、談話モジュールを拡充する際には、1 つの場面のみではなく、様々な場面を設定し、本コーパスで示唆された特徴などを取り入れることが期待される。それによって、その教材を用いる学習者は、実際の会話において、より自然で円滑なコミュニケーションをとることが可能になるだろう。

引用文献：

Brown, P. ,& Levinson, S.C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

(執筆者：木山幸子)

### 38. 「要求する」

「要求する」に該当する談話の抽出基準は以下の通りである。「聞き手が何らかの行動をとるように、聞き手に選択の余地を与えずに働きかけること。相手に選択の余地を与えない形式である必要があるため、典型的な言語形式は、『～(し)て』、命令形である(『BTS

による多言語話し言葉コーパス—日本語2』により)。」

上記の基準にしたがい、該当する談話が5つ抽出されている。そのうち、「要求するという機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」、つまりタイプ1の談話が4談話(90%)、「要求するという機能に典型的だと考えられる言語形式が見られるが、その機能は実現されておらず、別の機能が見られる談話」、つまりタイプ3の談話が1(10%)みられた。

タイプ1の4談話においては、女性同士による談話が1(25%)例、男性同士による談話が2例(50%)、そして異性同士による談話が1例(25%)あった。典型的な言語形式の「～[し]て」が含まれる発話がすべて女性の話者によるものである。その一方、男性による発話には、動詞の命令形が含まれていることがわかった。例1には、女性同士による談話を示す。「要求する」という機能を表す典型的な言語形式を含む発話は色を変えて示す。

#### 例1：女性同士による「要求する」という機能に該当する談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
24	23	*	F2	やだー、も、…<2人で笑い>。
25	24	*	F2	<手紙で送ってよ。>{<}。
26	25-1	/	F3	<ゆ、ゆ、>{>}ゆってこないからさー、たぶん、たぶんあれ、あたしは本持ってないけどお(N) //,,
27	25-2	*	F3	あたしが"これやってね"って言われたやつってたぶん、あの一、テキストのお(N)、おっきい問題集だったと思う。
28	26	*	F2	あなんか、こーやって項目があって、そのところに、1こ…。
29	27-1	/	F3	うん下のほうにこう、なんぼんなんぼんって,,
30	28	*	F2	そそそそれぞれー、それ提出すんの。
31	27-2	*	F3	4問か、5問ぐらいあるやつ(うん)。
32	29-1	/	F3	あれをお,,
33	30	*	F2	全部持ってんの?。
34	29-2	/	F3	もー全部コピーしてえ、テキストんなっててえ,,
35	31	*	F2	ねえ送って。
36	29-3	*	F3	それをはいっと…。
37	32	*	F2	送って送って送って。
38	33	*	F3	んじゃあ送ってあげるよ。
39	34	*	F2	ほんとに?。
40	35	*	F3	うん。
41	36	*	F2	やったー<笑い>。
42	37	*	F2	じゃああれじゃん。

43	38	*	F3	でも返してね。
44	39	*	F2	返す返す。

例1において、F2による「要求する」発話が複数にみられた。そのすべてにおいて、言語形式の「～て」がみられた。

一方、男性同士による談話においては、命令形がみられた。「要求する」を表す典型的な言語形式の1つである命令形が含まれる発話は色を変えて示すようにした。

### 例2：男性同士による「要求する」という機能に該当する談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
241	219	*	YM5	<ううん>{>}。
242	220	*	YM6	中学の一部。
243	221	*	YM5	いいよ、これ。
244	222	*	YM6	あごめん。
245	223	*	YM6	じゃあ。
246	224	*	YM5	おまえ俺や、だから野球部の話聞けよ、おまえ。
247	225	*	YM6	<笑いながら>なんで?。
248	226-1	/	YM5	[息を吸い込む]野球部将来おれ、あの野球部で、
249	227	*	YM6	うん。
250	226-2	*	YM5	エースになると思うね。
251	228	*	YM6	んん、じゃ、俺がはっきし言ってやろうか。
252	229	*	YM5	うん。
253	230	*	YM6	無理。

例2において、話者のYM05による発話である「おまえ俺や、だから野球部の話聞けよ、おまえ。」には、「聞く」という動詞の命令形である「聞け」が見られた。

次に、タイプ3に分類された談話を談話例3に示す。

### 例3：「要求する」以外の機能をしている談話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
138	125	*	OF04	でも、若いんですもん、一生懸命やって…。
139	126	*	BF11	若くないんです<笑い>。
140	127	*	OF04	"きつとはりきって頑張ってやって、ください"、とか言って<2人で笑いながら>。
141	128	*	OF04	体力と、体力で、とか言って…。
142	129	*	OF04	だんだん疲れてきたりして…。



143	130	*	BF11	いやーいえー、もう見習わなくちゃいけないですけど…<笑い>。
144	131	*	OF04	全然全然、もうー<笑いながら>。

例3において、話者 OF04 による発話「"きっとはりきって頑張ってやって、ください"」には、「要求する」という機能を表す典型的な言語形式である「～(し)て」が見られた。しかし、この発話は引用であるため、相手である BF11 に対して、「要求する」という機能がしていないことが言える。

『BTS による多言語話し言葉コーパス－日本語 2』に収録されている機能の「要求する」に相当する談話を分析した結果、以下のことがわかった。「要求する」という機能を表す典型的な言語形式が見られ、また、その機能も実現されている談話」においては、典型的な言語形式である「～(し)て、命令形」の双方が見られた。しかし、「～(し)て」が女性同士の会話にしか見られないのに対して、命令形は男性同士の会話にしか見られなかった。  
(執筆者：謝韞)

### 39. 「希望を述べる」

40 機能の中で、「機能 39：希望を述べる」の基準は次のとおりである。話し手が何らかの希望を表明すること。典型的な言語形式は、「～たい」という希望の助動詞や、「～ほしい」という形容詞である。以下では、「希望を述べる」という発話機能を取り上げ、『BTS による多言語話し言葉コーパス－日本語 2』における自然会話の談話例を対象とした分析を通し、庵(2000)を参考に、会話教材への示唆を探る。

このコーパスを整備した結果(関崎他 2004)から分かるように、実際の会話では、「当該の機能に典型的な言語形式が見られ、当該の機能も実現されている談話(タイプ1)」のほかに、「当該の機能に典型的な言語形式がなく、当該の機能が実現されている談話(タイプ2)」や、「ある機能にとって典型的だと考えられる言語形式が見られるが、当該の機能が実現されておらず、別の機能が見られる談話(タイプ3)」が存在する。「機能39：希望を述べる」として抽出された18つの談話は、全て〈タイプ1〉に分類される。

各会話において見られた発話は以下のとおりである。「わたしも、来年は、是非、北海道、行きたいなあーとは思いますがでも。」「いいなー、パン食べたい。」「いいな結婚、結婚したいよ<笑いながら>。」「早く結婚したいよおー、あー。」「食うだけのもんは、仕事はして、でー、それ以外の時間では、まあ、好きなことは<やりたいなって…>{<}。」「ただ飯はね、(んー)ほんとうまくなってほしいしね。」に見られるように、タイプ1に分類されたものは、「何が好きかなー、たぶん夏の暑いときは(うん)ビールを飲みたい気分だね。」などの「修飾節となっている場合」も含め、希望を述べる際に典型的な言語形式だと思われる「～たい」「(～て)ほしい」という表現が使われて当該の機能が実現されているものである。

以下にその例を1つ提示する。

例1：YF4（高校生女性）、YF3（高校生女性）、親しい同性同士の会話

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
158	152	*	YF4	それで、妊娠されて。
159	153	*	YF3	あっ、大学院で、院生だけど、<学生結婚ですか?>{<}。
160	154	*	YF4	<結婚してそうそうそう>{>}。
161	155	*	YF3	いいな結婚、結婚したいよ<笑いながら>。
162	156	*	YF4	早くしろよー、おま<えら>{<}=。
163	157	*	YF3	<早く>{>}<結婚したいよおー>{<}、あー。
164	158	*	YF4	=<呼んでね、呼んでね>{>}。

例1は、親しい女性高校生同士の会話で、結婚を話題にしている。知人の結婚について語られているYF4の発話に対して、YF3はライン161とライン163で「～たい」という形式を用い、自分の結婚願望を述べている。希望を述べる際に典型的な言語形式だと思われる「～たい」という助動詞を伴って「何らかの希望を表明する」という当該の機能が実現されていることから、〈タイプ1〉と見なされる。

抽出した談話例が全てタイプ1に分類されるが、以下のように、複合的機能を持つと考えられる例がある。

例2：PO1（女性）、SO1（女性）、学生友人同士ほめ場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	PO1	喧嘩したいなー、すごーい<笑い>。
2	2	*	SO1	喧嘩<笑い>、喧嘩した方がいいよ。
3	3	*	PO1	もーねー、喧嘩したい、喧嘩するのがいいよ、ほんとにもう、全然できないもーん。
4	4	*	SO1	それも不思議だよなー、なんで喧嘩できないんだろな…?。
5	5	*	PO1	そーう。
6	6	*	SO1	なに、ムカついてることとかってためちゃうの?、自分の中に。

例2は、女性友人同士の会話である。ライン1とライン3における「喧嘩したい」は、発話に笑いを伴っており、「希望を述べる」機能を持っていると共に、冗談のように使われていると考えられる。また、会話の流れから、PO1は「喧嘩したい」という発話で「喧嘩できない」という平和好きな性格に対して自己評価をしているとも考えられる。

以上の例から分かるように、同じ表現形式であっても、その働きは会話の流れにおいて

異なる場合がある。文法形式の存在のみをその機能のマーカーとするのは不十分であり、同じ表現形式が異なる機能をしているということは、談話全体の流れを見てはじめて明らかになるであろう。

今回の分析結果を踏まえ、機能の指導における留意点について考えると、典型的な言語形式を提示することによって学習者の理解や記憶の助けにするのは一つの手であるが、「当該の機能が認められるか、当該の機能に典型的な言語形式が含まれているかという観点」分類された3つの談話タイプについても視野に入れて説明する必要があると思われる。

引用文献：

庵功雄他（2000）「話し手の気持ちを表す表現（2）－意志・願望－」『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク，136-143.

関崎博紀，木山幸子，李恩美，施信余，宇佐美まゆみ（2004）『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語 2』の作成の過程と整備の結果から示されること－会話教育教材開発への示唆－』『言語情報学Ⅲ 第1回言語情報学国際会議報告集 言語情報学－現状と未来－』21世紀COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科，301-322.

（執筆者：張鈞竹）

#### 40. 人を紹介する

『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語 2』を作成するために用いた自然会話資料には、「人を紹介する」に相当するような談話は見られなかった。これはデータとして2者間の会話を用いたため、人を紹介するような、3者以上の会話参加者を必要とするような機能は見られなかったためだと考えられる。

（執筆者：木林理恵）

## 2. 『BTS による多言語話し言葉コーパス —日本語会話 1 (日本語母語話者同士の会 話)』を用いた研究

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 親しい日本語母語話者同士による悪態

## — 会話教育への示唆 —

関崎 博紀

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

### 1. はじめに

親しい友人の間では、付き合いの初期の段階とは異なるコミュニケーションが見られる。初対面会話においては、相手の領域を侵す話題は避けられることが報告されている(三牧 1999a)のに対し、親しい友人に対しては、率直な意見を交わすなどの言語行動が見られる(三牧 1999b)。

従来、親しい者同士のコミュニケーションに関する研究は充分になされてきたとはいえない。そのために、会話教育においても、親しい友人とのコミュニケーションについての十分な指導がなされているとはいいがたい。中山(1997)に指摘されている、学習者が母語話者との付き合いを深める段階において、丁寧なコミュニケーションを維持したために相手との距離を作ってしまうという問題は、このような傾向とも無関係ではないと考えられる。悪態に関しても、語彙の収集や分類を目的とした研究は見られるが、自然会話においてその実態を明らかにしたものは、ほとんど見られない。また、悪態の場合、会話教育において取り上げられることは稀であった。

本研究は、非常に親しい友人同士による自然会話の中で見られる悪態を対象とする。親しさの表現としての悪態に関して、その頻度やそれに伴う対人配慮行動の実態を明らかにする。そして、悪態を会話教育において扱う方法への示唆を示す。

本研究では、悪態を「会話の相手その人やその行動、発話、認識、および、それが好意を抱いている人物、ものごとに対して、否定的な評価を述べる言語行動」と定義する。以下、このような言語行動をとることを「悪態をつく」と表現し、悪態をつく者を悪態の「つき手」、悪態をつかれる者を悪態の「受け手」と呼ぶ。

### 2. 先行研究

まず Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を概観し、続いて、本研究が定義する悪態と深く関連する研究についてまとめる。

#### 2.1. Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論

Brown and Levinson (1987) (以下、B & L) は、人間がもつ基本的な欲求として、フェイスを提示している。フェイスには、他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティ

ブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがある。そして、この基本的欲求としてのフェイスを脅かさないように配慮することをポライトネスと捉えている。また、これらのフェイスを脅かす行動を FTA (Face Threatening Acts) といい、FTA がフェイスを脅かす度合い (以下、FT 度) は、P (聞き手が話し手に対してもつ力 : Power), D (話し手と聞き手の社会的距離 : Social Distance), Rx (当該の文化で、ある行為 (x) が「相手にかかる負担の度合い」 : rating of imposition) の 3 要素によって決定されるとされている。当該の言語行動の FT 度に応じて、それを軽減するための行動 (以下、FT 度の軽減行動) がとられるとされている。

## 2.2. 悪態に関する先行研究

本研究が定義する悪態と関係が深い言語行動には、悪態、ののしり、からかい、悪口などが挙げられる。諸家の示した分析、あるいはアンケート調査の結果から、これらの言語行動には、肯定的な側面もあることが明らかにされている。

星野 (1974) は悪態の諸相と機能を論じている。その中で、好意や親愛の表現としての積極的な悪態などに触れ、悪態には「個人と個人を離反させ敵対させる顕在機能と、むしろ集団の中の個人を結合させ連帯させる潜在機能があることが示唆されている」と述べている (p.44)。悪態の諸相について、語彙や文体、状況などを整理しているが、それに先立って、「悪態 (現象) の諸相を述べるには、決して頻発される語彙を並べるだけで『事終われり』としてはならないので、それに専心すれば、生きて動く悪態の実相は見逃されてしまう」 (p.34) と断っている。浜田 (1988) は、罵り表現を攻撃行動と定義したうえで、アンケート調査から、その攻撃性やイメージを調査している。「死ぬ」「ばか」「のろま」といったことばなどは、言われると「気にする」「腹が立つ」「侮辱された」などと感じられる傾向が示されているが、「あほ」「どじ」「お前の母さんデベソ」などには、「ユーモラスな感じ」や「親しみがある感じ」などのイメージがあることも示されている。卑罵表現について論じた米川 (1999) は、現代の女子大生が実際に交わっていた、卑罵表現を用いたやりとりをとりあげ、現代の卑罵表現が相手に親愛感・親密感をあらわしたり、それを確認したりするものとして使われていると指摘している。からかいについて論じた津田 (1998) は、シナリオを分析して、からかいがポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして使われていることを示している。それについて、「相手が避けたいことをわざと指摘している点で、FTA (Face Threatening Acts) を行っているわけであり、それによって相手との親密感を強調しているといえる。」と言及している (津田 1998 : 47)。Boxer and Cortes-Conde (1997) は、会話で使われるジョークの諸形態に焦点を当て、それが生み出す無数のタイプの活動や、日常的に行われる社会的会話におけるジョークの使用を規定する社会言語学的変数、ジョークの結果について議論している。会話の中で使われるジョークには、からかい、その場に居合わせない第三者への冗談、自虐的冗談が含まれている。これらには、お互いの関係を表示する機能 (RID: Relational Identity Display) があり、冗談やからかいを通じてお互いの関係をうまく表示することができれば、その結果、参与者同士が結びつくと言われている (p.282)。広井 (1985) は、悪口がもとで裁判に至った事例を引きながら、悪口を、「敵意、

憎悪、嫌悪、あるいは軽蔑などの感情を表出する言語行為」とし、「それによって話し手がカタルシスを経験する行為」であると論じている。

上に概観した先行研究から、悪態に聞き手に親しみを表す機能があることはほぼ明らかにされているといえる。しかし、当該の悪態が見られるときの会話参加者の人数や性別といった条件が統制されていない。また、悪態の頻度、悪態に伴う対人配慮行動などについては言及されることが少ない。

### 3. 実験方法

本研究では、非常に親しい間柄にある、同性の大学（院）生二名による会話をデータとする。協力者には研究目的は伝えず、修士論文のデータとするので条件に合う相手と会話するよう依頼した。会話は、MDとビデオによって記録した。実験場所は、最もリラックスできる場所として協力者自身に指定させた。会話の時間は、20分程度とした。会話に際しては、「こんな機会だから言える、普段相手に対して抱いている印象」という話題を設定した。調査者が会話の終わりを告げに現れた時点で、会話を終了させた。会話終了後、フォローアップ・アンケートの記入を依頼した。記入に際して、記入内容に影響が出ないように、距離をおいて座るよう依頼した。

### 4. 分析方法

ここでは、収集した会話の文字化の方法、コーディングの方法、コーディングの集計方法を述べる。本稿では、音声資料に限った結果を提示する。

#### 4.1. 文字化の方法

録音した会話は、調査者が場を離れ協力者同士が二者間の会話を始めた時点から、調査者が会話の終わりを告げに現れる時点までを、BTSJ (Basic Transcription System for Japanese, 宇佐美 2003) に従って文字化した。各協力者は、女性は F (Female)、男性は M (Male) と、それぞれに続く任意の番号によって識別する。

#### 4.2. コーディング

本研究では、コーディング項目として、悪態の有無、FT 度の軽減行動の有無、FT 度の軽減行動の種類のコーディング、悪態の効果の 4 つを設定する。コーディング結果の信頼性は、セカンドコーダーとの一致率 (Cohen's Kappa, Bakeman and Gottman, 1986) によって判断する<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 一致率の測定にあたっては、「資料全体の 8 分の 1 から 6 分の 1 程度を用例として取り出して一致度の測定を行い」(西郡 n.d.)、「直感的判断が伴う難しいものでは 0.7 以上」が安定した一致度とされている(西郡 2003)という見解に従った。

#### 4.2.1. 悪態のコーディング

本研究では、発話文<sup>2</sup>を単位として、1節に示した定義に従い、悪態のコーディングを行う。その際、非言語情報や文脈を総合的に考慮する。いわゆるクローズド・クエスションに対してなされる否定的返答は、口調などから、そこに悪態の要素がこめられていると判断される場合には、悪態と認定する。また、疑問文の形式をとっている発話は、それが返答を求めておらず、否定的な評価を述べたものだと判断される場合には、悪態と認定する。

例1: 悪態の例。M2が、M1には、何事も一人で抱え込む悪い癖があると指摘した後のやりとりである。M01が身に覚えがあると語っているところへ、否定的な評価が述べられている(ライン番号369)。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無
366	M01	もうねー、全部背負ってねー、何もかもやって。	
367	M02	うん。	
368	M01	で、できんとできんで自分に腹立ってね(うん)、だから、ほんとしょうもない(うん)っていう(<笑い>)<笑い>。	
369	M02	はい、だめおでーす<笑いながら>(<笑い>)。	○

#### 4.2.2. 悪態のFT度の軽減行動の有無のコーディング

悪態に先行する会話内や、悪態をついている最中、ついた後などにFT度の軽減行動がとられているかどうかを調べる。悪態に伴ってポライトネス・ストラテジーがとられているものは、FT度の軽減がなされていると捉える。また、笑いや周辺言語もFT度の軽減の役割を果たすと考えられる(Albert 1992, Albert et. al 1996, Boxer and Cortes-Conde 1997, Hay 2000, Straehl 1993, 津田 1999)。そのため、当該の悪態のFT度が軽減されているかどうかは、そのような情報も考慮して判断する。

笑いには、笹川(1997)によると、「愉快さや快感といった自分の感情を偽らずに表出する(p.89)」ものと、相手のフェイスへの評価や連帯感、相手を脅かす意図のないことを示し、自己のフェイスを調節するものがある。本研究では、悪態に伴って見られる笑いについて、次のように捉える。悪態の直前に、冗談などからくる笑いが先行していない場合、当該の笑いをFT度の軽減行動と捉える。一方、悪態の直前に、冗談などからくる笑いが先行している場合、口調や会話の流れ、笑いが悪態のあとも長く続いているかなどを考慮しながら、当該の笑いがFT度の軽減行動かどうかを判断する。冗談的な雰囲気強い中において生じた笑いで、FT度の高い発話の後にも自然に持続しているものは、FT度の

<sup>2</sup> BTSJでは「実際の会話の中で発話された文」という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位としている(詳しくは宇佐美 2003 参照)。



軽減をしていないと捉える。

例 2: FT 度の軽減行動を伴う悪態の例。M12 が M11 の印象を話している場面で、M11 の高校時代の印象が浮かんだと話しているところ。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無
565	M12	ブラスバンドの。		
566	M11	あー、ブラバンのね。		
567	M11	なつかしいね。		
568	M12	いうのが思ったたよね。		
569	M12	印象としてはなんだろう、太ったね、とか<笑い>。	○	○
570	M12	全然、		
571	M11	それよく言われる。		
572	M12	意味ない、印象だけど<笑いながら>。		

#### 4.2.3. FT 度の軽減行動の種類のコーディング

悪態がもつ FT 度の見積りに応じてとられる FT 度の軽減行動と、悪態の受け手が快く思っていないなどの反応を見せてからとられる FT 度の軽減行動とを区別する。コーディングの定義は以下の通りである。

- s → 悪態をつく前、ついている最中、ついた直後などにおいて、悪態がもつ FT 度の見積りに応じてとられる FT 度の軽減行動。
- i → 悪態の後、悪態の受け手が快く思っていないなどの反応を見せてからとられる FT 度の軽減行動。

例 3: 悪態がもつ FT 度の見積りに応じてとられる FT 度の軽減行動の例。M03 が M04 の印象を話し、悪態をついているが、M04 の反応よりも前に FT 度の軽減行動をとっている。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類
429	M03	へえええっ<笑いながら>、「M04 名」に対して抱いているかん、印象？。			
430	M03	熱い、熱い。			
431	M04	う、つ、み、見して。			
432	M04	[M04 紙を見る]<笑い>。			

433	M03	早く、熱いー、えーっと、怖い、えー (<吹出すように大笑い>)。	○	○	s
434	M03	まー、怖いのはその練習の厳しさってことだからまあいんだけど、熱い、厳しい、えー、できる、かな。			

例 4: 悪態の後、悪態の受け手が快く思っていないなどの反応を見せてからとられる FT 度の軽減行動の例。引用例冒頭部で、M06 は FT 度の軽減行動をとらずに悪態をつく<sup>3</sup>が、それに対して M05 が強く反論してきたことを受け、M05 に理解を示すような発言(ライン番号 503) をしている。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類
498	M06	お前はぶっきらぼうなやつだなーと思って<余韻的に笑いながら>。	○	○	i
499	M05	あれじゃん、コミュニケーションじゃん、そんなん。			
500	M06	うん。			
501	M06	え、<向こうも>{<}、			
502	M05	<もう、仲良く>{>}なったから、そういうことが平気で言えるんだよ。			
503	M06	向こうもそっちの方がいいのかな?。			
504	M05	え?。			
505	M06	向こうも?=[↓]			

#### 4.2.4. 悪態のポライトネス効果のコーディング

悪態がもたらすポライトネス効果の実態の一部を明らかにするため、悪態のポライトネス効果をコーディングする。ここでは、宇佐美 (2002) に従い、ポライトネス効果として、プラス・ポライトネス効果、ニュートラル・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果の 3 種類を設ける。宇佐美 (2002) では、それぞれ次のように説明されている。話し手は、FTA を行うときに、当該の FTA がもつ FT 度がどの程度であるかを見積もる。このとき、フェイス侵害度の見積りに応じた言語行動が選択されることが前提となっている。一方、聞き手も当該の FTA の FT 度を見積り、その見積りに応じた言語行動を期待する。この話し手の見積りと聞き手の見積りを比較し、それが一致も含め、許容される範囲のずれしかない場合には、話し手がとった行動は「適切行動」となり、「ニュートラル・ポライトネス効果」、あるいは、自分の基準より少し親しげに感じたり、少し丁寧に感じたりすると

<sup>3</sup> ここでの笑いは余韻的なものであり、FT を軽減する機能はもっていないと判断した。

いった「プラス・ポライトネス効果」を生むとされている。しかし、話し手の見積りが、許容される範囲を超えて聞き手の見積りよりも大きい場合や小さい場合、当該の言語行動は「過剰行動」「過少行動」となり、「マイナス・ポライトネス効果」を生むとされている。

直後に受け手の笑いや、受け手の楽しむ反応などを誘う悪態で、その後の会話からも、受け手が不快感を覚えていないと判断される場合、当該の悪態をプラス・ポライトネス効果のある悪態（p）とコーディングする（例5）。逆に、悪態のあとに、聞き手が強い不快感を覚えていると判断される反応を見せている場合や、フォローアップ・アンケートにおいて不快感を覚えたという記述があった場合、当該の悪態をマイナス・ポライトネス効果のある悪態（m）とする（例6）。そのような反応をとくに呼んでいない悪態をニュートラル・ポライトネス効果のある悪態（n）としてコーディングする（例7）。

はじめの反応から判断される効果と、悪態が実際にもたらした効果が一致していないと判断される場合には、それが分かるようにコーディングする。例えば、はじめは盛り上がったような反応が見られても、会話の流れなどから、実際には悪態での評価に不快感を覚えているなどと判断される場合には、p—mとコーディングする（例8）。

例5: プラス・ポライトネス効果のある悪態の例。テスト対策について話している場面で、M09の悪態を受けたM10は大きく笑っている。また、その後も悪態での評価を気にする様子は見られない。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	効果
263	M10	<授業の前に、>{>}授業の前に—（うん）、5分ぐらい教科書見た。		
264	M09	<笑い>そんなん、誰だってやるから<笑いながら><2人で笑い>。	○	p
265	M09	そんなん、どんな、どんなバカでもやるから<笑いながら>（<大きな笑い>）。	○	p
266	M09	そんなんゼロやから、ほとんど<笑いながら><2人で笑い>。	○	p
267	M09	おれは、いちお'一応ね、ちゃんと前の日徹夜して、試験に臨むよ。		
268	M09	そんだけの誠意は見<せるよ>{<}。		
269	M10	<しよう>{>}と思ってるんだけど、<できない>{<}。		

例6: マイナス・ポライトネス効果のある悪態の例。M06がM05の印象を話している場面。M05は「ぶっきらぼう」という評価を受け入れず強く反論しているところから、ここでM05は不快感を覚えていると判断した。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	効果
498	M06	お前はぶっきらぼうなやつだなーと思って <余韻的に笑いながら>。	○	m
499	M05	あれじゃん、コミュニケーションじゃん、そんなん。		
500	M06	うん。		
501	M06	え、<向こうも>{<}、		
502	M05	<もう、仲良く>{>}なったから、そういうことが 平気で言えるんだよ。		

例7: ニュートラル・ポライトネス効果のある悪態の例。彼女の写真を友人に見せることの是非について話し合っている場面。M05はM06に彼女がいないことを指摘しているが、それに対する目立った反応がないまま会話が進行している。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	効果
132	M06	だって、普通にでも可愛いと思ってるなら"あ、可愛い"って言うのにさ(うん)、やっぱおれを傷付け、ないようにさ(うん)、"あ、こんな子が"みたいな(うん)感じで言うから、それをなんか、見たくないってのはある。		
133	M05	だっていないじゃん、今<軽い笑い>。	○	n
134	M06	今はね。		
135	M05	まーね。		
136	M06	そうそう。		

例8: はじめの反応から判断される効果と実際の効果が一致していない悪態の例。成人であれば考えを率直に伝えてはいけないと指摘されたあとのやりとりである。M01は、M02こそ遠慮すべきだと悪態をついている。それに対し、M02は、初めは大きく笑っているが、後から反論している。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	効果
205	M01	ちゅか、お前が少し遠慮しろよみたいな(<笑い>)とこあるから<大きく笑いながら> <2人で大きな笑い>。	○	p-n
206	M01	<なー>{<}<笑いながら> 【。		

207	M02	]] <おれ>{>}、え、おれ結構、遠慮しーよ、おれ<軽く笑いながら>。		
208	M01	あ、そうなの?<笑いながら>。		
209	M02	おれ、遠慮しーよ、すっごい。[この間、M01 は笑っている]		

### 4.3. コーディングの集計方法

各列に記入されたものを集計していく。例9のように同内容の悪態が連続してつかれる場合もあるが、その場合にも、それぞれを別個に集計する。この場合、ほぼ同内容の悪態が3つ続けられているが、これらは、悪態が3つあると集計する。その他の項目についても同様に、それぞれを別個に集計する。

例9: 連続する悪態がほぼ同内容の繰り返しである例。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類	効果
263	M10	<授業の前に、>{>}授業の前にー(うん)、5分ぐらい教科書見た。				
264	M09	<笑い>そんなん、誰だってやるから<笑いながら><2人で笑い>。	○	○	s	p
265	M09	そんなん、どんな、どんなバカでもやるから<笑いながら>(大きな笑い)。	○	○	s	p
266	M09	そんなんゼロやから、ほとんど<笑いながら><2人で笑い>。	○	○	s	p
267	M09	おれは、いちお'一応'ね、ちゃんと前の日徹夜して、試験に臨むよ。				
268	M09	そんだけの誠意は見<せるよ>{<}。				
269	M10	<しよう>{>}と思ってるんだけど、<できない>{<}。				

## 5. データの基本情報とコーディングの結果

ここでは、まず、5.1. においてデータの基本情報を示す。続いて、5.2. 以下で上述した方法に従ってコーディング、集計した各項目についての結果を示す。

### 5.1. データの基本情報

収集した会話は、男性10組(20名)、女性10組(20名)である。協力者は、1名を除

き関東地方の大学に所属する<sup>4</sup>大学生，大学院生であり，年齢は18歳から26歳であった。表1は，データの基本情報である<sup>5</sup>。

表1. 会話の組み合わせ数および，総文字化分数，1会話の平均分数

	女性	男性	全体
組み合わせ数	10	10	20
総文字化分数	230	236	466
1会話の平均分数	23.6	24.3	23.9
総ライン数	7125	7917	15042
1会話の平均ライン数	712.5	791.7	752.1

文字化した会話のうち，最長のもは女性で28分40秒，男性で28分33秒，また最短のもは女性で20分20秒，男性で21分38秒であった<sup>6</sup>。最多ライン数は1052，最少ライン数は528であった。収集した会話は，フォローアップ・アンケートから，いずれも非常に親しい友人同士によるものであると確認できた。

## 5.2. 悪態の集計結果

データ中には，表2に示すとおりの悪態が見られた ( $\kappa=0.72$ )。各割合は，各頻度が全体に占めるものである。また，平均値は，1人の協力者が1会話中についた悪態を平均したものである。

表2. 悪態の集計結果

	女性		男性		全体	
頻度と割合	97	39.6%	148	60.4%	245	100.0%
平均値	4.9		7.4		6.1	
標準偏差	5.28		7.37		6.88	

一会話中，悪態が最も多かったのは，男性でM09の29個，女性でF04の17個である。反対に最も少なかったのは，男女とも0であった。悪態の数に男女で有意な差は見られなかった ( $t=-1.26 < \alpha=0.05$ )。男性のほうが多く悪態をつくという傾向も見られるが，これは，標準偏差から分かるように，特定の男性協力者が多く悪態をついたことによると考えられる。

特定の状況において悪態がつかれるかどうかには，いくつかの要因が関わっていると考えられる。例えば，受け手の様子である。受け手が同じく失敗経験を語っている場合でも，

<sup>4</sup> M02だけは，中部地方の大学に所属している。

<sup>5</sup> 実験場所として大学構内が指定されることが多かったため，実験中に協力者の知人が通りがかった言葉を交わすこともあった。文字化の際には第三者との会話を除いている。

<sup>6</sup> 平均的に20分強の録音をしているが，録音時間の差は協力者の都合による。

受け手が深刻に思っている度合いによって、悪態が続くかどうかが変わってくるようである。以下の例 10 と例 11 では、双方において M10 が失敗談を語っている。例 10 では、M10 の話の後に悪態が見られるのに対して、例 11 では見られない。悪態が見られる例 10 で M10 は、テスト勉強をしようと思っているがつい酒を飲んでしまてできないと語っている（ライン番号 269, 271）。しかし、勉強をしなくても点数をとれたという認識があるようで、軽い口調で述べている。また、自宅に焼酎を買おうと思ったという発言（ライン番号 275）からも、M10 が強く後悔しているわけではないことが伺える。一方、悪態が見られない例 11 において、M10 は、大切にしているネックレスを酔ってなくしたことについて「一番痛い」などと語り、M09 からの問いかけに真剣に答えていることから、失敗を強く後悔していると判断できる。

例 10: 受け手が失敗談を語った後に悪態がつかれる例。M10 は失敗談を語った（ライン番号 243）後に、反省するかのような発言をしている（ライン番号 269, 271）。しかし、勉強をしなくても点数がよかったと述べ（ライン番号 246）、飲酒を控えようとするそぶりを見せない（ライン番号 275）ことから、さほど深刻になっていないと考えられる。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無
243	M10	さん、30 点だった<笑いながら>。[この間、M09 は笑っている]	
244	M09	5 割以下や。	○
245	M10	うん。	
246	M10	や、でも、平均点は 45 点だから。	
247	M09	あ、そうなん。	
248	M10	うん。	
249	M09	<じゃ>{<} 【。	
250	M10	】<だか>{>}、それ考えたらね、####ないんだよ。	
251	M09	そうやね。	
252	M09	ちょっと低いだけやね。	
253	M10	無勉だよ。[強調して]	
254	M10	無勉<ですよ>{<}。	
13 ライン省略			
267	M09	おれは、いちお'一応'ね、ちゃんと前の日徹夜して、試験に臨むよ。	
268	M09	そんだけの誠意は見<せるよ>{<}。	
269	M10	<しよう>{>}と思ってるんだけど、<できない>{<}。	
270	M09	<飲んでし>{>}まうんやろ。	

271	M10	飲んでしまう。	
272	M09	<笑い>おかしいよ。	○
273	M09	飲みすぎやから。	○
274	M09	また腹出るよ=。	
275	M10	=だって、家に自分でいい、『いいちこ』買おうかなって思った。	

例 11: 受け手が失敗談を語った後に悪態がつかれない例。(ネックレスをなくしたことが「一番痛い」と語り、M09 からの問いかけに真剣に答えているところから、M10 は強く後悔していると考えられる。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無
436	M10	おれもな、この前、「地名 6」でまたやっちゃったしな、ほんとに。	
437	M09	えー、何やったん？。	
438	M10	まじ、金のネックレスなくしたのが一番<痛い>{<}。	
439	M09	<あー>{>}あー、いつの間にか。	
440	M10	<ぜ>{<} 【。	
441	M09	】 <と>{>}られたんじゃん？。	
442	M10	とられたってことないでしょー。[↓]	
443	M09	う、うーん。	
444	M10	絶対落としたんだと思う。	
445	M09	自分ではずして、どっかに置いて、忘れた。	
446	M10	でもはずすってことないもん、仕事終わったら。	
447	M09	どっか。	
448	M09	変なの。	

これらの例から分かるように、つき手は、受け手の様子を見ながら状況に応じて悪態をつけている。これは、自然会話を用いて悪態を捉えることによって明らかにできたことである。これまで日本語の悪態に関する研究は、語彙の収集や分類を主眼とするもの(荒木 1994, 川崎 1997 など)が多かった。親密化を図る戦略としての悪態をつけるようになるためには、悪態をついてもいい状況、控えるべき状況を、自然会話の中において明らかにする必要がある。

### 5.3. FT 度の軽減行動の有無の集計結果

ここでは、悪態に FT 度の軽減行動がどの程度伴っていたかを提示する ( $\kappa=0.80$ )。表 3 は、FT 度の軽減行動を伴った悪態の集計結果である。



表 3. FT 度の軽減行動を伴った悪態の集計結果

	FT 度の軽減行動を伴う悪態		全 悪 態	
頻度と割合	218	89.0%	245	100.0%
平均値	5.45		6.1	
標準偏差	5.92		6.88	

表 3 からわかるように、全悪態の 89% が FT 度の軽減行動を伴っている。続いて、この結果を男女別に示す。表 4 における割合は、各頻度が、男女各群の全悪態に占める割合である。また、平均値は、1 人の協力者が 1 会話中についた悪態の平均値である。

表 4. FT 度の軽減行動を伴った悪態の男女別の集計結果

	女 性				男 性			
	FT 度の軽減行動を伴う悪態		全悪態		FT 度の軽減行動を伴う悪態		全悪態	
頻度と割合	94	96.9%	97	100.0%	124	84.4%	148	100.0%
平均値	4.7		4.9		6.2		7.4	
標準偏差	5.31		5.28		6.52		7.37	

表 4 を見ると、悪態に FT 度の軽減行動が伴う割合は、女性の場合 96.9%、男性の場合 84.4% であることが分かる。今回のデータに見られた悪態は、ほとんどの場合 FT 度の軽減行動を伴っていたということが分かる。

その一方で、悪態に FT 度の軽減行動が全く伴わないものが見られた。まず、全悪態に占める、FT 度の軽減行動を伴わない悪態の割合を男女別に示す。割合は、各頻度が、男女各群の全悪態に占めるものである。

表 5. FT 度の軽減行動を全く伴わない悪態の集計結果

	女 性				男 性			
	FT 度の軽減行動を伴わない悪態		全悪態		FT 度の軽減行動を伴わない悪態		全悪態	
頻度と割合	4	4.1%	97	100.0%	24	16.2%	148	100.0%
平均	0.2		4.9		1.2		7.4	
標準偏差	0.52		5.28		1.91		7.37	

(%は、各頻度が各群の全悪態に占める割合、平均は一人当たりの数字)

FT 度の軽減行動を伴わない悪態の割合は、女性同士の会話に比べ男性同士の会話において多い。これは、M10 がついた悪態のうち 66.7%、M8 がついた悪態の全てが FT 度の軽減行動を伴っていないという、他の協力者と比べて一段と低い傾向が見られたことによると考えられる。両者が悪態をつく際に FT 度の軽減行動をとらなかったのは、個人の話し方

の特徴である可能性がある。ここでは、それを踏まえた上で、いくつかの例に共通して見られた特徴を挙げる。FT 度の軽減行動を全く伴わない悪態は、受け手が自身の悪い点について自ら指摘しているとき（例 12）や、ある程度の時間語っているとき（例 13）などに見られた。

例 12: 受け手が自身の悪い点について自ら指摘しているときに見られる悪態の例。先行する会話内で、M10 がサークルの飲み会で女子に混じって暴れていたという話が出ている。それを受けた M10 が、自らの否定的な評価を述べている。

ライン番号	話者	発話内容	悪態種類	軽減有無
570	M10	あー、じゃ、ねこの印象は、「酒飲み」ぐらい、 [自分の印象]		
571	M09	酒飲み、		
572	M10	<ですネ>{<}<笑いながら>。		
573	M09	<酒飲>{>}み<笑いながら>。	c	s
574	M09	あの、しかも、たちが悪い（<笑い>）。	c	
575	M09	そう、お前、酔ったら、おれに、おれの一、おれが家におるときメールきてー（うん）、いきなり"げんき?"とかって。		

例 13: 受け手が自身の悪い点についてある程度の時間語っているときに見られる悪態の例。M06 が、自身の恋愛観について語っている場面。

ライン番号	話者	発話内容	悪態種類	軽減有無
703	M06	でも、「学科」の人にはー（うん）、「学科」の女の子にはー（うん）、"だったらー、「M06 あだ名」は、日本人で、あんまり自分が、る、す、見た目もー（あん）、性格もー（うん）、すごく惚れ込むような子がいないからー（うん）、幻想を抱いてるんだよ"って。		
704	M05	うん、それはあるね。	c	
705	M06	そうそう、"あんまりにもいないとー（うん）、精神的に追い込まれるからー、"あ、そうか、朝鮮には BoA ちゃんみたいな子がいるのか"って思い込むことで<笑いながら>（うん）、どうにかやっただよ"って。		

706	M06	だから今度韓国とか行ったらわかるよって,,		
707	M05	<やばいな>{<}&gt;。	c	
708	M06	<言われた>{>}&gt;。		
709	M06	うん。		

悪態の受け手が自らの悪い点を指摘したときにつかれた悪態に FT 度の軽減行動が伴わないのは、悪態の受け手が自分の非を認めていることにより、悪態の FT 度が相対的に下がり、FT 度の軽減行動をとる必要性が薄くなるためではないかと考えられる。また、例 13 では受け手が自分の悪い点を語っているという特徴があるが、その合い間につかれる悪態が FT 度の軽減行動を伴わないのは、これらが相手の失敗談や悪い点についての語りに理解や共感を示すように使われていることにより、FT 度が低く見積もられたからだと考えられる。

#### 5.4. FT 度の軽減行動の種類のコーディングの集計結果

FT 度の軽減行動の種類についてコーディングした結果は、以下の表 6 と図 1 に示すとおりである ( $\kappa=0.80$ )。割合は、各頻度が、FT 度の軽減行動を伴った全悪態に占めるものである。

表 6. FT 度の軽減行動の種類のコーディングの集計結果

	s のみ		s と i		i のみ		FT 度の軽減行動 が伴う全悪態	
頻度と割合	151	69.3%	51	23.4%	16	7.3%	218	100.0%
平均値	3.8		1.3		0.4		5.5	
標準偏差	4.17		1.91		0.96		5.92	

(%は、各頻度が、FT 軽減行動を伴った悪態の総数に占める割合、平均値は一人当たりの数字)

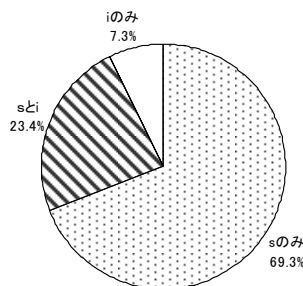


図 1. FT 度の軽減行動の種類別に見た、FT 度の軽減行動を伴う悪態の割合

sは、受け手が快く思っていないなどの反応をする以前に、悪態のつき手が FT 度を軽減しているものである（以後、これを、「事前の FT 度軽減行動」と呼ぶ）。表 6、図 1 を見ると、全悪態の 94%が、事前の FT 度の軽減行動を伴っていたと分かる。そのうち、sのみを伴っていた悪態は、表 6、図 1 を見ると、FT 度の軽減行動を伴った悪態のうち 69.3%にのぼっていることがわかる。事前の FT 度軽減行動の多くには笑いが含まれている。一方、iは、受け手が快く思っていないなどの反応を示してからとられる FT 度の軽減行動（以後、これを「事後の FT 度軽減行動」と呼ぶ）である。表 6、図 1 から、iを伴う悪態は、全体の 30.7%あったと分かる。このことから、今回のデータにおいては、非常に親しい間柄にあっても、悪態の 30.7%は、FT 度の見積もりを誤ってつかれているといえる。悪態に i のみが伴うことは、7.3%に留まっている。

続いて、表 6 を男女別に集計し、表 7、表 8 に示す。各割合は、各頻度が FT 度の軽減を伴った悪態の男女それぞれの総数に占めるものである。

表 7. FT 度の軽減行動の種類のコーディングの集計結果（女性）

	s のみ		s と i		i のみ		FT 度の軽減行動 が伴う全悪態 (女性)	
頻度と割合	64	68.1%	25	26.6%	5	5.3%	94	100.0%
平均値	3.2		1.3		0.3		4.7	
標準偏差	3.40		1.94		0.55		5.31	

表 8. FT 度の軽減行動の種類のコーディングの集計結果（男性）

	s のみ		s と i		i のみ		FT 度の軽減行動 が伴う全悪態 (男性)	
頻度と割合	87	70.2%	26	21.0%	11	8.9%	124	100.0%
平均値	4.4		1.3		0.6		6.2	
標準偏差	4.85		1.92		1.23		6.52	

表 7、表 8 から、男女とも全体の傾向と大きな違いがないことが分かる。 $\chi^2$ 検定の結果、男女に有意な差はみられなかった ( $\chi^2=1.676 < \chi^2, 0.05, 2=5.99$ )。FT 度の軽減行動の種類は、男女とも類似していることが分かる。以上に見たように、多くの悪態が事前の FT 度の軽減行動を伴っている。笑いや受け手に対する肯定的評価を伴わせることによって、受け手を傷つける意図がないことを表しているものと考えられる。

一方で、悪態の FT 軽減は受け手が快く思っていないなどの反応を示した後に行なわれる場合もある。下の例 14 では、M01 が「遠慮しろ」と悪態をついた（ライン番号 205）後に、M02 は遠慮していると反論している。それを受けた M01 は M02 の意見に同調し（ライン番号 212）、悪態の FT 度を軽減している。

例 14: 事後の FT 度軽減行動がとられる悪態の例。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類
205	M01	ちゅか、お前が少し遠慮しろよみたいな(<笑い>)とこあるから<大きく笑いながら><2人で大きな笑い>。	○	○	s,i
206	M01	<なー>{<}<笑いながら> 【】。			
207	M02	】<おれ>{>}、え、おれ結構、遠慮しーよ、おれ<軽く笑いながら>。			
208	M01	あ、そうなの?<笑いながら>。			
209	M02	おれ、遠慮しーよ、すごい。[この間、M01は笑っている]			
210	M01	だか、おれは、別にもうないね<笑いながら>。			
211	M02	だって、今日だっておれ、部活んときも遠慮しとったやん。			
212	M01	あー、確かにそれ、そう、そう。[強く共感したように、早口で強く]			
214	M02	思ってねーよ=。			
215	M02	=変わんねーよ、昔から<ごく軽い笑い>。			
216	M01	ちーが<笑いながら>。			
217	M01	ちが、だってー、"あれ、あいつあんなに遠慮するっけー"って思いながら、たし、確かに、今日練習中に思った。			
218	M02	うん。			

悪態の FT 度の軽減行動の取り方は、相手の反応に応じて変化する。受け手が反論した場合などには、悪態の FT 度の軽減行動を追加する必要がある。例 14 を見ると、事後の FT 度軽減行動をとった結果、両者の関係は悪化することなく保たれていることが分かる。このことから、悪態の後に見られる受け手の様子に気を配る必要があるといえる。

### 5.5. ポライトネス効果ごとにみた悪態の集計結果

続いて、データ中に見られた悪態のポライトネス効果の集計結果を表 9 に示す ( $\kappa=0.80$ )。割合は、各頻度が全悪態に占めるものである。表 9 は、紙面の都合上、2 行に分けて示す。

表 9. ポライトネス効果ごとに見た悪態の集計結果

	p		n		m		p→n		p→m	
頻度と割合	73	29.8%	159	64.9%	4	1.6%	8	3.3%	1	0.4%
平均値	3.5		5.1		2		2.7		1.0	
標準偏差	2.44		4.53		0		1.15			

	n→p		n→m		m→p		m→n		全悪態	
頻度と割合	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	245	100.0%
平均値									6.1	
標準偏差									6.88	

表 9 から分かるように、悪態の効果の中で最も多いものは n となっている。次いで、p が 29.8% となっており、悪態の 9 割以上は、これら 2 つの効果を呼んでいることが分かる。m, p→m は、2 人の協力者による 5 例しか見られない。今回のデータにおいて悪態が受け手に不快感を覚えさせることはほとんどなかったといえる。以後、効果ごとの傾向を把握しやすくするため、p→n は n として、p→m は m として、それぞれ集計する。表 10 に、表 9 をそのように集計し直した結果を示す。割合は、各頻度が全悪態に占めるものである。

表 10. ポライトネス効果ごとに見た悪態の集計結果

	p		n (p→n 含む)		m (p→m 含む)		全悪態	
頻度と割合	73	29.8%	167	68.2%	5	2.0%	245	100.0%
平均値	3.5		5.4		3		6.1	
標準偏差	2.44		4.81				6.88	

表 10 から分かるように、データ中に見られた悪態には、プラス・ポライトネス効果のあるものが 29.8%、ニュートラル・ポライトネス効果のあるものが 68.2% みられた。マイナス・ポライトネス効果をよぶ悪態は 2.0% のみである。男女ごとの傾向を調べるため、続いて、悪態のポライトネス効果の集計結果を、表 11、表 12 に男女ごとに示す。割合は、各頻度が男女それぞれの全悪態に占めるものである。

表 11. ポライトネス効果ごとに見た悪態の集計結果 (女性)

	p		n (p→n を含む)		m (p→m を含む)		全悪態 (女性)	
頻度と割合	32	33.0%	62	63.9%	3	3.1%	97	100.0%
平均値	4.9		4.4		3.0		4.9	
標準偏差	2.43		2.95				5.28	

表 12. ポライトネス効果ごとに見た悪態の集計結果 (男性)

	p		n (p→nを含む)		m (p→mを含む)		全悪態 (男性)	
頻度と割合	41	27.7%	105	70.9%	2	1.4%	148	100.0%
平均値	4.1		6.2		2.0		7.4	
標準偏差	2.42		5.91				7.37	

表 11, 表 12 を見ると, 男女間に目立った違いはない。悪態のポライトネス効果について男女間の傾向を比較したところ, 男女の間には有意差は見られないことが確認された ( $\chi^2=2.16 < \chi^2, 0.05, 2 = 5.99$ )。

プラス・ポライトネス効果を呼びやすい悪態は, 男性同士の会話では, 受け手が理解や共感を求めてきた際につかれるという傾向が見られた。また, 女性の場合には, 受け手が言い間違いや勘違いをしたときに多い傾向が見られた。

例 15: プラス・ポライトネス効果を呼びやすい悪態のうち, 男性によるものの例。他人の作業まで一人で抱え込む悪い癖があると自認する M01 は, 将来的にその癖が解消されると見通して, 共感を求めている (ライン番号 373)。その後に見られる M02 の悪態はプラス・ポライトネス効果を呼んでいる。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類	効果
373	M01	てかー、先生っていう (うん) 立場になったら (うん)、逆にできるのかも知らんけど、先生 (うん) んなっちゃったら、もう、さすがにやらんでしょ。				
374	M02	あーあー、確かにね。				
375	M01	さすがに、ある程度突き放して (うんうん) 見るからー。				
376	M02	あー、そう、そうかねー。[笑いかけの声で]				
377	M02	いやいや、<笑いながら>やっちゃいそうだなー<2人で笑い>。	○	○	s	p
378	M01	やりそうだなー。				

例 16: プラス・ポライトネス効果を呼びやすい悪態の女性によるものの例。同じ部活に所属する F01 と F02 が, 合宿で訪れた土地を振り返っている場面。F02 が勘違いした後に見られる悪態 (ライン番号 531, 534) は, プラス・ポライトネス効果を呼んでいる。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類	効果
530	F02	「地名 10」が、3年の春。				
531	F01	/少し間/うそだー=。	○	○	s	p
532	F02	=うそだー<2人で大きな笑い>。				
533	F02	3春、いないから<笑いながら>。				
534	F01	お前、ウソばっかついてんじゃねーよ<笑いながら>。	○	○	s	p
535	F02	<笑い>2春だ。				

プラス・ポライトネス効果を呼ぶ悪態は後ろに悪態を伴うことがあるが、ニュートラル・ポライトネス効果の悪態の場合には、それが少ないという特徴が観察された。例えば、以下の例に見られるようなものである。例 17 では、部員について話し合っている。M02 が悪態をついた（ライン番号 251）後、M01 は大きく笑っている。その後、M02 は悪態を続けたが、2 度目の悪態に対しては、M01 は笑っておらず、話題を部員に関することに戻している。その後、同じ話題に関して 3 度目の悪態は見られない。

例 17: 連続する悪態の例。プラス・ポライトネス効果の悪態（ライン番号 251）には悪態が続いている（ライン番号 253）が、ニュートラル・ポライトネス効果の悪態（ライン番号 254）の後には続いていない。

ライン番号	話者	発話内容	悪態有無	軽減有無	軽減種類	効果
248	M01	「人名 6 あだ名」も、だって（うん）、あれだもん、「M01 苗字」さん、りゅ、留学い、行かないでください"って、				
249	M02	<あー、そうなん?>{<}。				
250	M01	<言ってきた>{<}やつだもん。				
251	M02	あーまあ、あそっから「M01 苗字」ちゃん抜けたら、どうしていいか分からんよね、チームね<M01 の大きな笑い>に続いて M02 も笑う>。	○	○	s	p
252	M02	ねー<笑いながら>。[この間、M01 は笑っている]				
253	M01	あのねー（うん）、それゆったらあかん<笑いながら>。	○	○	s	p
254	M02	<笑い>"これ、どうしたん"って思って<笑いながら>。	○	○	s	n



255	M01	あれ、おれの、おれの代わりにキャッチャーやってたやつ(うん)、分かってる?。				
256	M02	あの一、				
257	M01	「人名 7」。				
258	M02	うん。				

受け手が楽しんだ反応を見せるのは、受け手が悪態での評価に不満を覚えていないことの現れである。その後悪態を続けるのは、悪態を重ねることによって受け手との親密化を図ろうとするつき手の意図の表れであると考えられる。一方、受け手が話題を変えるなどしたときには、楽しませる可能性が低いために、悪態を続けないのだと考えられる。これらのことから、悪態をつく際、つき手は相手の反応に気を配りながら、相互作用の中で悪態をついているといえる。

## 6. 会話教育への示唆の観点からの考察

本研究では、非常に親しい友人同士による会話での悪態に焦点を当て、その実態の一部を明らかにした。悪態をつく際には、覚えた語彙を並べればよいというわけではない。相手の様子に注意しながら対人関係に配慮したつき方が求められる。本研究における結果が会話教育へ示唆することを提示する。

本研究では悪態がつかれるかどうかに関わる要因のうち、受け手の様子について取り上げた。状況によっては、悪態をつくことによって受け手の気分を害する恐れがある。悪態をつき、互いの親密化を実現するためには、受け手の様子に注意するよう指導する必要がある。

今回のデータ中においては1人平均6.1回の悪態が見られた。この傾向は男女に共通している。母語話者が当該の言語の学習者と話す場合には母語話者同士の会話において見られる言語行動と同じものが現れるとは限らないことや、個人の性向の違いなどを考えると一概に論じることはできないが、仲が深まった段階で悪態をつくことがこれよりも少ないと、相手によそよそしいといった印象を与えてしまう危険性が指摘できる。反対に、これよりも多いと、相手になれなれしいと感じさせてしまう可能性もある<sup>7</sup>。親しさは、ジグザグに変化していくことが指摘されている(中山 1995)。そのため、悪態の回数を、初対面の時から直線的に増やしていけばよいというわけではない。本研究で明らかにしたことは、非常に親しい間柄におけるコミュニケーションを指導する際に利用できると考える。

ほとんどの悪態には笑いや相手に対する肯定的評価などが伴っていた。データ中に見られた悪態が相手に不快感を覚えさせることがほとんどなく、時に受け手を楽しませているのは、つき手がこれらの言語行動によって受け手を攻撃する意図がないことを表したこと

<sup>7</sup> 宇佐美(2002)における「有標ボライトネス」の考え方に基づく。詳しくは宇佐美(2002)を参照されたい。

とも関連していると考えられる。悪態をつく際には、悪態の後に肯定的評価を述べるなどの言語行動や、笑いを伴わせるように指導する必要がある。マレービアン（1986）は、表情から相手への好意の度合いを読み取ることができるとしている。悪態をつく際や受ける際、このような点にも注意することが必要である。

プラス・ポライトネス効果の悪態は、男性の場合、受け手が理解や共感を求めた際につかれるものに多く、女性の場合には、受け手のいい間違いや勘違いを指摘する際に多く見られた。これは、悪態をつく際の一つの指標として利用することができる。悪態がプラス・ポライトネス効果を呼んだ場合には、続けて悪態をつくことによって相手との親しさを深めることができる。

以上に示したことは、会話教育において、親しい友人とのコミュニケーションの1つとしての悪態を提示する際に重要である。学習者から悪態の説明を求められた場合には、本研究で明らかにした悪態の頻度などを一つの目安とすることが考えられる。

## 7. 今後の課題

今後はさらに用例を増やし、今回見られた結果を追検証していく必要がある。似通った状況であっても悪態がつかれる場合とつかれない場合がある。どのような条件が整ったときに悪態をつくことが自然となるのかを追究していくことは、悪態をつく際の指標を明らかにすることになる。また、特定の状況においてつかれる悪態について、どのような効果をよびやすいかを明らかにすることは、親しみを表すストラテジーとしての悪態をつく上で有効である。本研究は同性間での悪態について調査したが、今後、異性間で見られる悪態に関してもその実態を究明する必要がある。そのような研究を重ねることは、会話教育に大きく貢献すると考えられる。

## 参考文献

- 荒木雅實（1994）「悪態表現の意味分類について」『拓殖大学論集 人文・自然科学』、第2巻1号、1-17.
- 宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『第7回 国立国語研究所国際シンポジウム報告書—談話のポライトネス』、国立国語研究所、9-58.
- （2002）「ディスコース・ポライトネス理論構想」(4)～(6)『言語』、31巻10号-12号、大修館書店.
- （2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2)（代表研究者：宇佐美まゆみ）、研究成果報告書、4-21.
- 川崎洋（1997）『かがやく日本語の悪態』、草思社.
- 笹川洋子（1997）「儀礼行為としての『笑い』—電話会話に見られる笑いを手がかりとして—」

- 『親和国文』, 第 32 号, 親和女子大学, 84-109.
- 津田早苗 (1998) 「ポライトネス・ストラテジーと演技との関係: 『ミセス・ダウト』のからかいと比喩の分析」『TOKAI REVIEW』, 第 23 号, 東海学園女子短期大学英文学科研究室, 43-56.
- (1999) 「Swear words と Positive politeness」『TOKAI REVIEW』, 第 24 号, 1-14.
- 中山晶子 (1995) 「親しさと冗談・からかいの表現」『日本語と日本語教育 阪田雪子先生古稀記念論集』, 三省堂, 163-187.
- (1997) 「親しさの変化とコミュニケーション」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』, 凡人社, 509-521.
- 西郡仁朗 (2003) 「自然会話データ『偶然の初対面』の公開～その方法論について～」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平成 13—14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) (代表研究者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 87-98.
- 西郡仁朗 (n.d.) 「一致度 (Cohen's Kappa) の測定について」 東京都立大学国文学専攻ホームページ内『偶然の初対面の会話—基礎的方法と公開データ—』  
<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/jirom/kaiwa.html> - 2k より
- 浜田麻里 (1988) 「言語行動としての罵り—日本語と中国語の罵り表現の対照から—」『待兼山論叢』, 第 22 号, 大阪大学文学部, 77-93.
- 広井脩 (1985) 「悪口の心理学」『言語生活』, 第三九八号特集「悪口」, 筑摩書房, 16-24.
- 星野命 (1974) 「あくたいもくたい考—悪態の諸相と機能—」『季刊人類学』, 第 2 卷 3 号, 29-52.
- A・マレービアン著, 西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫訳 (1986) 『非言語コミュニケーション』, 聖文社. (Mehrabian.A. 1981 *Silent Messages: Implicit Communication of Emotions and Attitudes*. California: Wadsworth Publishing Company.)
- 三牧陽子 (1999a) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー」『日本語教育』, 103 号, 49-58.
- (1999b) 「『露骨な FTA』をめぐって」『視聴覚教材と言語教育』9, 大阪外国語大学, 54-61.
- 米川明彦 (1999) 「卑罵表現も変わりゆく」『言語』, 28 卷 11 号, 大修館書店, 30-33.
- Alberts, J. K. 1992. An inferential / strategic explanation for the social organization of teases. *Journal of Language and Social Psychology*, 11-3, 153-177.
- Alberts, J. K., Kellar-Guenther, Y., & Corman, S. R. 1996. That's Not Funny: Understanding Recipients' Responses to Teasing. *Western Journal of Communication*, 60-4, 337-357.
- Bakeman R. & Gottman J. M. 1986 *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. Cambridge University Press.
- Boxer, D., & Cortes-Conde, F. 1997. Form bonding to biting: Conversational joking and identity display. *Journal of Pragmatics*, 27, 275-294.
- Brown, P., & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge:

Cambridge University Press.

- Hay, J. 2000. Functions of humor in the conversations of men and women. *Journal of Pragmatics*, 32, 709-742.
- Straehle, C. A. 1993. "Samuel?" "Yes, dear?" Teasing and Conversational Rapport. In D. Tannen (ed.) , *Framing in discourse*, New York: Oxford University Press, 210-229.

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 日本語の雑談における不同意の様相

## —会話教育への示唆—

木山 幸子

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

### 1. はじめに

自然会話の特徴を会話教育に取り入れることは、学習者が自然なコミュニケーションを実現するために、不可欠である。なかでも、単に情報を伝達するのみではなく対人関係を配慮したやりとりを行うことは、学習者にとって習得しにくい課題のひとつだといえる。なぜなら、対人関係を配慮するやり方は、それぞれの言語文化において異なり、また、母語話者であれば無意識に行っているものだからである。

そのような対人配慮行動のメカニズムを説明する理論として、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論、宇佐美 (2001; 2002 など) のディスコース・ポライトネス理論構想がある。Brown and Levinson (1987) は、対人配慮行動としてのポライトネスを、「フェイス (face)」と「合理性」を仮定することによって説明している。人間は、他者に認められたい、賞賛されたいという欲求である「ポジティブ・フェイス (positive face)」と、自分の行動を他者に侵害されたくないという欲求である「ネガティブ・フェイス (negative face)」を持っており、社会に生きる成員は、この2つのフェイスを想定し、それに基づいて合理的に行動する、というものである。そして、それを発展させ、ポライトネスの効果を談話レベルで捉える必要性を唱える宇佐美 (2001; 2002 など) のディスコース・ポライトネス理論構想では、「守られていて当たり前で、期待されている言語行動が現れないときに、初めてそれが意識され、ポライトでないといえらるる」ものとして「無標ポライトネス」という概念が取り入れられている。そして、この「無標ポライトネス」としての「基本状態」を同定し、そこからポライトネスの効果を相対的に捉えることができるよう体系化されている。

本研究は、これらの理論を枠組みとして、日本語母語話者が日常的に何気なく交わしている円滑なやりとりの様相を分析し、会話教育へ生かすための一助とすることを目指すものである。この様相を明らかにするための切り口として、円滑に交わされる雑談に見られる「不同意」という言語行動に着目する。相手の発話内容に対して不同意するという行為は、相手を不愉快にさせ、円滑な対人関係を脅かす可能性を持つ。Brown and Levinson (1987) も、「不同意 (disagreement)」について、相手のポジティブ・フェイスの欲求を脅かす行為 (Face Threatening Act, 以下 FTA)、「話し手が聞き手のポジティブ・フェイスのある側面に否定的な評価をしていることを示す (Brown and Levinson, 1987: 66)」ものの1つであると指摘している。

これまでも、不同意に関する実証的研究が行われており、Holtgraves (1997) や Rees-Miller (2000) などが、議論という場面における不同意をポライトネスの観点から分析している。このような議論における不同意は、自分の意見を主張するという明確な目的があつてなされる場面の不同意であるから、それをするのは当たり前のことだといえる。しかし、不同意をすることが目的でない日常的な会話においても、不同意は出現する。会話者たちがどのようにして円滑にコミュニケーションをしているかを探るには、このような何気なく交わされる会話における言語行動にも注目する必要がある。

本研究では、日本語の雑談における「不同意」の様相を明らかにし、その特徴を会話教育にどのように取り入れることができるか考察することを目的とする。

## 2. 本研究における不同意の定義

本研究では、Brown and Levinson のポライトネス理論に則って不同意を実証的に分析した Rees-Millers (2000) によって定義される「不同意」に合致する言語行動を、「不同意」として取り上げることとする。

話し手 S は、聞き手 A が発話した、もしくは信奉していることが前提とされるある命題 P が、真実ではないとみなした場合に不同意し、P ではない命題内容または含意を持つ発話で反応する。(Rees-Miller, 2000: 1088, 筆者訳)

## 3. 方法

本研究では、自然会話を対象とし、そこに現れる「不同意」を定量的に分析する。ここでは、自然会話を収集する実験、会話の文字化作業、「不同意」の抽出及びそのコーディングについて述べる。

### 3.1. 実験および文字化作業

Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論においては、FTA をする際のストラテジー選択には、「社会的距離 (distance)」、「力関係 (power)」、「ある行為が相手にかかる負荷度 (rank of imposition)」の 3 要因が影響するとされている。本研究の分析では、会話者同士の社会的距離の差が、不同意にどのように影響するかということに焦点を当てることとする。実験の条件統制を、表 1 の通りに設定する。

表 1. Brown and Levinson (1987) の FT 度見積もりの公式に従った条件統制

D (distance)	親しい友人同士	初対面
P (power)	20 歳～29 歳の女性・学生同士	
R (rank of imposition)	雑談場面	

表 1 の条件に従い収録した会話は、親しい友人同士、初対面同士の会話各 12 会話、計

24 会話であり、合計 48 人の協力を受けたものである。協力者たちは、全員が日本語母語話者であり、東京の大学に通う学部学生または大学院生である。

実験の手続きについては、まず実験場所へ協力者を案内し、フェイスシートの記入を求める。その後、これから行う会話実験について、リラックスして話すように、話題は自由であるが実験協力のきっかけや実験者自身については触れないように、時間は 15 分程度を目安とし切りのいいところで終わりにするよう指示する。会話終了後には、フォローアップ・アンケートの記入を求める。これらを考慮し、分析データとして妥当性を確認できた会話を分析に用いる。収録した会話は、「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」（宇佐美 1997b; 改訂版 2003a）によって文字化資料を作成し、分析に用いる。

### 3.2. 先行発話と不同意の抽出

収録した会話から、分析対象である「不同意」を抽出する。不同意は、ある発話に対してなされるものであり、不同意の対象となる相手の発話が必ずある。双方向的なやりとりの分析をするためには、これら両方を分析する必要があると考え、「不同意」とその対象となる「先行発話」を合わせて抽出することとする。抽出にあたっては、3 節で定義した「不同意」に合致している言語行動、および、その「不同意」の対象となっている「先行発話」を、会話がのやりとりの意味的なつながりから判断する。「先行発話」については、その後になされる「不同意」の内容に直接関係があると判断したところをその範囲とする。「不同意」についても、「先行発話」に対してなされる 1 つの不同意として成立するために直接関係していると判断したところをその範囲に含む。

- ・「A」 (先行発話, antecedent) : 不同意の対象となっている発話。
- ・「D」 (不同意, disagreement) : 不同意の表れた発話。

1 つの不同意がトランスクリプト上の複数ラインにわたる場合は、最後のラインに記号を付す。

### 3.3. コーディング

次に、抽出した不同意の事例を、コーディングする。本研究では、不同意の性質、内容、表し方という 3 つのコーディング項目を立てる。それぞれの項目の基準と、コーディングをした会話例を示す。

#### 3.3.1. 不同意の性質：実質的な不同意か、儀礼的な不同意か

不同意は、Brown and Levinson (1987) の指摘では、本質的に相手の理解力を難じポジティブ・フェイスを脅かす FTA であるということであった。しかし、同じ不同意であっても、相手の自己卑下やほめに対する不同意は、FTA にはあたらないことをも指摘している。

本研究では、前者を「実質的な不同意」と呼び、後者の、相手の自己卑下やほめに対する不同意を、会話相手や状況などに対する配慮のあるものとして「儀礼的な不同意」と呼

び、この2つを分類することにする。

- ・「実質」（実質的な不同意）：不同意の先行発話が自己卑下や相手（不同意する者）へのほめではない場合。
- ・「儀礼」（儀礼的な不同意）：不同意の先行発話が、自己卑下や相手（不同意する者）へのほめである場合。

【会話例1「実質的な不同意」の例】

友人同士⑥：IF16が、友人のIF15が韓国へ行ったことがあると勘違いしている。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質
675	598	*	IF15	そうそう、また海外行きたいんだけど（うんー）、お金がない<笑い>。			
676	599	*	IF16	そうだよー。			
677	600	*	IF15	へー。			
678	601	*	IF16	あ、でもそっか、韓国行ったじゃんね。	4A		
679	602	*	IF15	行ってないよ。		4D	実質
680	603	*	IF16	あ行ってないっけ。			
681	604	*	IF15	うん。			

【会話例2「儀礼的な不同意」の例】 初対面①：大学卒業後の希望を話し合っている。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質
249	229	*	UF02	あたし、も、ずーっとなんか、小学校の頃から、もう、なんか、何だろ、夢があつてー<軽く笑う>。			
250	230	*	UF01	うーん、えーいいな、そういうの。			
251	231-1	/	UF02	なんか、外務専門職（うーん）、なりたい、って（うん）、思ってた、			
252	232	*	UF01	うんうんうんうん。			
253	231-2	*	UF02	でよくここまで続いたなって思ってるんですけど<2人笑い>。			
254	233	*	UF01	すごいですよ、でも。	3A-1		
255	234	*	UF01	夢まであと一歩って感じじゃないですか。	3A-2		
256	235	*	UF02	え、でも、全然ね（<笑い>）、今年は、無理かなーって思う…。		3D	儀礼



257	236	*	UF01	あー。			
258	237	*	UF02	うーん、一発で受かる人ってあんまりいない<から>{<}。			
259	238	*	UF01	<うん>{>}、大変ですもん。			

### 3.3.2. 不同意の内容：事実であるか、意見であるか

Rees-Miller (2000) が定義した不同意には、議論可能な立場や観点についてのものと、真偽が実証可能であるものとが含まれるということである。本研究でも、この2種類の不同意を分類し、その違いによって不同意の特徴に差が見られるかどうか分析する。

- ・「事実」：真偽が実証されており、それについて議論の余地はないといった事実に関する不同意。話し手が「事実」として確認をとった上で発話していることが分かる場合に「事実」とする。
- ・「意見」：真偽を実証する類のものではなく、立場や観点によって議論が成立するといった意見に関する不同意。事実について述べられているものであっても、話し手が確認をとってはず、推測して発話しているとみなされる場合は「意見」とする。

#### 【会話例3. 「事実」として述べられている不同意の例】

友人同士⑨：一緒に旅行する予定だったが、IF17の都合で行けなくなった。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質	内容
41	32	*	IF18	まー、部長さん自らねー(うん)、どうするわけにもいかないよねー。	1A-1			
42	33	*	IF18	＝一番自分の、そう、部長って何で？。	1A-2			
43	34	*	IF18	そう、一番自分の予定、後回しじゃない？。	1A-3			
44	35	*	IF17	そう。				
45	36	*	IF18	すごく<嫌'や'なんだけど>{<}。				
46	37	*	IF17	<あー、部長じゃないよ>{>}、あたし。		1D	実質	事実
47	38	*	IF18	え違うの？。				
48	39	*	IF17	<笑い>。				
49	40	*	IF18	代表じゃないの？。				
50	41	*	IF17	代表<じゃない>{<}。				

## 【会話例 4. 「意見」として述べられている不同意の例】

友人同士⑩：IF20 が、大学卒業後故郷で就職する予定であることについて。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質	内容
730	672	*	IF19	でもそういう、子もいたほうがいいんだよね、きっと。				
731	673	*	IF19	過疎化しちゃうから <笑い>。	10A			
732	674	*	IF20	失礼な<2人笑い>。		10D-1		
733	675	*	IF20	埼玉に言われたくないよ <2人笑い>。		10D-2		
734	676	*	IF19	ベッドタウンだから <笑い>。				
735	677	*	IF20	そうだよ。				
736	678	*	IF20	えでも、過疎化はしないと 思うけどな。		10D-3	実質	意見
737	679	*	IF19	まあ、そんなとこじゃないか。				
738	680	*	IF20	うん、一応。				

## 3.3.3. 不同意の表し方：直接的な不同意か、間接的な不同意か

Searle (1975) は、「指示 (directive)」の発話行為において、ポライトネスが間接性の主な動機となることを指摘している。不同意についても、「直接的」か「間接的」かをコーディングすることにする。

- ・「直接」 直接的な不同意：「先行発話」に対する「不同意」であることが、発話の字義通りの意味によって分かる。
- ・「間接」 間接的な不同意：「先行発話」に対する「不同意」であることが、その発話の字義通りの意味によってではなく、会話の文脈や、話者同士が共有する背景的情報に基いて推論することによって分かる。

## 【会話例 5. 「直接的な不同意」の例】

友人同士⑩：IF20 の実家の周辺がどれだけ田舎であるかという話題について。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質	内容	表し方
739	681	*	IF20	でも町内にコンビニないけど。					
740	682	*	IF19	へー。					
741	683	*	IF20	ちょっと<レアでしょ?><>。					
742	684	*	IF19	<酒屋とかでしょ?>、じゃあ。					

743	685	*	IF20	酒屋?、酒屋はあるよ <軽く笑う>。					
744	686	*	IF19	酒屋さんとかで（うん）お菓子 買うんでしょ?。	11A				
745	687-1	/	IF20	酒屋でお菓子は買わないけど さ<笑い>,,		11D-1			
746	688	*	IF19	そう<笑いながら>。					
747	687-2	*	IF20	スーパーとか、なんか。		11D-2	実質	事実	直接
748	689	*	IF19	は一。					

## 【会話例 6.「間接的な不同意」の例】友人同士⑩：共通の友人が留学していることについて。

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	先行 発話	不同意	性質	内容	表し方
46	36-2	*	IF21	半年かな?、ちょうど。					
47	38-1	/	IF21	だから,,					
48	39	*	IF22	ふーん。					
49	38-2	/	IF21	んーっと、2月、とかには戻っ て<くるから>{<},,					
50	40	*	IF22	<あー>{<}、ほんとに一。					
51	38-3	*	IF21	ちょっ、で<全然>{<}【【。					
52	41	*	IF22	】<また>{<}行きそうだよ、 そしたら。	1A				
53	42-1	/	IF21	んー、でも、帰ってきたら、 帰ってきたでなんか、付き人 をやって,,		1D-1			
54	43	*	IF22	うん。					
55	42-2	/	IF21	そのイギリスでちょっと舞も 勉強してっていう、なんか（う んうんうん）、経験を生かして か知らないけど（うん）、本人 の希望としては、なんか（う ん）「会社名 1」とか、ああい うなんかこう、文化的な<こと を>{<},,		1D-2			
56	44	*	IF22	<うんうん>{<}うんうんうん。					
57	42-3	/	IF21	放送媒体でやりたい、みたい な、<感じらしくて>{<},,		1D-3			
58	45	*	IF22	<あ、そうなん>{<}だー。					

59	42-4	/	IF21	一応、帰ってきたら、だからおとなしく,,		1D-4			
60	46	*	IF22	<おとなしく>{<}<笑いながら>。					
61	42-5	*	IF21	<おとなしく>{>}ってどうか、なんかあれだけど、<まあ就職しようかな、みたい>{<}。		1D-5	実質	意見	間接

以上の項目について、抽出した全 185 例のうち、約 24% (40 例) を対象に、筆者と第二認定者のコーディングの信頼性係数、Cohen's Kappa (Bakeman and Gottman, 1986) を算出し、信頼性を確認した。

#### 4. 結果と考察

まず、基礎的データとして会話全体の特徴とともに不同意の頻度を示す (4.1 節)。次に、コーディング項目ごとの結果とともに不同意の特徴を考察する (4.2 節)。また、コーディング項目以外に、特徴的であった現象に関する定性的な分析・考察を試みる (4.3 節)。

##### 4.1. 全体的特徴：会話全体の状況と「先行発話」・「不同意」の頻度

ここでは、文字化作業を行った会話の状況、および、分析対象となる「先行発話」・「不同意」の頻度を示す。

表 3-1. 基礎的データ①：会話の状況

	会話数	総会話時間 (分)	1 会 話 の 平均時間 (分)	総発話文数	1 会 話 の 平均発話文数
友人同士	12	約 240	約 20	6,691	557.6
初対面	12	約 262	約 22	6,517	543.1
全体	24	約 502	約 21	12,711	550.3

会話時間 (文字化時間と一致) については、友人同士 12 会話の合計が約 240 分、1 会話の平均が約 20 分 (最大約 27 分, 最小約 12 分, 標準偏差 4.86), 初対面 12 会話の合計が約 262 分, 1 会話の平均が約 22 分 (最大約 31 分, 最小約 15 分, 標準偏差 5.86), 両者合わせた 24 会話の総計が約 502 分, 総平均が約 21 分 (標準偏差 5.38) であった。

表 3-2. 基礎的データ②：「先行発話」・「不同意」の頻度

	会話数	「先行発話」 「不同意」の頻度	1 会話の平均頻度	標準偏差
友人同士	12	94	7.83	4.00
初対面	12	91	7.58	5.02
全体	24	185	7.26	4.54

「先行発話」・「不同意」は、両者が対応しているため、同数である。これらの頻度は、友人同士 12 会話において合計 94 回、1 会話の平均 7.83 回（最大 18 回，最小 3 回，標準偏差 4.00），初対面 12 会話において合計 91 回，1 会話の平均 7.58 回（最大 19 回，最小 3 回，標準偏差 5.02）である。両者合わせた 24 会話の総計が 185 回，総平均が 7.71 回（標準偏差 4.54）であった。平均値もほとんど変わらず，標準偏差も大きい。

このように，出現頻度という点では，親疎に応じた「先行発話」・「不同意」に差は認められなかった。次節からは，抽出した「先行発話」・「不同意」の特徴をより詳細に分析することで，親疎間の相違点と類似点について考察する。

## 4.2. コーディング項目ごとの結果と考察

### 4.2.1. 不同意の性質：実質的な不同意か，儀礼的な不同意か

抽出した「不同意」をこの両者に分類した際，友人同士と初対面とでどのような差が見られるかを検討する。まず，友人同士，初対面別に見た不同意の性質による分析結果を示す。

表 2-1. 「実質」・「儀礼」ごとに見る不同意の頻度と割合（友人同士）

	実質的な不同意	儀礼的な不同意	全 体
12 会話の合計	84 (89.4%)	10 (10.6%)	94
平均	7.00	0.83	
標準偏差	4.08	1.34	

表 2-2. 「実質」・「儀礼」ごとに見る不同意の頻度と割合（初対面）

	実質的な不同意	儀礼的な不同意	全 体
12 会話の合計	50 (54.9%)	41 (45.1%)	91
平均	4.17	3.42	
標準偏差	2.79	3.80	

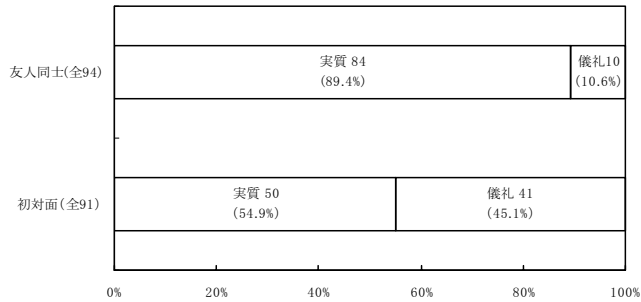


図1. 「実質」か「儀礼」かによる不同意の内訳（頻度と割合）

友人同士では、実質的不同意が 89.4%，儀礼的不同意は 10.6%であり、実質的不同意の割合が大部分を占めている。それに対して初対面では、実質的不同意が 54.9%，儀礼的不同意が 45.1%と、両者がほぼ同程度の割合である。不同意の頻度自体では、友人同士と初対面とで差は見られなかったが、実質的な不同意か儀礼的な不同意かという内訳を見ると、図1の通り、両者に差があることが分かる。実質的不同意、儀礼的不同意各々が持つポライトネスの性質と照らし合わせることによって、親疎に応じてこのような差が見られたことの意味を検討したい。

実質的な不同意については、友人同士より初対面の会話のほうが実質的な不同意の頻度は低い。FTA にあたる実質的不同意は、「社会的距離 (distance)」が大きい場合にはあまり多くなされていないということが分かる。

儀礼的な不同意については、友人同士より初対面の会話のほうが、儀礼的な不同意の頻度は大きい。儀礼的な不同意は、3.3.1 節で述べた通り、FTA ではない。この友人同士と初対面それぞれにおける儀礼的な不同意の様相は、ディスコース・ポライトネス理論では、「特別にポライトというわけでもなく、あつて当たり前であるが、それが欠如したときに初めてポライトでないと認知される『失礼でない状態』としての「無標ポライトネス」をなしていると捉えられる。

#### 4.2.2. 不同意の内容：事実であるか、意見であるか

次に、不同意の内容が、事実として述べられているか、意見として述べられているものであるかを分類した結果について検討する。なお、前節で見た「実質的な不同意」におけるものと「儀礼的な不同意」におけるものとを別個にする。

・実質的な不同意において：

表 3-1. 「実質的な不同意」における「事実」と「意見」の頻度と割合（友人同士）

	事 実	意 見	全 体
12 会話の合計	20 (23.8%)	64 (76.2%)	84
平均	1.67	5.33	
標準偏差	1.43	3.12	

表 3-2. 「実質的な不同意」における「事実」と「意見」の頻度と割合（初対面）

	事 実	意 見	全 体
12 会話の合計	18 (36.0%)	32 (64.0%)	50
平均	1.50	2.67	
標準偏差	1.12	2.09	

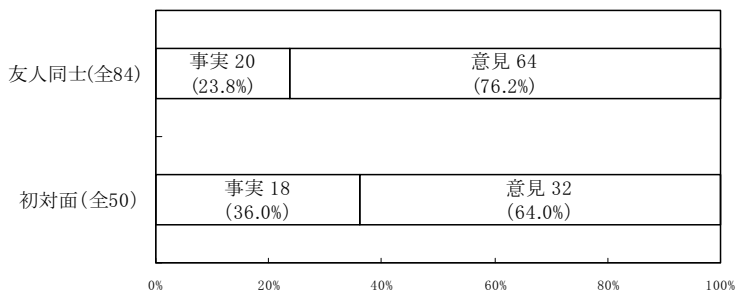


図 2. 不同意の内容：「実質的な不同意」における「事実」と「意見」の内訳（頻度と割合）

事実として述べられる実質的な不同意は、友人同士と初対面とではほぼ同程度の頻度である。Rees-Miller (2000) も、不同意 (disagreement) の中でも事実に対する訂正は、ルーティーンとして行われており過酷なものではないと述べている (Rees-Miller, 2000: 1098)。本研究の結果からも、親疎という「社会的距離 (distance)」の差によらず、話し手が明確に知っている事実について、同様にそれを告げていることが分かる。

一方、意見として述べられる実質的な不同意は、友人同士のほうが、初対面より多く見られている。Brown and Levinson は、相手のポジティブ・フェイスを満たす手段として、「共通の基盤を述べる (Claim common ground)」ことを挙げているが (Brown and Levinson, 1987: 103)、観点や立場によって変わり得る意見について違いを述べることは、会話者同士が共通の基盤を持たないことを明示することにつながる。意見として述べられる実質的な不同意は、フェイスという相手の根本的な欲求に抵触する恐れがあるために、本研究の結果においても、「社会的距離 (distance)」の大きい初対面に頻度が少なかったのだろうと考えられる。

また、儀礼的な不同意における結果は、友人同士・初対面ともに、全て意見として述べられるもののみであり、事実として述べられるものはなかった。これは、儀礼的な不同意というのは「ほめ」や「自己卑下」に対するものであり、それは相手に対する「評価」を加えるものだからである。

#### 4.2.3. 不同意の表し方：直接的な不同意か、間接的な不同意か

不同意の表し方が直接的であるか間接的であるかが、親疎によってその特徴にどのような違いがあるかを考察する。ここでも、前節と同様、実質的な不同意と儀礼的な不同意を別個にして検討する。

・実質的な不同意において：

表 4-1. 「実質的な不同意」における「直接」と「間接」の頻度と割合（友人同士）

	直 接	間 接	全 体
全 12 会話の合計	52 (61.9%)	32 (38.1%)	84
平均	4.33	2.67	
標準偏差	2.62	2.53	

表 4-2. 「実質的な不同意」における「直接」と「間接」の頻度と割合（初対面）

	直 接	間 接	全 体
12 会話の合計	29 (58.0%)	21 (42.0%)	50
平均	2.42	1.75	
標準偏差	1.71	1.42	

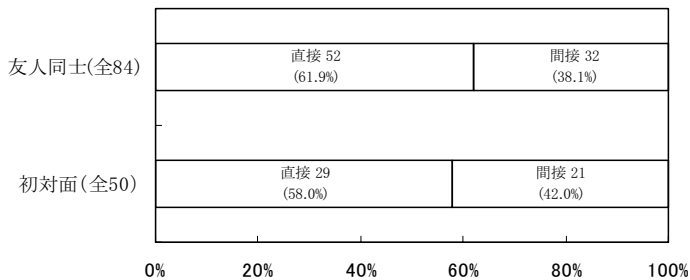


図 3. 不同意の表し方：「実質的な不同意」における「直接」と「間接」の内訳（頻度と割合）

友人同士と初対面とで、頻度に差があるものの、直接的な不同意と間接的な不同意のなされる割合は、ほぼ同様である。Searle (1975) が指摘したように、ポライトネスの動機が間接的な話し方をさせるのであれば、「社会的距離 (distance)」がより大きく、したがって相手にかかる負担の度合いが大きくなる初対面のほうが、友人同士よりも間接的な不同意



が多くなされるはずである。しかし、本研究のデータには、そのことを支持する結果は表れなかった。

例えば、友人同士の会話では、実際に発せられている言葉は、相手に伝達しようとする内容のごく一部しかないことがある。それは、両者の共有知識が多いために省略が可能となっているからだと考えられる。Grice (1989, 清塚訳 1998) の「協調の原理 (Cooperative Principles)」に「量の格率」が設けられているが、これは「(言葉のやり取りの当面の目的のための) 要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい」という指針である。この例においても、相手が明らかに知っていることは発話しないという、情報伝達の効率性が重んじられている結果だと解釈できる。

このように、間接的な不同意がなされる動機と考えられるものは、ポライトネスだけではない。ポライトネスと間接性の関連を明らかにするためには、「情報伝達の効率性」の動機によって間接的な不同意がなされるなどの現象を別にして論じる必要があるだろう。

・儀礼的な不同意において：

表 5-1. 「儀礼的な不同意」における「直接」と「間接」の頻度と割合 (友人同士)

	直 接	間 接	全 体
12 会話の合計	7 (70.0%)	3 (30.0%)	10
平均	0.58	0.25	0.42
標準偏差	1.11	0.60	0.91

表 5-2. 「儀礼的な不同意」における「直接」と「間接」の頻度と割合 (初対面)

	直 接	間 接	全 体
12 会話の合計	27 (73.0%)	10 (27.0%)	37
平均	2.45	0.91	1.68
標準偏差	3.23	1.44	2.62

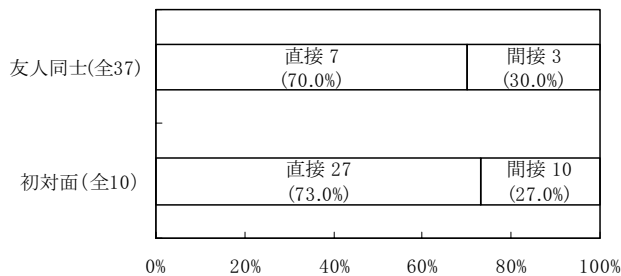


図 4. 不同意の表し方：「儀礼的な不同意」における「直接」と「間接」の内訳 (頻度と割合)

岡本（2000）は、相手にポジティブな評価をすることが前提となっているとき、誇張をすることによってお世辞・賞賛らしさの認知が増強されるところを報告している。この儀礼的な不同意は、自己卑下及びほめに対するものであり、直接的、間接的に相手の認められたいというポジティブ・フェイスを満たそうとする行動である。相手を認めていることを示すものであるなら、岡本に指摘されているように、それを行っていることを相手がよく認識するように、積極的に働きかけようとするはずである。したがって、直接的に表される儀礼的な不同意が多かったことは、相手のフェイスを満たそうとするとポライトネスの効果を高めようとしていることの結果だと考えることができる。

### 4.3. その他の特徴的な現象

これまで、分析項目として設けたコーディング項目の結果に沿って、会話例を挙げながら不同意の様相を考察してきた。本節では、コーディング項目の観点とは別に、本会話データにおいて特徴的であった現象を取り上げることとする。

まず1つ目に、不同意の内容をすべて伝達する前に相手がそれを先に察したという例を示す。

#### 【会話例7. 不同意の内容を相手が先取りする例】

初対面⑧：UF15 と UF16 はともに学部4年生であり、運転免許を取得したいという話をしている。UF15 は就職が内定しており、UF16 は大学院進学を希望している。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質	内容	表し方
402	376-1	/	UF15	よし、じゃあ、あの、もし、あ、受かるにしろ、受からないにしろ、まあ卒業できたら、					
403	377	*	UF16	大丈夫ですよ、大丈夫ですよ<2人笑いながら>。					
404	376-2	*	UF15	卒業できたら、とります、じゃあ、あたしも。					
405	378	*	UF15	とりたい<です>{<}。					
406	379	*	UF16	<あ>{>}、そうですよね。					
407	380	*	UF16	院だったら、まだ、院生活のうちにとるって<いうことも、可能ですよね>{<}。	15A				
408	381-1	/	UF15	<あー、でも先輩が>院生なんですけども、		15D-1			
409	382	*	UF16	やっぱ忙しいですか?。					
410	381-2	*	UF15	=忙しいって言ってましたね。		15D-2			

411	383-1	/	UF15	何、どんなことをするのか今イチよく分からないんですけど、なんか授業が忙しいとか、		15D-3			
412	384	*	UF16	あー。					
413	383-2	*	UF15	発表がけっこう多くあるとか。		15D-4	実質	意見	間接
414	385	*	UF16	院になると、もう自分の研究テーマについていう、感じに。					
415	386	*	UF15	そうですねー、うん。					

この前の部分で、UF16 が自動車学校に入学することに決めていると話している。それを聞いたUF15 が、自分も卒業できたら免許を取得したいと述べる（ライン番号 402, 404, 405）。UF16 は、大学院に進学するつもりなら、在学中に取得することも可能ではないかという予測をするが（ライン番号 407）、UF15 は、大学院入学してから取得するのは無理だと考えていることを伝える（ライン番号 408, 410, 411, 413）。このやりとりの中で、UF15 が、大学院在学中に取得することは無理だということを述べるために、その前に、そう考える理由として大学院の先輩が「大学院は忙しい」と言っていたことを挙げようとした。ここで、UF15 が「でも先輩が院生なんですけども（ライン番号 408）」と発話しただけで、UF16 は、「やっぱ忙しいですか?（ライン番号 409）」と問い返している。UF16 は、「院生の先輩」の話が出た段階で、最後まで話を聞かなくとも、UF15 が「大学院生が忙しいこと、だから在学中の免許取得は難しいと考えていること」、すなわち自分の先の発話に対して相手が不同意をしようとしていることを察したわけである。その後、UF15 も、不同意が相手に伝わったことが分かっているながら、その忙しいということについて一通りの説明をしている。

この例のように、不同意に納得するときターンを先取りして発話するという複雑なやりとりは、自然会話をデータとしているからこそ見られる現象だといえる。水谷（1993）は、話し手は自分で言い始めた文を完結させず、相手が進んでそれを引きとって相手の文を完結させようとする現象に注目し、それを「共話」と呼んでいる。自然会話から、不同意の後にどのような反応がなされるかということをも分析する際に、このような不同意の先取りという現象は、ポライトネスの効果の1つとして注目できる。

次に、もう1つ、不同意によって笑いが生じる例について考える。

【会話例 8. 笑いが生じる不同意】友人同士③：教育実習で水泳があることについて。

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	先行発話	不同意	性質	内容	表し方
339	321	*	IF06	ていうか来週水泳だしね<笑い>。					
340	322	*	IF06	まだ水着<買ってない>{<}。					
341	323	*	IF05	<来週?>{>}。					

342	324	*	IF06	うん、来週。					
343	325	*	IF05	水着…<笑いながら>。					
344	326	*	IF06	水着。					
345	327	*	IF05	水着…<笑いながら>。					
346	328	*	IF05	超、色っぽい買って<2人笑い>。	12A				
347	329	*	IF06	いや、"ふさわしいもの"って指定してあった。		12D	実質	事実	直接
348	330	*	IF05	書いてあったね、そういえば<2人笑いながら>。					

IF05 は、教育実習で予定されている水泳で用いる水着を買うことについて、「色っぽいを買う」と宣言する（ライン番号 346）。それに対して、IF06 は、「ふさわしいものでなければならない」と不同意をする。その後、2人は笑いあっている。

このやりとりにおいて、IF05 による先行発話（ライン番号 346）は、その前のライン番号 343、345 の発話に笑いが伴っていることを考えても、会話の流れからも、ふざけて発せられたものと判断できる。IF05 は、教育実習で「色っぽい水着」を着るという、場にそぐわない行動を述べることにより、そのギャップの効果として冗談を発生させようと狙っている。次のライン番号 347 では、IF06 は、その冗談に対して直接的に不同意をし、それによって笑いが発生している。

Zajdman (1995) は、FTA が冗談やユーモアといった機能を果たす場合もあると指摘している。本来は FTA である不同意も、冗談やユーモアとしてであれば、FTA ではなく、相手との親密感を示す行為になる。例 8 における実質的な不同意も、先行発話の冗談に対して発せられているということ考えると、親密だからできる不同意であり、両者の親密感を示し会話を盛り上げる効果をなしているものだといえる。

## 5. 会話教育への示唆

本節では、本研究のデータから得られた自然会話の特徴を、会話教育へどのように取り入れることが可能であるか、円滑な対人コミュニケーションという観点から考えたい。

本研究のデータにおいて、親疎によって差がある現象が見られた。まず、実質的な不同意については、初対面の会話のほうが、友人同士より頻度が低かった。そして、実質的な不同意の中でも、事実として述べられているものであるか意見として述べられているものであるかをみると、意見として述べられている不同意が、初対面の会話においてより少ないという結果が得られた。このことは、知り合っていない相手に対しては、実質的な不同意、とりわけ意見として述べる実質的な不同意をあまり多くすると、対人関係を脅かす恐れがあるということを示唆している。この点について、会話相手との社会的距離に応じた配慮が必要であることを、学習者に指導することが有効であろう。

次に、自己卑下やほめに対する不同意である儀礼的な不同意が、友人同士より初対面の会話において比較的多く見られた。また儀礼的な不同意の中でも、直接的に表される不同意の頻度が、間接的に表される不同意の頻度より高いことが分かった。直接的に表すことで、相手を認めていることをより積極的に示そうとしているものだと捉えることができる。社会的距離が大きい相手に対しては、このような直接的に表す儀礼的な不同意を会話に盛り込むことで、日本語の会話として自然なやりとりが可能となるという情報を学習者に与えることが考えられる。

また、定量的分析の結果以外に、特徴的な現象として紹介したものに、「不同意の先取り」や冗談として発せられる不同意という現象があった。「不同意の先取り」は、会話相手が不同意をしようとしているという意図を察し、相手が最後まで不同意をする前に、相手の発話を途中で引き取って完結させようとするというものであり、不同意の聞き手側の反応に関する現象である。そして、冗談として発せられる不同意は、親しい友人同士の間でなされているものであり、会話者同士の親密感を高めているものと捉えられる。この2つの現象については、本分析から一般化して論じることはできないが、これらの特徴を学習者に気づかせ理解させることで、より豊かなコミュニケーションの実現につながるといえる。

## 6. おわりに

本研究では、日本語の雑談における不同意の分析を実証的に試み、会話教育にどのようなことが示唆されるかを考えた。このような、日常的に何気なく交わしている会話の特徴を提示することは、その言語を母語としない学習者にとって、実際の会話をする際の指針となると思われる。今後は、ここで得た結果をさらに信頼性の高いものとし、会話教育に対して具体的な示唆を提供するためにも、分析方法を洗練させ追試検証を行う必要がある。その際には、4.2 節で紹介した不同意の先取りという聞き手側の反応のし方や、冗談としてなされている不同意といった現象も、分析項目に取り入れ定量的分析を施せるよう工夫していきたい。

## 参考文献

- 宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』, 文部省科学研究費一般研究 (C) 研究成果報告書, 12-26.
- (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム 第4 専門部会 談話のポライトネス』, 国立国語研究所, 9-58.
- (2002) 「連載ポライトネス理論の展開」『月刊言語』 31(1)-31(5), 31(7)-31(13).
- (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研

- 究』, 平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) (研究代表者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- 岡本真一郎 (2000) 「皮肉かお世辞か—誇張が認知に及ぼす役割—」『愛知学院大学文学部 紀要』, 30, 27-33.
- グライス P. 著 清塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』, 勁草書房. (Grice, P. 1989 *Studies in the way of words*. Harvard University Press.)
- 水谷信子 (1995) 『『共話』から『対話』へ』『日本語学』, 12 (12), 4-10.
- Bakeman, R. and Gottman, J. M. 1986. *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. C. 1987. *Politeness—Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Holtgraves, T. 1997 Yes, but... Positive politeness in conversation arguments. *Journal of Language and Social Psychology*, 16 (2) , 222-239.
- Rees-Miller, J. 2000. Power, severity, and context in disagreement. *Journal of pragmatics*, 32, 1087-1111.
- Searle, J. R. 1975. Indirect speech acts. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics: speech act*. Academic Press. 59-82.
- Zajdman, A. 1995. Humorous face threatening acts: humor as strategy. *Journal of Pragmatics*, 23, 325-339.

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 教師と学生のインターアクションにおける 言語行動分析

## —日本語とポーランド語の対照研究への試み—

カチマレク ミロスワバ

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

### 1. 研究以前の問題意識

数多くの学習者は、日本語を習得する過程において、文法も語彙もある程度すでに身に付いているにも関わらず、実際の対話場面になると、円滑なコミュニケーションを行うことが難しいと訴えている。

また、日本語教育に携わる先生方の観点から見れば、「スピーチレベル・シフト」というような言語行動は、外国人日本語学習者に正しく、効率的に身に付けさせることは極めて困難であると思われる。

例えば、J.V.ネウストプニー (1999: 47) は、コミュニケーション・ルールを取り上げる際、参加者ルールに関して次のように述べている。「外国人一般にとって、コミュニケーションの場合のフォーマリテイ、つまり改まった行動をするか、くだけた行動をするかの程度を自由に左右することはむずかしい」。あるいは、「敬語の使い方から見ると、外国人には二つの極端なタイプが認められる。一つは、いわゆるデス、マス体さえも使えず、誰に対しても「いくよ」とか、「いくの?」としか言えないグループである。いわゆる尊敬語—「いらっしゃいます」「お帰りになります」など—は、まったく使えない。このタイプは、日本で日本語を話せるようになった若い人に特に多い。もう一つは、明らかに敬語を使いすぎるという場合である。親しい言葉遣いが許される関係でも、「いらっしゃいますか」をくずさない (1999: 107) というように、対人関係を表す言語行動の問題点は取り上げられる。

### 2. 研究目的

本稿では、対話場面、つまり二人の話者が対面するときの、話し手と聞き手の対人関係を表す言語行動、言語ストラテジーを探っていくものである。そこで、教師と学生のインターアクションにおいてどの言語要素が会話者の親疎関係、会話のフォーマリテイの度合いを調整する機能を果たすか、というようなことをまず文レベルから同定していく。

さらに、定量的な分析を試みることによって、文レベルの言語要素が談話レベルではどのような様子を見せているか、またポーランド語と日本語それぞれのストラテジーが教師・学生の関係に及ぼす影響に、相違点、あるいは類似点はあるのか、ということを探る

のが本研究の主関心となる。

### 3. 研究方法

#### 3.1. 研究の場面設定

被験者：研究の被験者となる者は、教師と学生である。教師は大学の教官で、学生の指導教官である。学生は、学部あるいは大学院に在籍し、卒論、修論、あるいは博論を執筆中の学生である。

話 題：会話の話題は、研究上の面談や論文上の相談などである。

場 所：会話が行われている場所は教師の研究室、あるいは大学の教室である。

#### 3.2. データ収集法

データ収集において、まず筆者は教師と連絡を取って、論文指導の面談が予定されているかどうか確認してから、会話の録音を頼んだ。次に学生と連絡を取り、研究の目的などを説明し、学生がそれに同意すれば、録音計画を立てた。

面談当日、事前に教室に入り、録音の設備を用意した。教師と学生が面談を始めた時、録音の設備をオンにつけて、退室した。面談が終わったら、教室のなかへ呼び入れてもらい、フォローアップ・アンケートを記入してもらった。

このようにして、ポーランド語の会話、12会話をポーランド、ビドゴシチ市、ビドゴシチ・アカデミーで2003年3月に録音した。日本語の会話、12会話を、東京外国語大学で、2003年6月に録音した。

#### 3.3. データ分析法

##### 3.3.1. 文字化

宇佐美(2003b)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」に基づいて、録音した日本語とポーランド語の会話のうち、冒頭部の3分目<sup>1</sup>から10分間の文字起こしをした。

##### 3.3.2. コーディング

コーディング項目を共通項目と非共通項目に分けて、分析を行った。共通項目には、言語間における言語行動の明示化の度合いを調べるために、「聞き手明示」と「疑問文」を設けて、その頻度を調べることで、日本語とポーランド語の対照分析を試みた。

非共通項目には、日本語とポーランド語における教師と学生の親疎関係、また会話のフォーマリテイの度合いを調整するような機能をもつ言語行動の分析を言語別に行った。

---

<sup>1</sup> Cameron, D. 2001. *Working with Spoken Discourse*. Sage Publications. p32の指示に従う。というのは、被験者の報告によると、会話が始まった直後は、録音のことを少々意識する傾向があるからである。



日本語コーディングの場合、宇佐美（2001b：7）のスピーチレベルのコーディングに従い、「文全 POL」、「文末 POL」、「機能 POL」、「シフト」という項目によって、日本語のスピーチレベル・シフトの分析を行った。

ポーランド語の場合、「ムード」と「話者領域」というような項目を設けて、仮定法の使用と「話者領域進入」という言語行動の分析を試みた。その結果を以下に報告することにする。

### 3.3.2.1. 共通項目のコーディング：

**聞き手明示**：話文中に聞き手のことを明示する 2 人称代名詞あるいは呼称という形態素が発見された場合、以下のように分類し、記号化する。

PRO：Pronoun（2 人称代名詞）

日 本 語：あなた、きみ、など

ポーランド語：pan（男の人に対して、丁寧に‘あなた’と呼ぶ時）

pani（女の人に対して、丁寧に‘あなた’と呼ぶ時）

VOC：Vocative（呼称）

日 本 語：教師に対して：先生、

学生に対して：「姓」＋さん、など

ポーランド語：教師に対して：panie profesorze（教授「男」＋さん）など

学生に対して：pani＋名前（名前＋さん）など

ただし、一発話文に、PRO（2 人称代名詞）と VOC（呼称）という二つの形態素が発見された場合、聞き手のことを明示する度合いが高いのは、VOC（呼称）であるため、VOC（呼称）だけをコーディングする。

**疑問文**：疑問文は、聞き手の解答を求めるような発話文であるというふうに定義<sup>2</sup>する。

従って、発話文中に、疑問文の同定条件として、答えが伴っている発話文のみ疑問文として捉え、分析対象とする。以下のように記号化する。

QUE：Question（疑問文）

日本語の例：

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	聞き手明示	疑問文
43	41	*	JTF01	何ページに、から取ったとも分らないじゃないか。		QUE
44	42	*	JSF05	えと、ここに書いたんですけど。		

<sup>2</sup> 現代言語学辞典（1988）成美堂の定義に従う

ポーランド語の例：

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	聞き手示	疑問文
109	93	*	PTF03	y, teraz, y-, czyli, czyli okazuje się (mhm), że ten słownik się sprawdza, <tak??>{<}. では、この辞書は役にたっているというわけ、そうですか？		QUE
110	94	*	PSF03	<tak>{>}. はい。		

### 3.3.2.2. 非共通項目のコーディング：

日本語：宇佐美（2001b：7）のスピーチレベルのコーディングに従い、すべての発話文を形式面と実際的な表現効果・機能面から分類を行った。

言語形式面では、以下の二つの項目に従って、コーディングを行った：

**文全 POL**：発話文全体のスピーチレベル

S：Super-polite form（尊敬語、謙譲語、美化語などを含む発話）

P：Polite-form（丁寧語：～です、～ますという敬体を含む発話）

N：Non-polite form（辞書形、常体を含む発話）

NM：No-marker（丁寧度を示すマーカのない発話：あいづち、中途終了型発話など）

**文末 POL**：文末のスピーチレベル

P：Polite-form（敬体）

N：Non-polite form（常体）

NM：No-marker（丁寧度を示すマーカのない発話：上記の敬体や常体がない発話）

次に、実際的な表現効果、言語機能の面では、以下の二つの項目に従って、分析を行った：

**機能 POL**：このコーディングは文末が敬体か常体かという形式にこだわらず、発話のテキストや音声面を考慮し、その発話がフォーマル（F）なものか、カジュアルな（C）感じがするかという機能面に注目している。

F：Formal（フォーマルな感じがする発話）

C：Casual（カジュアルな感じがする発話）

**シフト**<sup>3</sup>：直前の発話の機能が異なっている場合、シフトとして捉える。ここでは、相手からのシフトだけに重点をおいて、コーディングを行う。

DI：Down-shift from Interlocutor（直前の、相手の発話がFであり、次の発話がCとなる）

UI：Up-shift from Interlocutor（直前の、相手の発話がCであり、次の発話がFとなる）

<sup>3</sup> 本論のスピーチレベル・シフトのコーディングは、宇佐美（2001b）と違って、相手からの直前シフトだけに限る。

以下のように、日本語のコーディングの例を示す：

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	聞き手 明示	疑問文	文全 POL	文末 POL	機能 POL	シフト
124	119	*	JTF01	いったい産業が不振だとか、それから、えーと、すたれたとかと言うのは、どういふふうに判断したらいいのかしらね。			N	N	C	
125	120	*	JTF01	つまりね、日本映画をかつては娯楽の王様だったけど、今はその地位から滑り落ちましたよね。			P	P	F	
126	121	*	JSF05	はい。			NM	NM	F	
127	122	*	JTF01	じゃ、日本映画で優れたものができてないのかっていうと、ま、そうでもない。			N	N	C	DI
128	123	*	JSF05	はい。			NM	NM	F	UI
129	124	*	JTF01	そうすると、「JSF05」さんが主張したいのは、その、娯楽が多様化してきて、映画が one of them になってしまったということをお願いなのか、/少し間/それとも映画自身の質が裾野が市場が小さくなってきたから、映画自身の質がよくなった、活気がなくなったってということをお願いなのか。	VOC	QUE	P	N	C	DI

ポーランド語：ポーランド語のコーディング項目は日本語と違って、ポーランド語の構造を考慮した上で、「ムード」と「話者領域」の観点から分類を行う。

**ムード**：ムードは動詞のカテゴリーであるため、動詞形をもとにコーディングする。ポーランド語のムードには、直説法、仮定法、命令法、という三つがある<sup>4</sup>。本論ではそれを全部以下のように記号化し、分類を行うが、仮定法だけを分析対象とする。

IND：Indicative（発話文が直説法である場合）

SUB：Subjunctive（発話文が仮定法である場合）

<sup>4</sup> ムードの定義や分類は、Nagórko (2001：89-91, 113-114) に従う。

IMP : Imperative (発話文が命令法である場合)

**話者領域** : 文中に、聞き手、或いは話し手のことを示す動詞の人称形が現れた場合、以下のように分類し、記号化する。

HE : Hearer (聞き手に対する 2 人称代名詞を伴う動詞の 2 人称単数形)  
「聞き手領域進入」と名づける。

SP : Speaker (1 人称単数代名詞、あるいは動詞の 1 人称単数形)  
「話し手領域進入」と名づける。

SP+HE : Speaker+Hearer (話し手と聞き手のことを同時に表す動詞の 1 人称複数形)  
「話し手と聞き手領域進入」と名づける。

上のような話者による三つの言語行動、言語ストラテジーは、会話者同士の心理的距離を変化させる機能を果たすと思われる。

例えば、以下の文章では命題内容は同じであるけれども、1 番の文章では、話者間の心理的距離が一番小さく、2 番の文章では大きくなり、3 番の文章では動詞の形に話し手あるいは聞き手を示す人称形がないので、距離が一番大きいと思われる。

1. Czy **przeczytał pan** już tę książkę? 「聞き手領域進入」－「HE」  
あなたはこの本をもう読み終わりましたか？
2. **Zastanawiam się**, czy ta książka została już przeczytana 「話し手領域進入」－「SP」  
この本は、読み終わっているかどうか、(私) 知りたいけど。
3. Czy ta książka już została przeczytana? 「話者領域進入なし」  
この本は、読み終わっているのか？

このように、各発話文を原則として動詞の人称形をもとにコーディングする。ただし、一発話文に、話者が「HE」と「SP」、二つの領域に侵入した場合、会話のフォーマリテイの度合いが一番低いのは「HE」であるため、「HE」だけをコーディングする。以下の 4 番の文章では、その例を示す：

4. **Zastanawiam się**, czy **przeczytał pan** już tę książkę. 「聞き手領域進入」－「HE」  
あなたはこの本をもう読み終わったかどうか、(私) 知りたいけど。

4 番の文章は、1 番の文章より、聞き手に対する心理的距離がやや大きく、聞き手に対してやや親切的な感じがするが、2 番の文章ほど聞き手に対する距離が大きくないので、ここでは 1 番の文章と 4 番の文章を同等に扱い、「聞き手領域進入」－「HE」とコーディングする。

従って、一発話文に「HE」、「SP」と「SP+HE」という三つの動詞形が現れた場合、「HE」、「SP+HE」、「SP」という順序でコーディングを行う。

以下は、「HE」、「SP+HE」、「SP」の実例を示す。

HE : Hearer (聞き手に対する 2 人称単数代名詞を伴う動詞の 2 人称単数形)

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	聞き手 明示	疑問文	ムード	話者 領域
128	100	*	PTF01	]]<pani nie ma>{>} poczty elektronicznej?。 (電子メールありませんか?)	PRO	QUE	IND	HE

SP + HE : Speaker + Hearer (動詞の 1 人称複数形)

7	6	*	PTF03	[głęboki oddech] bo właśnie no, zastanówmy się y, o czym ta mapa <świadczy>{<}. ([深呼吸], では, この地図について, 考えてみましょう。)			IMP	SP + HE
---	---	---	-------	--	--	--	-----	---------------

SP : Speaker (1 人称単数代名詞, あるいは動詞の 1 人称単数形)

105	79	*	PSF01	właśnie tak myślałam。 (その通り思った。)			IND	SP
-----	----	---	-------	-------------------------------------	--	--	-----	----

以下のようにポーランド語のコーディングの例を示す<sup>5</sup> :

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	聞き手 明示	疑問文	ムード	話者 領域
1	1	*	PSF08	A czy pan profesor ma książkę, którą, y-, w zeszłym tygodniu pan, nie chciał mi jej udostępnić <śmiejąc się lekko>, mówił <że komuś pożyczał>{<}. (先生はお持ちになる本, 先週お借り できなかった, だれかにお貸し出さ れた本〈笑いながら〉のことなので すが, 今日はお持ちでしょうか。)	VOC	QUE	IND	HE
2	2	*	PTM03	<o programach wyborczych>{>}。 (選挙のプログラムについて)				
3	3	*	PSF08	O programach <wyborczych>{<}. (選挙のプログラムについて)				
4	4	*	PTM03	<mam, proszę bardzo>{>}, czeka tutaj na panią。 (持っているよ, どうぞ, [本は] <sup>6</sup> その 方「あなた」のことを待っているよ)	PRO		IND	SP

<sup>5</sup> ポーランド語の雰囲気을できるだけ伝えようとしたところ, 翻訳のところは不自然な日本語になってしまった。

<sup>6</sup> 「本」のことは原文では出なかったが, 翻訳を分かりやすくするために「[ ]」の中に入れた。

5	5	*	PSF08	to, gdzieś w niedzielę, w przyszłym tygodniu bym panu (tak) oddała。 (では、来週、日曜日ぐらい(はい)その方「あなた」には返ししたいと思いますが。)	PRO		SUB	SP
6	6	*	PTM03	p proszę tam <zerknąć>{<}</td>。 (どうぞ参考にしてください。)			IMP	

#### 4. 研究結果と考察

##### 4.1. 基本データ：ライン数と文数

表1に、文字化した日本語とポーランド語の全会話の総ライン数と総文数の合計を示す：

表1. 全会話におけるライン数と文数

会 話	ライン数	文 数
JP	1354	1236
PL	1455	1238
合 計	2809	2474

##### 4.2. 共通項目の分析結果と考察

###### 4.2.1. 「聞き手明示」の分析結果

まず、各会話における教師と学生による「聞き手明示」の頻度を、VOC（呼称）とPRO（2人称代名詞）の種類別に調べた。さらに、全会話文数のもとにその全会話における頻度と割合を以下の表2と表3で対照してみた。

表2. 日本語の全会話における「聞き手明示」の頻度と割合

「聞き手明示」の種類	教 師 (T)	学 生 (S)
VOC (呼称)	3 (0,24%)	2 (0,16%)
PRO (2人称代名詞)	12 (0,97%)	0 (0%)
合 計：	15 (1,21%)	2 (0,16%)

表3. ポーランド語の全会話における「聞き手明示」の頻度と割合

「聞き手明示」の種類	教師 (T)	学生 (S)
VOC (呼称)	7 (0,57%)	17 (1,37%)
PRO (2人称代名詞)	196 (15,83%)	2 (0,16%)
合計：	203 (16,40%)	19 (1,53%)

#### 4.2.2. 「疑問文」の結果対照

表4には、日本語とポーランド語の全会話における疑問文の頻度と割合を示す：

表4. 全会話における教師と学生による「疑問文」の頻度と割合

	教師 (T)	学生 (S)
JP	129 (10,4%)	19 (1,5%)
PL	151 (12,2%)	62 (5,0%)

#### 4.2.3. 「聞き手明示」と「疑問文」の分析結果上の考察

対照分析を行うために設けた「聞き手明示」と「疑問文」というような共通項目の結果を眺めていくと、ポーランド語では、行われている言語行動の頻度が、日本語より多いことがわかった。

例えば、「聞き手明示」の項目において、ポーランド人教師が高い割合を示しているのは、指導を与える側は指導を受ける側を明示しなければ、互いの役割関係があいまいになるからであると思われる。また、2人称代名詞（PRO）を使って聞き手のことを明示する言語行動は、「聞き手領域進入」「HE」という行動や、さらに対者敬語使用とも関わっているので、対面場面において義務的な行動だと思われる。それに比べ、日本人教師による「聞き手明示」の割合が低いのは、聞き手のことを明示することは、日本語では義務的ではないことを示している。というのは、日本において聞き手のことを明示しないことこそ、自然であり、対面場面では文末のスピーチレベルをシフトさせることで、相手のことを気使いながら人間関係を暗示させるという現象が起きているのではないかとと思われる。

さらに、「疑問文」の項目結果を見ると、日本人、ポーランド人教師の間に、疑問文の頻度に大きな差がないことがわかる。それは、論文指導の個人面談というような場面において、教師が学生に質問するという行動は役割関係上期待されているからである。それに対して、学生側から教師に対して質問を投げかけるというような行動は、役割関係上期待されていないので、学生の意志によるものとなり、教師には質問しなくても不自然でないと感じられる。ここでは、学生が取り上げられている疑問文の頻度において、日本語とポーランド語の間に大きい差が見られる。ポーランドの学生が教師に対して、日本の学生より3倍ぐらい疑問文を使用しているという結果は、ポーランドの学生が自分の言語行動を明示化させることにさほど抵抗を感じないからではないかと思われる。

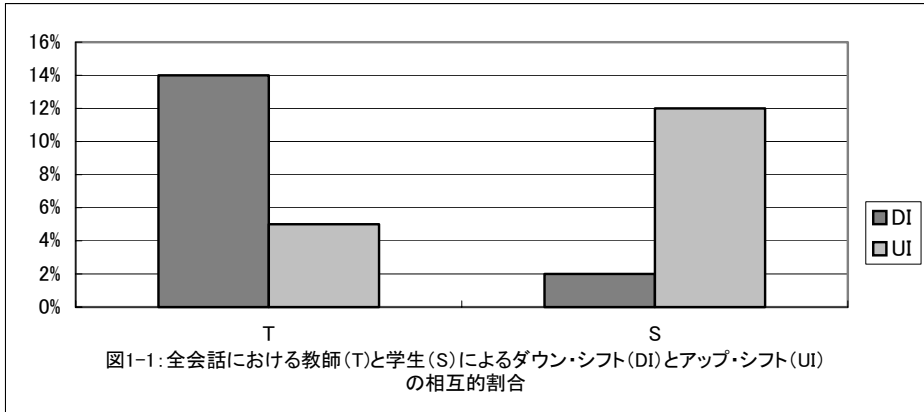
### 4.3. 非共通項目分析結果と考察：

#### 4.3.1. 日本語の分析結果と考察

##### 4.3.1.1. スピーチレベル・シフト分析結果と考察：

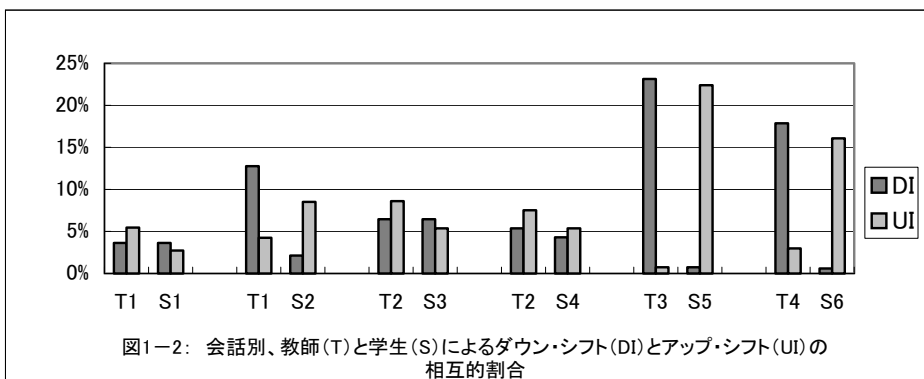
論文指導のための個人面談というような場面では、スピーチレベル・シフトが話し手と聞き手の人間関係、親疎関係、役割関係などを一番顕著に反映していると思われる。

以下の図は、全会話文数のもとに集計した教師（T）と学生（S）によるダウン・シフト（DI）とアップ・シフト（UI）の相互的な割合を示している。



このように、教師と学生の論文指導のための個人面談という場面において、全会話において教師によるスピーチレベルのダウン・シフト (DI) が学生より多く、学生によるスピーチレベルのアップ・シフト (UI) が教師に比べて多いという傾向は、「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」として捉えられる。

ところが、このような教師と学生による DI と UI の相互関係は、各会話でいつもそうであるとは限らない。例えば、収集した 12 会話の中から、6 会話を抽出すると、各会話において、スピーチレベル・シフトの頻度と教師－学生間における DI と UI の相互割合に、以下のような差が見られる。



このグラフでは、会話毎に、スピーチレベル・シフトの頻度と教師と学生の間に行われているダウン・シフト (DI) とアップ・シフト (UI) の相互的割合を示している。図 1-1 の全会話の結果と比べて、かなりの差が見られる。

スピーチレベル・シフトの頻度に関しては、頻度が高くなる（グラフの棒が長くなる）につれて、会話のフォーマリテイの度合いが下がっていくと推測できる。さらに、DI については、教師による DI の頻度が学生の DI を下回ることがないという事実は、DI の使用が



教師と学生の役割関係を指標する機能を持ち、会話の社会的コンテキストがここで大きな影響を及ぼしていることが読み取れる。また、UIに関しては、学生によるUIが教師のUIを下回ることもあれば、上回ることもあるので、UIの使用は教師と学生の役割関係には直接的な影響を及ぼしていないのではないかと推測できる。

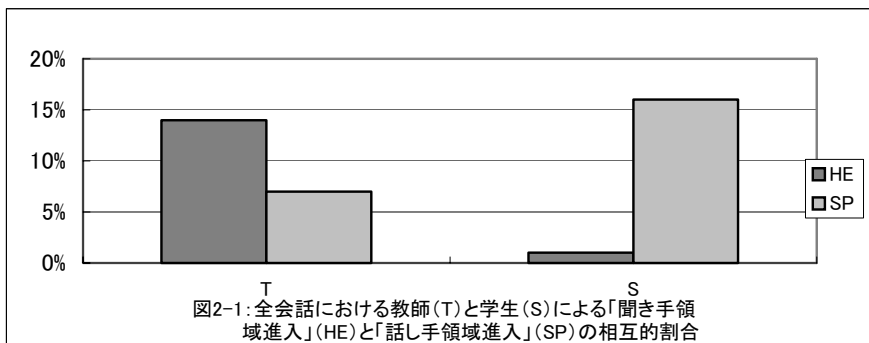
フォローアップ・アンケートの結果から、教師と学生の年齢差、性別、学生の属性、学年のような外的、社会的要因は、直接的にDIとUIの頻度に影響を与えないことがわかった。それより、むしろ教師の心構えによる内的、心理的要因のほうがここでは関わっているのではないかとと思われる。例えば、フォローアップ・アンケートでは、教師からのDIが多かった会話において、「学生に対して改まっていない態度をとっている」というような答えが頻繁に出た。なお、学生については、UIが多かったか、少なかったかにかかわらず、答えは例外なく、いつも「先生に対して、改まった態度をとっている」というものであった。

つまり、T1：S2の会話、またT3：S5、T4：S6の会話のように、教師からのDIが学生に比べて多く、UIが少ない、また学生からのUIが教師に比べて多く、DIが少ないというような傾向は、上下・役割関係を顕著に反映している。しかし、いずれにせよT1：S1、T2：S3、T2：S4の会話における教師と学生の関係は、上記のようなはっきりとした相互的割合を見せていないことから、日本語における教師と学生の役割関係は時としてあいまいになる場合があるかと思われる。

#### 4.3.2. ポーランド語の分析結果と考察

##### 4.3.2.1. 「話者領域」の分析結果と考察：

ポーランド語の会話では、「話者領域」という項目に含まれる「聞き手領域進入」(HE)、「話し手領域進入」(SP)、あるいは「聞き手と話し手領域進入」(SP+HE)というような言語行動が、対話場面における話者間の親疎関係、会話のフォーマリテイの度合いを調整する機能をもっているので、ここでは、これを対人コミュニケーション・ストラテジーとして扱う。

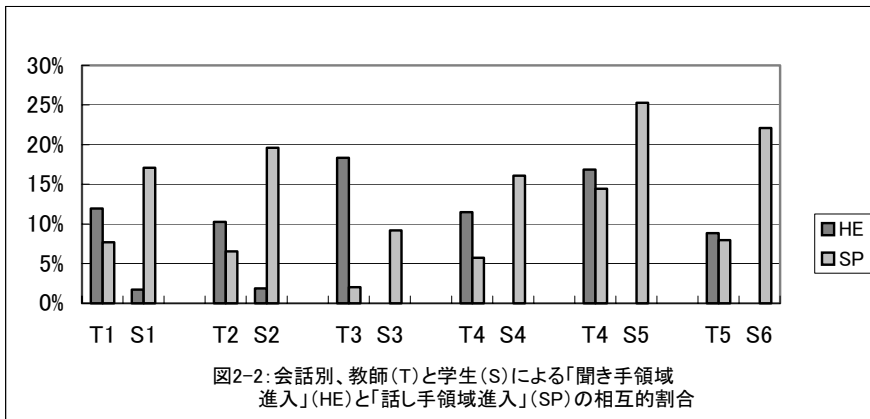


このグラフは、全会話文数から集計した教師と学生が行っている「聞き手領域進入」(HE)

と「話し手領域進入」(SP)という言語行動の割合を示している。論文指導の場面においてもっとも自然な言語使用は、教師による「HE」の頻度が学生より高い、また学生による「SP」の頻度が教師より高いことであるとわかる。このような傾向は、教師は指導を与える側として、学生の「領域」へ進入することが多いと期待され、学生は指導を受ける側として、自分の「領域」へ進入することが多いということで、まさに教師と学生の役割関係をはっきりと反映している。

「SP+HE」ストラテジーに関しては、全会話では、教師には1,6%, 学生には0,4%という結果が得られた。このストラテジーは、ポライトネス理論の立場から見れば、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると言える。具体的には、Brown and Levinson (1987 : 127)において、「SとHの両方を活動に巻き込む」というようなストラテジーで、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの12番に当たる。

以下の図は、収集した12会話の中から6会話を抽出し、各会話における教師と学生による「聞き手領域進入」(HE)と「話し手領域進入」(SP)の割合を示している。



それぞれ各会話を、個別に分析していくと、学生による「HE」の頻度は教師による「HE」の頻度を超えることがない、また教師による「SP」の頻度は、学生による「SP」の頻度を超えることもないという結果が目立っている。もし、教師と学生による「HE」と「SP」の相互関係が、各会話において上のような一定した傾向を見せなかった場合、教師と学生の役割関係はあいまいになり、人間関係を損なう危険性が現れてくるかと思われる。

#### 4.3.2.2. 「ムード」の分析結果と考察：

言語体系上の制約を受けにくく、話者間の上下・役割関係とは関係なしに話題に応じて、発話のポライトネス・レベルを左右する機能を持っているのは、発話の「ムード」であると思われる。

ここでは特に、ポライトネス・レベルを上げる機能を持ち、またネガティブ・ポライト

ネス・ストラテジーの一つとしての仮定法 (SUB) に注目したが、その全会話における割合は 10% であることがわかった。さらに、そのうち、教師の発話は 7%、学生の発話は 3% が「仮定法」だったことがわかった。

## 5. 全体上の考察

### 5.1. 「論文指導の個人面談」という場面の特徴

論文指導の個人面談という場面は、教師と学生の上下・役割関係が言語形式や言語使用において反映されやすい場面だと思われる。また、このようなコンテキストで行われている教師と学生のインターアクションは、フォーマルな性質も持っていれば、フォーマルでない性質も持っている。というのは、会話のコンテキストを構成する社会的要因は、会話のフォーマリテイの度合いを維持するような働きをしている一方、「人と会って、直接話す」という点において、フォーマリテイがなくなるという現象が起きている。このように、各会話においてフォーマルな言語行動とフォーマルでない言語行動は共存し、教師と学生の親疎関係、また毎会話のフォーマリテイの度合いを決定していると思われる。

### 5.2. 言語教育への示唆

鈴木 (1997: 48) によると、日本語学習者の立場から見れば、文末のスピーチレベルは、単純に「丁寧さの度合いが異なる」ものであり、「文末を機械的に変えさえすれば、丁寧さを変えることができるように見える」というような指摘がある。

この問題に関して、鈴木 (1997: 45-46) は、さらに次のような説明をしている：「丁寧さを問題とする際には、普通体で話す『普通体世界』における場合と、丁寧体で話す『丁寧体世界』における場合を、単に言語コードが変わるだけではなく、異なる行動規範に基づく世界として、区別して考える方が説明しやすい」。そこで、「丁寧体世界では、話し手は聞き手の間に一線を引いて、話し手側のことと聞き手側のことを、はっきりと分けることが基本となっている」(鈴木 1997: 56)。また、「丁寧体世界において丁寧さを保つためには<聞き手の領域>に踏み込むことを避け、<聞き手の領域>に言及する場合には、<中立の領域>や<話し手の領域>について述べる形を使うなどの配慮が行われる」(鈴木 1997: 57)。

このことから、日本語とポーランド語の対者敬語を分析する際、あるいは学習者にそれらの使用上の原則を説明する時、「聞き手領域」、「話し手領域」、「中立の領域」という用語を使うことが便利なのではないかと思う。ただ、ポーランド語では、「聞き手領域」(HE)、「話し手領域」(SP) が、言語形式によく反映されているのに対して、日本語ではそれらの使用は言語形式のみから判断しにくいものだと思われる。そこで、学習者は、日本語を話しながら、よく戸惑うことがある。つまり、会話の話題となっている事柄が、「聞き手の領域」に属するか、あるいは「話し手の領域」に属するかというような疑問がいつも残るのである。換言すれば、日本語では、「聞き手領域」と「話し手領域」が言語形式において明示化されていない場合が多く、またその概念の捉え方には日本語とポーランド語の間で異

なるところが見られるので、学習者が思っている「話し手領域」が、実際には「話し手領域」ではなく、「聞き手領域」であった場合、大変な誤解となり、人間関係を損なう危険性がある。

そこで、「丁寧体世界」と「普通体世界」は、人間関係において「ソトの世界」と「ウチの世界」に代表されることを、それらが日本人にとってどのように認識されているかを示す実例を挙げながら、できるだけ具体的に説明する必要があるかと思う。

## 6. 結論及びまとめ

「論文指導の個人面談」という同じコンテキストで行われた日本語とポーランド語の会話の分析結果をもとに、教師と学生が使用する言語行動について以下のようにまとめ、結論する。

- ① 分析が言語形式だけに留まると、言語使用上の制約が見られ、それぞれ言語による特有の言語行動、言語ストラテジーを正當に比較することは不可能となる。
- ② 呼称と2人称代名詞の使用については、ポーランド人教師の使用率は、日本人教師の使用率を大きく上回るという傾向が見られた。
- ③ 疑問文の頻度については、ポーランドの学生が教師に対して、日本の学生より3倍ぐらい疑問文を使用しているという結果が得られた。
- ④ 日本語とポーランド語において、会話者同士の親疎関係、会話のフォーマリテイの度合いを調整する機能をもつ言語行動の様相は異なっている、全会話の結果から見えてくる教師と学生の上下・役割関係に大きい差が見られなかった。しかし、各々の会話の結果をもとに考察した結果、日本語では教師と学生の上下・役割関係がややあいまいになる可能性があるのに対して、ポーランド語では教師と学生によるストラテジーの相互関係は各会話においてははっきりとしており、役割関係はあいまいになりにくいという結論が得られた。

## 参考文献

- 井出祥子・櫻井千佳子（1998）「視点とモダリティ言語行動」『視点と言語行動』、くろしお出版、119-153.
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベル・シフト生起の条件と機能」、学苑第662号、昭和女子大学近代文化研究所、27-42.
- 宇佐美まゆみ（2001a）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構造」『「談話のポライトネス」』（第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書）、国立国語研究所編、9-58.
- 宇佐美まゆみ（2001b）『「ディスコース・ポライトネス」の観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—』『語学研究所論集』、第6号、東京外国語大学語学研究所、1-29.

- 宇佐美まゆみ (2003a) 「異文化接触とポライトネスーディスコース・ポライトネス理論の観点から」, 『対照言語行動学第1回研究会』, 7月12日, 東京外国語大学・本郷サテライト.
- 宇佐美まゆみ (2003b) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2) (研究代表者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」 『視点と言語行動』, くろしお出版, 45-76.
- 益岡隆志 (1998) 『モダリティの文法』, くろしお出版
- 水谷信子 (2002) 『日英比較話し言葉の文法』, くろしお出版
- J.V.ネウストプニー (1999) 『外国人とのコミュニケーション』, 岩波新書
- Brown, P., & Levinson, S.C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B. 1976. Linguistic politeness axes: speaker-addressee, speaker-referent, speaker-bystander. *Pragmatics Microfiche 1.7:A3*. Dept of Linguistics, Univ. of Cambridge.
- Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua*, 8, 223-248.
- Usami, Mayumi. 2002. *Discourse Politeness in Japanese Conversation Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo
- Grzegorzczkova, R. Laskowski, R. Wróbel, H. 1984. *Gramatyka współczesnego języka polskiego. Morfologia*. Warszawa
- Grzegorzczkova, R. 2001. “Kategorie gramatyczne.” w: *Współczesny język polski* pod red. J Bartmińskiego. Lublin: Wyd. Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej 453-467
- Huszcza, R. 1996. *Honoryfikatywność: Gramatyka, Pragmatyka, Typologia*. Warszawa: Wydawnictwo Akademickie Dialog
- Jabłoński, A. 1998. “Japońska grzeczność-nauczanie japońskich wyrażen grzecznościowych z językiem polskim jako źródłowym – zestaw postulatów.” w: *Japonica(9)*. Warszawa: Zakład Japonistyki i Koreanistyki, Instytut Orientalistyczny, Uniwersytet Warszawski. 143-157
- Nagórko, A. 2001. *Zarys gramatyki polskiej (ze słowotwórstwem)*. Wydawnictwo Naukowe PWN

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 携帯電話の会話における開始部と終結部

## —日本人同士と台湾人同士の比較研究を通して—

黄 瓊芸

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

### 1. 目的

現代社会で多用されるコミュニケーション手段の一つとして電話がある。電話は言葉そのものが相手に伝わるため、直接相手に会った時以上に言語行動に配慮しなくてはならない。特に近年、固定電話以上に携帯電話の使用が一般化しており、携帯電話での言語行動を分析することで、現代のコミュニケーション方法の一端が明らかになるのではないかと思う。

携帯電話は固定電話と比べると、簡便性（手軽に電話ができる）、直接性（直接相手につながる）、常態性（何時でも電話がつながる）などの特徴を持っている。さまざまな要因が影響しあって、固定電話と違った携帯電話特有の会話形式が生まれるのではないかと推測される。今までの電話会話の研究では、携帯電話における自然会話研究は少ないのが現状であり、その実態はまだ明らかにされていないように思われる。

本稿では日本人と台湾人の携帯電話での会話の実態を探り、そこから携帯電話の開始部と終結部の構成要素を抽出し、対照研究を通して、それぞれの特徴を明らかにしたいと思う。さらに、対照研究から得られた結果を日本語の会話教育のための教材開発に生かし、改善に貢献できればと思う。

### 2. 本研究で用いた用語の定義

本研究で用いた用語を、先行研究を参考にしながら、次のように定義することとする。

「開始部」— ザトラウスキー（1993）及び今石（1992）などを参考にし、「電話の呼び出しベルが鳴って受け手が受話器を取った瞬間から用件の切り出しまでの部分」を「開始部」と定義する。

「終結部」— Schegloff&Sacks（1973）の定義を参考にし、終結部を次のように定義する。「一話者の発話の完了が、他の話者の話す機会にはならず、また、それがその話者の沈黙としてみなされない段階に会話の参加者が同時に到達すること」と定義する。

### 3. 研究方法

#### 3.1. 実験計画

本稿では、普段携帯電話を使う頻度が高いと思われる親しい間柄の人との携帯電話の内容を研究対象とする。親しい同性同年代の大学生や大学院生2名による携帯電話の内容を、男女各10組ずつ日本人同士と台湾人同士に分けて収集する。協力者にインストラクションを示し、それに従って実行してもらう。携帯電話の内容を携帯電話録音アダプターとテープレコーダーを用い、かけ手と受け手双方の会話を録音する。実験に当たって、会話は自由にしてもらうが、携帯電話で話をする場合、料金を気にして用件だけで電話を終わらせる人が多くなるのではないかと考え、また携帯電話の内容をある程度統一するという目的もあり、会話中に、必ず相手に「言語調査への協力」を依頼してもらうよう事前に断っておく。

#### 3.2. 協力者

携帯電話を使う頻度が高いと思われる親しい友人という設定で、協力者は親しい同性同年代の友人にし、年齢が同じでなくても、お互いに常体で話す、力関係が同等である相手に限定する。また、協力者のデータをある程度統一するため、協力者の身分を大学生や大学院生という設定にする。親しい間柄の日本人同士と台湾人同士の男女10組ずつのデータを集める。日本人の協力者は日本に在住して、東京都内の大学に在籍する20代の大学生・大学院生男性10組・女性10組で、台湾人の協力者は台湾に在住して、台北及び台北近辺地区の大学に在学する20代の大学生男性10組・女性10組である。合計40件の会話で、異なる男女80名である。

#### 3.3. 手続き

協力者に携帯電話をかけるよう依頼をする際、インストラクションを示して、それに従って実行してもらった。インストラクションの一部は下に示している。

- (4) 会話のどこかで相手に**日本語の言語調査に協力してくれるよう依頼してください**。その言語調査の内容については下の(5)を参照にしてください。そのほかは自由に話してもらっても構いません。(ほかに用件がなければ話さなくてもいいです。)
- (5) もし「日本語の言語調査」の内容に関して、相手に聞かれた場合は、以下の内容を答えてください。
- 場面設定：友達が今、言語調査に協力してくれる人を急募している。
- 調査の内容：友人との雑談を録音
- 時間：15分
- 謝礼：500円図書券
- 場所：ゆっくり話ができるところ

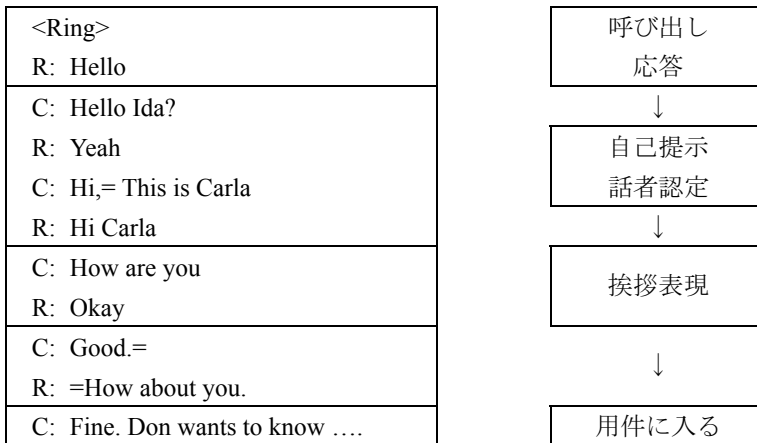
### 3.4. 文字化及びデータの基本情報

収集した会話データ（計 106 分程度）を最初から最後まで全て文字化した。収集した会話の文字化は、「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese : 2003）」宇佐美（2003）に従った。中国語も BTSJ に従って文字化した。

### 3.5. 分析の流れ

携帯電話の全体的構造は、ザトラウスキー（1993）、小野寺（1992）、熊取谷（1992）、岡本（1990）を参考にして、「開始部」「主要部」「終結部」という 3 部に区分する。

まずは、開始部についてである。開始部の構造の基本的枠組みは以下のようになる。

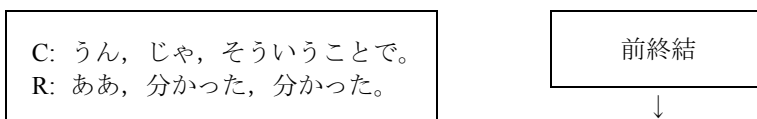


(Hopper 1992: 52, 日本語は筆者による)

上に示した例のように、開始部の構成は (1) 呼び出しー応答 (2) 自己提示ー話者認定 (3) 挨拶表現という順番から成っている。開始部の分析もこの順番で行う。

まず、開始部に関する構成要素のコーディングを行い、(1) 呼び出しー応答については、携帯電話の呼び出しと応答に当たる部分が「第一発話規則」に従うかどうかを調べ、そして、「第一発話の言語形式」の構成要素のバリエーションを示す。次に、(2) 自己提示ー話者認定に関しては、携帯電話の特性を考えて、「名前を言う」という発話に焦点を当て、考察する。続いて、(3) 挨拶表現のところで、挨拶のパターンを見出す。最後は、(4) 用件を切り出すところ、つまり開始部から主要部へ移行する時に伴うディスコースマーカースも分析範囲に入れて、考察してみる。

次は終結部の分析についてである。終結部の構造の基本的枠組みは以下のようになる。





C: うん、よろしくお願ひします。 R: はい。	人間関係最肯定
C: はい、じゃね。 R: バイバイ。 C: バイバイ。	↓ 最終のやりとり

(例は筆者のデータによるもの)

上に示した基本的枠組みのように、終結部を(1)前終結、(2)人間関係再肯定、(3)最終のやりとりという三つに分け、本稿は(1)前終結と(2)人間関係の再肯定という二つの項目を中心に分析を進める。まず、(1)前終結では、前終結の声明を出すパターンを見出し、さらに、前終結の声明を出す際に、つまり主要部から終結部への移行に伴うディスコースマーカがあるかどうか調べてみる。次に、(2)人間関係の再肯定という部分で、別れの挨拶を交わす前に、どのような構成要素を用い、人間関係を補うのかを考察し、分類する。最後に、終結部全体のターン数を調べ、分析してみる。

### 3.5. コーディング

#### 3.5.1. 開始部の構成要素に関するコーディング

##### 3.5.1.1. 「自己提示－話者認定」

本稿では、上に示した分析の流れにそって、それぞれのコーディング項目を立てた。まずは、「自己提示－話者認定」に関してであるが、親しい間柄の携帯電話では既にお互いの電話番号や名前などを知っている状態で電話をかける・受けるという状況にある。このような特徴から考えて、「名前を言うこと」に焦点を当てることにした。「自己提示－話者認定」という段階に「自己提示」と「話者認定」という二つのセルを設け、さらに名前を言った時の、その発話自体が誰からなのか(かけ手から、受け手から)をコーディングした。

以下は「自己提示」と「話者認定」の分類の認定である。

「自己提示」－ 自分の姓、ファーストネームを名乗るもの。

「話者認定」－ 相手の姓、ファーストネーム、あだ名を言って確認するもの。

「自己提示」と「話者認定」がかけ手からなら、Callerの略称の「C」で、受け手からなら、Receiverの略称の「R」というアルファベットの大文字で示し、名前を言うことがなければ、何も示さないことにする。具体例は下に示している。

例(1)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定
1	1	*	TMR06	喂、喂。 (もしもし)		

2	2	*	TMC06	喂, 「TMR06 外號」。 (もしもし, 「TMR06 あだ名」。)		C
3	3	*	TMR06	喔一, 「TMC06 外號」=。 (お一, 「TMC06 あだ名」=。)		R

### 3.5.1.2. 挨拶表現

続いて、「挨拶表現」に関して、Hopper (1992) の「挨拶-挨拶」部分は、吉野 (1994) の「挨拶表現」で示された部分と同じで、吉野 (1994) はさらに挨拶表現の下位項目を分類した。今回は、「挨拶表現」の下位分類も考察するため、吉野 (1994) の「挨拶表現」という用語を用いた。吉野 (1994) では、「挨拶表現」は「あいさつ」、「前回の接触への言及」、「非接触時間への言及」、「健康に関する質問」、「近況に関する質問」、「接触時の状況に関する質問」という六つに分けられ、吉野 (1994) の分類を参考にし、予備調査で考察した結果を合わせて、「挨拶表現」を次のように下位分類した。

表2. 本稿の「挨拶表現」における下位分類

内容からの分類	データからの具体例	
	日本人	台湾人
① 挨拶	こんにちは/どうも	
② 前回の接触への言及	さっきごめんね/お待たせごめんね	你終於接電話囉 (やっと電話でたか) /你剛剛幹嘛不接電話 (何で電話出られなかったの?)
③ 非接触時間への言	久しぶり	
④ 気遣い	今大丈夫?/今時間大丈夫?/今時間平気?/今忙しい?/突然ごめんね/ごめん今大丈夫?/話せる?	你有空嗎? (今暇?) /你現在可以講話嗎? (今話せる?) /有空講電話嗎? (今話す時間ある?) /你現在在忙嗎? (今忙しい?)
⑤ 現在相手の居場所、行動への言及	今外?	你在幹嘛? (何してるの?) /在那裡啊? (どこにいるの?) /你在家嗎? (家にいる?)
⑥ 近況に関する言及	もう帰ってる?	你什麼時候上來? (いつ台北に来るの?)
⑦ 健康に関する言及		

(具体例の空白の部分は今回のデータから見当たらないため)

ほとんどの分類は吉野 (1994) に従って分類したが、吉野 (1994) と異なる分類は「気遣い」と「現在の相手の居場所、行動への言及」という二つを新たに設けたことである。携帯電話の特性である直接性 (直接相手につながる) と常態性 (何時でも電話につながる) を分類の考慮に入れて、移動しながらも携帯電話がつながるという固定電話との違った特

性から考えてみると、吉野（1994）の分類の六番目「接触時の状況に関する質問」をより細かく分類する必要があると思われる。携帯電話の「挨拶表現」の特徴をより見出すため、「接触時の状況に関する質問」を「気遣い」と「現在の相手の居場所、行動への言及」という二つに詳しく分類した。また、今回立てた「前回の接触への言及」は分類の名前自体は吉野（1994）と同じであるが、具体例の性質に関して、今回のデータに応じて、携帯電話の受け手が最初の電話に出られなかったことに対する発言も「前回の接触への言及」に分類した。それぞれの分類がよく理解されるよう、具体例を下に示している。

例（2）→①挨拶

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定	挨拶表現
1	1	*	JMR04	もしもし。			
2	2	*	JMC04	あっ、もしもし、「JMR04名」君。		C	
3	3	*	JMR04	あー、あー。			
4	4	*	JMC04	あっ、「JMC04」です=。	C		
5	5	*	JMC04	=こんにち<は>{<}。			①
6	6	*	JMR04	<は>{>}いはいい。			
7	7	*	JMR04	こんにちは、こんにちは。			①
8	8	*	JMC04	あんと、今大丈夫？。			④

例（3）→②前回の接触への言及

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定	挨拶表現
1	1	*	JMR06	はい、もしもし。			
2	2	*	JMC06	あっ、もしもし。			
3	3	*	JMR06	お、もしもし。			
4	4	*	JMC06	<今大丈夫?>{<}。			④
5	5	*	JMR06	<あ、さっき>{>}は…。			
6	6	*	JMR06	はい、大丈夫。			
7	7	*	JMC06	あ、ごめんね=。			
8	8	*	JMR06	=さっきごめんね=。			②
9	9	*	JMC06	=<いや、とんでもない>{<}。			

例（4）→③非接触時間への言及

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定	挨拶表現
1	1	*	JFR10	もしもし？。			
2	2	*	JFC10	あっ、もしもしー。			

3	3	*	JFR10	おー、久し振りー。			③
4	4	*	JFC10	久し振りー=。			
5	5	*	JFC10	=ね、今大丈夫?。			④
6	6	*	JFR10	うん、ちょっとだけ。			

## 例 (5) →④気遣い

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定	挨拶表現
1	1	*	JFR06	もしもし。			
2	2	*	JFC06	も、もしもし、「JFR06 あだ名」。		C	
3	3	*	JFR06	うん、はいはい。			
4	4	*	JFC06	今大丈夫?。			④
5	5	*	JFR06	うん、大丈夫、大丈夫。			

## 例 (6) →⑤現在の相手の居場所、行動への言及

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定	挨拶表現
1	1	*	JFR04	もしもし。			
2	2	*	JFC04	あっ、もしもし。			
3	3	*	JFR04	はい。			
4	4	*	JFC04	あ、「JFR04 名」ちゃん。		C	
5	5	*	JFR04	うん、<何?><{>。			
6	6	*	JFC04	<あっ、「JFC04 姓」です>>{>。	C		
7	7	*	JFC04	今大丈夫?。			④
8	8	*	JFR04	#####。[電波が悪くて、音が聞き取れない]			
9	9	*	JFC04	あっ、なんか今外?。			⑤
10	10	*	JFR04	外、外、あの一、今、学校向かってんの。			

## 例 (7) →⑥近況に関する言及

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	自己提示	話者認定	挨拶表現
1	1	*	JFR05	はい、もしもし。			
2	2	*	JFC05	あっ、もしもし、「JFR05 名」。		C	
3	3	*	JFR05	うんうんうん。			
4	4	*	JFC05	あ、「JFC05 名」ですけど。	C		
5	5	*	JFR05	久しぶり。			③

6	6	*	JFC05	久しぶり。			
7	7	*	JFC05	えっ、もう帰ってる?。			⑥
8	8	*	JFR05	今ね、まだ「地名」にいる。			

例 (8) →⑦健康に関する言及

今回のデータでは、具体例が見られなかったため、吉野 (1994a) の具体例を参考にすると、この項目に該当するものは「お元気ですか」のような例である。

### 3.5.2. 終結部の構成要素に関するコーディング

本稿では、上の分析の流れで述べたように、終結部の枠組みを「前終結」「人間関係再肯定」「最終のやりとり」という三つに分け、そのうちの「前終結」「人間関係再肯定」という二つに焦点を当て、コーディングする。

#### 3.5.2.1. 「前終結」

ほとんどの分類は吉野 (1994) に従って分類したが、吉野 (1994) と異なる分類は「気遣い」と「現在の相手の居場所、行動への言及」という二つを新たに設けたことである。携帯電話の特性である直接性（直接相手につながる）と常態性（何時でも電話につながる）を分類の考慮に入れて、移動しながらも携帯電話がつながるという固定電話との違った特性から考えてみると、吉野 (1994) の分類の六番目「接触時の状況に関する質問」をより細かく分類する必要があると思われる。携帯電話の「挨拶表現」の特徴をより見出すため、「接触時の状況に関する質問」を「気遣い」と「現在の相手の居場所、行動への言及」という二つに詳しく分類した。また、今回立てた「前回の接触への言及」は分類の名前自体は吉野 (1994) と同じであるが、具体例の性質に関して、今回のデータに応じて、携帯電話の受け手が最初の電話に出られなかったことに対する発言も「前回の接触への言及」に分類した。それぞれの分類がよく理解されるよう、具体例を下に示している。

表 3. 本稿の「前終結」の声明の構成要素の下位分類

内容からの分類	データからの具体例	
	日本人	台湾人
A 終結を導くあいづち・ディスプレイコースマーカー	じゃ/	好/好吧/好啦/好啊/ok
B 総括表現	そういうことだから/そういうことで	先這樣了/就這樣/那先這樣子
C 会話内容や結論から導き出される行動の確認	詳しいこと決まったら、また電話する。	那我再打電話給你
D 会話の始まりや会話中の話題を呼び戻す		趕快去吃飯啦（早くご飯食べて）/

E 会話の流れの調子を変える		
F 外部事情によって一方的に終結を開始する		

(具体例の空白の部分は今回のデータに該当例が見当たらないため)

## 例 (9) →A 終結を導くディスコースマーカ

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
32	30	*	JMC10	じゃ、一応、その、まあ、決まったら、その、少なくとも2週間、1週間ぐらい前には連絡して、確認取るわ。	AC	
33	31	*	JMR10	うん、分かった。		
34	32	*	JMC10	うん、悪かったね、<急に>{<}&#92;		c
35	33	*	JMR10	<はい->{>}&#92;		
36	34	*	JMR10	あ、いいや、いいや。		
37	35	*	JMC10	うんうん。		
38	36	*	JMC10	お、じゃあ。		
39	37	*	JMR10	あ、じゃあ。		
40	38	*	JMC10	うん。		
41	39	*	JMC10	また。		

## 例 (10) →B 総括表現

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
66	65	*	JMC04	うん、じゃ、そういうことで。	AB	
67	66	*	JMR04	ああ、分かった、<分かった>{<}&#92;		
68	67	*	JMC04	<うん、>{>}よろしくお願いします。		d
69	68	*	JMR04	はいー。		
70	69	*	JMC04	はい、じゃね。		
71	70	*	JMC04	バイバイー=。		
72	71	*	JMR04	=バイバイー。		

## 例 (11) →C 会話内容や結論から導きだされる行動の確認

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
32	30	*	JMC10	じゃ、一応、その、まあ、決まったら、その、少なくとも2週間、1週間ぐらい前には連絡して、確認取るわ。	AC	

33	31	*	JMR10	うん、分かった。		
34	32	*	JMC10	うん、悪かったね、<急に>{<}。		c
35	33	*	JMR10	<はいー>{>}。		
36	34	*	JMR10	あ、いいや、いいや。		
37	35	*	JMC10	うんうん。		
38	36	*	JMC10	お、じゃあ。		
39	37	*	JMR10	あ、じゃあ。		
40	38	*	JMC10	うん。		
41	39	*	JMC10	また。		

例 (12) →D 会話の始まりや会話中の話題を呼び戻す

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
59	58	*	TMC08	好啦，好啦，趕快去吃飯啦=。 (うん、じゃ、早くご飯を食べて=。)	AE	
60	59-1	/	TMC08	=好啦，<晚一點>{<},, (=じゃ、<今度>{<},,)		
61	60	*	TMR08	<好，好>{>}。 (<うんうん>{>}。)		
62	59-2	*	TMC08	再找你找你找你打##。 (また##をやるうね。)		a
63	61	*	TMR08	<好啊好啊，沒問題>{<}。 (<うんうん、いいよ>{<}。)		
64	62	*	TMC08	<好好好，byebye>{>}。 (<じゃ、バイバイ>{>}。)		
65	63	*	TMR08	<好，byebye>{<}。 (<うん、バイバイ>{<}。)		
66	64	*	TMC08	<好，byebye>{>}。 (<うん、バイバイ>{>}。)		

例 (13) →E 会話の流れの調子を変える

この項目は、今回のデータでは見られなかった。岡本 (1991) の説明を参考にすると、この項目は、「殺し文句」または「落ち」をつけることによって、会話の流れの調子を変え、終結部への移行の意思表示をするものである。

例 (14) →F 外部事情によって一方的に終結を開始する。

今回のデータでは、この項目も見当たらなかったため、藤原 (1998) の例から取り上げると、「長くなると悪いから」「もう家出なあかんねん」などがこれに該当する例である。

### 3.5.2.2. 「人間関係再肯定」

次は、「人間関係再肯定」についてである。岡本（1991，1992）と藤原（1998）とを参考にし、今回の「人間関係再肯定」の下位分類をより詳しく分類するため、藤原（1998）の分類に倣い、コーディングした。本稿の「人間関係再肯定」の下位分類は以下ようになる。しかし、より簡単に分類の名前を表現するため、藤原（1998）の「接触継続についての言及」を「再接触の約束」という分類名に変更し、コーディングした。それぞれの会話の具体例を表の下に示す。

表 4. 本稿の「人間関係再肯定」の構成要素の下位分類

内容からの分類	データからの具体例	
	日本人	台湾人
a 再接触の約束	また遊びましょう/また明日	我要出去玩再找你（遊びに行くなら、また誘うから）/我再打電話給你（また電話する）
b 感謝の表明	ありがとう	謝啦（ありがとう）
c 謝罪	ごめんね、時間取っちゃって/悪かったね、急に/	
d 依頼表現	よろしくお願いします	
e 相手の健康・幸せについての配慮		祝你工作順利囉（バイトうまくいくといいね）
f 伝言	「名前」によろしく	
g 相手・互いに対する励まし	頑張ってよ	
h 互いの出会いの喜びの表明	また会うのを楽しみに	

（具体例の空白の部分は今回のデータに該当例が見当たらないため）

#### 例（15）→a 再接触の約束

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
50	49	*	JFC07	じゃ、また明日。	A	a
51	50	*	JFR07	うん。		
52	51	*	JFC07	うん。		
53	52	*	JFC07	じゃね。		
54	53	*	JFR07	はいはい。		
55	54	*	JFR07	<はい>{<}</td> <td></td> <td></td>		
56	55	*	JFC07	<うん>{>}。		



## 例 (16) →b 感謝の表明

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
113	106	*	JFC01	はい、じゃ、そういう、そういうことで。	AB	
114	107	*	JFR01	はい、じゃ。		
115	108	*	JFC01	うん。		
116	109	*	JFR01	ありがとうね。		b
117	110	*	JFC01	ううん。		
118	111	*	JFR01	<バイバイ>{<}。		
119	112	*	JFC01	<じゃね>{>}。		

## 例 (17) →c 謝罪

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
50	49	*	JFC05	じゃ、お願いします。	A	d
51	50	*	JFR05	はい。		
52	51	*	JFC05	=じゃ、ごめんね、時間取っちゃ<って>{<}。		c
53	52	*	JFR05	<じゃ>{>}ーねー。		
54	53	*	JFC05	はい、じゃーねー。		
55	54	*	JFR05	はいー。		

## 例 (18) →d 依頼表現

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
36	36	*	JMC02	うん、じゃ、また後日連絡しますので。	AC	
37	37	*	JMR02	うん、分かつた>{<}。		
38	38	*	JMC02	<はい>{>}、よろしくお願いします。		d
39	39	*	JMR02	はいー。		
40	40	*	JMC02	はい。		

## 例 (19) →e 相手の健康・幸せについての配慮

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
74	71	*	TFC03	<那, 那好, >{>} 那我看什麼時候有時間, 我在打電話給跟你講。 (<うん、じゃ、>{>} 時間あつたら、また電話するから。)	AC	

75	72	*	TFR03	好啊。 (うん。)		
76	73	*	TFC03	嗯，好不好，那，那就祝你打工順利喔〈邊說邊笑〉。 (うん、じゃ、バイトがうまくいくといいね<笑いながら>。)		e
77	74	*	TFR03	謝謝，謝謝。 (ありがとう。)		
78	75	*	TFC03	好，不客氣，好，那就先這樣囉。 (ううん、じゃ、そういうことで。)	AB	
79	76	*	TFR03	好一。 (うん。)		
80	77	*	TFC03	嗯，好，<byebye>{<}。 (うん、<バイバイ>{<}。)		
81	78	*	TFR03	<好，>{>} byebye。 (<うん、>{>} バイバイ。)		
82	79	*	TFC03	嗯。 (うん。)		

## 例 (20) →f 伝言

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
62	62	*	JFC08	じゃ、そういうことで。	AB	
63	63	*	JFR08	うん、<分かった>{<}。		
64	64	*	JFC08	<うん、>{>}<はいー>{<}。		
65	65	*	JFR08	<はい>{>}。		
66	66	*	JFC08	<じゃね>{<}。		
67	67	*	JFR08	じゃ、<「JFC08 の妹の名前」>{>}ちゃんに<よろしく>{<}。		f
68	68	*	JFC08	<はい>{>}。		
69	69	*	JFC08	<うん>{<}。		
70	70	*	JFR08	<はい>{>}。		
71	71	*	JFC08	バイバイ。		
72	72	*	JFR08	はい、バイバイ。		

## 例 (21) →g 相手・互いに対する励まし

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
137	133	*	JMC06	じゃ、頑張ってよ、頑張ってよ<ていうか、>{<}<笑い>。	A	g
138	134	*	JMR06	<はい、>{<}<笑い>。		
139	135	*	JMR06	あ、じゃ、また連絡。	A	a
140	136	*	JMC06	そうだね、悪いね。		c
141	137	*	JMR06	うん。		
142	138-1	/	JMC06	またじゃ、		
143	139	*	JMR06	はいはい。		
144	138-2	*	JMC06	ちょっと連絡します。		a
145	140	*	JMR06	はいー。		
146	141	*	JMC06	うん。		
147	142	*	JMR06	<じゃまた>{<}。		
148	143	*	JMC06	<じゃまた>{>}ねー。		
149	144	*	JMR06	はいー。		
150	145	*	JMC06	じゃね。		
151	146	*	JMC06	はー<い>{<}。		
152	147	*	JMR06	<はーい>{>}。		

## 例 (22) →h 互いの出会いの喜びの表明

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	前終結	人間関係再肯定
171	165	*	JFC02	うん、じゃ、また、10月に会えるのを<楽しみに>{<}。	A	h
172	166	*	JFR02	<うん、>{>}ありがとね、<電話、本当に>{<}。		b
173	167	*	JFC02	<うん、ありがとう、うん、>{>}ごめんね、(うん) 突然電話しちゃって。		bc
174	168	*	JFR02	う<うん>{<}。		
175	169	*	JFC02	<はい>{>}。		
176	170	*	JFC02	<うん>{<}。		
177	171	*	JFR02	<じゃあ>{>}、また (うん) 10月にね。	A	a
178	172	*	JFC02	そうだね、じゃね。		
179	173	*	JFR02	うん。		
180	174	*	JFC02	うん。		
181	175	*	JFR02	<バイバーイ>{<}。		
182	176	*	JFC02	<バイバーイ>{>}。		

## 4. 結果と考察

本稿では、英語の電話会話と日本語の電話会話の先行研究に従って、携帯電話の全体構造を「開始部」「主要部」「終結部」という三つに分けることとした。ここでは、開始部、終結部、終結部におけるターン数という三つに分けてそれぞれを分析することとする。以下は結果と考察及び会話教育に取り入れられる点について考えてみた。

### 4.1. 開始部

#### 4.1.1. 開始部の構成要素

携帯電話の開始部について、まず、携帯電話の構成要素の基本的枠組みを一覧し、さらに、開始部を構成する「呼び出し－応答」、「自己提示－話者認定」、「挨拶表現」という三つをそれぞれ分析し、考察する。最後に、開始部が終わって「用件に入る」時の、つまり、開始部から主要部への移行に伴うディスコースマーカーについても分析対象に入れて考察する。

##### 4.1.1.1. 開始部の構成の基本的枠組み

日本人と台湾人の開始部における構成の基本的枠組みは同じであり、「呼び出し－応答」、「自己提示－話者認定」、「挨拶表現」という順番の開始部構成要素から成っていることと、親しい間柄では以上の三つの中の、「挨拶表現」を省略し、すばやく「用件に入る」形式もあることが分かった。学習者に電話会話の開始部の基本的枠組みを紹介することで、学習者が開始部に対する全体的なイメージを掴むことができると考えられる。

##### 4.1.1.2. 呼び出し－応答

携帯電話のベルの音や振動などが「呼び出し」で、最初の発話が「呼び出し」に対する「応答」である。ここで、「電話を受けた人が最初に話す」という Schegloff が名づけている「第一発話の分布規則」(distribution rule for first utterance) に焦点を当て、次に、「応答」という第一発話の言語形式を見てみることにする。結果から見ると、まず、日本人、台湾人とも「第一発話の分布規則」に従うことが分かった。次に、「第一発話の言語形式」に関して、台湾人の全てのバリエーションには「喂」(wei) が含まれているが、日本人は「もしもし」と「はい」の組み合わせによるバリエーションで全ての発話パターンを網羅していることが分かった。台湾人の学習者にとって既に「喂」(wei) と同じような機能である「もしもし」という言葉には馴染んでいると思われるので、さらに、自然会話のデータを通して、「もしもし」と「はい」の組み合わせによる他の「第一発話の言語形式」のバリエーションも提示することができれば、より自然な日本語習得に役立つのではないかと考えられる。

##### 4.1.1.3. 自己提示－話者認定

携帯電話の開始部で自己提示と話者認定がどのように行われているかについてを、「名前を言うこと」に焦点を当てて分析した。その結果として、7 種類の分類の仕方を挙げる事ができた。それぞれの略称の示す内容を下の表に示している。

表 5. 「自己提示－話者認定」の分類の結果

自 C	自己提示 C
自 R	自己提示 R
話 C	話者認定 C
話 R	話者認定 R
なし	自己提示と話者認定なし
話 C+自 C	話者認定 C+自己提示 C
話 C+話 R	話者認定 C+話者認定 R

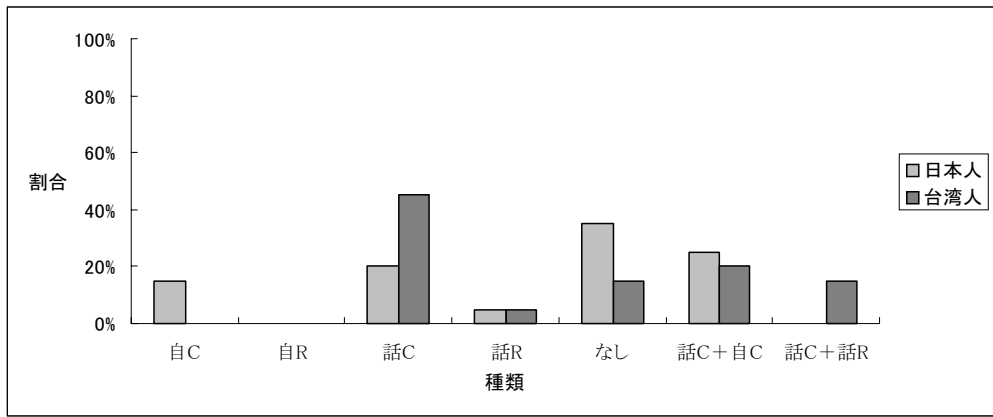


図 1. 日本人と台湾人の「自己提示－話者認定」の会話数と割合

携帯電話特有には相手の名前を知りながら電話を受けるという前提があるので、「自己提示－話者認定」の段階で、かけ手、受け手がともに名乗ったり、相手の名前を言って確認したりすることのない「なし」類が日本人、台湾人の両方で用いられていることが分かった。携帯電話を用いることによって、「自己提示－話者認定」のパターンが多少変わってくるのではないかと考えられる。また、日本人はかけ手から名乗る、「自己提示 C」を多く使用しているが、受け手から名乗る、「自己提示 R」は使用されていないことが分かった。これは従来 of 家庭用の固定電話研究の結果との違いの一つと言えるだろう。学習者にこのような実際にあった会話のデータを提示することで、より一歩日本人が今現在使用している言葉に近づくのではないかと考えられる。また、台湾人は、「自己提示 C」と「自己提示 R」の 2 つを用いていないことが分かった。このような文化の違いによる差を念頭に置いて、学習者にこの違いに注意するよう指導すると、日本語習得にも役立つのではないかと考えられる。

#### 4.1.1.4. 挨拶表現

携帯電話の開始部で、「自己提示－話者認定」をしてから、最初的话题に至るまでに現れる「挨拶表現」の要素の順序を整理すると、概ね下の表に見られるような順序が観察された。

表 6. 「挨拶表現」の順序と種類

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
順序	1. 挨拶	○	○							×
↓	2. 前回接触/非接触時間への言及			○	○	○				×
↓	3. 気遣い		○	○			○	○		×
↓	4. 現在相手の居場所、行動への言及				○			○	○	×
↓	5. 近況に関する言及					○				×

携帯電話の開始部を構成する三つ目の部分「挨拶表現」は上の表に示したように、1.挨拶から5.近況に関する言及という順序で構成されている。また、それぞれの項目の有無によって、①から⑨までの九種類のパターンに分けることができる。

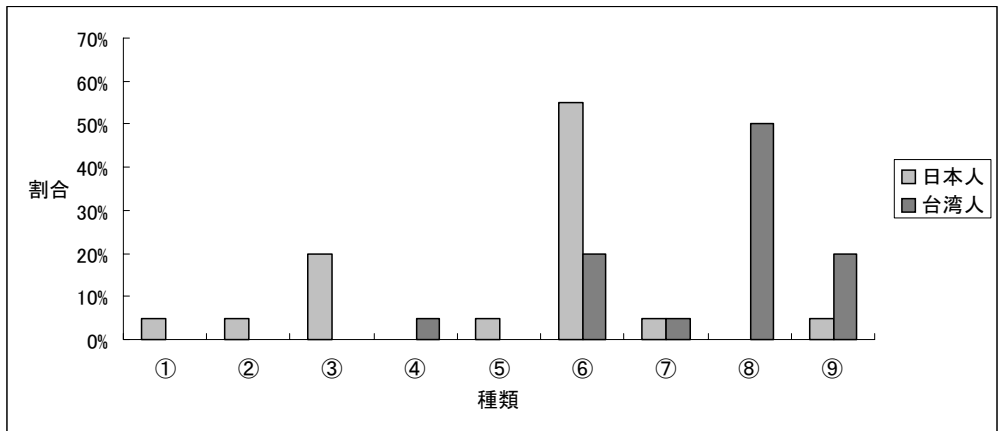


図 2. 日本人と台湾人の「挨拶表現」の順序に関する会話数と割合

日本人は九パターンのうち、七種類を用いており、そのうち最もよく使われているのが、⑥「気遣い」の項目であった。台湾人は、九パターンのうち、五種類を用い、中でも⑧「現在の相手の居場所、行動への言及」が一番多くの割合を占めている。

挨拶表現では、日本人は「気遣い」、台湾人は「現在の相手の居場所、行動への言及」を一番多く使用していることが分かった。学習者に携帯電話での挨拶表現を教える際、日本人の「気遣い」表現を強調し、自然会話データの例から日常生活で日本人がよく使うこのような言葉を学習者にできるだけ多く教えて意識させる。そして、台湾人が多用する「現在の相手の居場所、行動への言及」を、日本人はあまり使用しないということを説明し、日本人が使用する自然会話の例を示すことで、学習者は効率的に自然な口語を習得できるのではないかと考えられる。

#### 4.1.1.5. 開始部から主要部への移行に伴うディスコースマーカ

これからは、開始部から主要部に入る際、話題を切り出すシグナルとしてのディスコースマーカを見てみることにする。

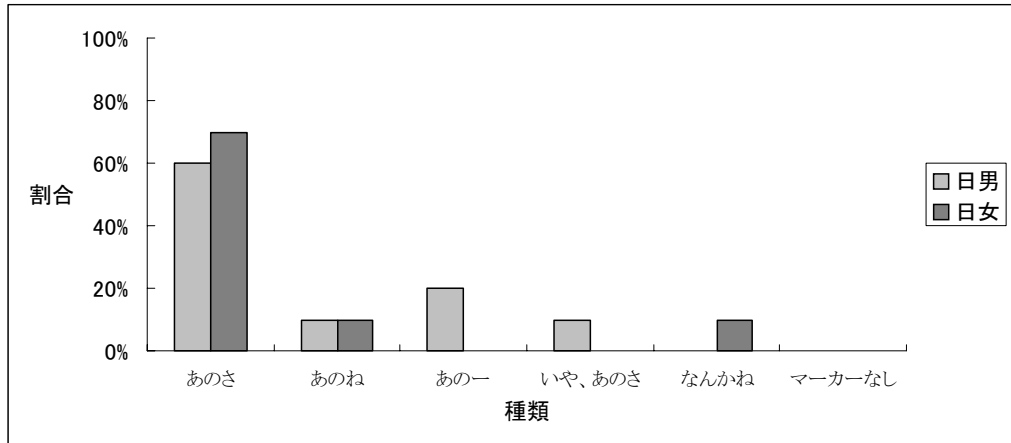


図3. 日本人の男女別に見た開始部におけるディスコースマーカ

携帯電話の開始部から主要部に入る際に用いられたディスコースマーカに関して以下のようにまとめられる。日本人は20件のデータのうち、「あの」系が90.0%も会話で使用され、非常に高い割合を占めている。「あの」系の「あのさ」「あのね」「あの一」という三つのうち、「あのさ」が男女ともによく使われていて、それぞれ60.0%、70.0%という高い割合を示している。

台湾人によく使われている「なし」類は、日本人では一度も使用されていないことも分かった。自然会話のデータを学習者に提示することで、一般に日本語教材で紹介されている「あの一」という表現だけでなく、今日本人の大学生の間でよく使用されている「あのさ」「あのね」なども一緒に学習することができるのではないかと考えられる。さらに、台湾人はディスコースマーカなしで話題に入ることもあるので、日本語ではディスコースマーカなしという場合が少ないことを、台湾人の学習者に説明したほうが違和感のない日本語を習得することに役に立つと思われる。

## 4.2. 終結部

### 4.2.1. 終結部の構成要素

本節では携帯電話の終結部を取り上げたいと思う。まず、携帯電話における終結部の構造の基本的枠組みについて述べ、さらに、終結部を構成する「前終結」、「人間関係再肯定」「最終のやりとり」という三つに分け、その中の「前終結」、「人間関係再肯定」に焦点を当て、分析していく。最後に、主要部から終結部へ移行する際に用いたディスコースマーカも分析対象に入れて考察する。

#### 4.2.1.1. 終結部の構造の基本的枠組み

今回、携帯電話のデータを取る際に指示したのは、会話の中で必ず「雑談を録音する」ことを受け手に依頼する、ということだけであり、全体の会話の中のどこでその話題を持ち出すのか、つまり、この依頼の用件を会話のどこで切り出すのかということは全てかけ手に委ねられていた。そのため、会話の構成もそれぞれ異なっており、どのように会話の終結部を迎えるのかという点についても当然様々なバリエーションがあると考えられる。さらに、先行研究のところでも述べたように、「終結部」の中の、「前終結の声明」と「人間関係再肯定」の境界をはっきり区別することは非常に困難であり、「前終結声明」と「人間関係再肯定」の要素が多様な形で、組み合わせられ、最終的に「終結部」を完結させていることも今回の分析で分かった。

#### 4.2.1.2. 前終結の声明の構成要素について

日本人と台湾人では「前終結の声明」を出す際に、同じようにディスコースマーカが多用されていることが分かった。日本人、台湾人とも「マーカ+結論からの行動の確認」というような構成要素をよく用いるという特徴も見られた。自然会話のデータを学習者に提示し、日本人の「前終結の声明」の特徴を学習者に注意してもらおうと、学習の効果も上がるのではないかと考えられる。また、台湾人の場合はディスコースマーカ「好」(hao)だけで、「前終結の声明」になりうるが、日本人のデータではディスコースマーカだけで、終結部への意志表明をする例は見られなかった。

#### 4.2.1.3. 人間関係再肯定

「人間関係再肯定」は、会話を終わらせようとすることによってもたらされる会話者間の関係に与えるマイナスの影響を補おうとする機能であるため、会話内容や状況によって、かけ手と受け手両方から、「人間関係再肯定」の構成要素を用いる可能性があると考えられる。従って、以下の結果<sup>1</sup>の分類では、かけ手と受け手を分けて見ることとする。それぞれ分類に当てた英語小文字が示す構成要素の種類は下のようになる。

表7. 「人間関係再肯定」の構成要素の記号と種類

a 再接触	c お詫び	e 幸せを祈る	g 励まし
b 感謝	d 依頼	f 伝言	h 出合いの喜び

<sup>1</sup> 「人間関係再肯定」の統計の算出において、分母は終結部の総発話文数である。



## 【かけ手】

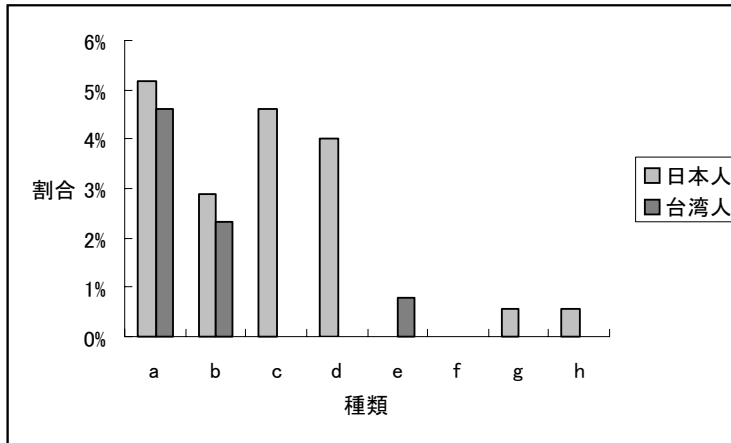


図 4. 日本人と台湾人のかけ手における「人間関係再肯定」の構成要素

## 【受け手】

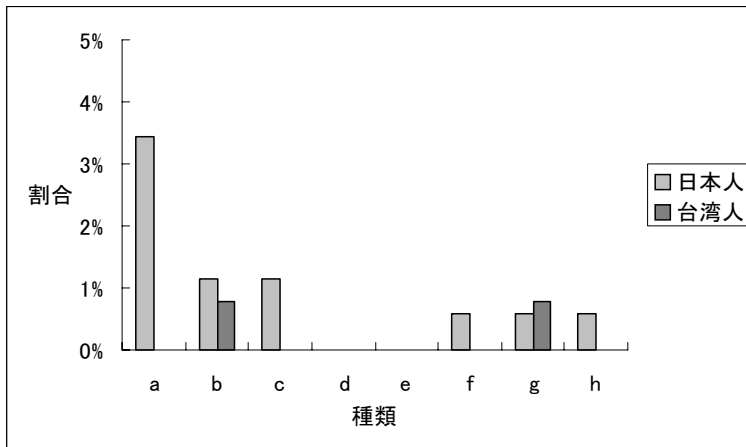


図 5. 日本人と台湾人のかけ手における「人間関係再肯定」の構成要素

人間関係再肯定の使用頻度に関して、日本人、台湾人とも C (Caller) のほうが R (Receiver) より使用する回数が多かった。さらに詳しく見ると、C に関しては、日本人の使用頻度は台湾人より高いことが分かった。また、R に関しては、日本人が高い使用頻度である一方、台湾人は僅かな頻度しか使用していないことが分かった。今回の調査は、C が「言語調査」への協力を R に頼むという設定であったため、C から R へ「言語調査」に関して再び連絡するという内容がよく見られた。結果として C からの「人間関係再肯定」の使用が R より多くなったというのは、このような調査の設定と多少関連しているのではないかと考えられる。

構成要素の種類については、C, R に関わらず、日本人のほうが台湾人よりもさまざまな種類の構成要素を使用していることが分かった。そして、日本人が用いた構成要素の種類のうち、最もよく使われている「お詫びの表明」と「依頼表現」は、台湾人のデータでは見られなかった。学習者に文化面の違いを説明し、自然会話データを学習者に提示しながら、日本人の普段使っている「お詫びの表明」と「依頼表現」の例を挙げて、生きた日本語に触れさせることが日本語学習に役立つと思われる。

#### 4. 2. 1. 4. 主要部から終結部への移行に伴うディスコースマーカ―

「前終結の声明」で述べたように、「前終結の声明」はディスコースマーカ―とともに用いられることが多いという結果であった。従って、ここでは、その主要部から終結部に移行する際に用いるディスコースマーカ―について、見てみることにする。

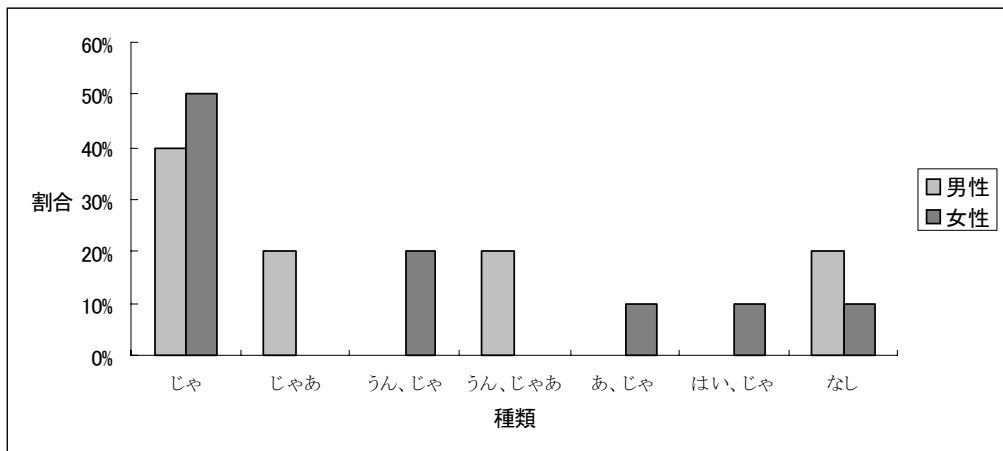


図 6. 日本人の男女別に見た終結部のディスコースマーカ― II

日本人は 20 件のデータのうち、「じゃ」系が 85.0%もの会話で使用され、非常に高い割合を占めている。「じゃ」系には様々な形があるが、そのうち、「じゃ」が男女ともによく使われていて、それぞれ 40.0%, 50.0%という高い割合を占めている。今石 (1992) は日本語電話の特徴の一つとして、「じゃあ」などを使って、相手に終了部への移行を伝えると指摘しているが、今回の携帯電話の結果も固定電話と同じような結果が得られたと言える。

一方、台湾人の中国語のディスコースマーカ―は、「好」(hao) 系が一番高い割合を占めていて、80.0%の会話で用いられたことが分かった。また、「好」(hao) 系のうち、「好」(hao) と「好啦」(hao la) という二種類はともに 35.0%を占め、一番高い割合で使用されていることが分かった。久下 (1994b) は中国語の電話会話の終結部の「前終結の声明」に焦点を当て、中国語の「好グループ」が「前終結の声明」として働くことを指摘している。今回の中国語の携帯電話のデータでも同じような結果が得られた。

#### 4.2.2. 終結部のターン数

終結部の長さとは、「前終結の声明」が現れてから、最終発話交換の終了までの部分のことであり、その部分の会話のターン数を調べることにする。結果は以下に示す。

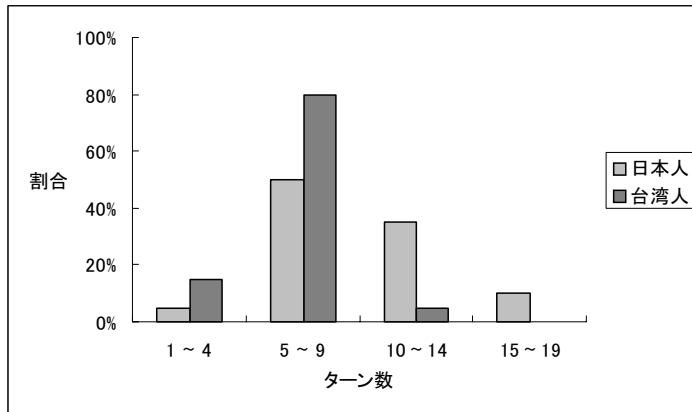


図7. 日本人と台湾人の終結部のターン数

日本人、台湾人ともに 5～9 までのターンが最も多く見られ、会話のそれぞれ 50.0%、80.0%を占めている。その次に多いのは、日本人では 10～14 までのターン数の 35.0%、台湾人では、1～4 までのターン数の 15.0%であった。日本人のターン数のほうが台湾人よりも多く、よって、日本人の終結部の長さも台湾人より長いということが分かった。

また、男女差に関しては、日本人男性の場合、5～9 までのターン数が最も多く 70.0%を占めている一方、日本人女性では、10～14 までのターン数が多く見られ、60.0%となっている。さらに、日本人女性には、1～4 までのターン数が見られなかったという特徴も挙げられる。つまり、日本人女性は男性よりもターン数が多いということが分かった。台湾人の場合には、男女による違いはあまり見られなかった。台湾人男女とも 5～9 までのターン数が最も多く、それぞれ 70.0%、90.0%の割合を占めている。

このような対照研究を通じて得られた結果から、日本人のほうが終結部のターン数が多い、つまりかけ手と受け手の共同作業が多いということを学習者に伝えることで、会話の終わりが無愛想にならないような会話運びを習得することにも役立つのではないかと考えられる。

#### 5. 会話教育への示唆

本稿では日本人と台湾人の携帯電話での会話の対照研究を通して、それぞれの特徴を明らかにし、会話教育という観点から考察した。このような自然会話のデータから得られたものを会話教育に取り入れることで、会話教材開発や改善に貢献できればと思う。

## 参考文献

- 今石幸子 (1992) 「電話の会話のストラテジー」『日本語学』11 卷 9 号, 明治書院, 65-72.
- 伊藤芳弥 (2003) 『チャットの会話における開始部と終結部—友人同士よる一対一のチャットを対象として—』お茶の水女子大学修士論文
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) (研究代表者: 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書, 4-21.
- 岡本能里子 (1990) 「電話による会話終結部の研究」『日本語教育』72, 日本語教育学会, 145-159.
- (1991) 「会話終結の談話分析」『東京国際大学論叢商学部編』44, 東京国際大学, 145-159.
- 小野寺典子 (1992) 「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』第 11 卷 10 号, 明治書院, 26-38.
- 久下恵子 (1994) 『中・日電話会話ストラテジー対照研究—終結部を中心に』東呉大学日本文化研究所修士論文
- 熊取谷哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』第 11 卷 10 号, 明治書院, 14-25.
- ザトラスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 藤原智栄美 (1998) 「電話会話における終結部構造の日米比較」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第 2 号 pp1-15
- 林 美善 (2001) 「電話会話の終結部に現れる日韓の相違に関する一考察—日韓の 20 代の親しい友人同士の電話会話から—」『言語文化と日本語教育』第 22 号, お茶の水女子大学日本言語文化学部研究会, 78-91.
- 吉野文 (1994a) 「電話の会話の開始部に関する研究」お茶の水女子大学修士論文
- (1994b) 「電話の会話におけるかけ手と受け手の言語行動—開始部を中心として—」『言語文化と日本語教育』7, お茶の水女子大学日本言語文化学部研究会, 1-13.
- 梁長歳 (2001) 「日中対照会話分析—電話会話の開始部と終結部を通して—」『神戸外国語大学研究科論集』第 4 号, 神戸外国語大学大学院外国語研究科.
- (2002) 「日中対照会話分析—電話会話における主要部切り出し談話標識を通して—」『神戸外国語大学研究科論集』第 5 号, 神戸外国語大学大学院外国語研究科, 45-59.
- Clark, H. H. & French, J. W. 1981. Telephone goodbyes. *Language in Society*, 10 (1), 1-1.
- Hopper, R. 1992. *Telephone conversation*. Bloomington: Indiana University Press.
- Shegloff, E. A. & Sacks, H. 1973. Openings up Closings, *Semiotica*, 8, 289-327.

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 談話レベルからみた依頼に対する「断り」の 言語行動について

## 一日本人大学生と台湾人大学生との比較一

施 信余

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

### 1. はじめに

本研究では、日本人と台湾人によるある特定の場面での言語行動の共通点と相違点を探るため、依頼に対する「断り」に焦点を当て、分析する。「断り」という言語行動は、相手の好意や依頼に対して「その意に沿えない」という気持ちを相手に理解してもらおう行動であり、その行動自体が相手の心情を害し、人間関係を損なってしまう危険性を伴うものである。したがって、「断り」を行う際、話し手は、「断り」を達成するほかに、円滑な人間関係を維持するため、相手に不快な思いをさせない配慮が必要であると言われてきた。このような相手のフェイスを脅かす行為<sup>1</sup>である「断り」に対して、日本人と台湾人はいかに反応しながら会話を進めているのかに注目する。

これまでの「断り」に関する先行研究は、主に調査紙を用いた談話完成テスト (Discourse Completion Test ; 以下 DCT)<sup>2</sup> やロールプレイなどの方法で調査がなされており、実際の会話における「断り」には焦点を当てていない。しかもこれらの研究は、断る側の一発話ずつのやりとりを分析対象としているものが多く、談話レベルでの「断り」という言語行動は注目されていない。また、筆者が調べたところ、中国語における自然会話分析 (特に台湾人<sup>3</sup>を対象としたもの) は未だほとんど行われていないため、台湾人の実際の言語行動の特徴を探ることは有意義な試みであると考えられる。

したがって、本研究では、日本人同士と台湾人同士の自然会話における依頼に対する「断

<sup>1</sup> Brown&Levinson (1987) は、人間がもつ基本的な欲求として、フェイスの概念を提示している。フェイスには、他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがある。これらのフェイスを脅かす行動を FTAs (Face Threatening Acts) と呼ぶ。「断り」は依頼者の欲求に否定的に答えることであり、依頼者のポジティブ・フェイスを脅かすことになりうるため、FTA の一種であると言われている。

<sup>2</sup> 談話完成テスト (Discourse Completion Test: DCT) とは、被験者にあらかじめ設定された状況を与え、実際にその状況に置かれた場合、被験者ならどのように答えるかを、空欄に書いてもらうものである。

<sup>3</sup> Liao (1994) は、中国語 (Mandarin Chinese) は中国国内だけではなく、香港、シンガポール及び台湾でも一般に使われているが、地理上と政治上の違いにより、これらの四つの地域は、ポライトネスの社会語用論の面では独立して発達してきたと指摘している。

り」を談話レベルから分析し、日本人と台湾人がどのように断りをしているのかを探り、その共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

## 2. 本研究における「断り」行動の定義について

本研究では、特に「依頼に対する断り」に絞り、また、「断り」を、「依頼を受けたあとから、その話題が終わるまでの、断る側がとる一連の言語行動」と定義する。これは、ただ「断り」を達成するために用いるストラテジーを指しているのではなく、依頼側との人間関係を維持するためにとる様々な言語行動も含んでいることを意味する。

## 3. 研究方法

### 3.1. データの収集方法—電話会話

#### 3.1.1. 被験者

日本人 52 名（依頼をする側の被験者 13 名、依頼をされる側の被験者 39 名）、台湾人 52 名（依頼をする側の被験者 13 名、依頼をされる側の被験者 39 名）の 104 名を被験者とした。日本人の被験者は日本に在住して、東京都内の大学に在籍する 18-23 歳の大学生、あるいは大学院生<sup>4</sup>で、台湾人の被験者は台湾に在住して、台北地区の大学に在学する 19-24 歳の大学生あるいは大学院生で、全員女性である。

#### 3.1.2. 実験手順

実験者が依頼をする側の被験者に、普段気軽にものを頼めるような、ある程度親しい関係をもつ同性友人の中から学校の「先輩」・「同級生」・「後輩」<sup>5</sup>を、一人ずつ選んで、それぞれの相手に携帯電話から電話をかけて、あらかじめ決めた「依頼内容」に従って依頼してもらった。

「依頼内容」は、友人に、明日の午前中に自分の代わりに自分の男友達と一緒に国立国語研究所<sup>6</sup>に行って言語調査に関する実験に参加してもらうことに設定したが、その詳細な内容や会話の順序については、依頼をする側の被験者に任せることにした。

依頼をする側の被験者に修士論文執筆のために会話を録音させてほしいという旨を伝えて、携帯電話による会話内容のすべてをテープレコーダー、あるいはボイスレコーダーで録音した<sup>7</sup>。

---

<sup>4</sup> 依頼をされる側の被験者のうち、日本人大学院生（1年生）と台湾人大学院生（1年生）がそれぞれ 1 名いる。そのほかの被験者は全員大学生である。

<sup>5</sup> 今回は、「学年の差」による影響については言及しない。

<sup>6</sup> 中国語の場合は、「国立国語研究所」の代わりに、「国立国語研究所」と性質的に似ていて（研究機関）、都心から少し離れている場所にある「中央研究院」にした。

<sup>7</sup> 携帯電話とテープレコーダー（あるいはボイスレコーダー）を接続し録音するためのアダプターを通して、被験者双方の発話を録音する。

また、実験終了後、修士論文のデータとして使うための実験だったということを、依頼をされる側の被験者に告げ、承諾を得た。そして、被験者双方にフォローアップ・アンケートを記入してもらった。日本語におけるフォローアップ・アンケートは、依頼をする側用と依頼をされる側用の2バージョンに分けて、相手との親しきや録音されていること、与えられた依頼内容についての質問、また、被験者の背景に関する質問を設けたものを使う。また、中国語のフォローアップ・アンケートに関しては、同じ内容を筆者が中国語に訳したものを使用する。

実験を行った期間に関しては、日本人の場合は2003年7月であり、台湾人の場合は2003年8月である。依頼をする側の被験者に静かな場所から、できるだけ相手とゆっくり話せる時間に携帯電話で実験を行ってもらって、日中両言語の会話各39例を集めた。

## 3.2. 分析方法

録音した会話（計170分程度）を「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」（宇佐美2003）に従い、電話会話ごとに文字化する。

また、文字化した発話を数量化し、定量的分析ができるように、電話会話から「断り談話」を認定し、「断り談話」の構成要素を分類項目別にコーディングする。

コーディングの信頼性は、第一認定者と第二認定者（Second Coder）<sup>8</sup>の間の判定の一致率にて判断する。また、コーディングだけでは見逃しやすい発話の特徴は、文字化したデータと二次的データであるフォローアップ・アンケートから確認・検討し、分析結果に用いる。

### 3.2.1. コーディング項目の定義

得られた会話の文字化資料を、以下のコーディング項目に従って分析を行う。

#### 3.2.1.1. 電話会話における依頼に対する「断り談話」について

本研究は、ザトラウスキー（1993）の定義に従い、電話の呼び出し音がなってから、二人の会話が終わり電話を切るまでの一連の「会話」を1単位の電話の「会話」として考える。また、電話会話において、依頼に関する最初の発話から、依頼についての話題が終わるまでのやりとりを、一つの「断り談話」とする。以下では、それぞれ「断り談話」の起点と終点にあたる「『断り談話』のはじめとなる発話」及び「『断り談話』のおわりとなる発話」について詳しく説明する。

「断り談話」のはじめとなる発話（「A」）：

電話会話の開始部<sup>9</sup>が終わった直後に、「注意喚起」「前置き」「見込みの確認」など

<sup>8</sup> 第一認定者は筆者であるが、第二認定者は中村美保氏（日本語会話の部分）、謝韞氏（中国語会話の部分）である。

<sup>9</sup> Schegloff (1968)によると、電話会話の「開始部」は、「呼び出しに対する答え」、参加者の「自己提示」とその「了解」・「挨拶」からなるという。

の「依頼発話」までの依頼側の会話展開に関わる項目<sup>10</sup>や「依頼発話」のうちのどれかが現れた場合、その最初に現れたものを「依頼に関する最初の発話」とする。そして、その「依頼に関する最初の発話」を、『断り談話』のはじめとなる発話とする。

「断り談話」のおわりとなる発話（「B」）：

依頼についての話題が終わった直後に、他の話題に転換して話す場合もあり、直接に電話の終了部<sup>11</sup>に入る場合もある。ここでは、依頼についての話題が終わっているならば、「断り談話」も終わっていることとする。つまり、今回の依頼用件と何の関わりもない会話、または電話会話特有の会話のやりとり（例えば「じゃ、またね」「じゃ、失礼します」など）を、「断り談話」から除外することとする。しかし、電話の終わりで再び「依頼」に言及することがあり、これは南（1981）が「回帰」と呼んでいるものであるが、ここでは、その部分も「断り談話」の一部として考察する。

上述したように電話会話から「断り談話」を認定し、さらに、断りが成立するまでの流れと、断りが成立した後の流れを分けて分析するために、一つの「断り談話」を二つの段階に分ける。一つ目は、「最初の依頼に関する発話」が現れたときから、最初の「断りへの了解を示す」発話が発せられたところまでの流れであり、二つ目は、最初の「断りへの了解を示す」発話が現れた直後から、「断り談話」が終わるまでの流れである。そこで、「断り談話」での最初の「断りへの了解を示す」発話の位置を確認する必要がある。以下では、「断りへの了解を示す」発話とは何かを定義しておく。

「断りへの了解を示す」発話（「C」）：

国立国語研究所（1994）では、「相手が表明した断りの意思を受け入れること」を、「断りへの了解」とする。本研究は、基本的にはこの定義に従い、「断りへの了解を示す」発話を、相手の断りたい意志を認め、もうこれ以上ねばったりせめたりしないことを伝える発話と定義する。すなわち、「断りへの了解を示す」発話が見れたら、断りが成立したこととなる。

### 3.2.2.2. 依頼に対する「断り談話」の構成要素の分類法

本研究では、「断り談話」における「断る側」の言語行動を主な分析対象とする。上述した方法で認定した各「断り談話」に対して、さらに本研究で提示した「断り談話」を構成

<sup>10</sup> 謝（2001）は、「依頼発話」には「依頼」行為の遂行動詞（「貸す」、「借りる」）が伴う使用とそうでない使用があるため、対話者の発話を考慮に入れて「依頼発話」の認定を行っている。また、受信を促すものである「注意喚起」、会話の大まかな目的を伝えるものである「前置き」、「依頼」の続行の見込みや支障の有無を確認するものである「見込みの確認」と、聞き手へかける負担を実質的または心理的に軽減するための使用である「先行する補助使用」の四つを、「依頼発話」までの依頼側の会話展開に関わる項目として挙げている。

<sup>11</sup> 電話の終了部には、「終了先行発話（pre-closing）」（例えば、英語の“Okay”）や、「終了発話（closing）」（例えば、英語の“Bye”）が含まれている（Schegloff and Sacks, 1973）。



する主要素に該当するものをコーディングしていく。本研究では、「断り談話」の構成要素について、大まかに「単独的」なもの、「複合的」なものに分けて、合計 11 の具体的なストラテジーを設けた（表 1 を参照）。以下では各構成要素についての定義と事例を提示する。また、提示した例文の中の網掛け部分がそれぞれ項目にあたるものである。

表 1. 「断り談話」の構成要素

単独的/複合的	番号	項目名	定義
単独的	1	回避	相手の依頼に対して断りの意向を直接的に伝えることを避けるために使うストラテジー
	2	直接的な断り	相手の依頼に対して断りの意向を直接的に表現するもの
	3	理由説明	相手の依頼を断る理由について述べること
	4	代案提示	依頼を断る代わりに、あるいは依頼を断った後に、問題になっている事柄について自分なりの解決策を相手に提示すること
	5	謝罪や残念な気持ちの表明	相手の依頼を断ることに対して詫びること、あるいは自分が協力できないことに対して残念な意を伝えること
	6	否定的な見解の表明	依頼の内容について否定的な判断や意見を述べること
	7	条件提示	今の条件のままだと協力できないが、自分が提示した条件に替えてくれれば承知する可能性があることを提示すること
複合的 (二つ以上の単独的構成要素の組み合わせ)	8	謝罪＋理由説明 (または、理由説明＋謝罪)	—
	9	謝罪＋直接的な断り (または、直接的な断り＋謝罪)	—
	10	理由説明＋直接的な断り (または、直接的な断り＋理由)	—
	11	その他の組み合わせ	—

## 例 1: 回避一言言葉を濁す (中国語例) (発話文番号 63)

発話文番号	発話文終了	話者 <sup>12</sup>	発話内容	「断り談話」	構成要素
61	*	TBI06	嗯，嗯，那那那那你覺得你可以嗎？ (うーん、うーん、じゃじゃじゃじゃ、行けると思う?)。)		
62	*	TYK06	嗯… <笑>。[以傻笑來拖延時間的感覺] (えっとー<笑い>。[笑いで時間を延ばしている感じ])		
63	*	TYK06	不知道耶<邊說邊笑>。 (分からな一い<笑いながら>。)		1

## 例 2: 回避一冗談を言う (日本語例のみ) (発話文番号 45)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
44	*	JBIO9	「JSK09 姓」さん (えっ) どうでしょう <笑い>。		
45	*	JSK09	<笑い> 「JSK09 姓」さん、「JSK09 姓」 さん眠いです<JBIO9 がずっと笑っている。 のち、2 人で笑う>。		1

## 例 3: 直接的な断りー協力に否定的な気持ちの表明 (日本語例) (発話文番号 15)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
14	*	JBIO4	「JSK04 名」空いてないかなと思って。		
15	*	JSK04	空いてはいるけど行きたくない<笑い>。		2

## 例 4: 直接的な断りー不可能/困難であることの表明 (中国語例) (発話文番号 13)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
10	*	TYK07	明天，什麼時候啊？ (あした、いつ?)。)		

<sup>12</sup> 話者を表す記号の説明は下記のようなものである。

JBIO: 日本人, 依頼側; JOK: 日本人, JBI の学校の先輩, 断る側; JSK: 日本人, JBI の学校の同級生, 断る側; JYK: 日本人, JBI の学校の後輩, 断る側。TBI: 台湾人, 依頼側; TOK: 台湾人, TBI の学校の先輩, 断る側; TSK: 台湾人, TBI の学校の同級生, 断る側; TYK: 台湾人, TBI の学校の後輩, 断る側。

11	*	TBI07	明天早上 9 點。 (明日の朝 9 時。)		
12	*	TBI07	<是因為>{<} 【】。 (<何故かという>{<} 【】。)		
13	*	TYK07	【】 <我明天>{>} 不行耶。【】 <私は明日>{>} だめなんだけど。)		2

例 5: 理由説明 (日本語例) (発話文番号 18)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
16	*	JOK12	明日?。		
17	*	JBI12	はい、明日の朝 9 時からで。		
18	*	JOK12	明日ね、バイトなんだ。		3

例 6: 代案提示 (中国語例) (発話文番号 15)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
14	*	TBI09	你明天早上不行喔。 (明日の朝だめか。)		
15	*	TOK09	還是，我幫你問看看，你要怎樣的，只要是女生就可以嗎?。 (それとも、私が代わりに聞いてみようか、どんなのが必要なの?、女の子だったら大丈夫なの?。)		4

例 7: 謝罪や残念な気持ちの表明 (日本語例) (発話文番号 39)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
38	*	JBI01	じゃ試験<がんばって>{<}。		
39	*	JSK01	<すみません、あの、>{>}お役に立てなくて。		5

例 8: 否定的な見解の表明 (日本語例) (発話文番号 119)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
117	*	JBI03	なんかお礼ができないっていう…。		
118	*	JOK03	あ、いやいや別に (んー)、それは。		
119	*	JOK03	3 時間まずちょっときつい、きついかなー。		6

## 例 9: 条件提示 (中国語例) (発話文番号 44)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
42	*	TYK11	ha2 <sup>13</sup> ("什麼"的意思), 早上的話我要上家教耶。 (えっ?、朝だと家庭教師があるんだけど。)		3
43	*	TBI11	ha2, 你早上要上家教是不是? (あ、そう?、朝家庭教師があるの?)		
44	*	TYK11	嗯, 我可能只有下午可以幫你。 (うん、私はたぶん午後しか手伝えない。)		7

## 例 10: 「謝罪+理由説明」(日本語例) (発話文番号 17)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
16	*	JBIO3	「教官姓」ゼミの関係でね、(うん) 明日ね、国立国語研究所に行く、行くはずだったんだけど、(うん) それにね、急に行けなくなっちゃってね、(うん) それでね、もし明日、の午前中に時間があったら、行っていただけませんかっていう…。		
17	*	JSK03	あ、ごめん、明日授業。		8

## 例 11: 「謝罪+直接的な断り」(日本語例のみ) (発話文番号 123)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
122	*	JOK03	9時じゃね、ちよっ(うんー) なんか、うーん。		
123	*	JOK03	/沈黙 7 秒/うんー、ごめん、ちよっと<無理かも><>。		9

<sup>13</sup> 中国語の文字化においては、一部の漢字にできない感嘆詞は、ha2、ei4 などのように、もとの音声に一番近いローマピンインにし、さらに声調がわかるように、1・2・3・4・0 と付けるようにする。

例 12: 「理由説明+直接的な断り」(中国語例)(発話文番号 18)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
17	*	TBI14	是早上 9 點開始, 然後有 3 個小時, 可是沒有沒有錢。 (朝 9 時から、それから 3 時間かかって、でも出ない、お金は出ない。)		
18	*	TSK14	可是我明天有事情, 可能不行耶。 (でもわたしは明日用事があってたぶんだめなのよ。)		10

例 13: その他の組み合わせ—「理由説明+回避」(日本語例)(発話文番号 14-1, 14-2)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
13	*	JB101	ちょっと急ですよ。		
14-1	/	JOK01	うん…、9 時は多分遅刻するから、		
15	*	JB101	うん。		
14-2	*	JOK01	<微妙…>{<}>。		11

例 14: その他の組み合わせ—「否定的な見解の表明+直接的な断り」(中国語例)(発話文番号 53)

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
52	*	TBI01	哪會很遠, 在南港區耶, 這麼近。 (遠くないよ、南港区よ、とても近い。)		
53	*	TOK01	而且我還要坐捷運去那麼麻煩, 我不想。 (しかも MRT で行かなきゃだめだから、そんなに面倒くさいことはしたくない。)		11

### 3.2.4. 分析の信頼性

以上のようなコーディング項目に基づいた会話の分析、発話の分類の信頼性を確認するために、第二認定者を立てることにする。文字化したすべての会話資料の 8 分の 1 を、筆者と第二認定者がそれぞれ個別にコーディングを行い、その判断の一致率を Cohen's Kappa (Bakeman and Gottman, 1986) を用いて確認する。発話文の分割のような機械的な作業の要素が強い分類では、0.85 以上が一応の合格基準とされているが、コーディングのような調査者の判断による性質が強いものでは 0.7 以上であれば、その分析は一応の信頼性のあるものと判断される。以下では、本研究の「断り談話」の認定及び「断り談話」の構成要素のコーディングに関する、筆者と第二認定者との一致率を示す。

表 3. 各コーディング項目の一致率

コーディング項目	Po	Pc	Kappa
日本語の「断り談話」の認定	0.993	0.913	<b>0.914</b>
中国語の「断り談話」の認定	0.983	0.919	<b>0.794</b>
日本語の「断り談話」の構成要素	1.000	0.648	<b>1.000</b>
中国語の「断り談話」の構成要素	0.959	0.701	<b>0.864</b>

以上の結果から、本研究での両言語における「断り談話」の認定及び「断り談話」の構成要素のコーディングは、信頼性を保っていることがわかる。

#### 4. 分析結果と考察

##### 4.1. 日本語と中国語の「断り」のストラテジーの選択における共通点と相違点

##### 4.1.1. 「断り談話」の構成要素における出現順序について

###### ①「最初に用いる断りのストラテジー」

まず、表 4 に日本語と中国語における各「最初に用いる断りのストラテジー」の頻度と各言語の総談話数に占める割合を示す。

表 4. 日本語と中国語の「最初に用いる断りのストラテジー」における頻度と割合

種 類	日本語		中国語	
	頻 度	割合 (%)	頻 度	割合 (%)
直接的な断り	5	12.8	5	12.8
理由説明	18	46.2	23	59.0
否定的な見解の表明	3	7.7	5	12.8
謝罪+理由説明	8	20.5	0	0.0
理由説明+直接的な断り	0	0.0	5	12.8
その他*	5	12.9	1	2.6
合計	39	100.1	39	100.0

\*上記のストラテジー以外のものを指す（以下同様）。

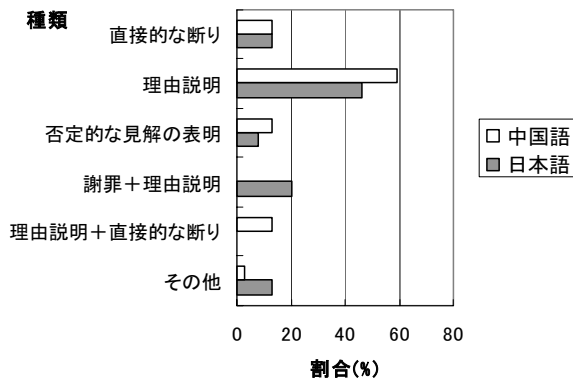


図 1. 日本語と中国語の「最初に用いる断りのストラテジー」における割合

表4と図1からわかるように、「最初に用いる断りのストラテジー」において、日本語と中国語ともに「理由説明」をたくさん使用している。しかし、日本語では、「謝罪+理由説明」が2番目に多く使われているが、中国語では1例も見られなかった。一方、中国語では、「理由説明+直接的な断り」というストラテジーが「直接的な断り」と「否定的な見解の表明」と同時に「理由説明」に次いで2番目に多く使われているが、日本語にはなかった。

## ②「最後に用いる断りのストラテジー」

次に、日本語と中国語における各「最後に用いる断りのストラテジー」の頻度と各言語の総談話数に占める割合を示す。

表5. 日本語と中国語の「最後に用いる断りのストラテジー」における頻度と割合

種 類	日本語		中国語	
	頻 度	割合(%)	頻 度	割合(%)
理由説明	2	5.1	7	17.9
代案提示	2	5.1	6	15.4
謝罪	31	79.5	18	46.2
否定的な見解の表明	0	0.0	3	7.7
謝罪+理由説明	2	5.1	0	0.0
その他	2	5.2	5	12.8
合計	39	100.0	39	100.0

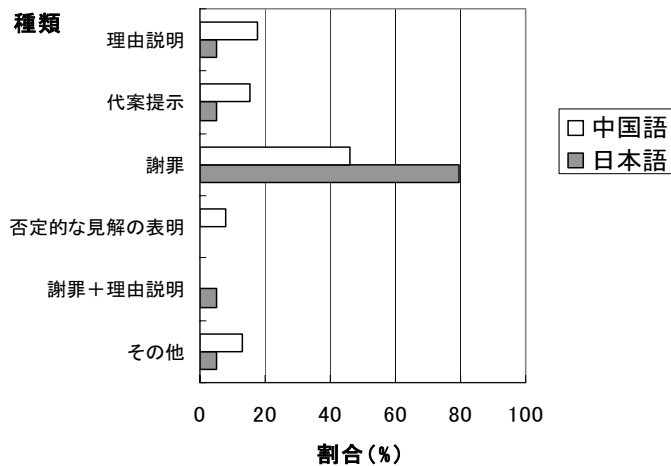


図2. 日本語と中国語の「最後に用いる断りのストラテジー」における割合

表5と図2からわかるように、「最後に用いる断りのストラテジー」において、日本語と中国語ともに「謝罪」をたくさん使用している。しかし、各ストラテジーが使用される割合を詳しく見ると、日本語のほうがより「謝罪」の使用に集中する傾向がある（全日本語

談話の約 80%の割合を占める)。中国語では、「謝罪」を使用する割合は日本語ほどない(46.2%)が、そのかわりに「代案提示」(15.4%)も、「理由説明」(17.9%)も日本語より多く使われている。また、日本語の談話に見られた「謝罪+理由説明」(5.1%)のストラテジーは中国語の談話にはなく、一方、中国語の談話に見られた「否定的な見解の表明」(7.7%)というストラテジーは、日本語の「断り談話」においてそれを最後のストラテジーとして使う例はなかった。

#### 4.1.2. 「断り談話」の構成要素における使用頻度について

##### ①「断り談話」全体における各ストラテジーの使用割合

まず、日本語と中国語における各「断り談話」の構成要素の使用頻度と使用頻度の各言語の総使用頻度に占める割合を表にまとめて提示する。

表 6. 日本語と中国語の「断り談話」の構成要素における使用頻度と割合

種 類	日本語		中国語	
	頻 度	割合(%)	頻 度	割合(%)
回避	6	3.8	2	1.2
直接的な断り	15	9.4	10	5.8
理由説明	31	19.5	63	36.6
代案提示	8	5.0	28	16.3
謝罪	75	47.2	23	13.4
否定的な見解の表明	5	3.1	24	14.0
条件提示	2	1.3	8	4.7
謝罪+理由説明	10	6.3	1	0.6
謝罪+直接的な断り	3	1.9	0	0.0
理由説明+直接的な断り	3	1.9	8	4.7
その他の組み合わせ	1	0.6	5	2.9
合計	159	100.0	172	100.0

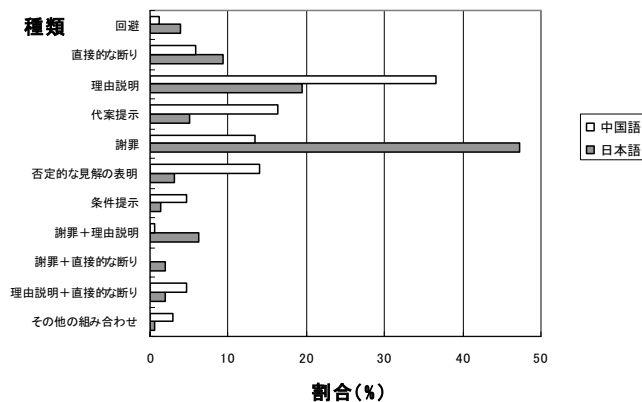


図 3. 日本語と中国語の「断り談話」の構成要素における割合



表6と図3に示すように、中国語においては、「理由説明」が一番多く使われており、その次は「代案提示」、「否定的な見解の表明」であるのに対し、日本語においては、「謝罪」の使用は他のどの要素よりも多くみられ、二番目に多いのは「理由説明」であり、その次は「直接的な断り」である。「回避」、「直接的な断り」、「謝罪」、「謝罪+理由説明」などのストラテジーにおいて、日本人は台湾人より多用しているが、「理由説明」、「代案提示」、「否定的な見解の表明」、「条件提示」、「理由説明+直接的な断り」などのストラテジーにおいては、台湾人のほうがより多く使っている。

②「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階における各ストラテジーの使用割合

次に、各「断り談話」の構成要素における使用の割合を、「断り成立まで」と「断り成立後」の両段階に分けて、表7にまとめて提示する。

表7. 日本語と中国語の「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階における各構成要素の使用頻度の談話全体に占める割合（％）

種 類	断り成立まで		断り成立後	
	日本語	中国語	日本語	中国語
回避	100.0	100.0	0.0	0.0
直接的な断り	80.0	100.0	20.0	0.0
理由説明	83.9	90.5	16.1	9.5
代案提示	12.5	39.3	87.5	60.7
謝罪	2.7	4.3	97.3	95.7
否定的な見解の表明	80.0	75.0	20.0	25.0
条件提示	100.0	50.0	0.0	50.0
謝罪+理由説明	80.0	100.0	20.0	0.0
謝罪+直接的な断り	33.3	—	66.7	—
理由説明+直接的な断り	100.0	87.5	0.0	12.5
その他の組み合わせ	100.0	60.0	0.0	40.0
合計	41.5	66.3	58.5	33.7

※中国語談話には「謝罪+直接的な断り」の使用がみられなかったため「—」に記しておく。

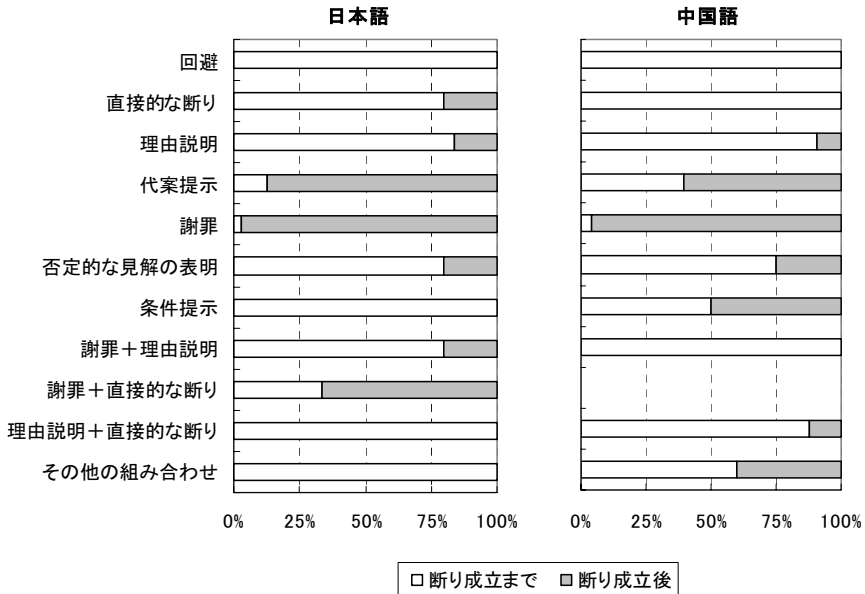


図 4. 日本語と中国語の「断り成立まで」と「断り成立後」の 2 段階における各構成要素の使用頻度の談話全体に占める割合

表 7 からわかるように、「『断り成立まで』の段階で使われた構成要素の割合」対「『断り成立後』の段階で使われた構成要素の割合」について、日本語の場合は約「4 割 : 6 割」であるのに対して、中国語の場合は約「7 割弱 : 3 割強」で、使用された構成要素が断りが成立するまでの段階に集中して現れる傾向がみられた。

このように二つの段階に分けてみると、「断り成立まで」の段階において、日本語の場合は、「回避」をはじめ、「直接的な断り」、「理由説明」、「否定的な見解の表明」、「条件提示」、「理由説明+直接的な断り」、「その他の組み合わせ」などの戦略の使用は、主にこの段階で行われており、中国語の場合も、上述した戦略のうち、「条件提示」と「その他の組み合わせ」を除けば、日本語とほぼ同じ特徴が見られている。また、「断り成立後」の段階において、日本語と中国語ともに「謝罪」の使用がこの段階に集中していることが目立っている。そして、「代案提示」も、「断り成立まで」の段階より、「断り成立後」の段階で使われることが多いことがわかる。

以上の結果から、日本語話者と台湾人中国語話者ともに、断りたい意思を伝える際に、主に「回避」、「直接的な断り」、「理由説明」、「否定的な見解の表明」などの戦略を用い、また、相手が自分の断りに了解を示してくれた後に、「謝罪」をしたり、「代案提示」をしたりすることによって対人配慮行動をとることが多いといえるであろう。

## 4.2. 「断り」を談話レベルで捉えることで明らかになる言語行動上の特徴

### 4.2.1. 「スピーチレベル・シフト」

従来のポライトネス研究では、日本語のような敬意表現が文法の中に組み込まれている言語において、敬語の使用法が敬語使用の原則に制約されているため、戦略的な言語使用の余地があまりないと主張されてきた。しかし、日本語においては、宇佐美(1993)が主張している通り、談話レベルの要素、すなわち、スピーチレベル・シフトや話題導入の頻度などに顕著に個人の戦略的な言語使用が反映されていると考えられる。

以下の例15と例16の会話においてスピーチレベル・シフトが戦略的に用いられている。まず、例15の会話においてJOK06のスピーチレベルの基本状態は「常体」と考えられるが、発話文番号35-1, 35-2でJOK06が「常体」から「丁寧体」へとアップ・シフトしている。また、例16の会話では、同等の友人同士であるJBI09とJSK09は、「常体」で話すのが普通だと思われるが、JSK09が発話文番号45, 48, 50-1, 50-2で「常体」から「丁寧体」へとアップ・シフトしている。そして、この会話では、依頼側のJBI09からのアップ・シフトも見られた(発話文番号30, 44)。

例15: 「スピーチレベル・シフト」が含まれている例

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
32	*	JOK06	それはなにをするものなの?。		
33-1	/	JBI06	なんか、私自し、体もちょっとよく分からないんですけど、<なんか>{<}、		
34	*	JOK06	<<笑い>>{>}、うん。[自分さえわからないことを他人に頼むのかよって感じ]		
33-2	*	JBI06	その国立国語研究所の人が、(うん)なんか言葉、わ、若者言葉かなんかそういう言葉についての調査をするんで、(えー)それに参加してくださいっていうやつなんですけど。		
35-1	/	JOK06	えー、うんーと、明日ねゼミの発表が、		
36	*	JBI06	あつ。		
35-2	*	JOK06	ありまして。		3
37	*	JBI06	はい。		
38	*	JOK06	うんー、えっ、それは別にまさか「大学名」大でやるわけじゃないんだよね。		
39	*	JBI06	あの、赤羽、らへん。		

例 16: 「スピーチレベル・シフト」が含まれている例

発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	「断り 談話」	構成 要素
28-2	*	JBIO9	そう、でなんか急にいけれなくなってね なんか、(うん) そう、「JSK09 あだ名」 明日、ね、どうかねって思っ。		
30	*	JBIO9	どう、どうですかね。		
31	*	JSK09	どこでやるの?。		
32	*	JBIO9	あ、すごい遠くて、(うん) えっとね、 板、板橋。		
			(中略)		
44	*	JBIO9	「JSK09 姓」さん(えっ) どうでしょう <笑い>。		
45	*	JSK09	<笑い> 「JSK09 姓」さん、「JSK09 姓」 さん眠いです<JBIO9 がずっと笑っている。 のち、2人で笑う>。		1
46	*	JBIO9	やー、9時起きれないか<笑いながら>。		
47	*	JBIO9	<9時は>{<}<笑いながら>。		
48	*	JSK09	<起きれ>{>}ないですよ。		3
49	*	JBIO9	<笑い>しかも9時から。		
50-1	/	JSK09	明日はね、		
51	*	JBIO9	うん。		
50-2	*	JSK09	明日ね、あの一、マックを買いに行くん です。		3
52	*	JBIO9	<笑いながら>マック?。		
53	*	JSK09	明日パソコンを買いに<行くので、無理> {<}。		10

このように、基本状態からはみ出しているスピーチレベル・シフトの使用は、ストラテジーとしての言語使用とみなすことができる。例えば、例 15 のように、後輩からの依頼に対して、断る理由を述べる場面において、依頼側の先輩である JOK06 は基本状態である「常体」から「丁寧体」へとスピーチレベルをシフトさせている。これは、相手のフェイスを脅かす度合い、相手との対立を緩和するためのストラテジーだと考えられる。

このように、敬語使用の原則がある日本語において、宇佐美(1998)が指摘している通り、言語形式以外のスピーチレベル・シフトなどの言語的ストラテジーを用いて、相手に近づきたいという個人の気持ちを表したり、相手のポジティブ・フェイスに訴えかけたりしているのである。

#### 4.2.2. 依頼側による「食い下がり」と「気配り発話」<sup>14</sup>

自然会話データの分析結果がDCTによる結果と根本的に異なる点は、自然会話ではDCTには見られなかった依頼側による「食い下がり」や「気配り発話」が用いられているところである。つまり、自然会話では、例17のように、JYK08が依頼に対して回避という間接的なストラテジーを用いて断ったつもりであっても、JBI08にそれが受け入れられず、依頼の場面がもう一度繰り返され、依頼の発話が続くことになる場合もあり、例18のように、JBI01が「無理ならいいんだけど」などのような「気配り発話」をしてくれたため、JOK01が断りをしやすくすることになる場合もある。

例17: 依頼側による「食い下がり」が含まれている例

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
5-2	*	JBI08	「JYK08 あだ名」明日暇?。	A	
7	*	JYK08	明日ですか?。		
8	*	JBI08	うん。		
9	*	JYK08	うんー、ちょっと微妙です。		1
10	*	JBI08	あ、微妙?。		
11	*	JYK08	はい。		
12	*	JBI08	午前中も空いてない?。		
13	*	JYK08	はい。		
14	*	JBI08	あ、そっか…。	C	
15	*	JYK08	はい。		

例18: 依頼側による「気配り発話」が含まれている例

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	「断り談話」	構成要素
1-6	*	JBI01	言語調査に関する実験に参加してはいただけないでしょうか?<軽く笑いながら>。		
7	*	JOK01	えー、へー、へ、えー=。[あまりに驚いた様子]		
8	*	JBI01	=しかも、韓国人と一緒に<笑いながら>。		
9	*	JOK01	えっ。		
10	*	JBI01	無理ならいいんだけど。		

<sup>14</sup> ザトラウスキー (1993) によると、「断りを促す発話」には、「断り/断る理由に関する気配り発話」、「相づちによる気配り発話」、「接続表現による気配り発話」、「陳謝/感謝/残念な気持ちを表す発話」の4種類がある。「勧誘応答の話段」における「気配り発話」は、「断り」を促し、被勧誘者が断りやすくする発話であるという。

11	*	JOK01	いやだ。		2
12	*	JBI01	いやだ<笑いながら><2人で笑う>。		
13	*	JBI01	ちょっと急ですよ。		
14-1	/	JOK01	うん…、9時は多分遅刻するから、。		
15	*	JBI01	うん。		
14-2	*	JOK01	<微妙…>{<}。		11

このように、話し手は聞き手との相互作用の中で、ある特定の言語行動（ここでは「断り」）を徐々に「作り上げていく」ことが自然会話ではよくあることがわかった。

#### 4.2.3. 話し手と聞き手との相互作用

ここでは、表1に提示されている11の構成要素を「単独的」と「複合的」の二つのグループに分けてみると、その使用の割合は以下のようになる。

表8. 「単独的」と「複合的」構成要素と使用割合（%）の日中対照

種 類	日本語	中国語
単独的	89.3	91.9
複合的	10.7	8.1
合 計	100.0	100.0

以下の図5に、日本語と中国語における「単独的/複合的」構成要素の使用傾向を示す。

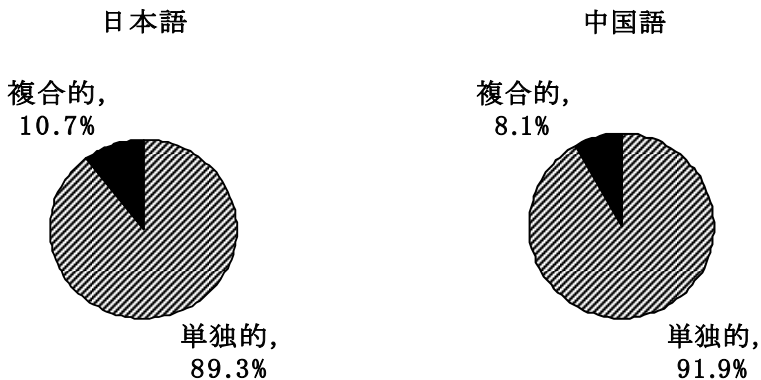


図5. 「単独的」「複合的」構成要素における使用割合の日中対照

図5に示すように、自然会話にある「断り談話」において、日本語と中国語ともに「単独的」構成要素の使用は「複合的」構成要素より圧倒的に多いことがわかる。この点について、馬場・禹（1994）が提示した、「理由+謝罪」、「理由+代案提示」などの組み合わせた形で現れたものが日中両言語において多用されているという結果とは異なる傾向が示さ

れている。これは、調査方法による違いだと考えられる。馬場・禹（1994）が用いたアンケート調査では依頼側との交渉行為がなく、普段何回かに分けてとる断り行為を解答欄にいったん書くことになりやすいため、複合的な構成要素が頻繁に使われる結果になると考えられる。それに対して、自然会話における断りの言語行動は一度の発話のやりとりで終わるのではなく、相手の反応を見ながら、相手との相互作用のなかで徐々に作り上げられていくのである。本研究で得られたこの結果は、このような自然会話の特徴を反映しているといえるであろう。

## 5. 示唆点

本研究で得られた実際の言語行動に関する結果は、第二言語教育にも応用できるであろう。すなわち、日本語と中国語において、いかなる断りの行動が可能、あるいは適切で、いかに解釈されうるかということを学習者に理解してもらい、適切に学習言語を使用するために応用できると考えられる。また、異なる文化を背景にする日本人と台湾人がコミュニケーションを行うとき、言葉が通じるとしても、その言語使用の違いにより相手の誤解を招くおそれがある。日本人と台湾人がより円滑なコミュニケーションを行うためには、実際の言語行動を理解しなければならない。それゆえ、本研究は、日本人と台湾人による異文化コミュニケーションの相互理解の一助になると考えられる。

## 6. 今後の課題

本研究では、主に「断り」の言語行動の特徴に重点をおいたため、イントネーション、ポーズなどの音声的な側面は考慮に入れなかった。しかし、ためらいやポーズなどは、それのみで聞き手はこれから話し手が断ろうとしていることが察知できる場合がある。今後、このような音声的な側面が「断り」の場面においてどのように機能しているかについて分析を行いたい。

また、今後は、依頼側の行動にも注目し、「依頼」と「依頼に対する返答」という相互行為における日本人と台湾人の言語行動の特徴を明らかにすることを課題としたい。

## 引用文献

- 宇佐美まゆみ（1993）「談話レベルから見た“Politeness”－“Politeness Theory”の普遍理論確立のために」『ことば』第14号、現代日本語研究会、20-29。
- （1998）「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本語研究・教育年報1997年度版』、東京外国語大学日本課程編、145-159。
- （2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C（2）（研究代表者：宇佐美ま

ゆみ), 研究成果報告書, 4-21.

金秀英 (1998) 『日本語の話しことばにおける依頼に対する断り表現: 韓国語との比較から』  
平成 10 年度東京外国語大学大学院修士論文.

国立国語研究所 (1994) 『伝えあう言葉 4 機能一覧表』日本語教育映像教材 中級編 関  
連教材.

ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』,  
くろしお出版.

謝オン (2001) 「談話レベルからみた『依頼発話』の切り出し方—日本人大学生同士と中国  
人大学生同士の依頼談話から」『東京外国語大学日本研究教育年報 5』, 77-101.

西郡仁朗 (2002) 「自然会話データ『偶然の初対面』の公開—その方法論について—」『人  
文学報』 330, 東京都立大学人文学部, 1-18.

馬場俊臣・禹永愛 (1994) 「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学紀要』第 45  
巻第 1 号, 43-54.

南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として」藤原与一先生古希  
記念論集『方言学論叢』 I, 三省堂, 87-112.

劉玉琴, 小野由美子 (1996) 「中日母語話者の『断り』発話行為に見られる相違について」  
『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第 42 巻第 2 部, 540-545.

Bakeman, R. & Gottman, J. M. 1986. *Observing Interaction: an Introduction to Sequential  
Analysis*. New York: Cambridge University Press.

Brown, P. & Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*.  
Cambridge :Cambridge University Press.

Liao Chao-chih 1994. *A Study on the Strategies, Maxims, and Development of Refusal in Mandarin  
Chinese*. The Crane Publishing: Taipei.

Schegloff, Emanuel A. 1968. Sequencing in conversational openings. *American anthropologist*  
70.6:1075-95.

Schegloff, Emanuel A. and H. Sacks. 1973. Opening up closing. *Semiotica*, 7.4:289-327.



### 3. 『BTS による多言語話し言葉コーパス —日本語会話 2(日本語母語話者と学習者 の会話)』を用いた研究

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 接触場面におけるコミュニケーション調整行動 — 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話より —

キム ウンミ  
金 銀美

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

## 1. はじめに

日本語母語話者と日本語学習者の接触場面では、互いの理解を深めるためにさまざまなやり取りが行われている。特に学習者は限られた日本語の知識や情報で母語話者とのコミュニケーションを行わなければならない。しかし、両者のやり取りには言語形式上の問題だけではなく、コミュニケーション全般にかかわる問題を処理するために、「意味交渉 (negotiation of meaning)」が必要となってくる。とすると、接触場面でのコミュニケーション問題は相手である母語話者の意味交渉も学習者と同様に欠かせない要素である。M.Long (1985) は、「話し手が互いにさまざまな情報をやりとりすること」であるインターアクションの過程の「協議的会話 (negotiated conversation)」が習得を促進すると考えた (岡崎・岡崎 2001)。つまり、両者のインターアクションの中で行われる意味交渉こそ、接触場面のコミュニケーション問題を解決する鍵になると考えられる。

宮崎 (1999a) は意味交渉の研究について次のように指摘している。「インプットに関する実証研究が進められてきたが、こうした研究では、接触場面でのコミュニケーション問題 (不適切さ) が起きた場合、どのように処理するかについての考察が不十分である」。そこで宮崎はコミュニケーション問題を処理するための調整モデルを提示している。さらに宮崎 (2002) では、「いままでなされてきた意味交渉研究でデザインされているタスクは、自然な場面で起きる交渉を反映していない」と指摘している。

今まで、日本語の意味交渉研究ではタスク中心の研究が主であり、自然場面の会話からの試みはほとんどなされていない。日本語教育の最終目標は少なくとも、教室の中で作られているタスク活動から教室以外の会話場面でのコミュニケーションに学習者のレベルを持っていくことであろう。むしろ、自然場面での会話を通して日本語学習者と日本語母語話者の意味交渉の実態を見極めてから、日本語教育に有効な調整行動を見直してみることが有効であると考えられる。

そこで、本研究では日本語母語話者 (以下 NS と称する) と韓国人日本語学習者 (以下 NNS と称する) の自然会話を取り上げ、コミュニケーション問題を解決するために行われる調整行動がどのようなものがあり、それぞれの調整行動がインターアクションの中でどのように機能しているかを考察していく。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調整行動の定義

「調整行動」とは、学習者と母語話者の意味交渉の中でコミュニケーション問題が生じた場合、それを解決するために行われるストラテジーである。ここでのコミュニケーション問題は言語形式の誤りだけではなく、円滑なコミュニケーションを妨げる意味的に理解困難なものも含む。したがって、本研究での調整行動は言語形式の誤りに対する調整だけでなく、円滑なコミュニケーションのために行うものを含めたものである。

### 2.2. 研究課題

次の二つを本研究の課題とする。

- 1) NS と NNS の接触場面における、調整行動の全体像を明らかにする。
- 2) インターアクションの観点から調整行動が両者のコミュニケーションの中で、どのように機能しているかを調整行動に対する反応をみることによって考察する。

### 2.3. 会話データの概要

本研究の会話データについて、協力者の概要は次の表 1 のようになる。

表 1. 会話協力者の概要

NNS の 居住地	男性 (NSM <sup>1</sup> ×NNSM <sup>2</sup> )	女性 (NSF <sup>3</sup> ×NNSF <sup>4</sup> )	会話協力者の属性 ※20代16人	総会話数
韓国	NSM01～04× NNSM01～04	NSF01～04× NNSF01～04	NS:韓国で留学している在日韓国人 <sup>5</sup> NNS <sup>6</sup> :大学で日本語を専攻としている3・4年生(日本語のレベル中級以上)	8 会話
日本	NSM05～08× NNSM05～08	NSF05～08× NNSF05～08	NS:大学生・大学院生 NNS:日本語学校の学生(日本語レベル中級以上)	8 会話

<sup>1</sup> NSM : Native Speaker Male (男性日本語母語話者)

<sup>2</sup> NNSM : Non Native Speaker Male (男性日本語学習者)

<sup>3</sup> NSF : Native Speaker Female (女性日本語母語話者)

<sup>4</sup> NNSF : Non Native Speaker Female (女性日本語学習者)

<sup>5</sup> 在日韓国人であるが、日本語を母語とする人達であり、会話収録の時は韓国語で話さないよう注意した。

<sup>6</sup> ただし、韓国在住の学習者のデータのうち、一つは日本で収集した。日本に来て1週間経たない学習者であったため、収録当時の学習環境は韓国在住の学習者とほとんど変わらないといえる。

会話の協力者を初対面同士<sup>7</sup>の同年代、同性になるように設定したのは、協力者の条件を極力一定にするためである。

会話終了後、フェイスシート、フォローアップ・アンケートに答えてもらった。

会話収録の場所は会話参加者以外の人はいない状況に統一した。特別な話題は与えずになるべく自然に会話が流れるようにし、最低 15 分の会話をするように指示した。会話の終わりは会話参加者が自然に終わらせるように任せた。

録音された会話データの文字化は宇佐美 (2003) の「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System For Japanese: BTSJ) に従って行った。

文字化についてはセカンドコーダーにセカンドチェックを依頼した。セカンドコーダーには分類項目を説明し、会話データ全体の 10 分の 1 にあたる発話 (24 分間) のコーディングを頼んだ。その一致度は Cohen's Kappa を用いて確認したが、Kappa=0.818 という数字が得られ、信頼できる分類項目であることが確認できた<sup>8</sup>。

#### 2.4. 分析項目

本研究では調整行動を表 2 のように話し手、聞き手の観点から、「調整ストラテジー」と「調整リクエスト・ストラテジー」の 2 つのタイプに分けた。

調整タイプ別調整行動の下位分類は尾崎 (1993)、横山 (1998)、宮崎 (1999b)、村上 (1997) を参照し分類する。

表 2. 調整行動の分類

調整行動の視点	調整行動のタイプ	調整行動
I. 話し手の調整行動： 話し手（自分）の発話に対する話し手（自分）の調整行動	① 調整ストラテジー	A 自己修正 B 説明・具体化 C 理解チェック
	② 調整リクエスト・ストラテジー	D 間接的修正／確認要求 E 直接的修正／確認要求
II. 聞き手の調整行動： 話し手（相手）の発話に対する聞き手の調整行動	③ 調整ストラテジー	F 他者の修正
	④ 調整リクエスト・ストラテジー	G 反復要求 H 明確化要求 I 確認要求

<sup>7</sup> 会話データのうち、1 会話のみ初対面ではないが、大学の授業で顔を知り合っただけで話を交わすのは初めてである。

<sup>8</sup> Cohen's kappa はコード化の基準、定義を決めた上で、二人のコード者が別個にデータの 5~20% にあたる量のコーディングを行い、その一致度から、偶然一致した確率を差し引いたもの。この値が 0.7 未満であれば、コード化の基準や定義に問題があると捉えて、再検討したほうがよいとされている。また、0.75 以上であれば、大変信頼性が高いとみなしてよいとされている（詳しくは、Bakeman & Gottman (1986) を参照のこと）。（宇佐美 1997:3）

### 2.4.1. 話し手の調整行動

話し手の調整行動とは、話し手が自分の発話について調整を行ったり、調整をリクエストしたりするものである。話し手の調整行動の場合、コミュニケーション問題は自分の発話の中で生じる。

#### ① 調整ストラテジー

A. 自己修正：話し手が自己発話の中で、修正を始め、終わるもの。

〈会話例1：日本語で話すことについて〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P <sup>9</sup>	A・T <sup>10</sup>	AD <sup>11</sup>	R <sup>12</sup>
223	208	*	NSF04	“こういうとき（ああ）、こうやって話せばいいんだ”って、思ったときに言えば、 <u>多分向こうも、相手も伝わると</u> 思うんです。	●	①	A	
224	209	*	NNSF04	うんー。				

B. 説明・具体化：話し手自身が自分の発話の中で、聞き手の理解を助けるために具体的な例や言い換えなどにより説明を加えるもの。

〈会話例2：外国語の勉強について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
391	366	*	NNSF05	日本に来て（うん）、考えたんですけど（うん）、なんか、韓国の人達は（うん）、なんか、なんと <b>言</b> え <b>ば</b> いい <b>か</b> 。				
392	367	*	NNSF05	なんか、世の中で（はい） <u>一般的に使われている言葉</u> ですよ <b>ね</b> 、英語と <b>か</b> 中国語と <b>か</b> 。	●	①	B	
393	368	*	NSF05	ええええ。				

<sup>9</sup> C・P：コミュニケーション問題

<sup>10</sup> A・T：調整行動のタイプ

<sup>11</sup> AD：調整行動

<sup>12</sup> R：反応

## ② 調整リクエスト・ストラテジー

C. 理解チェック:自分の発話を相手が正しく理解しているかどうか確認するもので、「～って分かります?」、「分かるかな」、「わかりませんか?」などを含んだ発話。

〈会話例3:紅葉について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
328	320	*	NSF08	<うん>{>、あの一、 <u>紅葉、って分</u> <u>&lt;かる?&gt;{&lt;}</u> 。	●	①	C	
329	321	*	NNSF08	<紅>{>葉?。				
330	322	*	NSF08	あもう、木が、あもう。				

D. 間接的修正/確認要求:話し手が自分の発話の中で不確かさを感じ、言いよんだり、繰り返したり、語尾を上げたりして、間接的に自分の発話の不適切さを表すもの。

〈会話例4:韓国語で「お姉さん」という言葉について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
98	92-1	/	NNSM04	あとは、なん一、韓国の友人から聞いた話だと、				
99	93	*	NNSM04	はい。				
100	92-2	*	NNSM04	韓国では目上の人に対して(ああ)、名前ではなくて(はい)、 <u>たとえば女性</u> だったら、 <u>ヌナ??、&lt;ヌナ??&gt;{&lt;}</u> 。	●	②	D	
101	94	*	NNSM04	<あ、ヌン??>{>}。[↑]				

E. 直接的修正/確認要求:話し手が自分の分からない語彙や表現を聞き手に直接聞いて修正や確認を求めるもの。「～は何と言いますか?」、「～合っていますか?」などといった形で、相手の調整を引き出すものもある。

〈会話例5:「二ヶ国語」の発音について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
199	198	*	NNSM07	また、外国語は日本語ひとつで十分だと思います<笑い>。				
200	199	*	NNSM07	また、 <u>にかげく、にかげくご'2ヶ国語??、&lt;笑いながら&gt;にかげくご'2ヶ国語??、発音してください。</u>	●	②	E	
201	200	*	NSM07	2ヶ国語。				

### 2.4.2. 聞き手の調整行動

聞き手の調整行動とは、相手（話し手）の発話に対して、聞き手が調整したり、相手に調整をリクエストするものである。聞き手の調整行動の場合、コミュニケーション問題は相手の発話の中で生じる。

#### ③ 調整ストラテジー

F. 他者の修正：聞き手が話し手の発話の不適切さに気づき、修正を行うもの。聞き手が話し手に確認せずに修正を行うもので、話し手自身は修正があって初めて自分の不適切さに気づくものが多い。

〈会話例6：日本人と韓国人の違いについて〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
104	96	*	NNSF03	それがちょっと、日本人はすごい礼儀いいんですが…。				
105	97	*	NSF03	うんうん。				
106	98	*	NNSF03	<u>なんかちがいです、韓国人は【】。</u>	●			
107	99	*	NSF03	【】 うん、 <u>違います。</u>		③	F	
108	100	*	NNSF03	はい=。				

#### ④ 調整リクエスト・ストラテジー

G. 反復要求：相手の発話が聞き取れなかった時、「なに?」、「うん?」、「えっ?」など、直接繰り返しを求める。

〈会話例7：海産物の話について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
264	248	*	NSF04	でも、 <u>魚介類</u> とかはおいしいんですよね。	●			
265	249	*	NNSF04	<u>なに?。</u>		④	G	
266	250	*	NSF04	魚介類。				
267	251	*	NSF04	魚とか（あー）海老とか、そういう海、海の…。				
268	252	*	NNSF04	海産物?。				

- H. 明確化要求：相手の発話が聞き取れたが、理解困難な際、繰り返し、言いよどみ、あるいは「どういう意味ですか?」、「どういうことですか?」など、直接相手の発話に対して具体的な説明を求める。

〈会話例 8：食べる虫についての話〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
263	259	*	NSM08	なんか、『ばった』ってわかります?。				
264	260-1	/	NNSM08	はい、<え?>{<}、				
265	261	*	NSM08	<『ばった』>{>}。	●			
266	260-2	*	NNSM08	『ばった』って?。[↓]		④	H	
267	262	*	NSM08	あのう、ぴよんぴよんって飛ぶ…。				
268	263	*	NNSM08	あああ、はい、はいはい。				

- I. 確認要求：相手の発話に対して、不明確なことがあるとき、自分（聞き手）の理解が正しいかどうかを、自分が理解したとおりに表現することによって、正しく理解しているかどうかを確認させる。

〈会話例 9：日本人が日本語を専攻することについて〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
42	40	*	NNSF01	なんか日本語科の学生で、日本人会ったことは、たくさんあるけど。				
43	41	*	NSF01	うんー。				
44	42	*	NNSF01	/少し間/いつも考えて、日本人にとって、日本語科はなんか、 <u>やすい</u> 。	●			
45	43	*	NSF01	あ、やさしい?。		④	I	
46	44	*	NNSF01	<u>やさしい</u> 。				
47	45	*	NSF01	<確かに>{<}。				

### 3. 結果

以下、NS と NNS の調整行動について、韓国在住の NNS と日本在住の NNS の調整行動の比較、調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応といった観点から分析の結果を述べる。

#### 3.1. NS と NNS の調整行動

NS と NNS の調整行動を比較すると次のように表 3 のようになった。



表 3. NS と NNS の調整行動の使用頻度と割合

		I. 話し手の調整行動					II. 聞き手の調整行動				
		①調整ストラテジー		②調整リクエスト・ストラテジー			③調整ストラテジー	④調整リクエスト・ストラテジー			
		A 自己修正	B 説明・具体化	C 理解チェック	D 間接的修正/確認要求	E 直接的修正/確認要求	F 他者の訂正	G 反復要求	H 明確化要求	I 確認要求	合計
NS	頻度	10	59	8	3	2	16	10	25	249	382
	割合	3%	15%	2%	1%	1%	4%	3%	7%	65%	100%
NNS	頻度	123	41	7	39	11	0	12	29	87	349
	割合	35%	12%	2%	11%	3%	0%	3%	8%	25%	100%

調整行動の全体の頻度は、NS は総 382 回、NNS は総回数 349 回である。

NS の調整行動の使用割合は、高い順に「I 確認要求」→「B 説明・具体化」→「H 明確化要求」→「F 他者の修正」→「A 自己修正」→「G 反復要求」→「C 理解チェック」→「D 間接的修正/確認要求」→「E 直接的修正/確認要求」である。

NNS の調整行動の使用割合は、高い順に「A 自己修正」→「I 確認要求」→「B 説明・具体化」→「D 間接的修正/確認要求」→「H 明確化要求」→「G 反復要求」→「E 直接的修正/確認要求」→「C 理解チェック」である。「F 他者の修正」は本会話データでは現れなかった。

### 3.2. 韓国在住の NNS と日本在住の NNS の調整行動の比較

本研究の会話データである 16 会話のデータは、2.3.で述べたように、8 会話は韓国で日本語を専攻して学んでいる学生を、残りの 8 会話は日本在住の学習者を対象にしたものである。

尾崎（1992）では、聞き返しストラテジーの使用頻度を国外で学んでいる学習者の会話を資料として調べているが、日本国内で学んでいる学習者の場合であれば異なる結果が出る可能性もあるとしている。そこで、本研究では学習者の学習環境によって調整行動の使用に影響があるかを調べた。

韓国在住の NNS と日本在住の NNS の調整行動の詳細は、次の表 4 のようになる。

表 4. 韓国在住の NNS と日本在住の NNS の調整行動の頻度と割合

		I. 話し手の調整行動					II. 聞き手の調整行動				
		①調整ストラテジー		②調整リクエスト・ストラテジー			③調整ストラテジー	④調整リクエスト・ストラテジー			
		A 自己修正	B 説明・具体化	C 理解チェック	D 間接的修正/確認要求	E 直接的修正/確認要求	F 他者の訂正	G 反復要求	H 明確化要求	I 確認要求	合計
NNS (韓)	頻度	73	20	6	24	3	0	4	15	42	187
	割合	39%	11%	3%	13%	2%	0%	2%	8%	22%	100%
NNS (日)	頻度	50	21	1	15	8	0	8	14	45	162
	割合	31%	13%	1%	9%	5%	0%	5%	9%	28%	100%

学習者の学習環境による調整行動の使用割合は、カイ二乗検定の結果、自由度 (df)=6 で、統計上の有意差は見られなかった。

しかし、韓国在住の NNS は「A 自己修正」と「D 間接的修正/確認要求」が日本在住の NNS より多い。また、日本在住の NNS は「I 確認要求」、「E 直接的修正/確認要求」、「G 反復要求」については、韓国在住の NNS より高い割合を示している。

### 3.3. インターアクションにおける調整行動について

本研究での調整行動は「調整ストラテジー」「調整リクエスト・ストラテジー」の二つがある。本会話データから NS と NNS の調整行動の全体の割合は次のような結果になっている。

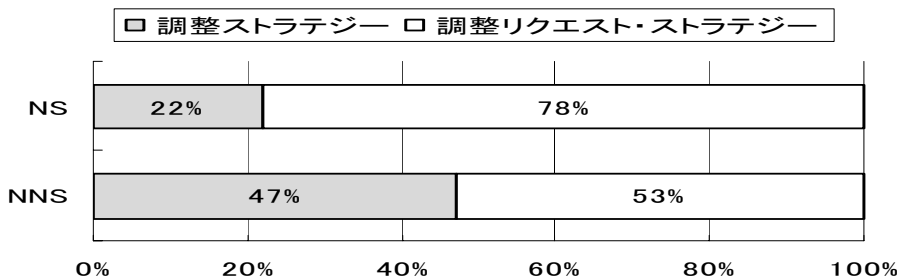


図 1. NS と NNS の調整行動の割合

大平 (1999) は、日本語母語話者の「言い直し」を、相手にとって理解しやすい表現で再度発話される自己訂正と、相手とのインターアクションの時に意味交渉の結果として生じるものの二つがあると述べている。

本研究の会話データのうち、「調整ストラテジー」である「A 自己修正」「B 説明・具体化」

「F 他者の訂正」は、自分又は相手の発話を相手にとって理解しやすい表現にするものである。また、「調整リクエスト・ストラテジー」である「C 理解チェック」「D 間接的修正/確認要求」「E 直接的修正/説明要求」「G 反復要求」「H 明確化要求」「I 確認要求」は、相手とのインターアクションの際、自分又は相手の発話について相手に調整を求める意味交渉の結果として現れるものである。

次にこのインターアクションにおける調整行動が NS と NNS の意味交渉の中で、どのように交わされるかをみるために、「調整リクエスト・ストラテジー」に対する相手の反応をみることによって考察していく。

Pica et al. (1989) では、学習者と母語話者のインターアクションの過程で生じたアウトプットに注目している。学習者の発話が理解困難な際、母語話者が学習者の発話の明確化を求める「明確化要求」が学習者の発話（アウトプット）の修正を引き起こしたとしている。母語話者が学習者の発話を正しく理解しているか確認する「確認要求」は数多く観察されたが、「確認要求」に対する反応は“Yes”, “No”などで簡単に答えるだけで済むので、学習者のアウトプットの修正を引き起こさなかったという実験結果を報告している。ところが、母語話者による「確認要求」は学習者が表現したかったが適切にできなかった表現、いわば「モデル発話」を含んでいるため、学習者にとって重要なインプットとなっているとしている。

すると、「確認要求」の中でも、学習者のアウトプットの修正を引き起こすものはどのような「確認要求」であるだろうか。

本研究では、調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応を表5のように分類する。さらに、NNS の反応だけではなく NS の反応も調べることによって、両者のインターアクションの中で、調整リクエスト・ストラテジーがどのように機能しているかをみていく。

表5：調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応

調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応	
a 適切なインプットやアウトプット および情報を提供するもの。	b 簡単に答え、理解を示すもの、「はい（うん）」「いいえ（いや）」「そうですね（そうそう）」など。

なお、堀口（1997）は「確認要求」を話し手から情報や行動を要求された場合と、話し手から情報を提供された場合に見られると述べている。また、確認要求の表現には、繰り返しのほかに、言い換え、限定、結論の提示などがみられると論じている。

本研究では「I 確認要求」をさらに「I-1 聞き取り確認要求」「I-2 理解確認要求」「I-3 情報確認要求」「I-4 結論確認要求」の4つに分類する。

以下、調整リクエスト・ストラテジーに対する反応の具体例を「I 確認要求」の下位分類と合わせて提示する。

I. 確認要求：確認要求は堀口（1997）を参照し、さらに4つに分類する。

I-1. 聞き取り確認要求：話し手からの情報や発話に対する聞き取りを確認するもの。

〈会話例 10：映画の話〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
185	181	*	NNSF02	/沈黙 8 秒/映画とか好きですか?。	●			
186	182	*	NSF02	あつ、映画ですか?。		④	I - 1	
187	183	*	NNSF02	はい。				b

I-2. 理解確認要求：話し手の発話に理解困難または不適切さを感じて、言い直し、言い換え、先取りなどの形で、自分の理解が正しいかどうか確認するもの。

〈会話例 11：大学編入についての話〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
36	34	*	NSF04	<なんで>{>}、日本語科を選んだんですか?。				
37	35	*	NNSF04	え、まあ、 <u>私、編入です、編入したんです。</u>	●			
38	36	*	NSF04	<u>あ、違う大学から?。</u>		④	I - 2	
39	37	*	NNSF04	うん、違う大学は卒業して、その大学はコンピュータ工学部だったんですけど。				a

I-3. 情報確認要求：話し手の発話に対して談話展開上、必要とされる情報や質問を加えて限定することにより、確認を求めるものである。この確認要求では前に出た話を確かめたり、再び質問するものも含む。

〈会話例 12：相手の名前について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
2	2	*	NNSM01	<u>ちょっと難しいんですけど、こう書くんですよ。</u>	●			
3	3	*	NNSM01	<u>あーの、元々の名前がですか?。</u>		④	I - 3	
4	4-1		NNSM01	はい、これ、日本、日本ではこれで、				a
5	5	*	NNSM01	ああー。				

I-4. 結論確認要求：話し手の発話から聞き手が結論を引き出して提示し、その結論でよいかどうかの確認を求めるもので、「～よね」「ですね」「～なんだ」などといった形式が多く用いられる。

〈会話例 13：韓国の男の人について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	C・P	A・T	AD	R
206	196-1	/	NNSF01	なんか、韓国人の男の人は、なんか、うん、きょうざい'交際'??[↑]、する前はなんか、				
207	197	*	NSF01	うんうん。				
208	196-2	*	NNSF01	"すごいな"とか、あ、なんかあのう人は目が高いな感じだと思ったけど(うん)、 <u>きょうざい'交際'して、1年??、くらい、すごったら、過ごしたら、なんか、おとう、なんか、弟(ああ)になった感じ。</u>	●			
209	198	*	NSF01	<u>あー、慣れちゃうんですね。</u>		④	I-4	
210	199	*	NNSF01	うん。				b

### 3.4. 調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応

NSの調整リクエスト・ストラテジーに対するNNSの反応を調べた結果が図2である。反応aの高い割合の順で示す。

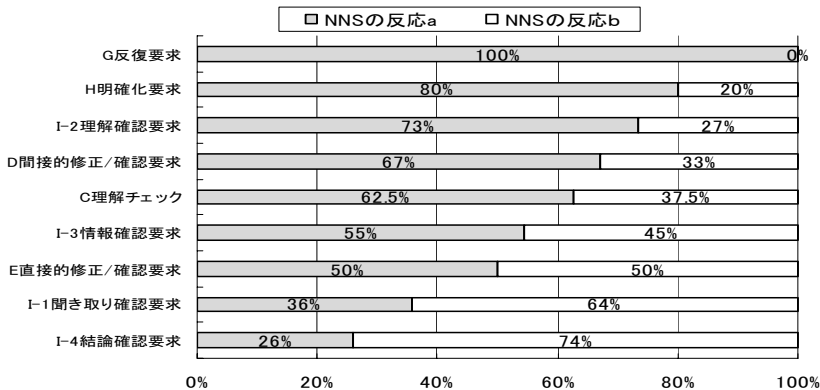


図2. NSの調整リクエスト・ストラテジーに対するNNSの反応

次の図3はNNSの調整リクエスト・ストラテジーに対するNSの反応を、反応aが高い順にグラフに表したものである。

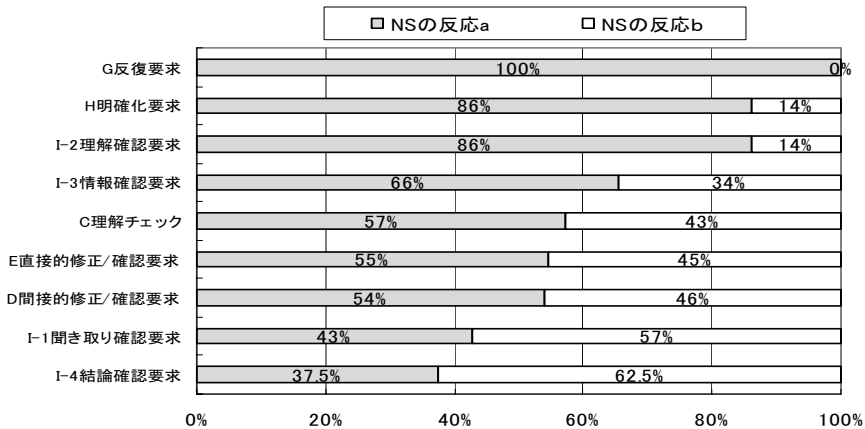


図 3. NNS の調整リクエスト・ストラテジーに対する NS の反応

NS と NNS 共に「G 反復要求」「H 明確化要求」「I-2 理解確認要求」は反応 a が高く、「I-1 聞き取り確認要求」「I-4 結論確認要求」に対しては反応 b が高い。

## 4. 考察

### 4.1. 本研究のまとめ

本研究では NS と NNS の接触場面において、調整行動の実態とインターアクションの観点から調整行動が両者のコミュニケーションの中でどのように機能しているかを考察してきた。本研究で出された結果を次の三つの観点からまとめる。

### 4.2. 接触場面の調整行動の実態

調整行動は大きく、話し手の調整行動と聞き手の調整行動の二つに分けられ、さらにこの二つの調整行動はそれぞれ、調整ストラテジーと調整リクエスト・ストラテジーの二つのタイプに分けられる。

このように 4 つに分けた調整行動のそれぞれについて次のような結果が得られた。

NS が行った、最も頻度の高い調整行動は高い順に、I 確認要求 > B 説明・具体化 > H 明確化要求であった。また、NNS は A 自己修正 > I 確認要求 > B 説明・具体化であった。NNS の発話には F 他者の修正は現れなかった。

調整ストラテジーと調整リクエスト・ストラテジーの二つの調整行動のタイプから、NS と NNS の使用割合を比較すると次のようになる。NS は調整ストラテジーが 22%、調整リクエスト・ストラテジーが 78% で、調整リクエスト・ストラテジーが多かった。NNS は調整ストラテジーと調整リクエスト・ストラテジーがほぼ半々であった。つまり NS の方が NNS よりも調整リクエスト・ストラテジーを多く使用すると言えよう。

### 4.3. 在住地による調整行動の相違点

次に、学習言語（日本語）の話されている現地に在住しているかどうかについては、韓国在住でも日本在住でも同じように、A 自己訂正が最も使用頻度が高く、次に I 確認要求であった。ただし、韓国在住の NNS が、わずかに A 自己修正が高い傾向にあった。また、D 間接的修正／確認要求は韓国在住が高く、E 直接的修正／確認要求は日本在住の方が高かった。

このように韓国在住と日本在住はほぼ同じ傾向を見せたものの、日本在住の方が I 確認要求と E 直接的修正／確認要求が多少高い使用頻度を見せた。これは日本在住の方が日常から日本人とのインターアクションが多いため、より積極的な調整行動を用いているといえよう。

また、C 理解チェックに関しては、韓国在住は 3%、日本在住は 1% で、韓国在住がわずかに高い。これは、例えば、「韓国の三国時代、知ってるんですか?、三国時代」など、NNS が韓国と関連がある話を持ち出す機会が多いからではないだろうか。

しかし、在住地による調整行動の相違点に関しては、今後、より多いデータからの更なる観点からの検討が必要であろう。

さらに NNS が使用する C 理解チェックと、NS が使用する D 間接的修正／確認要求や E 直接的修正／確認要求は、単なる日本語における文法や語彙だけの問題ではない。西口 (1999) は、これまでの接触場面でのコミュニケーションについての考え方は、NS と NNS のコミュニケーションにおける問題の原因を、NNS の伝達能力の欠如のみにとらえてきたと指摘し、このような考え方は NS と NNS とのコミュニケーションを、NS 同士のコミュニケーションと比較してきたことに起因するとしている。さらに、NS と NNS のコミュニケーションは NS 同士のそれと比較するものではなく、理解可能なリソースを動員して、共通理解という両者が共有する目標を達成するための独自の社会的実践であると見ることができる (Firth & Wagner 1997) と述べている。

NNS がより多い情報や知識を持っている場合、相手である NS に理解チェックすることは共通の理解に到達するための働きかけである。また、NS が間接にまたは直接、NNS に修正や確認を求める原因は、NNS により多い情報や知識があるからだと想定できる。つまり、NS と NNS のコミュニケーションで生じる問題は NNS だけにあるのではない。したがって、接触場面でのより円滑なコミュニケーションを行うためには、NS と NNS がどれぐらい共通の理解を求め、互いに協調するか否かに焦点を当てなければならない。

### 4.4. インターアクションの観点から見た調整行動の機能

インターアクションの観点から調整行動が両者のコミュニケーションの中でどのように機能しているかについては、調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応から考察した。

Pica et al. (1989) の結果と同様、本会話データでも明確化要求は適切なインプットやアウトプットを引き起こしているものが多いという結果と、I 確認要求に対する反応は“はい”、“いいえ”などで簡単に答えるものが多いという結果が出た。

また、明確化要求と確認要求以外の調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応も調べた結果、次のように三つの観点からの考察ができた。

調整リクエスト・ストラテジーには「適切なインプットとアウトプット」、「相手への働きかけ」、「コミュニケーション促進」という三つの機能があると考えられる。一つめの、適切なインプットとアウトプット機能を主に担っている調整リクエスト・ストラテジーは G 反復要求, H 明確化要求, I-2 理解確認要求 D 間接的修正/確認要求, E 直接的修正/確認要求であった。相手への働きかけという機能を主に担っているのは C 理解チェックと I-3 情報確認要求である。コミュニケーション促進という機能を主に担っているのは, I-1 聞き取り確認要求と I-4 結論確認要求であった。

宮崎 (1998) は意味交渉の「意味」の範囲を、狭義の文法項目の不適切さから、社会言語能力や社会文化能力までも視野に入れた広い意味でのものとして扱わなければならないとしている。そこで本研究では、NS と NNS の意味交渉の中で起こる不適切さを、言語形式によって理解困難にしているものだけに限らず、広く談話的な情報の不足によるものまで入れて考察した。その結果、上記の 3 つの機能を通じて、広い範囲で調整行動を捉えることができた。

さらに、メイナード (2000) は、会話での言語の主体は相手と互いに会話の役目を定義し合い、認め合う交渉を続けながら、常にその役目を交替し続けるとし、このような行為には次の二つの視点からの理解が必要だとしている。まず、主体は自分の立場から言語行為の意味を理解しようとするが、このとき、自分の内面のみを見つめるのではなく、相手を感覚的に受け止め、共同作業に入り、次に相手の行為の意味を理解してそれを支える補助的な行為をとる必要がある。これらは同時に遂行させなければならず、そのためには両者とも相手の行為を予測しなければならない。

NS と NNS の調整行動は異なるものとして捉えるべきではなく、メイナードがいう共同作業として見ていくべきである。

従来、NNS 側のコミュニケーション・ストラテジーと NS 側のフォリナー・トークについての研究のほとんどが、接触場面でのコミュニケーションの問題は NNS の伝達能力の不足であると考えていた (西口 1999)。NS と NNS のコミュニケーションと NS 同士のコミュニケーションは性質の異なるものである。したがって、NS と NNS の接触場面における意味交渉問題を考察するためには、両者のインターアクションの中でどのような調整行動が行われているかに重点を置くべきである。本研究では NS と NNS の調整行動を異なるものとして扱わず、話し手と聞き手、すなわち共同作業という視点から考察した。なお、NS と NNS の調整リクエスト・ストラテジーに対する相手の反応の考察によって、より広い範囲で調整行動を捉えることができた。

## 5. 言語教育への応用

### 5.1. 日本語教育への示唆

以上のような研究は日本語教育、さらには外国語教育にも応用していける可能性をもつ



ている。自然会話における調整行動の実態をもとに、教育現場で、意識的な調整行動の指導、より円滑なコミュニケーション指導を行う上で有効な材料を提供するだろう。例えば教科書で使われている調整行動との比較からも、より有効なコミュニケーション教育についての研究が可能であろう。

また、中級以上の教室で行われているタスク活動にみられる調整行動を狭い意味の文法項目だけに絞らずに、社会言語能力や社会文化能力まで視野に入れた広い意味での調整行動を取り入れた指導法を工夫していかなければならない。そのためには、NNS の学習レベルを揃えた自然会話をより多く分析し、適切で有効な調整行動をモデル化し、実際の授業で提示することが必要であろう。

それでは、自然会話から得られたこのような結果を具体的に会話教材あるいは教室活動としてどのように提示できるだろうか。

NNS の使用する調整行動のうち、「D 間接的修正/確認要求」や「E 直接的修正/確認要求」は NS に修正や確認を求めることによって、NNS 自身の日本語能力を確かめたり、新たな情報を得る機会になる。他にも「自己修正」や「明確化要求」なども会話教材に積極的に取り入れることにより、実際に日本語母語話者とのコミュニケーションを円滑に行うための具体的な会話スキルが提示できると考えられる。

NS が使用する調整行動は、モデル発話を含んでいるのが多く、NNS にとって自分の発話に活用させることができる。例えば、NS が最も多く使う「I 確認要求」は「～という意味ですか?」、「～ということですよ」と NNS が表現しなかった発話が提示されているので、次の自分の発話に活用できる。さらに、NNS の発話の誤りに対して確認を求めずに修正する「F 他者の修正」より NS の「I 確認要求」は、NNS に丁寧な印象を与えると同時に NNS に働きかける機能とコミュニケーション促進の機能も持っている。これらの機能は NNS の日本語のレベルが向上するにつれて、さらに要求される会話スキルといえるので、初級の段階からレベルに合わせた示し方が望ましいだろう。

## 5.2. 今後の課題

宮崎 (1999a) が指摘しているように、調整行動には一回だけの「単純調整」、連続した「複合調整」が存在する。本研究では、複数回に渡って調整が行われている調整行動に対する類型化や質的分析はできなかった。複合調整がどのような形で交わされているのかという点は今後の研究課題になる。

また今回の会話データは、日本語学習者のレベルを中・上級に絞った。今後は学習者のレベル別による調整行動の相違点も興味深い課題であろう。

最後に、日本語の会話教育における意味交渉の問題は NS と NNS の発話の修正のみならず、両者が同じ共通の理解と情報を共有するために行っていく共同作業として見直すべきである。そのためには、接触場面のコミュニケーションを NS と NNS のインターアクションにおける調整行動について、更に研究することが期待されるであろう。

## 参考文献

- 宇佐美まゆみ (1997) 「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジー研究とマルチメディア教材の試作』平成7年度～8年度科学研究費－基盤研究(C)(2)－研究成果報告書, 12-26.
- (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C(2)(研究代表者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- 大平未央子 (1999) 「接触場面の質問－応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』第3号, 大阪大学留学生センター, 67-85.
- 尾崎明人(1992)『「聞き返し」のストラテジーと日本語教育』『日本語研究と日本語教育(カッケンブッシュ寛子他編)』名古屋大学出版会, 251-263.
- (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー－聞き返しの発話交換をめぐって－」『日本語教育』81号, 19-29.
- 岡崎眸・岡崎敏雄 (2001) 『日本語教育における学習の分析とデザイン: 言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社.
- 西口光一 (1999) 「状況的学習論から見た日本語教育」『大阪大学留学センター研究論集 多文化社会と留学生の交流』第3号, 大阪大学留学生センター, 1-15.
- ネウストプニー, J. V. (1981) 「外国人の日本語の実態 (1) 外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45号, 日本語教育学会, 30-40.
- (2002) 「インターアクションと日本語教育－今何が求められているか－」『日本語教育』112号, 日本語教育学会, 1-14.
- 堀口純子 (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号, 日本語教育学会, 16-32.
- (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 宮崎里司 (1998) 「第二言語習得理論における調整, 意味交渉及びインプット」『紀要』11 早稲田大学日本語研究教育センター, 177-190.
- (1999a) 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」『日本語研究と日本語教育: 森田良行教授古稀記念論文集』明治書院, 368-380.
- (1999b) 「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン: 自己マーク自己調整を中心として」『早稲田日本語研究』7号, 早稲田大学国語学会, ひつじ書房, 13-24.
- (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の問題」『早稲田日本語教育研究』創刊号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 77-89.
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の『意味交渉』にタスクの種類が及ぼす影響－母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて－」『第二言語としての日本語の習得研究』1号第二言語習得研究会編集, 凡人社, 119-136.

- (2001) 「発話の自主的な『修正』を引き出すフィードバックとは」『南山日本語研究』第8号 南山大学大学院外国語研究科日本語教育専攻修士課程, 36-45.
- メイナード, 泉子 K. (2000) 『情意の言語学: 「場交渉」と日本語表現のパトス』くろしお出版.
- 横山紀子 (1998) 「言語学習におけるインプットとアウトプットの果たす役割」『日本語国際センター紀要』第8号 国際交流基金日本語国際センター, 67-79.
- Bakeman, R. & Gottman, J. M. 1986 *Observing Interaction: an Introduction to Sequential Analysis*. New York: Cambridge University Press.
- Firth, A. & Wanger, J. 1997 On Discourse, Communication, and (Some) Fundamental Concepts in SLA Research. *The Modern Language Journal*, 81-3, 285-300.
- Long, Michael. 1993. Native Speaker/Non-native Speaker Conversation and the Negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*. 4/2, 126-141.
- 1998. The role of implicit negative feedback in SLA : Models and recasts in Japanese and Spanish. *The modern Language journal*. 82 (3), 357-371.
- Mariko, Moroishi Wei. 2002. Recasts, Noticing, and Error Type : Japanese Learners' Perception of Corrective Feedback. 『第二言語としての日本語の習得研究』第5号, 凡人社, 24-41.
- Miyazaki Satoshi. 2000. Communicative Adjustment and Adjustment Marker : The point of Request for Clarification. 『第二言語としての日本語の習得研究』第3号, 凡人社, 57-93.
- Pica, T., Holliday, L., Lewis, N., & Morgenthaler, L. (1989) Comprehensible Output as an Outcome of Linguistic Demands on the Learner. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 63-90.
- Varonis, E. and S. Gass. 1985. Non-native/Non-native conversations : A Model for Negotiation of Meaning. *Applied Linguistics*, 6, 71-90.

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 台湾人学習者の初対面日本語会話における スピーチレベルの使用実態

林 君玲

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

## 1. はじめに

従来、日本語教育においてスピーチレベルの問題は切実なテーマとして議論されているにもかかわらず、現場では、スピーチレベルの決定、すなわち丁寧体と普通体のどちらを使用するかを、聞き手の属性に応じて決定するように指導されることが多く、「丁寧体」を教えておけば無難とされてきたのが現状である。そのためか、学習者はある程度日本語が上達しても、敬語を用いる場合には、どの程度のスピーチレベルを選択すれば適切であるかについて戸惑うものが少なくないだろう。さらに、台湾語と中国語では、日本語のような敬語体系を有さないため、台湾人学習者にとって、このようなスピーチレベルの使い分けを理解するのは一段と難しい。

近年、日本にいる学習者と日本語母語話者の接する接触場面におけるスピーチレベルの研究(上仲 1997, 陳 1998)は進んでいるが、教科書に強く依存している日本国外の学習者がどのようなスピーチレベルを用いるかについて、研究するものは未だに少ない。日本国内にいる学習者は母語話者との接触により、スピーチレベルの使用も徐々に母語話者に近づいていると考えられるのに対して、普段日本語母語話者と接する機会が少ない海外の学習者が選択したスピーチレベルは、日本にいる学習者のそれとは違うだろうし、スピーチレベルに関する会話教育も必要であると考ええる。

本研究では、自然会話分析という方法を用いて、留学経験がない台湾人学習者と日本語母語話者の接する場面のスピーチレベルの使用実態を調べ、それと日本語母語話者同士の接する会話場面との比較を通して、学習者と母語話者のスピーチレベルの選択における異同について考察を行う。さらに、各場面でのスピーチレベルの選択の特徴を探り、日本語教育における会話指導や会話教育教材の改善に貢献したい。

## 2. 研究方法

### 2.1. 実験計画

本研究では、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論の枠組みを借り、FT 度見積もりの公式を決定する三要素、「力関係 (Power)」、「社会的距離 (social distance)」、「負担の度合い (rank of imposition)」のうち、「初対面同性である事」、「同様の場面で自由に話して

もらう事」で、「社会的距離」と「負担の度合い」を一定に持ち、「力関係」がベース被験者の言語使用にどの程度影響を与えるかを明らかにする。対話相手の年齢を「年上」「同等」「年下」の三通りに分けるはずであるが、実際に台湾にいる十代の母語話者があまりいないと考慮した上で、対話の相手の年齢を「年上」(30代前半)と「同等」(20代前半)の二通りにし、対話者の性差はベース被験者のスピーチレベルの選択に影響を与える可能性があることを考慮した上で、すべての会話を同性同士に統制した。

表 1. ベースが行った会話の組み合わせ

学習者ベース <sup>1</sup> (NNSB)	対話者 (NSI)	母語話者ベース (NSB)	対話者 (NSI)
NNSBF- 20代前半の 大学生・大学院生 女性・4名 B: Base, F: Female	NSSF- 20代前半学生 (同等) S: Same	NSBF- 20代前半の 大学生・大学院生 女性・4名 B: Base, F: Female	NSSF- 20代前半学生 (同等) S: Same
	NSOF- 30代前半社会人 (年上) O: Old		NSOF- 30代前半社会人 (年上) O: Old
NNSBM- 20代前半の 大学生・院生 男性・4名 B: Base, M: Male	NSSM- 20代前半学生 (同等) S: Same	NSBM- 20代前半の 大学生・大学院生 男性・4名 B: Base, M: Male	NSSM- 20代前半学生 (同等) S: Same
	NSOM- 30代前半社会人 (年上) O: Old		NSOM- 30代前半社会人 (年上) O: Old

録音の場所には、教室などの場所を選ぶ。各会話は、名前も含め、互いに相手についての情報を知らされていない初対面同士の会話である。協力者には、話題を与えることは特にせず、「パーティなどで隣り合った人などを想像して自由に話してください。」というインストラクションを出し、約15分ずつ会話してもらって録音・録画した。会話終了の直後には、フォローアップ・アンケートに記入してもらい、「相手の年齢についてどう思ったか」、「相手の方は、初対面の方としては、話しやすかったか」「相手の方の話し方、態度について、少し失礼だ、或いは、少し不愉快だと感じたところがあったか」、「自然に話せたかどうか」、「録音・録画を意識したか」などについて主に5段階評価で回答してもらった。実験はそれぞれ東京と台北で実施した。

以上の条件統制に従い、接触場面16会話、母語場面16会話、合わせて32会話を収集した。

## 2.2. 分析方法

会話の文字化は、上記の方法で収集した32会話のうち、最初から10分間を対象とし、

<sup>1</sup> 台湾人ベースの条件を日本語専攻して日本語能力試験1級を持ち、留学経験がない学習者に限定した。

宇佐美 (2003) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」に従って行った。

### 2.3. 分析項目

本研究では、文字化したデータを数量的な分析が可能になるようにコーディングを行った。コーディング項目についてだが、まず、スピーチレベルの項目(発話文全体 POL, 文末 POL)は、宇佐美 (2001) の定義に従って分類した。また、予備調査から、丁寧語を示すマーカのない発話である「NM」は学習者の接触場面における談話の特徴を表す可能性が高いと考えた上で、猪俣 (2002), 李 (2003) を参考に、文末の「NM」発話を言語形式面から分類した。なお、母語話者同士の会話場面のデータには、動詞常体の「～て形」で終わる発話文が多かったのに対し、それは、接触場面ではあまり見られていない。これは学習者の習得しにくい部分と考えた上で、文末常体の動詞「～て型」のコーディングも行う。以下では、発話文全体 POL, 文末 POL, 文末 NM 発話の型, 文末常体「～て型」の順で、それぞれの具体的な分類項目を以下のように示す。

#### 発話文全体 POL<sup>2</sup>

この項目のコーディングは、発話文全体において現れた、言語形式の丁寧度が最も高いものについてコーディングを行った。

S-Super-polite form (尊敬語, 謙譲語, られる, わたくし等を含む発話)

P-Polite-form (敬体を含む発話)

N-Non-polite form (常体を含む発話)

NM-No-marker (丁寧度を示すマーカのない発話, 中途終了型発話など)

#### 文末 POL

P-Polite form (敬体)

N-Non-polite (常体)

NM-No-marker (丁寧度を示すマーカのない発話, 中途終了型発話など)

#### 文末 NM 発話の型

「I」—あいづち詞, 応答詞, 感嘆詞, 終助詞のみの使用など→「はい」「ええ」「うん」「あー」のあいづち詞, 「はい」「いいえ」「うん」などの応答詞, 「はあー」「えー」「ふん」などの感嘆詞, 終助詞「ねー」などのような終助詞のみの使用, 副詞「そう」のみの使用などが含まれている。

(1) NSBF2 : 「NSSF2 姓」さん。

→NSSF2 : はい。

「II」—言い淀みのない単語レベル発話。

---

<sup>2</sup> 発話文全体 POL は、発話文全体 Politeness の意味を指す。

- (2) NSSF2 : 「NSSF2 姓」と申します。  
→NSBF2 : 「NSSF2 姓」さん。
- 「III」一言い淀みのない文レベル発話。
- (3) NSSF2 : あー、若い人、<あーそうですね>{<}。  
→NSBF2 : <特に東京より>{>}西の人は特に。
- 「IV」一言い淀みのある単語レベル発話。
- (4) NSSF2 : えと、私は言語文化コースの「NSSF2 姓」です。  
→NSBF1 : 今、修士の…。  
NSSF2 : 1 年目です。
- 「V」一言い淀みのある文レベル発話。
- (5) →NSBM1 : じゃあ、もう移動が、かなり…。  
NSSM2 : 移動…まあ、そうなんです=。

### 文末常体の動詞「～て型」

(例) →なんか、で、なんか、「人名 4」は広東、あ、広東じゃない、香港出身だけど、香港の英語もかなりすごいよとか言って<2 人で笑い>。

## 2.4. 分析にあたっての仮説

- ① 母語話者ベースも学習者ベースともに、対話者が年上との会話で用いる、発話文全体の敬体以上の発話「S+P」、文末の「P」の使用割合は、対話者が同等の場合より高い一方、発話文全体の常体発話「N」、文末の「N」の使用割合は低い。
- ② 母語話者ベースの対話者の年齢に応じたスピーチレベルの使用割合の変化の幅は、学習者ベースのものより大きい。
- ③ 「丁寧体」を使えば、無難であるという意識に強く支えられてきた台湾人学習者の用いる台湾人学習者の用いる発話文全体 POL、文末 POL における「P」(Polite form) の割合は、母語話者のものより高い。一方、常体「N」の割合は低い。
- ④ ベースの対話者が同等の場合に用いる NM 発話の割合は、対話者が年上の場合に用いる NM 発話のそれより高い。母語話者ベースが多用する NM 発話の型は、学習者のものと異なる。

## 3. 結果

以下では、学習者のスピーチレベルの選択に注目し、母語話者同士の会話場面（以下、「母語場面」）と学習者と日本語母語話者の接触する場面（以下、「接触場面」）のスピーチレベルの結果を、発話文全体 POL、文末 POL、NM 発話の型に分けて示し、比較する。さらに、対話者の年齢によって生じた各スピーチレベルの割合の変化から、対話者の年齢という力関係がベースのスピーチレベルの選択へ及ぼす影響を考えた上、すべての項目において、対話者の年齢による割合の変化も分析対象とする。

なお、図の表示について、破線と実線の2種類の図を用意する。例えば、下記の図1は破線で表示する図であるが、その破線は、割合の変化を表示するものではなく、X軸のNSBとNNSBを比較するために繋げたものであることを示している。一方、実線で繋げてある図2は、対話者の年齢による割合の変化を表示するものである。

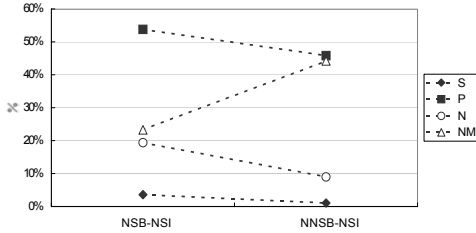


図 1.

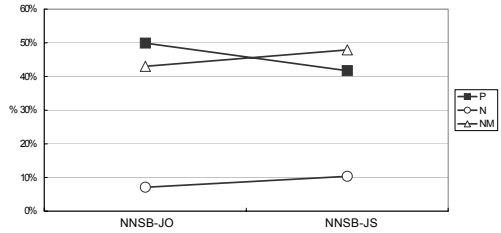


図 2.

### 3.1. 発話文全体 POL

#### 3.1.1. 発話文全体 POL における母語話者ベースと学習者ベースの比較

まず、対話者の年齢、ベースの男女差を考慮せず、母語話者ベースと学習者ベースの用いる発話文全体 POL の結果を図3に示す。

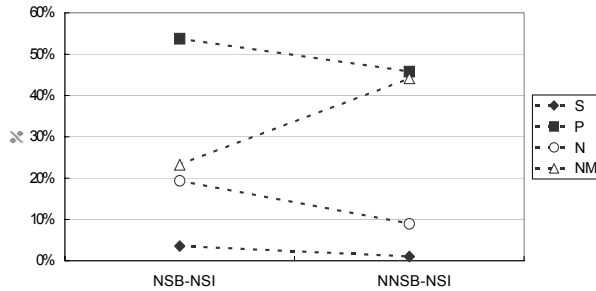


図 3. 発話文全体 POL における母語話者ベースと学習者ベースの割合の平均の比較

図3から分かるように、母語話者ベースは学習者ベースと比べ、尊敬語・謙譲語などを含む発話「S」、敬体「P」、常体「N」を多く用いている。それに対し、学習者ベースの場合には、丁寧度を示すマーカのない発話「NM」が、母語話者ベースのものとは比べ、明らかに高い割合を示している。



### 3.1.2. 母語話者ベースと学習者ベースの対話者の年齢に応じて用いた発話文全体 POL の比較

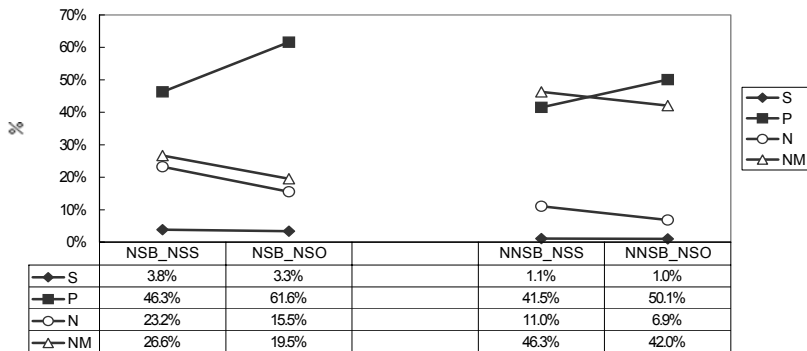


図 4. 母語話者ベースと学習者ベースの対話者の年齢に応じて用いた発話文全体 POL の比較

図 4 に示すように、まず、対話者の年齢にかかわらず、母語話者ベースが用いていた尊敬語・謙譲語などを含む発話「S」、敬体「P」、常体「N」の割合は、学習者ベースのものより高い。その一方で、丁寧度を示すマーカーのない発話「NM」の割合は、学習者ベースのものより明らかに低くなっている。また、「S」を除き、母語話者ベース、学習者ベースの対話者の年齢に応じて用いた発話文全体 POL において、敬体「P」は、対話者の年齢と正比例の関係にある一方、常体「N」と丁寧度を示すマーカーのない発話「NM」は、対話者の年齢とやや反比例の関係にあるという母語話者ベースと学習者ベースの共通の傾向が観察された。

さらに、対話者の年齢による割合の変化についてだが、まず、「S」について、母語話者ベースと学習者ベースともに、対話者の年齢による「S」の使用割合の変化の差があまり見られない。一方、「P」における母語話者ベースの対話者の年齢による割合の変化の幅は、学習者ベースの用いる割合の変化の幅より明らかに大きい。さらに、「N」と「NM」における母語話者ベースの対話者の年齢による割合の変化の幅は、学習者ベースの用いるものよりやや大きいという結果が得られた。

## 3.2. 文末 POL

### 3.2.1. 文末 POL における母語話者ベースと学習者ベースの比較

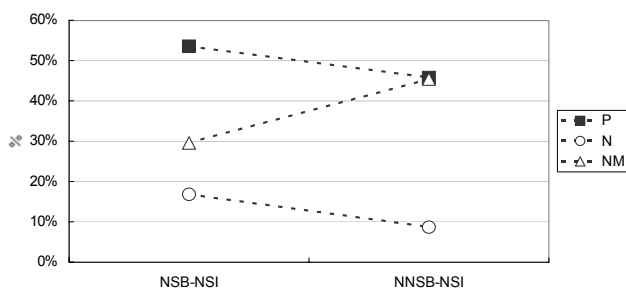


図 5. 文末 POL における母語話者ベースと学習者ベースの割合の平均の比較

図 5 から分かるように、母語話者ベースの用いる敬体「P」と常体「N」の割合は、学習者ベースのものとは比べ、やや高い。一方、学習者ベースの用いる丁寧度を示すマーカーのない発話「NM」の割合は、母語話者ベースのものより、高い割合を示している。

### 3.2.2. 母語話者ベースと学習者ベースの対話者の年齢に応じて用いた文末 POL の比較

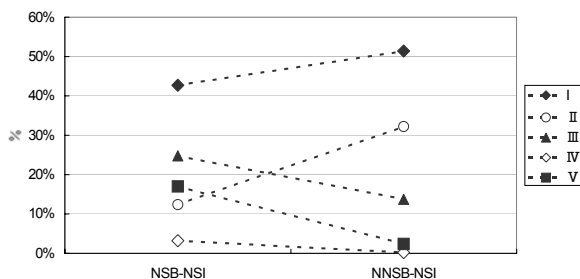


図 6. 対話者の年齢に応じた、母語話者ベースと学習者ベースの文末 POL の割合の平均の比較

図 6 に示すように、対話者の年齢にかかわらず、母語話者ベースの用いる敬体「P」と常体「N」の割合は、学習者ベースの用いるものより高い。一方、学習者ベースは母語話者ベースと比べ、丁寧度を示すマーカーのない発話「NM」を多く使用していることが分かった。また、母語話者ベース、学習者ベースの対話者の年齢に応じた文末 POL において、敬体「P」は、対話者の年齢と正比例の関係にある一方、常体「N」と丁寧度を示すマーカーのない発話「NM」は、対話者の年齢と反比例の関係にある。さらに、対話者の年齢に応じた割合の変化を見ると、まず、敬体「P」について、学習者ベースのものとは比べ、母語話者ベースの対話者の年齢による割合の変化は、より大きいことが見られる。また、常体

「N」と丁寧度を示すマーカーのない発話「NM」の場合に、母語話者ベースの対話者の年齢による変化の幅は、学習者ベースのものよりやや大きい。

### 3.3. 文末 NM 発話の型

#### 3.3.1. 母語話者ベースと学習者ベースの NM 発話の型の割合の比較

以上の結果から、初対面日本語会話において、丁寧度を示すマーカーのない発話は、学習者ベースのスピーチレベルの選択の特徴ではないかと考えられる。以下では、母語話者ベースと学習者ベースの用いる NM 発話の型の結果を図 7 に示す。

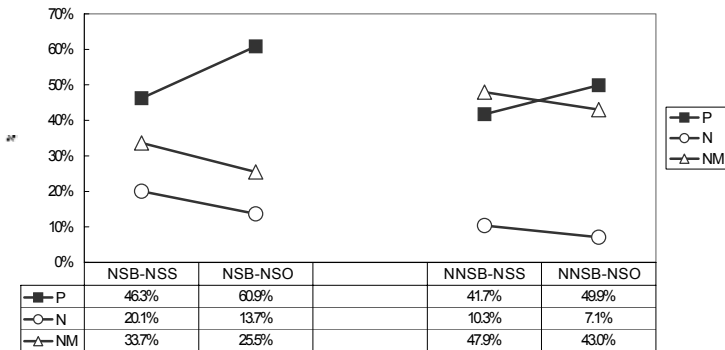


図 7. 母語話者ベースと学習者ベースの NM 発話の型の割合の平均の比較

図 7 から分かるように、母語話者ベース、学習者ベースともに、最も多く用いている NM 発話の型は「はい」「うん」などの相づち詞、応答詞などを含む発話「I」であり、最も用いることが少ないのは言い淀みのある単語レベル発話「IV」である。母語話者ベースの用いる言い淀みがない文レベル発話「III」と言い淀みのある発話「IV」と「V」の割合は、学習者ベースのものより高い。一方、学習者ベースのほうは、「はい」・「うん」などの相づち詞、応答詞などを含む発話「I」と単語レベル発話「II」を母語話者ベースと比べ、多く用いていることが分かる。

### 3.3.2. 母語話者ベースと学習者ベースの対話者の年齢に応じて用いた「NM」発話の型の比較

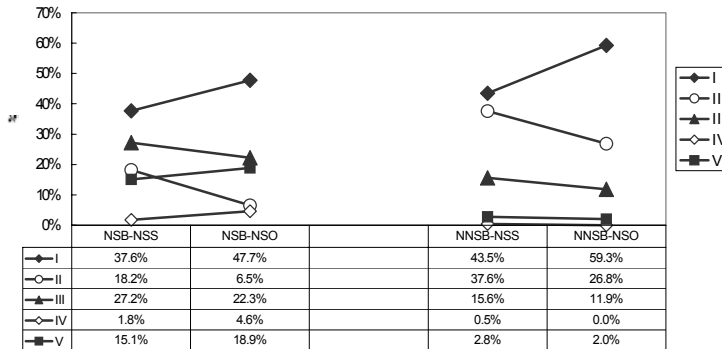


図 8. 母語話者ベースと学習者ベースが対話者の年齢に応じて用いた「NM」発話の型の割合の比較

図 8 に示すように、対話者の年齢にかかわらず、学習者ベースが用いていた相づち詞、応答詞などを含む発話「I」と言い淀みがない単語レベル発話「II」の割合は、母語話者ベースのものより高い。とくに、言い淀みがない単語レベル発話「II」の場合、学習者ベースが用いていたものは、母語場面の基本状態 (default)<sup>3</sup>を逸脱している。つまり、ディスコース・ポライトネス理論<sup>4</sup>の観点から捉えると、対話者が年上の場合、失礼になっている可能性がある。よって、学習者ベースにとってこういった単語レベルを選択する際、対話者の年齢や社会的地位によって注意が必要であろうと思われる。

なお、母語話者ベースが用いていた、言い淀みがない文レベル発話「III」、言い淀みがある発話「IV」と「V」の割合は、学習者ベースのものより高い。そして、母語話者ベースと学習者ベースともに、「I」の割合は、対話者の年齢と正比例の関係にあるのに対し、「II」の割合は、対話者の年齢と反比例の関係にあるということが共通している。さらに、対話

3 基本状態：宇佐美(2001) ディスコース・ポライトネス理論(以下、DP 理論) の用語である。DP 理論では、ポライトネスを「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」に分けて考える。「有標ポライトネス」として位置付けられているのは、B&L(1987) が提唱した、1 発話行為レベルにおけるフェイス保持のためのストラテジーとしてのポライトネスである。「無標ポライトネス」とは、「守られていて当たり前であり、期待されるポライトネスがないときに初めてそれが意識され、impolite だと捉えられる」を指すものである。この無標ポライトネスを形成する諸要素と、その総体としての談話の典型を、DP 理論では基本状態と呼んでいる。

4 宇佐美(2001) のディスコース・ポライトネス理論(以下、DP 理論) では、ポライトネスを「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」に分けて考える。「有標ポライトネス」として位置付けられているのは、B&L(1987) が提唱した、1 発話行為レベルにおけるフェイス保持のためのストラテジーとしてのポライトネスである。「無標ポライトネス」とは、「守られていて当たり前であり、期待されるポライトネスがないときに初めてそれが意識され、impolite だと捉えられる」を指すものである。

者の年齢による割合の差を見ると、まず、「Ⅰ」について、学習者ベースの用いるものの割合の変化は、母語話者ベースのものより大きい。また、「Ⅱ」についてだが、対話者の年齢による割合の変化の幅には、母語話者ベースのほうは、学習者ベースよりやや大きい。そして、「Ⅲ」の割合の変化を見ると、母語話者ベースは学習者ベースのものとはほぼ変わらない。なお、言い淀みがある発話「Ⅳ」と「Ⅴ」についてだが、母語話者ベースのほうは、学習者ベースと比べ、変化の幅がやや大きいように見受けられる。

### 3.4. 文末常体の動詞「～て型」

以下の表2は、各会話から文末常体の動詞「～て型」を抽出して、集計したものである。

表2. 文末常体の動詞「～て形」の分布：(使用回数/1 会話の常体「N」の回数)

会 話	学 習 者 ベ ー ス	対話者	会 話	母語話者 ベ ー ス	対話者
NNSBM1-NSSM1	0/34	0/19	NSBM1-NSSM2	1/16	2/6
NNSBM1-NSOM1	0/16	1/25	NSBM1-NSOM2	0/6	1/14
NNSBM2-NSSM1	0/13	2/13	NSBM2-NSSM2	1/5	6/9
NNSBM2-NSOM1	0/4	0/7	NSBM2-NSOM2	2/6	1/11
NNSBM3-NSSM3	0/1	0/46	NSBM3-NSSM2	0/10	2/7
NNSBM3-NSOM1	0/10	0/34	NSBM3-NSOM2	0/6	2/19
NNSBM4-NSSM3	0/7	0/18	NSBM4-NSSM2	8/16	3/10
NNSBM4-NSOM1	0/3	0/15	NSBM4-NSOM2	3/12	
合 計	0/88 (0%)	3/177 (1.7%)	合 計	15/77 (19.5%)	17/109 (15.6%)
NNSBF1-NSSF1	0/12	0/36	NSBF1-NSSF2	6/29	10/25
NNSBF1-NSOF1	1/7	0/19	NSBF1-NSOF1	2/17	0/24
NNSBF2-NSSF1	0/2	0/22	NSBF2-NSSF2	4/21	0/29
NNSBF2-NSOF1	0/1	1/15	NSBF2-NSOF1	4/8	4/24
NNSBF3-NSSF1	0/26	0/46	NSBF3-NSSF2	4/25	9/40
NNSBF3-NSOF1	0/12	0/50	NSBF3-NSOF1	9/25	1/41
NNSBF4-NSSF1	0/3	0/23	NSBF4-NSSF2	9/39	10/26
NNSBF4-NSOF1	0/10	0/19	NSBF4-NSOF1	6/19	7/55
合 計	1/73 (1.3%)	1/230 (0.4%)	合 計	44/183 (24.0%)	41/264 (15.5%)

表2に示したように、常体の動詞「～て型」で終わる発話の使用は、学習者ベースは8人のうち、1人しか用いていないのに対し、母語話者ベースは、8人のうち、NSBM3を除いた全員が用いている。母語話者ベースのうち、男性ベースと比べて、女性ベースのほうが多く用いていることが分かる。そして、その使用割合を見ると、母語話者男性ベースは、

文末常体の 19.5%を占めているのに対し、女性ベースのものは、24.0%である。このことから、20代前半である母語話者ベースによる、初対面という社会的距離が大きい会話場面において、こうした文末動詞常体の「～て型」は、文末常体使用の約2割を占めていることが分かる。母語話者の女性ベースが動詞常体の「～て形」を多く使用することは、今回の女性ベースの文末「N」の割合が高いという結果に若干反映されていると考えられる。

メイナード(1994:121)では、「～て形」で終わる機能について、「発話の終わりに余韻を残し、相手に自分の見方や考え方を押し付けないようにする戦略と見てもよい」と述べられている。学習者側の、自然な日本語を学習したいという観点から今回の学習者ベースの結果を考えると、こういった動詞常体の「～て形」が文末に用いられている用法は、学習者がまだ習得していない部分かもしれない。

#### 4. 考察

以上は本研究の結果だが、さらに結果に対する考察は下記の(1)～(3)である。

(1) 図1と図2に示したように、学習者ベースに見られた「S」の割合は、母語話者ベースのものより低いという結果が得られた。実際の使用はどうなっているのかを明らかにするため、今回の会話データから見られた「S」レベルの語彙を抽出し、表3にまとめる。

表3. 尊敬語・謙譲語などを含む発話「S」(Super Polite form)の分布

会話	学習者ベース	対話者	会話	母語話者ベース	対話者
NNSBM1-NSSM1	申す・ <sup>5</sup> お姉さん・お爺さん・ください	お姉さん	NSBM1-NSSM2	申す・お宅・方*2・～させていただく・～ていらしゃる・出られる	申す・どちら・ご存知・なさる・いらして・やってらしゃる*3・住まってる
NNSBM1-NSOM1	申す	申す	NSBM1-NSOM2	申す	方々・方・どちら・こちら*2・ご出身・お勉強になる・卒業(下宿・勉強)される・住ま(行か)れる

<sup>5</sup> 網掛けの部分は、ベースが用いていた「方」、「どちら」、動詞「～れる(られる)」の尊敬表現及び、接頭辞「お」「ご」が付く語彙である。

NNSBM2-NSSM1	申す		NSBM2-NSSM2	申す・お名前*2・ご存知・～てらしゃる*3・おしゃる・～てらした・卒業される・行かれる	申す・こちら*2・いらっしゃる*2・おしゃる*2・～ていただく・やられる
NNSBM2-NSOM1	申す	おられる	NSBM2-NSOM2	申す・お好き・お読みになる	方・どちら・お家・卒業(勉強)される・～てください
NNSBM3-NSSM3	/		NSBM3-NSSM2	申す・お稽古・～ておる	申す・来られる*3・やってらしゃる*2・出られる・卒業される・いらっしゃる
NNSBM3-NSOM1	/	お上手	NSBM3-NSOM2	ありがとうございます	ご存知・おめでとうございます
NNSBM4-NSSM3	申す	～てください*2	NSBM4-NSSM2	ご存知・行かれる	申す・方・こちら*2・来られる*2・やってらしゃる*2・～させていただく・お会いした
NNSBM4-NSOM1	申す	/	NSBM4-NSOM2	/	される
NNSBF1-NSSF1	ご出身・どちら	どちら	NNSBF1-NSSF2	申す・お名前・留学される	どちら・伺う・泊まれる・おしゃる
NNSBF1-NSOF1	お客様	方*2・お刺身・お客さん*2・お仕事・ありがとうございます	NNSBF1-NSOF1	方・お給料・どちら・いらっしゃる・住まれる・帰られる	方・お店・お値段

NNSBF2- NSSF1	申す	/	NSBF2- NSSF2	申す・方*3・ご 存知・お仕事 *4・なさる・お しゃる*3・いら っしゃる *2・～てらっ しゃる*2	お名前・いら した・いらっ しゃる
NNSBF2- NSOF1	申す・致す	申す・お友 達・お店・お 仕事・～てく ださい	NSBF2- NSOF1	申す・なさる	お名前・いら した・いらっ しゃる
NNSBF3- NSSF1	申す	/	NSBF3- NSSF2	お知り合い*2	申す
NNSBF3- NSOF1	/	お名前	NSBF3- NSOF1	勉強される・ 行かれる	方
NNSBF4- NSSF1	/	お名前	NSBF4- NSSF2	申す・お手伝 い・お給料・ やられる	申す
NNSBF4- NSOF1	申す	お父さん・お 母さん	NSBF4- NSOF1	お仕事	こちら

表3から分かるように、母語話者ベースは、「かた」、「どちら」「～(ら)れる」、接頭辞「お」「ご」が付く語彙などをよく用いていたのに対して、学習者ベースは、自己紹介段階の「～(名前)と申します」に見られる「申す」という言葉を除いてはあまり用いていないことが観察された。学習者は初級時後半、或いは中級時前半の段階で尊敬語・謙譲語などを勉強しているにもかかわらず、実際の会話場面においてあまり使用していないことは非常に興味深い。例えば、「どちらの方ですか？」の「どちら」「かた」という自己紹介の段階の丁寧な言葉は、最近では初級のはじめの方で扱われていることが多い(坂本2002)。だが、学習者ベース8人の中で、女性ベース一人を除くと、ほとんど用いていないことが観察された。学習者ベースは限られた「S」レベルの語彙しか用いていないという傾向について、学習者ベースに対するフォローアップ・インタビューから、以下のようなことが明らかになった。まず、どの場面で、尊敬語を使ったらいいか、把握できない場合があるようである。例えば、「先生に対していらっしゃる、おっしゃるなどの尊敬語を使うのを知っていますが、30代の年上の人に使えるかどうか分かりません」というコメントや、正しい敬語を使う自信がないというコメントもあった。「間違えたら、かえって失礼になるかもしれないと考えて、デス・マス体を使っていれば、大丈夫だと思った」と答えた学習者もいた。さらに、『～れる(られる)』は尊敬表現として使えることは知っています。しかし、教科書では、『～れる(られる)』の尊敬表現より、動詞の尊敬・謙譲動詞の特別の



形（「いらっしゃる」「おっしゃる」<sup>6</sup>など）で載せている場合が多い」と答えた学習者も何人もいた。こうした学習者の心情が、「S」レベルの使用結果に、多少反映されているのではないかと考えられる。

(2) 図3と図4から分かるように、学習者ベースに見られた低い割合の文末「N」の結果について、今回の学習者ベースが用いていた常体「N」を見ると、母語話者ベースの用いている、動詞常体の「～て型」や、独話の場合の「～んだ」、相手の発話への理解・把握を表すときの「そうなんだ」など表現が、ほとんど見られない。この傾向の要因としては、常体「N」の使用のタイミングや機能などがまだ習得されていない可能性が考えられる。

(3) 図5と図6に示したように、母語話者ベースと比べ、学習者ベースに見られた高い割合の言い淀みがない単語レベル発話「II」および、あまり見られない言い淀みがある発話という結果について、以下では具体例を挙げながら、考察を行う。

まず、学習者ベースのデータしか見られない例や、母語話者ベースにあまり見られないが、学習者ベースによく見られたパターンの例を挙げる。

#### (II-1) NNSBF3 と年上の対話者 NSOF1 の会話例 (ライン番号 167) →簡略化した質問

164	152	*	NNSBF3	あの、日本にはない果物も(うん)たくさん II。		
165	153	*	NSOF1	II) ホントホント、うん、マンゴとか…。		
166	154	*	NNSBF3	あ、そうそうそう。		
167	155	*	NNSBF3	ライ、ライチは?。	NM	II
168	156	*	NSOF1	ライチもそう、美味しいですよ。		

(II-1) は NNSBF3 と年上の対話者 NSOF1 の台湾の果物についての会話例である。ライン番号 167 には、NNSBF3 は「ライチはどうですか?」という質問の代わりに、「ライチは?」という簡略化した質問をした。

#### (II-2) 質問に対する簡潔な答え (ライン番号 145)

144	132	*	NSOF1	あ、じゃあ、今までいろいろなところに行きましたけど、(うんうん) どこが一番、好きになりました?。		
145	133	*	NNSBF3	北海道<笑い>。	NM	II
146	134	*	NSOF1	やっぱり北海道か<2人笑い>。		

(II-2) は NNSBF3 と年上の対話者 NSOF1 の旅行についての会話例である。ライン番号 145 には、NNSBF3 は「北海道」という単語レベル発話で、NSOF1 の質問を答える。

学習者ベースは単語レベル発話を選択する際、場合によって（例えば、聞き取れない場

<sup>6</sup> 以上の内容は、学習者に対するインタビューの結果から整理したものである。

合), 自然に単語レベル発話を用いる可能性が考えられる。だが, 上に挙げた(II-1)と(II-2)のような「簡略化した質問」や「質問に対する簡潔な答え」の場合, NNSBF3の「ライチは?」「北海道。」という単語レベルの発話には, 「デス体」を付け, 或いは, インドネーションに注意を払えば, 年上に対してより適切になるのではないかと考えられる。

なお, 母語話者ベースが多く用いている一方で, 学習者ベースはあまり用いていない表現に, 言い淀みがある発話が挙げられる。以下の(V-1)は, 母語話者ベースの用いる例である。

(V-1) 言い淀みがある発話

39	37	*	NSBF1	じゃあ今、あのー(うん)住まれてるのは台湾ですか?。	P	
40	38	*	NSOF1	=あ、そうです、うん。	P	
41	39	*	NSBF1	で、今は帰国…。	NM	V
42	40-1	/	NSOF1	=今はね一時帰国中で、(あぁー)あの、あのなんかサーズが結構ね,,	/	
43	41	*	NSBF1	あ、<そうですよね>{<}。	P	
44	40-2	*	NSOF1	<あの、はやってたときに>{>} (うん) 1 回戻ってきて、(へー) でそのまま、まだいるんですけど。	P	

上の例(V-1)において, NSBF2はまず, 年上のNSOF1に住む場所に関して質問した。NSOF1が質問に対して答えたらNSBF1は, さらに今はなぜ日本にいるのかについて聞くが, 相手のプライバシーに関わる問題になるとも考えられるため, 「で, 今は帰国ですか?」と言い切るような表現の代わりに, 「で, 今は帰国…」というような言い淀みのある曖昧表現を用いている。こういった発話を用いることによって, 発話を和らげることができると考えられる。宇佐美(1995:35)<sup>7</sup>は, このような最後まで言い切っていない発話の機能について, 「最後まではっきり言い切らないことによって, 明言を避け, 発話を緩和したり, 相手に発話の機会を与える機能を持つ」たりすると述べている。母語話者同士の会話において, 言い淀み発話はよく使われているうえに, そこには対人関係上の機能も含まれているといえる。今回の結果から, 学習者ベースは言い淀み発話をあまり用いていないことが明らかになったが, このようなものが学習者ベースにはあまり馴染みがないものと推測される。

<sup>7</sup> (宇佐美 1995:35) スピーチレベル・シフトに関する研究の中で, 「述部が省略される場合や, 複文の場合, 従属節のみで主節が省略されたりする発話, すなわち, 最後まで言い切っていない発話を「中途終了型発話」と呼ぶ。

## 5. 結論

これまで、母語話者ベースと学習者ベースが用いていたスピーチレベルの結果をもとに、考察を行った。以下では、仮説を検証する。

まず、仮説①については、それと一致した結果が得られた。図2と図4に示したように、対話者の年齢が同等である会話と比べ、年齢が高い対話者に対しては、発話文全体、文末の敬体「P」をより高い割合で使用し、常体「N」を抑えて用いているという母語話者ベースと学習者ベースの共通の傾向から、母語話者ベースと学習者ベースともに、今回の初対面会話におけるスピーチレベルの選択に、「対話者の年齢」が影響を及ぼしていることが確認できた。また、対話者の年齢によるスピーチレベルの使い分けは、学習者ベースにとっても馴染みのあるものだと考えられる。ただし、対話者の年齢によるスピーチレベルの使用割合の変化の幅についての結果から、学習者ベースと比べ、母語話者ベースのほうは、対話者の年齢により強く影響され、それがスピーチレベルの選択に反映されていると推測される。

また、対話者の年齢に応じたスピーチレベルの使用割合の変化についてだが、結果は仮説②と一致した。図2と図4から分かるように、母語話者ベースの対話者の年齢に応じた敬体「P」と常体「N」の使用割合の変化の幅は、学習者ベースのものとは比べて大きいという結果が得られた。この結果を対話者の年齢という力関係が及ぼす、ベースの文末スピーチレベルの選択への影響の度合いという観点から捉えると、学習者ベースと比べ、母語話者ベースのほうは、対話者の年齢という力関係により強く影響され、それが文末のスピーチレベルの選択に反映されているといえる。

学習者ベースは、発話文全体 POL における「S」、発話文全体、文末の敬体「P」を、母語話者より多用する一方、常体「N」はあまり用いないという仮説③に対し、結果と反して、学習者ベースは、発話文全体の尊敬語・謙譲語などを含む発話「S」と発話文全体、文末の敬体「P」を、母語話者ベースに比べて使用しないという結果が得られた。

また、学習者ベースの用いる敬体「P」の割合が低かった結果について、学習者ベースに対するフォローアップ・アンケートの結果から、「初対面会話において、基本的にデスマス体を用いるはず、たまに常体を用いる」という学習者自身の意識が伺えた。しかし、実際の会話において対話者とのやりとりなどにより、学習者ベースのスピーチレベルの選択にも影響が出たのではないかと考えられる。なお、学習者ベースが用いた動詞常体「N」の割合が母語話者ベースのものとは比べ低かったという結果は、仮説③と一致した。今回の学習者ベースが用いていた常体「N」を見ると、母語話者ベースの用いる動詞の常体の「～て型」や、独話の場合の「～んだ」、相手の発話への理解・把握を表すときの「そうなんだ」など表現が、ほとんど見られない。この傾向の要因としては、常体「N」の使用のタイミングや機能などがまだ習得されていない可能性が考えられる。

NM 発話についてだが、本研究で示された結果は、仮説④を支持するものであった。すなわち、母語話者ベースと学習者ベースは男女ともに、NM 発話を、対話者が年上の場合にあまり用いず、対話者が同等の場合により多く用いていることが観察された。NM 発話の型を見ると、学習者ベースは、「はい」「うん」など構造がより簡単な相づち詞、応答詞

などを含む発話「Ⅰ」と言い淀みがない単語レベル発話を多く用いているのに対し、母語話者ベースは、言い淀みがない文レベル発話「Ⅲ」、言い淀みがある発話「Ⅳ」と「Ⅴ」を多く用いている。

## 6. 日本語教育への示唆と応用

以下では、日本語教育への応用について、考察したい。

まず、尊敬語・謙譲語などを含む発話「S」について、日本語レベルが中・上級に達すると、「日本人のように話したい」という意欲を持ってくる学習者が少なくないだろう。よって、学習者の日本語レベルに応じて、教科書に載せてある特別な尊敬動詞（「おっしゃる」、「いらっしゃる」など）をただ丸暗記させるのみならず、自然会話分析を通して、母語話者は普段どの程度の表現をとっているかを、学習者に指導する必要があるだろう。

また、文末の「N」の場合、母語話者ベースの多く用いている動詞常体の「～て型」などの使い方や、言い淀みがある発話などは、学習者ベースにとって未だに習得していない部分だと推測される。こういった日本語母語話者のよく用いている表現を自然会話のデータから抽出し、会話教育に反映させれば、学習者の「日本人なみの日本語」の習得に助けとなるだろう。

さらに、今回の結果から、学習者ベースは「デス・マス一本調子」ではなく、丁寧度を示すマーカのない発話を多く用いていたことが分かった。こういった結果は、自然会話分析を用いていないと得られない結果だと考えられる。学習者ベースの高い割合の言い淀みがない単語レベル発話の結果から、年上の対話者に対して、「簡略化した質問」、「簡潔な答え」などの表現を多用すると、失礼になる可能性があるため、なるべく避けたほうが良いという説明が不可欠であろう。

最後に、接触場面について、母語話者のフォローアップ・アンケートで指摘された、学習者ベースの第二人称の使用について少し触れておきたいと思う。今回のデータから、学習者ベースは年上の対話者に対して、「あなた」と「きみ」を用いることが観察されたが、対話者である母語話者はそれぞれ、フォローアップ・アンケートの「相手の方の話し方、態度について、少し失礼だ、或いは、少し不愉快だと感じたことはありませんか。」という質問に対して、「少しあった」と選択し、理由としては、「一度『あなたは』と言われたけど、私は慣れてるから、不愉快とは感じませんでした」と「一度きみと言われたから。」と回答した。こういった回答から、年上の対話者にとって、年下の相手に「あなたは…」と指名されていることは非常に気になるという様子が伺える。日本語の「あなた」には多くの制約があり、初対面のあいさつが終わるやいなや、「あなたは…」などと切り出す日本人はまずいないだろう。また、目上の人にも「あなた」は使えない。しかし、中国語の「你」が誰に対しても使えることから、学習者はよく「あなたは…」というような使い方をするのが予測できることであろうし、台湾の文型中心の日本語教育の影響とも繋がりがあるだろう。よって、二人称代名詞の問題は、「デス・マス体」を使うかどうかというようなスピーチレベルの選択の問題とは直接関係のあることではないが、使うと相手の機嫌を損なう可

能性があるゆえ、日本語教育における待遇表現の指導を工夫する必要があるだろう。

本研究では、学習者ベースと母語話者ベースのスピーチレベルの選択には、量的・質的な相同・相違点が観察された。日本語教育現場において、各場面の特徴を取り上げ、適切な言語使用を指導していくには有用であるし、必要だと思われる。本研究の結果は、日本国外の学習者の使用実態を断片的に示しているに過ぎないが、こういった会話分析を通して、学習者側にどういった特徴や問題点が見られるのか、といった学習者要因を探ることもできるし、さらに、日本語母語話者のスピーチレベルの使用実態を会話指導や会話教材に応用させることも考えられる。

## 7. 今後の課題

本研究では、スピーチレベルの選択を左右する要因として、「対話者の年齢」に注目して条件を整え、発話文全体 POL, 文末 POL さらに NM 発話を通して初対面会話のスピーチレベルの分析を試みた。だが、ベース被験者の数が少なかったために、個人的な癖や偏りが結果に影響しやすかった。今回の結果だけから一般化することは難しいが、年齢と性別の条件を統制して、同種のデータを蓄積し、研究を行うことは可能であろう。

また、本研究では、学習者ベースのスピーチレベルの選択には、母語話者ベースのものと若干違うという結果が得られたが、これらの要因を探り出すには、さらに下位分類し、追究する必要もあるだろう。とくに、学習者が高い割合で用いる NM 発話について、それがどういう場面で、どういう型の「NM」を用いているのか、それが対人関係において上記の何らかの機能をもっているのか、深く分析していくことが重要である。

なお、今回の分析にあたって、学習者ベースは、母語話者ベースのように多様なストラテジーを使用しながら会話を進めていくことがまだ習得できていないという前提で、学習者ベースの産出した日本語の特徴を探り出すため、すべて言語形式の形式面のみに注目した。今後より広い視点で、文レベルの「言語形式」のみならず、談話レベルの言語行動としての「会話のストラテジー」としての「話題導入の頻度」や「スピーチレベル・シフトの頻度」という観点からスピーチレベルを分析する必要があるだろう。

今回は横断的なスピーチレベルの選択に視点を置き、学習者ベースと母語話者ベースの使用実態を調査した。今後、母語話者との接触回数を増やすことによって、学習者がどのようにしてスピーチレベルを操作するか、という視点でスピーチレベルの使用実態を解明していきたい。

## 参考文献

生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12月号, 大修館書店, 77-84.

泉子・K・メイナード (1994) 『会話分析』くろしお出版

猪俣公克 (2002) 「タイ人留学生学習者のスピーチレベル選択の習得過程について」東京外

国語大学修士論文。

上仲淳 (1997) 「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベル及びスピーチレベル・シフトー日本語母語話者との比較考察ー」『日本語教育論文集ー小出詞子先生退職記念ー』凡人社, 149-165.

宇佐美まゆみ (1993) 「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析: 対話相手に応じた使い分けという観点から」『学苑』第 647 号, 昭和女子大学近代文化研究所, 37-47.

———— (1995) 「談話レベルから見た敬語使用ースピーチレベルシフト生起の条件と機能ー」『学苑』662 号, 昭和女子大学女子大学近代文化研究, 27-42.

———— (1997) 『言葉は社会を変えられる』明石書店.

———— (2001) 「ディスコース・ポライトネス」という観点からみた敬語使用の機能ー敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆する事ー」『語学研究所論集』第 6 号, 1-29.

———— (2003) 「改定版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13 年度~14 年度 科学研究補助金ー基盤研究 C (2) 研究成果報告書, 4-21.

———— (2003) 「初対面 2 者間会話におけるディスコース・ポライトネスの基本状態の調査ースピーチレベル/接頭語「お」「ご」の付く語/助詞「ね」「よ」「よね」という要素から」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13 年度~14 年度 科学研究補助金ー基盤研究 C (2) 研究成果報告書, 26-43.

オリヴィエーリ クラウディア (1999) 「イタリア人学習者の日本語におけるスピーチレベル・シフト」東京外国語大学修士論文.

坂本恵 (2002) 「日本語教育の中での敬語表現の扱い方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学留学生日本語センター, 61-67.

立松喜久子 (1989) 「外国人学習者の待遇表現のレベルの適正さについて」『日本語教育』69 号, 日本語教育学会, 61-68.

陳文敏 (1998) 「台湾人日本語学習者と日本語母語話者の発話末に見られるスピーチレベルシフト」『日本語教育学会春季予稿集』, 日本語教育学会, 57-62.

塚原真紀 (2000) 「理解・把握を示す「そうなんだ」ー話題展開の視点からー」『日本語教育学会秋季大会予稿集』, 日本語教育学会, 110-115.

三牧陽子 (1989) 「待遇レベルシフトの談話分析」『AKP 紀要』第 3 号, 同志社大学, 34-50.

———— (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示ー初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心にー」『社会言語科学』第 5 巻第 1 号, 57-73.

バルバラ・ピッツィコーニ (1997) 『待遇表現から見た日本語教科書ー初級教科書五種の分析と批判ー』くろしお出版.

ネウストプニー J.V. (1994) 「敬語回避のストラテジーについてー主として外国人の場合ー」

『日本語学』第2巻第1号, 明治書院, 62 - 67.

———— (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店.

山本富美子 (1989) 「待遇表現としての文体」『日本語教育』69号, 日本語教育学会, 77-92.

李恩美 (2003) 「丁寧度を示すマーカのない発話の日本語と韓国語の対照研究—その機能を中心に—」東京外国語大学修士論文.

Brown, P. & Levinson, S. C. 1987. *Politeness— Some universals in language usage*. New York : Cambridge University Press.

Usami, Mayumi. 2002. *Discourse Politeness in Japanese Conversation Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

# 台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用 —コミュニケーション機能を中心に—

張 鈞竹

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

## 1. はじめに

日本語の話し言葉では、文末の終助詞が微妙なニュアンスを伝えたり会話をスムーズに進行させたりすることが多い。その中で、「ね」という助詞は、日本語母語話者同士の日常会話で頻繁に使用されているが、日本語学習者にとって、その適切な使用は難しいように思われる。宇佐美(1997)で指摘されているように、陳(1987)、蓮沼(1988)、伊豆原(1992)など、「ね」の「内在的意味」や「言語形式としての『ね』の『中心的機能』」についての研究は少なくないが、「実際の会話における『ね』の『運用面における機能』(宇佐美 1997 : 242)」という捉え方はほとんどなされていない。日本語教育の観点から「ね」を分析・考察する研究も少なくないが、ほとんどが短いやりとりや文脈のない一文を対象としているため、やはり言語形式に目が向けられやすい。「実際の会話における『ね』の『運用面における機能』」という観点から「ね」を日本語教育と結び付ける研究はまだ少ないようである。

学習者に「ね」の用法・機能を充分理解させ使いこなせるようにするためには、日本語教授において何を補い、どう教えるかを探る必要がある。そのためには、学習者の「ね」の使用状況に関する研究の蓄積が欠かせない。

本研究では、自然会話をデータとし、「運用面における機能」の側面から台湾人日本語学習者による「ね」<sup>1</sup>の使用実態を明らかにし、それが日本語母語話者による「ね」の使用実態とどう異なるかを分析する。すなわち、本研究は形式的な正誤を見るのではなく、学習者の使用する「ね」がどのようなコミュニケーション機能を担っているのかを探る試みである。

本研究では以下のように研究課題を設定した。

- (1) 台湾人日本語学習者と日本語母語話者は「ね」をどの程度使用しているのか。
- (2) 使用された「ね」を機能別に見た場合、使用傾向にはどのような特徴が見られるか。

---

1 本研究では、従来感動詞、間投助詞、終助詞、終助詞の間投用法などとして分類されている「ね」のすべてを分析対象とする。ただし、「ね」とほかの助詞との組み合わせの形(「わね」、「よね」、「かね」など)については、複合的な機能を持つか、別の機能を持つかを新たに検討する必要があるため、本稿では観察対象外とした。



## 2. 研究方法

### 2.1. 会話データの収集

#### 2.1.1. インフォーマントの設定

台湾人日本語学習者が使用した「ね」の特徴を捉えるためには、台湾人学習者と日本語母語話者との接触場面を見るだけでなく、日本語母語話者同士の場面（母語場面）との比較を行う必要があるため、インフォーマントとして、台湾人日本語学習者と日本語母語話者を設定し、接触場面と母語場面の両方からデータを収集した。

表 1. インフォーマントの設定

インフォーマント	人数	年齢	その他
台湾人日本語学習者（接触場面） NNSF01, NNSF02 … NNSF9, NNSF10	10	20代	日本語能力試験1級を持ち、日本に留学している（2年間以上）上級学習者
日本語母語話者（母語場面） NSF11, NSF12. … NSF19, NSF20	10	20代	東京近辺の大学・大学院に在籍する学生

\*<sup>1</sup> NNSF: 台湾人日本語学習者・女性

\*<sup>2</sup> NSF: 日本語母語話者・女性

本研究では、性差や世代差は研究対象としないため、同世代同性間の会話のみを扱う。また、「普通体の文の方が丁寧体より『ね』、『よ』となじみやすい（益岡 1991 : 104）」とする知見から、ある程度親しい関係にある友人同士の雑談、すなわち普通体の会話を収集した。

#### 2.1.2. 会話データ収集の方法・手続き

実験の同意が得られた協力者には、「同性同年代の親しい友人を連れてきてください」と共通のインストラクションを与えた。ただし、親疎の感覚は人によって差があり、会話相手の間で親しさに関して感覚のずれが生じる場合も考えられる。そのため、両者の親しさに関して、フォローアップ・アンケートで確認した。

会話の録音場所には、インフォーマントの自宅や教室などインフォーマントにとって話しやすい場所を選ばせた。話題は特に与えず、普段どおり話してくれるよう口頭で伝えた。実験者が戻ってくるまでの間（15～20分）会話を続けてくれるよう指示し、レコーダーのスイッチを入れた後、実験者は退室した。会話の後、フォローアップ・アンケートを互いに相談することなしに記入してもらった。以下、インフォーマントの組み合わせを表2に示す。

表 2-1. 各会話のインフォーマントの組み合わせ（接触場面）

会話番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
会話者	NNSF01   NSF01	NNSF02   NSF02	NNSF03   NSF03	NNSF04   NSF04	NNSF05   NSF05	NNSF06   NSF06	NNSF07   NSF07	NNSF08   NSF08	NNSF09   NSF09	NNSF10   NSF10

表 2-2. 各会話のインフォーマントの組み合わせ（母語場面）

会話番号	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
会話者	NSF11-NSF12	NSF13-NSF14	NSF15-NSF16	NSF17-NSF18	NSF19-NSF20

## 2.2. 分析方法

### 2.2.1. 会話データの文字化

得られた会話は、それぞれ会話の始まりからの 15 分間を文字化した。文字化は、宇佐美 (2003) の「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従った。文字化した会話は 15 分×15 の計 225 分であり、これを本研究の分析対象とする。

### 2.2.2. 分析項目

宇佐美 (1997) に基き、実際の会話における「ね」の「運用面におけるコミュニケーション機能 (宇佐美 1997 : 246)」を下記の 5 項目に分類する。以下は各機能の説明と分類の基準を示したものである。また、会話データにおける使用例も挙げた (例中の該当する機能の「ね」には「ね」と下線を施した)。

#### ① 会話促進 (Facilitating) —— 相互作用的用法

宇佐美 (1997) では、「話し手が対話相手と意見・考えなどを共有するものと想定することによって相手との一体感を示したり、相手の発話に同意を示すことで聞き手に対する連帯感 (solidarity) や肯定的態度を示すもの (宇佐美 1997 : 248)」であり、「取り去ることも可能であるが、そうすると、その話者の言い切りによって、会話の流れが途切れる感じや、ごちない感じになってしまうものが多い (宇佐美 1997 : 249)」としている。談話レベルでは、特定の内容に対して同意したり同意を求めたりするものというより、概して相手と同じような考えだということを表現している。

## 〈例1：会話⑫（NSF13-NSF14）より：機械に強い友人について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
361	340	*	NSF14	だから MD も、(うん) 壊れた MD を、(うん) なんか、最近の話、これも、(うん) 壊れた MD を分解して、(うん) また作り直したら直ったとかって<2人で笑い>。	
362	341	*	NSF14	それがまだ別の話だよね、っていうの。	
363	342	*	NSF13	MD プレーヤーでしょう?、こんなちっこいやつでしょう?。	
364	343	*	NSF14	そうそうそうそうそう。	
365	344	*	NSF13	すごい <u>ね</u> 。	①
366	345	*	NSF14	<u>ね</u> ー。[↑]	①
367	346	*	NSF14	で、なんかちっちゃい頃は、(うん) それこそ、なんていうんだろう、ラジカセみたいなものを分解 (うん) して、(うん) で、違う箱に、なんか普通の箱??、(うん) 木箱だったかな、靴箱だったつつってたかな、普通の箱に (うん) 繋げて、(うん) スピーカにしたりとかしてたらしい。	

## ② 注意喚起 (Attention-getting) —— 話し手中心用法

宇佐美 (1997) では、「話し手が聞き手を自分の話題に引き込むために、自分の発話を強調したり、相手の注意を喚起するものであり、聞き手が同じ情報を持っているか否かという判断も必要ない (宇佐美 1997: 250)」ものであるとされ、会話促進の機能を持っているとも考えられる。しかし、「『注意喚起』の『ね』は、取り去っても、文意が変わったり、ぎこちなくなるということはなく、また、相手に失礼になるということもない (宇佐美 1997: 251)」という点は、「会話促進」の「ね」と大きく違っている。「多用すると、相手や時と場合によっては、失礼になってしまう危険性がある (宇佐美 1997: 251)」とされている。

## 〈例2：会話③（NNSF03-NSF03）より：進路について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
69	67	*	NNSF03	あ、でも、この前 <u>ね</u> 、(うん) あの、先生と相談したの、(うん) これからどうするって。	②

70	68	*	NSF03	あー。	
71	69	*	NNSF03	で、そうしたらね、もともと1月くらいの時、やめようと思ったの。	②
72	70	*	NSF03	あ、そうなの?。	
73	71	*	NNSF03	で、その時、あの一、そ、その先、その時、すごく、先生と相談したかったけど、(あー) すごく忙しかったの、(あー) 先生が=。	
74	72	*	NNSF03	=で、(うん) そうしたら、もう、最近ちょっと"まあいいや"と思って、(うん) 急に先生がメールを送ってきて、(うん) "最近いつか時間があるよ"って、"来なさい"って、"あれっ?まだ覚えてる?"<笑いながら>。	
75	73	*	NNSF03	で、うん、そうしたら、"研究計画を持ってきた?"って、(あー) "ないです"って、すごく恥ずかしい。	

### ③ 発話緩和 (Softening) —— 聞き手中心用法

宇佐美 (1997) では、「聞き手の感情を配慮し、自分の発話を和らげるもの」であり、「話し手が、聞き手が知らないであろうと判断する情報を提供するときにも用いられ、あえて『ね』を用いて聞き手との情報の共有性を示唆することによって、発話を緩和する機能を果たしている (宇佐美 1997 : 251)」としている。「この『ね』」の使用は任意であるが、取り去った場合、話し手が自分の意見を言い切った印象を与えるため、時と場合、相手によっては、失礼になる場合が出てくる (宇佐美 1997 : 251)」とされている。

〈例 3 : 会話⑩ (NNSF10-NSF10) より : 相手の NSF10 が留学先で基督教に勧誘された経験について述べている場面〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
196	172	*	NSF10	あと、一緒にの寄宿舎、2人目だったんだけど、(うん) そのもう1人の子がやっぱり基督教で、まあ、そういう話もたまにはしてくれたけど、(うん) そんなに、自分から引きつけるっていう子じゃないから、(あー) すごい勧誘するっていう子じゃなくって、(おー) ちゃんと、まあ、礼儀正しい、まあ、(<笑い>) 教徒の人かなっていう感じで。	

197	173	*	NNSF10	へー。[↑]	
198	174	*	NSF10	だからよかったけど。	
199	175	*	NSF10	そうじゃなかったら、本当…、もう、キリスト教に引っ張られそうって嫌だったけどね。	
200	176	*	NNSF10	そっか。	
201	177	*	NNSF10	私まあ、特別な宗教とか信仰とかないけどね。	③
202	178	*	NSF10	バスの中でも勧誘してくるし、うん。	

## ④ 発話内容確認 (Confirming)

「話し手が自分の発話の内容に確信を欠く場合に、聞き手に確認するもの (宇佐美 1997 : 252)」である。

〈例 4 : 会話⑭ (NSF17-NSF18) より : 一緒に山登りに行く予定について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
155	139	*	NSF18	高尾山多分、ぬるいからね。	③
156	140	*	NSF17	<そう?>{<}	
157	141	*	NSF18	<涼しく>{>}ないから、上まで上がっても。	
158	142-1	/	NSF17	あっ、そんな…、そんなに高くないからっていう、	
159	143	*	NSF18	<うん>{<}	
160	142-2	*	NSF17	<意>{>}味ね。[↑]	④
161	144	*	NSF17	あー、そうだね。	①
162	145	*	NSF18	うん。	

## ⑤ 発話埋め合わせ (Verbal filler)

「話し手が、発話中に不確実な言語表現のために言いよどんだ時や、次の表現を計画する時間を稼ぐための間を埋め合わせるため、また、会話のギャップを埋めたりするために挿入された言葉 (フィラー) に付随するもの (宇佐美 1997 : 253)」である。

〈例 5 : 会話⑮ (NSF11-NSF12) より : NSF11 が遭遇した人身事故について述べている。〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
1	1	*	NSF11	きのうね、また人身事故にあったの、帰り。	②
2	2	*	NSF12	ははは、ついてないね、あんた。	①

3	3-a	/	NSF11	っていうか、あの一、西武線で、えっと <u>ね</u> //,,	⑤
4	3-b	*	NSF11	たぶん新宿前に帰っていったら、(あー) 思いっきり足止めくらって、なんかね、 なんか###っていうか。	②
5	4	*	NSF12	あー、そっかそっか。	

主語が倒置されている場合も含め、以上の基準によって、①～⑤のいずれの機能を持つか判断し、コーディングを行う。談話レベルから「ね<sup>2</sup>」の機能を分類する際に、一つの「ね」が複数の機能としての働きをしている場合も考えられる。しかし、コーディングの際には、「当該の『ね』が使用された談話レベルのコンテキストやイントネーション等を考慮し、その談話の流れの中で、当該の『ね』が最も強く果たしていると思われる機能として分類する(宇佐美 1997: 247)」という宇佐美(1997)が採っている方法に倣った。本研究では、台湾人日本語学習者と日本語母語話者による「ね」の使用実態を明らかにする際に、実際の使い方だけではなく機能別の使用頻度とその割合も比較の観点としているからである。

母語話者が学習者と会話する際にフォリナートークがなされた結果、そこで見られる「ね」の使用状況が母語話者同士の会話における「基本状態<sup>3</sup>」とずれている可能性があるということを考慮し、分析にあたっては、接触場面では台湾人学習者 10 人(NNSF01～NNSF10)の発話に現れた「ね」のみを対象とし、対話相手である母語話者(NSF01～NSF10)の発話に現れた「ね」は対象から除外した。母語場面での会話については、母語話者 10 人(NSF11～NSF20)それぞれの発話に現れた「ね」を対象とする。

「台湾人日本語学習者が『ね』をコミュニケーションにおいてどのような機能で用いているか」に主眼を置いているため、いわゆる「非用」は対象外とし、台湾人日本語学習者により使用された「ね」のみを分析する。学習者による「ね」については、イントネーションも考慮し、複数の母語話者の意見も参考にしうえて、①～⑤のいずれの機能を持つか判断し、コーディングを行った。なお、会話の流れの中で不自然と思われる「ね」の使用については複数の母語話者にその印象(不自然の箇所とその理由)を書いてもらい、「判別不可<sup>4</sup>」とした。

<sup>2</sup> 本稿では、会話に現れた「ね」と「ねー」の違いを区別せずに同じ「ね」として論じていく。

<sup>3</sup> 宇佐美(2001: 12)は、「基本状態」には、「無標ポライトネスとして認知されている談話の『ディスコース・ポライトネスの基本状態』と、「ディスコース・ポライトネスを構成する談話内の各要素の基本状態」の2種類があるとしている。

<sup>4</sup> 文脈においてほかの終助詞が適切と思われるものや、「ね」の前の部分に語彙的・文法的・表現的誤りがみられるものなどが含まれる。不自然と思われるものを研究者の推測によって無理やり①～⑤のいずれかの機能に分類することを避けるため、コーディングの際には「判別不可」とし、それらについて考察の部分で質的に分析する。

### 2.2.3. データの信頼性

自然会話をデータとして分析を行うには、発話文の区切り方、及びコーディングの「客観性」・「信頼性」が問われる。そこでセカンドコーダーを立て、筆者との間の一致率を測定した。発話文の区切り方については「 $\kappa=0.97$ 」という数値が得られており、コーディングについては、日本語母語話者のデータが「 $\kappa=0.97$ 」、台湾人日本語学習者のデータが「 $\kappa=0.80$ 」となっている。いずれも $\kappa$ が0.7以上であるので、信頼性が認められた。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 「ね」の使用傾向

#### 3.1.1. 「ね」の使用頻度とその総発話文数に占める割合

以下の表3は、「ね」の使用頻度とその総発話文数に占める割合を、話者のグループ別にまとめたものである。

表 3-1. 「ね」の使用頻度とその総発話文数に占める割合：「日本語母語話者」

話者	「ね」の使用頻度	総発話文数	割合(%)
NSF11	19	157	12.1
NSF12	20	173	11.6
NSF13	32	176	18.2
NSF14	53	184	28.8
NSF15	46	260	17.7
NSF16	19	233	8.2
NSF17	49	138	35.5
NSF18	31	132	23.5
NSF19	34	110	30.9
NSF20	22	97	22.7
合計	325	1660	19.6
平均	32.5	166	19.6
標準偏差	13.0	51.3	9.0

\*1 一発話文に複数回「ね」が使われることもある。

表 3-2. 「ね」の使用頻度とその総発話文数に占める割合：「台湾人日本語学習者」

話者	「ね」の使用頻度	総発話文数	割合(%)
NNSF01	11	200	5.5
NNSF02	30	167	18.0
NNSF03	15	199	7.5
NNSF04	21	176	11.9
NNSF05	10	173	5.8
NNSF06	16	238	6.7
NNSF07	9	124	7.3
NNSF08	3	126	2.4
NNSF09	3	226	1.3
NNSF10	23	177	13.0
合計	141	1806	7.8
平均	14.1	180.6	7.8
標準偏差	8.7	37.3	5.0

\*2 小数点2位以下四捨五入。

表3に示されたように、「ね」の使用頻度は、平均、日本語母語話者が32.5回、台湾人日本語学習者が14.1回となっている。台湾人日本語学習者の「ね」の使用頻度は日本語母語話者の半分以下であることが分かった。「総発話文数に占める『ね』の使用割合」という

点から見ると、平均、日本語母語話者が 19.6%、台湾人日本語学習者が 7.8%であった。親しい友人による会話場面では、台湾人日本語学習者の「ね」の使用率は日本語母語話者より低かったことが分かる。

### 3.1.2. コミュニケーション機能別に見た「ね」の使用傾向

「ね」の各機能における使用傾向を明らかにするため、インフォーマントごとにその各機能の使用頻度と割合をまとめた結果を表 4 に示す。

表 4-1. コミュニケーション機能別に見た「ね」の使用頻度と割合：「日本語母語話者」

機能 母語話者	①会話促進	②注意喚起	③発話緩和	④発話内容 確認	⑤発話埋め 合わせ	合 計
NSF11	9 (47.4)	7 (36.8)	0 (0)	0 (0)	3 (15.8)	19 (100)
NSF12	13 (65.0)	4 (20.0)	1 (5.0)	1 (5.0)	1 (5.0)	20 (100)
NSF13	11 (34.4)	13 (40.6)	5 (15.6)	0 (0)	3 (9.4)	32 (100)
NSF14	20 (37.7)	17 (32.1)	7 (13.2)	0 (0)	9 (17.0)	53 (100)
NSF15	11 (23.9)	35 (76.1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	46 (100)
NSF16	2 (10.5)	14 (73.7)	2 (10.5)	1 (5.3)	0 (0)	19 (100)
NSF17	13 (26.5)	30 (61.2)	5 (10.2)	1 (2.0)	0 (0)	49 (100)
NSF18	9 (29.0)	13 (41.9)	6 (19.4)	0 (0)	3 (9.7)	31 (100)
NSF19	10 (29.4)	13 (38.2)	8 (23.5)	1 (2.9)	2 (5.9)	34 (100)
NSF20	9 (40.9)	10 (45.5)	3 (13.6)	0 (0)	0 (0)	22 (100)
合 計	107 (32.9)	156 (48.0)	37 (11.4)	4 (1.2)	21 (6.5)	325 (100)
平 均	10.7	15.6	3.7	0.4	2.1	32.5
標準偏差	4.5	9.7	2.9	0.5	2.8	13.0

\* 括弧内は、各機能の使用頻度が全体に占める割合 (%)



表 4-2. コミュニケーション機能別に見た「ね」の使用頻度と割合：「台湾人日本語学習者」

機能 台湾人 学習者	①会話促進	②注意喚起	③発話緩和	④発話内 容確認	⑤発話埋 め合わせ	⑥判別不可	合 計
NNSF01	3 (27.3)	6 (54.5)	0 (0)	0 (0)	1 (9.1)	1 (9.1)	11 (100)
NNSF02	2 (6.7)	25 (83.3)	1 (3.3)	0 (0)	2 (6.7)	0 (0)	30 (100)
NNSF03	10 (66.7)	3 (20.0)	2 (13.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	15 (100)
NNSF04	9 (42.9)	3 (14.3)	5 (23.8)	0 (0)	4 (19.0)	0 (0)	21 (100)
NNSF05	8 (80.0)	2 (20.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (100)
NNSF06	4 (25.0)	9 (56.3)	1 (6.3)	0 (0)	0 (0)	2 (12.5)	16 (100)
NNSF07	3 (33.3)	4 (44.4)	1 (11.1)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (100)
NNSF08	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (33.3)	3 (100)
NNSF09	3 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (100)
NNSF10	9 (39.1)	10 (43.5)	3 (13.0)	1 (4.3)	0 (0)	0 (0)	23 (100)
合 計	52 (36.9)	63 (44.7)	13 (9.2)	2 (1.4)	7 (5.0)	4 (2.8)	141 (100)
平 均	5.2	6.3	1.3	0.2	0.7	0.4	14.1
標準偏差	3.4	7.3	1.6	0.4	1.3	0.7	8.7

\* 台湾人日本語学習者が使用した「ね」についても5つの機能に分類したが、中には、不自然さによって「判別不可」と判断された「ね」も含まれている。

以上の表4から分かるように、多少の個人差はあるが、全体的には、日本語母語話者も台湾人日本語学習者も、「注意喚起」「会話促進」の「ね」で、全体の約8割（日本語母語話者：80.9%，台湾人日本語学習者：81.6%）を占めており、「発話緩和」「発話埋め合わせ」「発話内容確認」の「ね」は、あまり使われていない。同じ「ね」であっても、使われる度合いは機能によって異なることが分かった。「会話促進」「注意喚起」が双方とも多いのは、親しい友人同士の会話の特徴であると思われる。「注意喚起」で相手を自分の話題に引き込んだり、「会話促進」で相手との連帯感を示すことで親しみを表したりしているものと推測できる。

### 3.2. 「会話促進」, 「注意喚起」, 「判別不可」の「ね」について

本節では、台湾人学習者の使用傾向に特徴が見られた「会話促進」「注意喚起」という2つの機能及び「判別不可」の「ね」について、会話例を交えて考察していきたいと思う。

#### 3.2.1. 会話促進

表4に見るように、「ね」のコミュニケーション機能の中では、日本語母語話者、台湾人日本語学習者を問わず、すべてのインフォーマントにおいてこの「会話促進」の使用が認められた。親しい友人同士の会話において、これが不可欠な機能であるという見方もでき

るであろう。

一口に「会話促進」と言ってもその使われ方は様々であり、会話データを見ると、「会話促進」の「ね」を含む発話には、「同意を求めたり、相手との共有化志向を伝達・表出したりするもの」と「陳述性のやや低いあいづち的なもの」が観察された。両者の比を見ると、母語話者が約 1 : 1 であるのに対し、学習者はおよそ 7 : 3 になっている。

〈例 6-1 : 会話⑬ (NSF15-NSF16) より : 中国大陸へ観光に行った時の体験について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
176	150-5	*	NSF16	<犬…、>{}違う、犬、猫、鳥、こう、括弧して、鍋って書いてる<2人で笑い>。	
177	155-1	/	NSF16	"選べんの選べんの",,	
178	156	*	NSF15	選べんの<笑いながら>。[手をたたく]	
179	155-2	*	NSF16	選べんの。	
180	157-1	/	NSF16	で、まだ、犬は,,	
181	158	*	NSF15	<笑いながら>いいチョイス。	
182	157-2	*	NSF16	犬は聞いたことあったから、(うん) いいけど、えっ、猫??。	
183	159	*	NSF15	猫も食べるなんて。	
184	160-1	/	NSF16	"猫は食べられないでしょう",,	
185	161	*	NSF15	<u>ね</u> ー。	①
186	160-2	*	NSF16	と思った。	
187	162	*	NSF15	なるほど <u>ね</u> 。	①

例 6-1 の話題は、中国大陸へ観光に行った時の体験である。NSF16 は「中国大陸において犬鍋のほかにもいろいろなメニューがある」ということを NSF15 に伝え、「猫も食べる」ことに対する違和感を表している。それに対して、NSF15 はライン 185 で強く共感を示し、NSF16 の発話 (ライン 186) の後に、「なるほどね」と軽くあいづちを打っている。このように、日本語母語話者による「会話促進」の「ね」は、「共有化志向を示すもの」と「あいづち的なもの」がほぼ平均して現れ、会話を進めるものである。

〈例 6-2 : 会話⑨ (NNSF09-NSF09) より : あるドラマについて〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
186	169	*	NNSF09	=私もともと『幸福の王子』を見て(あー) たけど、(うんうんうんうんうん) 台湾に帰っちゃったから、(あー) 最終回は見なかった。	

187	170	*	NSF09	そっか。	
188	171	*	NNSF09	うんうんうん<うんうん>{<}<}	
189	172-1	/	NSF09	<私>{>}あれ、最初2回ぐらい見て、あんまりにもこう不幸が、	
190	173	*	NNSF09	すごく…不幸ね<笑い>。	①
191	172-2	*	NSF09	なんて辛いんだろう<笑いながら>と 思っ	
192	174	*	NNSF09	だから見てるの、私<笑い>。	

例6-2は、双方とも見たことがある『幸福の王子』というドラマについて語られている。NSF09はライン189でそのドラマを見た感想を述べ、NNSF09はライン190で強く共感を示している。台湾人日本語学習者による「会話促進」の「ね」には、このような共有化志向をはっきり示すものが多い。

### 3.2.2. 注意喚起

「ね」のコミュニケーション機能の中では、日本語母語話者、台湾人日本語学習者を問わず、使用された「ね」全体の半分程度（日本語母語話者が48.0%、台湾人日本語学習者が44.7%）をこの機能が占めており、使用率が最も高かった。

注意喚起の「ね」は、話し手が聞き手を自分の話題に引き込もうとする時に使用されるものなので、語末や句末レベルで頻繁に現れる。言語環境<sup>5</sup>別に分析した結果、一番高い使用率となる「助詞との共起」では、日本語母語話者が「は、が、に、で、でも、て、も、の…」など、多種の助詞の後に「ね」を用い聞き手を自分の話題に引き込んでいる。一方、学習者は、多くの場合、以下の例7に示したように、「は」で話題を提起する際に「ね」を用いていた。

〈例7：会話②〉(NNSF02-NSF02)より：京都への花見について

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
44	41	*	NSF02	京都で、まあ、まだ咲いてないかも。	
45	42	*	NNSF02	まだかも。	
46	43	*	NSF02	『青春18キップ』で行ける時期には、まだかも。	
47	44-a	/	NNSF02	なんか(うん)前はね//,	②

<sup>5</sup> 言語環境とは、「ね」の前に現れる品詞の種類である。例えば、名詞に付加されているのか、動詞に付加されているのかなど（初鹿野1994）。

48	44-b	*	NNSF02	あのインターネットで(うん)ちょっと、(うん) まあ、調べてみたけど、(うん) なんか今年、今年のかな、それとも前のかな、あの、そのサイトで、(うん) なんか書かれたのは、今年は <u>ね</u> 、しがっ、あの、3月の、(うん) うーん、31日まで(うん) 発売。	②
49	45	*	NNSF02	で、使う時期は <u>ね</u> 、(うん) 4月の11日までって。	②
50	46	*	NSF02	うんうんうんうん。	

例7は、花見に行く予定について語られている。NNSF02は「青春18切符」で京都へ行きたいことを述べ、ライン47から何回も「ね」を用いNSF02を自分の話題に注目させようとしている。

「注意喚起」の「ね」は、相手を自分の話題に引き込もうとする時に文のどこでも用いることができ、言語環境による使用制限はないように見える。この「ね」の有無は伝達内容に関わらないので任意に使えとも言えそうだが、コミュニケーション機能の観点から考えると、無制限に使用できるわけではなく、「適切な使用頻度」がある。

従来、多用すると子供っぽく感じられる、押し付けるようなニュアンスが感じられるなどと言われている「注意喚起」の「ね」について、宇佐美(1997)では「ディスコース・ポライトネス」という観点から捉え、「適切な頻度であればポライトネスを逸してはいないが、適切な頻度を超すと、FTA (Face Threatening Acts) の度合いが高くなり、失礼になるという意味で、ディスコース・ポライトネスのひとつの構成要素になっている」としている。そして、会議場面と雑談場面においてその使用頻度を同定することによって、「注意喚起」の「ね」の場面に応じた「適切な使用頻度」を「会議などの改まり度の高いところでは、ほとんど使われない」としており、「成人女性の雑談においては、100発話中4、5回前後の使用が適切である」としている。

以上の観点から、親しい友人同士の会話に着目し、「注意喚起」の「ね」の「適切な使用頻度」について考えていく。表4に見られる日本語母語話者の使用率48%を目安とするなら、「親しい友人同士の会話」においてはどの程度が「適切な使用頻度」なのだろうか。

表3にまとめたように、母語話者による会話において、総発話文数に占める「ね」の割合は19.6%であった。先の『「ね」全体に占める『注意喚起』の割合(48%)を、総発話文数に対する割合に直すと約9.4%ということになり、100発話中約9回の使用ということになる。これを「適切な使用頻度」として、台湾人学習者による「注意喚起」の「ね」を検証していく。

表4-2から分かるように、台湾人学習者による「注意喚起」の「ね」の割合(44.7%)は、母語話者の場合(48%)と大きな差はないが、「ね」全体の使用数が少ないため、「注意喚起」の「ね」の使用数も母語話者よりずっと少なかった。「ね」の使用数が母語話者並みに

多い学習者が1人 (NNSF02) いるが、使用された「ね」の総数 30 のうち、「注意喚起」の「ね」が 25 であった。167 発話中 25 回の使用は上記の「適切な使用頻度」を大幅に超えている。

NNSF02 の会話のテープを聞いても、例 7 で抜粋したものだけでなく、15 分間の会話全体を通して話題を提起する際にこの「ね」を多用しており、相手を自分の話題に引き込もうという意図が強く感じられた。「ね」の総発話文数に占める割合 (表 3 参照) は、学習者の中で一番母語話者に近いが、押し付けるようなニュアンスが感じられてしまうのは、この「注意喚起」の「ね」が「適切な使用頻度」を超えたためとも考えられる。

### 3.2.3. 「判別不可」の「ね」について

コーディング項目に挙げた 5 つの機能についてそれぞれ使用例を考察したが、台湾人日本語学習者が使用した「ね」の中で、4 例を「判別不可」とした。

まず、文脈から判断して、ほかの終助詞が適切と思われるものについて見ていく。以下の 2 例では、「よね」の使用が適切と思われる。

〈例 11-1 : 会話⑥ (NNSF06-NSF06) より : 世界水泳大会について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
58	52	*	NSF06	前でもね、(うん) 今回の大会じゃない時も見た、(うーん) 私。	
59	53	*	NSF06	日本にも<来てたよね>{<}。	
60	54	*	NNSF06	<あっ、福岡>{>}よ、福岡。	
61	55	*	NSF06	うん。	
62	56	*	NSF06	それは 2001 年のことか。	
63	57	*	NNSF06	2、2 年 1 回なの?。	
64	58	*	NNSF06	去年なかった <u>ね</u> 。	⑥
65	59	*	NSF06	何?。	
66	60	*	NNSF06	あの…、/少し間/世界水泳。	

例 11-1 において、NNSF06 はライン 64 で「世界水泳大会が去年なかった」という事柄に対する自分の判断を確認しようとしているようだが、「去年なかったね」という発話では、「世界水泳大会が去年なかった」ことそのものの確認・念押しになってしまっている。「去年なかったね」の直前の「2、2 年 1 回なの?。」という発話によって「話し手の不確かさ」が明示されているので、ここでは「去年なかったね」ではなく、「去年なかったよね」と言うのが適切だと考えられる。NNSF06 の「去年なかったね」という発話の直後に、NSF06 が「何?。」と言っているのは、共通の認識について確認を求められているのか、単に事実・判断を伝えられているのかを疑問に思ったからであろう。

## 〈例 11-2 : 会話⑧ (NNSF08-NSF08) より : 修士論文の製本について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
231	206	*	NSF08	あとさ、製本ってどうするの?、あの。	
232	207-1	/	NNSF08	製本って、なんか、	
233	208	*	NSF08	うん。	
234	207-2	*	NNSF08	その一、コピーとかやってくれる(うん)店とかある <u>ね</u> 。	⑥
235	209	*	NNSF08	あっ、でもそれ結構高いかな。	
236	210	*	NNSF08	しかも私、(うん) 2冊になっちゃうし<笑い>。	
237	211	*	NSF08	あー、<そうだよね>{<}。	

例 11-2 は、修士論文の提出を控えた 2 人の会話である。会話の流れから、NNSF08 はライン 234 で「そういう店がある」という共通認識を相手に求めようとしているようだが、「その一、コピーとかやってくれる店とかあるね」という用法では、聞き手が同じように認識するかどうかを配慮せず、一方的に自分の判断を伝えることになってしまっている。これに対し、「よね」を使用すると、「その一、コピーとかやってくれる店とかある」ということを、聞き手が同じように認識するかどうかの「話し手の不確かさ」を表明し、聞き手に確認しようとする発話となる。ゆえに、ここでは「ね」ではなく、「よね」の使用が適切だと考えられる。

以上のような、文脈において「ね」より「よね」が適切と思われる 2 例のほかにも、以下のように、「ね」の前の部分に語彙的・文法的・表現的誤りが見られたために「判別不可」としたものが 2 例ある。

## 〈例 11-3 : 会話① (TF01-JF01) より : お茶について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
221	210-1	/	NSF01	<苦く>{<}、	
222	211	*	NNSF01	<ちょっと、こう、>{>}この、ちょっと『豊瑞ほうずい』がなんか味は濃茶に合わないが…。	
223	210-2	*	NSF01	うん、苦い感じ…。	
224	212	*	NNSF01	するよ<ね>{<}。	
225	213	*	NSF01	<うん、>{>}ちょっと。	
226	214	*	NNSF01	とは言っても、『何々の昔』って稽古用のわけもない <u>ね</u> 。	⑥
227	215	*	NSF01	でもあるんだよ。	

例 11-3 は、同じ茶道部に所属している 2 人の会話である。NNSF01 と NSF01 はお茶を飲みながら話している。会話の流れから、NNSF01 が『何々の昔』という高価なお茶は稽古に使うわけにもいかない」ということを共有の知識・情報と想定し、聞き手との連帯感を示そうとしていると判断できる。「ね」が「会話促進」という機能で使用されているように感じられたが、「ね」の前の部分に語彙的・文法的・表現的誤りが見られたものの機能を推測によって判別することを避けたいとの考えから「判別不可」とした。

〈例 11-4 : 会話⑥ (NNSF06-NSF06) より : フランスの水泳選手について〉

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	ねの機能
38	35	*	NNSF06	鼻栓?。	
39	34-2	*	NSF06	全然そういうことしないなら 【。	
40	36	*	NNSF06	】鼻栓ってなんか、鼻みたい?。	
41	37	*	NSF06	違う違う<違う><{>。	
42	38	*	NNSF06	<なんか><{> こういう専門用語はあまりよく分からない<ね><{>。	⑥
43	39	*	NSF06	<あ><{>の、洗濯ばさみみたいんで、鼻づまみ…。	
44	40	*	NNSF06	あっ、鼻栓って…。	
45	41	*	NSF06	うんうんうんうんうん。	
46	42	*	NSF06	やって泳ぐじゃない?、シンクロをやる人は。	
47	43	*	NNSF06	あー。	

例 11-4 では、シンクロナイズド・スイミングに出場したフランスの選手について語られている。会話の流れから、ライン 42 における「ね」が「会話促進」か「発話緩和」という機能で使用されているように感じられたが、場面においては、その前の部分(「分からない」)が不適切である。「分からないね」という用法では、「専門用語が分からない」ということについて相手に共感を求めるか、一方的に「専門用語が分からない」ということを相手に伝えることになってしまっている。相手の発話に出ていた「鼻栓」という単語が分からないという事実を聞き手の NSF06 に伝えてそれについて説明を求めようとしているのであれば、「分からないね」ではなく、「分からなくてね」という表現が適切だと思われる。これは「ね」自体から生じた自然さの問題というより、話し手が自分の話題に聞き手を引き込んでいこうとする形<sup>6</sup>が使えないことによるものであると思われる。

<sup>6</sup> 伊豆原 (1992 : 167) は、「きのう東京へ行きましたね」と言うべきところを「きのう東京へ行きましたね」とする誤用は、話し手が自分の話題に聞き手を引き込んでいこうとするときの形が使えないことによるものとしている。

#### 4. 日本語教育への示唆の観点からの考察

以上、台湾人日本語学習者の使用した「ね」がどのようなコミュニケーション機能をしているのかについて結果を見てきた。最後に、日本語教育への示唆について考えてみたいと思う。

台湾人日本語学習者が使用した「ね」を機能別に見た場合、それぞれの使用割合は日本語母語話者と大きな差がない。しかし、いずれの機能においても母語話者による使用頻度の半数に達していないことが目立った。学習者の自然会話を資料とした調査方法では、学習者がある言語使用表現が使えないとか、避けているということを断定するところまではいかない。しかし、3.1.2で確認したように、雑談場面においては「会話促進」「注意喚起」の「ね」が大切な働きをしていると考えられるので、NNSF08、NNSF09のように「ね」を使うことが少ない学習者の場合は、伝達上の誤解は招くことがなくても、場合によって相手に会話が途切れるように感じさせ、コミュニケーションに支障をきたすかもしれない。

3.2.1では、「会話促進」の「ね」が日本語母語話者により使用される場合、「共有化志向を伝達・表出したりするもの」と「陳述性のやや低いあいづち的なもの」がほぼ平均して現れるのに対して、学習者による「会話促進」の「ね」は、「共有化志向を伝達・表出したりするもの」に偏っていることを明らかにした。会話というのは、相手双方による相互作用であり、あいづちなど聞き手からの働きかけが日本人同士の会話では大きく作用するということを考えると、以上観察されたことは、「ね」の用法・機能を指導する時に、あいづち的な働きをする「ね」をもう少し頻繁に使用するように指導した方がよいことを示唆している。

「注意喚起」の「ね」は、この機能が台湾では重点を置いた指導がなされていないことを考えると、学習者による高い使用率が見られたことは興味深い。この「ね」は伝達内容に関わらず任意に使えらると思われていることも、「注意喚起」の「ね」が日本語教育においてあまり重要視されていない一因かもしれない。しかし、実際の会話におけるコミュニケーション機能という観点から考えると、このような「ね」は、意味のある働きをしている。「場面に応じた適切な頻度」で用いれば、相手を自分の話題に引き込んだり、会話のテンポを作り出したり、一種の「会話促進」機能を持つが、「適切な頻度」を超すと、押し付けがましく感じられ、失礼になるおそれがある。このようなことから考えると、指導にあたって強調すべきは「多用すると相手に不愉快な印象を与えるおそれがあるから一概に使わないほうがよい」ということでもなく、「相手を自分の話題に引き込もうとする時に任意に使ってよい」ということでもなく、「場面に応じた適切な頻度がある」ことであるだろう。教室では、「ね」が「適切な頻度」で使用された会話と、適切な頻度を大幅に超えて使用されているものの二種類を聞かせ、場面に応じた適切な頻度があるということを学習者に気づかせるのも一つの手である。

「ね」の用法・機能について様々な観点から研究されてきた。神尾（1990）では、「聞き手に情報がある場合」は「ね」が必須であるとし、必須要素としての「ね」の用法については、「話し手と聞き手とが既獲得情報として同一の情報を持っていると話し手が想定している場合、話し手の発話は『ね』を伴わねばならない」と規定している。また、任意要素



としての「ね」の用法については、「話し手が自己の発話により特に協応的態度を表現したい場合、話し手の発話は『ね』を伴うことが出来る」としている。伴・架谷(1996)では、「ね」の使用条件として「義務性」と「随意性」に分けており、それぞれの「ね」について具体的な指導法を提案している。「必須・義務的」「任意・随意的」というような分け方は、「ね」の誤用・非用を起こさないためには非常に有益であり、理解の助けになる。しかし、学習段階が進むにつれ、学習者による会話は単に「文法的に正しいかどうか」だけではなく、「自然さ」も問われてくる。実際のコミュニケーションの場では、初級学習者の発話に文法的・表現的誤りなどがあっても寛大に扱われるかもしれないが、上級学習者の発話は相手に母語話者並みに受け取られることもある。一つの表現形式「ね」だけであっても、相手・場面に応じて使えない場合、丁寧すぎる、ぞんざいだといった印象を与えてしまい、コミュニケーションに支障をきたす恐れがある。上級学習者に対して、「確認する時や同意を求める場合など『ね』がないと意味が通じなくなるから使用しなくてはならない」、もしくは「協応的態度を聞き手に示したい時に『ね』を任意に使用できる」というような指導法だけでは、「ね」は十分に学習されるとはいえない。

今回の観察結果を踏まえ、「ね」の指導における留意点について考えると、教科書の解説で扱っている「ね」を伴った発話内容がどのようなものであるかを解説することはもちろんであるが、語用論的ポライトネスという観点からの説明も必要と思われる。「ね」がどのような場面で、どういう相手と、どのようなコミュニケーション機能において使用されているかが重要だということを意識させ、「会話促進」「注意喚起」「発話緩和」「発話内容確認」「発話埋め合わせ」それぞれの機能についても説明する必要がある。

## 5. おわりに

今回は、コミュニケーション機能という側面から、台湾人日本語学習者と日本語母語話者が実際の言語使用において「ね」をどのように用いているかを分析し、その中から台湾人日本語学習者による「ね」の使用の特徴を捉えることを試みた。インフォーマント数の少なさ、台湾人日本語学習者による「ね」の使用総数の少なさなどを考慮すると、本研究の結果を安易に一般化することは危険かもしれないが、本研究はひとつのケーススタディーとして、台湾人日本語学習者の「ね」の使用について幾つかの示唆を含んだ結果が得られたのではないかと思う。

本研究は上級の女性学習者を対象として調査を行ったが、この結果を上級の台湾人日本語学習者一般に当てはめることができるかどうかは、男性学習者のデータも含め、より多くのデータを分析し検証する必要がある。また、「ね」には、イントネーションなど非言語的要素も深く関わるので、今後は、そのような要素と合わせて分析する必要があるだろう。もう1つ課題としてあげたいのは、「ね」とほかの助詞との組み合わせである。今回の台湾人学習者の会話では、「ね」「よね」の使い分けの難しさを示唆しているようにも思われる例が観察された。本研究では「ね」だけに着目したが、日本語学習者が実際の会話において「ね」をどのように使用しているかをより正確に確かめるには、「ね」とほかの助詞との

組み合わせがどのようなコミュニケーション機能において使用されているかについての考察も望まれるであろう。

今後は、コミュニケーション機能という観点から終助詞の用法・機能について研究を重ねていきたい。

## 参考文献

- 伊豆原英子 (1992) 『『ね』のコミュニケーション機能』『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会, 159-172.
- 宇佐美まゆみ (1997) 『『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス』『女性のことば・職場編』ひつじ書房, 241-268.
- (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書 談話のポライトネス』国立国語研究所, 9-58
- (2003) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) (研究代表者：宇佐美まゆみ) 研究成果報告書, 4-21.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』, 大修館書店.
- 陳常好 (1987) 「終助詞——話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞——」『日本語学』10月号 vol.6, 明治書院, 93-109.
- 西郡仁朗 (2003) 「一致度 (Cohen's Kappa) の測定について」下記のホームページ参照 (<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/gaidai/cohen.html> ; 2003. 10. 21 取得)
- 蓮沼昭子 (1988) 「続・日本語ワンポイントレッスン・第2回」『月刊言語』6月号 vol.17, 大修館書店, 94-95.
- 伴紀子・架谷真知子 (1996) 「誤用からみた終助詞『ね』の指導法」『アカデミア』文学・語学第 61 号, 南山大学, 135-156.
- 益岡隆志 (1991) 「終助詞『ね』と『よ』の機能」『モダリティの文法』くろしお出版, 92-107.

## 4. 資料編

『言語情報学研究報告』No.6 (2005)

## 本報告書で用いた記号凡例

本報告書で用いた文字化の記号についての説明を、宇佐美まゆみ (2004) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究C (2) (研究代表者：宇佐美まゆみ)，研究成果報告書，4-21 頁より，以下に抜粋する。

BTSJ は、その名の通り、「基本的な文字化の原則」であり、特定の研究の目的に応じて、例えば、より詳細な音声情報を付加するなど、BTSJ を基本にしつつも、特定の目的に適した独自の記号を設けることを奨励するものである。その一例として、最後に、特定の研究目的に適した記号を追加した例を示す。

尚、以下の記号は、「検索」などの際に漏れないよう、但し書きのあるもの以外は、「半角」で統一することを原則とする。

- 。 [全角] 1 発話文の終わりにつける。
- „ 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 、
  - ① [全角] 1 発話文および 1 ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
  - ② 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ‘ ’
  - ① 複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で ‘ ’ に入れて示す。
  - ② 通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、‘ ’ の中に正式な表記をする。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末 (発話文末) なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?、」をつける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。

[↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いる。

/少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。

/沈黙 秒数/ 1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は1発話文として扱い1ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。

= = 改行される発話と発話の間（ま）が、当該の会話の平均的な間（ま）の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話（文）について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。

… 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。

< >{<} 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{>}をつける。

【 【 】】 [全角] 第1話者の発話文が完結する前に、途中で挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【 【 】】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に【 【 】 をつけ、第2話者の発話文の冒頭には 【 【 】】 をつける。

[ ] 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴（アクセント、声の高さ、大小、速さ等）のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。

( ) 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、( )にくくって入れる。

- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。
- (< >) 相手の発話の途中で、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
- " " 発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を" "でくくる。
- 『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくくる。
- ### 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
- 「 」 トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護ために明記できない単語を表すときに用いる。
- // 本来の BTSJ のルールでは改行しないが、コーディングの便宜上、改行するものであることを示す。

---

追記

尚、「発話文終了セル」には、以下の2種類の記号を必ず記す。

- \* 句点「。」とは別に、発話文が終了していることを示す「\*」を、「発話文終了セル」に記入する。つまり、発話文番号と「。」と「\*」の数は必ず一致する。
- / 英語式コンマ2つ「,,」とは別に、発話文が終了していないことを示す記号「/」を「発話文終了セル」に記入する。つまり、「,,」と「/」の数は必ず一致する。

このように、発話文の終了を二重に確認し、漏れや重なりを防ぐようにする。

## 索引

## 事項

- 相手の様子 161
- 悪態の回数 161
- 意味交渉 243, 252
- 依頼に対する「断り」 223, 224
- インターアクション 183, 195, 243, 244, 251, 252, 256
- FTA(Face Threatening Act) 134, 142, 146, 165-167, 174, 180, 223, 293
- 開始部 199, 201, 202, 213-216, 225
- 会話教育 25, 130, 141, 161, 162, 165, 166, 181, 199, 213, 220
- 会話促進 283, 284, 290, 296-298
- 気配り発話 239
- 基本状態 165, 237, 238, 269, 287
- 共同作業 257
- 儀礼的な不同意 167, 168, 173-178, 181
- 言語行動 141, 142, 146, 147, 161, 162, 165-167, 183-185, 188, 191, 193, 195, 196, 199, 223, 224, 226, 237, 240, 241
- Cohen's Kappa 143, 172, 231, 245
- 断り談話 225, 226, 228-232, 234, 237-240
- 「断り談話」の構成要素 225-227, 231, 232, 234, 235
- コミュニケーション機能 290, 292, 293, 297-299
- 雑談 165, 166, 217, 282, 293, 297
- 自然会話 20, 43, 46, 74, 84, 123, 131, 152, 165, 166, 179, 199, 213, 215, 216, 219, 220, 223, 239-241, 261
- 自然会話の中で見られる悪態 141
- 親しい者同士のコミュニケーション 141
- 親しさの表現 141
- 実質的な不同意 167, 168, 173-177, 180
- 終結部 199, 201, 202, 213, 216, 217, 219, 220
- 終助詞「ね」 281
- スピーチレベル 185, 186, 191, 192, 261, 262, 264, 276, 278
- スピーチレベル・シフト 183, 186, 191, 192, 237, 238
- 前終結 201, 202, 206-212, 216, 217, 220
- 相互作用 15, 21, 161, 240, 241
- 対者敬語 191, 195
- 対人関係配慮行動 165
- 対人配慮行動 141, 236
- 対話場面 183
- 談話完成テスト, DCT (Discourse Completion Test) 223, 239
- 注意喚起 284, 290, 292, 293, 297, 298
- 調整行動 243, 244, 246, 249-252, 255-258
- 調整ストラテジー 245, 246, 251
- 調整リクエストストラテジー 245, 247, 251, 252, 254-257
- ディスコース・ポライトネス 287, 293

- ディスコース・ポライトネス理論 165, 174, 269
- ディスコースマーカ 201, 202, 206, 207, 213, 216, 217
- 丁寧度を示すマーカのない発話 263, 265-268, 277
- 適切な使用頻度 293
- 電話会話 213, 219, 224-226
- 日本語母語話者 165, 167, 243, 261, 282, 287, 288, 290, 292, 297, 298
- 人間関係再肯定 202, 206-212, 216-218
- 人称 185, 188-191, 196
- 発話埋め合わせ 286, 298
- 発話緩和 285, 298
- 発話内容確認 286, 298
- 判別不可 287, 290, 294, 296
- 否定的な評価を述べる言語行動 141
- フェイス 134, 141, 142, 165, 175, 178, 223, 269
- 不同意 165-167, 169-181
- ポライトネス 144, 165, 194, 269, 298
- ポライトネス理論 141, 166, 194, 261
- 有効なコミュニケーション教育 258
- 話者領域 185, 187-189, 193



## 固有名詞

- 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』 10
- 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 1』 10
- 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 2』 10. 11
- 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System For Japanese: BTSJ)」  
143, 167, 184, 201, 225, 245, 263, 283
- Albert, J. K. 144
- Albert, J. K., Keller-Guenther, Y., & Cormam, S. R. 144
- Bakeman, R. & Gottman, J. M. 143, 172, 231, 245
- Boxer, D. & Cortes-Conde, F. 142, 144
- Brown, P. & Levinson, S. C. 141, 165, 167, 175, 194, 223, 261
- Grice, P. 177
- Hay, J. 144
- Holtgraves, T. 166
- Hopper, R. 201, 203
- Liao Chao-chih 223
- Long, M. 243
- Nagórko, A. 187
- Rees-Miller 166, 169, 175
- Schegloff, Emanuel A. 213, 225
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. 99, 226
- Searle, J. R. 170, 176
- Straehl, C. A. 144
- Zajdman, A. 180
- 伊豆原英子 281
- 今石幸子 199
- 上仲淳 261
- 宇佐美まゆみ 15, 143, 144, 146, 161, 165, 167, 186, 201, 225, 237, 238, 245, 263, 275, 281, 283-287
- 岡崎眸・岡崎敏雄 243
- 岡本真一郎 178
- 岡本能里子 201, 208, 209
- 小野寺典子 201
- 神尾昭雄 297
- 久下恵子 219
- 熊取谷哲夫 201
- 国立国語研究所 226
- ザトラウスキー、ポリー 199, 201, 225, 239
- 鈴木睦 195
- 陳常好 281
- 陳文敏 261
- 津田早苗 142, 144
- 中山晶子 141, 161
- 西郡仁朗 143
- 西口光一 256, 257
- ネウストプニー、J. V. 183
- 蓮沼昭子 281
- 馬場俊臣・禹永愛 240, 241
- 浜田麻里 142
- 藤原智栄美 208, 209
- 星野命 142
- 伴紀子・架谷真知子 297
- 堀口純子 252, 253

益岡隆志 282

マレービアン、A 162

水谷信子 179

南不二男 226

三牧陽子 141

宮崎里司 243, 245, 257, 258

泉子・K・メイナード 257

吉野文 203, 204, 206

米川明彦 142

# 資料

東京外国語大学大学院 21世紀COEプロジェクト  
「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」

講演会

2004年度（2004年4月～2004年12月）

21世紀COE講演会	
日時	12月24日（金） 16:30～18:30
場所	語学研究所（419号室）
題目	日本語初級中級教科書の改訂と インターネット教材およびデータベースの作成
講演者	畑佐 由紀子准教授（Yukiko Hatasa, University of Iowa）

21世紀COE講演会	
日時	11月26日（月） 18:15～20:15
場所	研究講義棟（103号室）
題目	現代イギリス英語の発音：長期イギリス在住日本人の観察
講演者	ツトム・アカマツ教授（Tutomu Akamatsu, University of Leeds）

21世紀COE講演会	
日時	11月8日（月） 16:30～18:00
場所	研究講義棟（226号室）
題目	ヨーロッパの文化史について：ヨーロッパ言語地図からの洞察 On the cultural history of Europe Insights provided by the Atlas Linguarum Europae
講演者	ヴォルフガング・フィアエック教授 （Wolfgang Viereck, Otto-Friedrich University at Bamberg）

21世紀COE講演会	
日時	6月1日（火） 16:30～18:00
場所	語学研究所（419号室）
題目	カナダにおける心理・応用言語学の発展とその一例：日本語と英語の曖昧性 についての比較研究
講演者	ジョセフ・F・ケス教授 （Joseph F. Kess, University of Victoria, Canada）

2003 年度（2003 年 4 月～2004 年 3 月）

21 世紀 COE 講演会	
日時	10 月 9 日（木） 14：00～16：00
場所	語学研究所（419 号室）
題目	The Linguistics of Choice
講演者	フロリアン・クルマス教授 (Florian Coulmas, University of Duisburg, Germany)

研究会

2004 年度（2004 年 4 月～2005 年 2 月）

第 12 回研究会（共催 語学研究所）	
日時	2 月 28 日（月） 18：00～19：30
場所	語学研究所（419 号室）
テーマ	言語学班研究報告
題目	無生物 3 格に関する文意味構造と統語的傾向
発表者	時田 伊津子（東京外国語大学ドイツ語非常勤講師）
題目	状態変化動詞と使役交替
発表者	カン ミンギョン（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第 11 回研究会（共催 語学研究所）	
日時	2 月 4 日（金） 18：00～20：00
場所	語学研究所（419 号室）
テーマ	フィールド調査実施報告
題目	フィールド調査に関する報告－マレーシア
発表者	鶴沢 洋志（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	マドリードにおけるフィールド調査報告
発表者	結城 健太郎（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	モスクワフィールド調査の報告
発表者	恩田 義徳（東京外国語大学大学院博士前期課程） 佐藤 修（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第 10 回研究会（共催 語学研究所）	
日時	12 月 20 日（月） 18：00～19：30
場所	語学研究所（419 号室）
テーマ	発音モジュール・文法モジュール開発

題目	発音モジュール（理論編）デザインについて
発表者	杉山 香織（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	文法モジュール学内公開
発表者	林 俊成（東京外国語大学外国語学部助教授） 阿部 一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第9回研究会（共催 語学研究所）	
日時	12月1日（水） 18:00～19:30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	語彙モジュール開発
題目	ドイツ語語彙教材の開発
発表者	フランク・ミールケ（東京外国語大学ドイツ語客員助教授）

第8回研究会（共催 語学研究所）	
日時	10月7日（木） 18:30～20:30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	2004 PC Conference 報告
題目	他大学における語学学習用 e-Learning の実情や、Internet を利用したその他の取り組みに関する報告
発表者	山本 樹（東京外国語大学大学院博士前期課程） 成定 久美子（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第7回研究会（共催 語学研究所）	
日時	7月27日（火） 18:30～20:30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語教育学班（談話グループ）
題目	BTS (Basic Transcription System: 基本的な文字化の原則) による文字化資料作成の試演－日本語・英語・韓国語を中心として－
発表者	李 恩美（東京外国語大学大学院博士後期課程） 木林 理恵（東京外国語大学大学院博士後期課程） 木山 幸子（東京外国語大学大学院博士前期課程） 宇佐美 まゆみ（東京外国語大学外国語学部教授）

第6回研究会（共催 語学研究所）	
日時	7月23日（金） 18:30～20:30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語教育学班（談話グループ）
題目	「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」による文字化資料作成方法と『BTS による多言語話し言葉コーパス－日本語』の利用方法の一例の紹介

<b>発表者</b>	木林 理恵（東京外国語大学大学院博士後期課程） 李 恩美（東京外国語大学大学院博士後期課程） 木山 幸子（東京外国語大学大学院博士前期課程） 宇佐美 まゆみ（東京外国語大学外国語学部教授）
------------	---

第5回研究会（共催 語学研究所）	
<b>日時</b>	7月20日（火） 18：30～20：30
<b>場所</b>	語学研究所（419号室）
<b>テーマ</b>	言語教育学班（談話グループ）
<b>題目</b>	「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTJS）」の概要とその活用の可能性について
<b>発表者</b>	木山 幸子（東京外国語大学大学院博士前期課程） 木林 理恵（東京外国語大学大学院博士後期課程） 宇佐美 まゆみ（東京外国語大学外国語学部教授）

第4回研究会（共催 語学研究所）	
<b>日時</b>	5月31日（月） 18：00～20：00
<b>場所</b>	語学研究所（419号室）
<b>テーマ</b>	言語学班（通言語音声研究グループ） 2003年度研究成果報告 III
<b>題目</b>	発音モジュール基礎研究：音声・音韻構造の概説 スペイン語
<b>発表者</b>	木越 勉（東京外国語大学大学院博士後期課程）
<b>題目</b>	発音モジュール基礎研究：音声・音韻構造の概説 朝鮮語
<b>発表者</b>	呉 文淑（東京外国語大学大学院博士前期課程）
<b>題目</b>	発音モジュール基礎研究：音声・音韻構造の概説 ポルトガル語
<b>発表者</b>	牧野 真也（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第3回研究会（共催 語学研究所）	
<b>日時</b>	5月27日（木） 18：15～20：00
<b>場所</b>	語学研究所（419号室）
<b>テーマ</b>	言語教育学班（第二言語習得（英語）グループ）2003年度研究成果報告
<b>題目</b>	日本人英語学習者の学習者言語コーパス基礎調査・現状と今後の課題
<b>発表者</b>	植田 恵（東京外国語大学大学院博士前期課程） 西村 恵（東京外国語大学大学院博士前期課程修了）
<b>題目</b>	英語会話モジュール教材附属指導用手引きの開発（理論編） マニュアル作成にあたっての理論的枠組み
<b>発表者</b>	向井 緑（東京外国語大学大学院博士前期課程） 鶴沢 菜摘子（東京外国語大学大学院博士前期課程） 加藤 愛（東京外国語大学外国語学部）
<b>題目</b>	英語会話モジュール教材附属指導用手引きの開発（実践編） 練習問題及びマニュアルのデモンストレーション

発表者	向井 緑（東京外国語大学大学院博士前期課程） 鶴沢 菜摘子（東京外国語大学大学院博士前期課程） 加藤 愛（東京外国語大学外国語学部）
-----	--

第2回研究会（共催 語学研究所）	
日時	5月20日（木） 18：30～20：20
場所	研究講義棟3階（326号室）
テーマ	言語教育学班（第二言語習得（日本語）グループ）2003年度研究成果報告
題目	日本人学習者の言語学習ストラテジーとリソース
発表者	菊池 富美子（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	日本人学習者の言語学習ビリーフ
発表者	秋山 佳世（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	第二言語学習ストラテジー／ビリーフハンドブック（資料編）
発表者	野村 愛（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第1回研究会（共催 語学研究所）	
日時	4月2日（金） 13：00～14：30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語教育学班（評価研究グループ）2003年度研究成果報告
題目	発音モジュールの評価シート分析
発表者	藤原 愛（東京外国語大学博士後期課程）
題目	TUFS 言語能力記述モデル開発のための試み Common European Language Framework の研究
発表者	和田 朋子（東京外国語大学大学院博士後期課程）

## 2003年度（2003年4月～2004年3月）

第21回研究会（共催 語学研究所）	
日時	3月16日（火） 14：00～16：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語学班（通言語音声研究グループ）2003年度研究成果報告 II
題目	朝鮮語ソウル方言における統語的曖昧文とF0の下降現象
発表者	宇都木 昭（筑波大学大学院博士後期課程）
題目	フランス語の音声と音韻構造－TUFS・Pモジュール理論編－
発表者	中田 俊介（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第20回研究会（共催 語学研究所）	
日時	2月27日（金） 15：30～18：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語学班（コーパス研究グループ）2003年度研究成果報告 III
題目	ロシア語男性名詞複数主格・対格形のゆれについて－ウプサラ・コーパスをデータとして－
発表者	秋山 真一（東京外国語大学大学院博士後期課程）



題目	「nel'zja ne +動詞不定詞」という結合における動詞について—既存コーパスからのデータに基づいた再解釈—
発表者	阿出川 修嘉 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
題目	ロシア語の名詞 <i>нопа</i> と共起する不定形動詞の体について
発表者	小川 暁道 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

第19回研究会 (共催 語学研究所)	
日時	2月16日(月) 18:30~20:30
場所	語学研究所 (419号室)
テーマ	言語教育学班(談話グループ)2003年度研究成果報告 III
題目	親しい友人同士のコミュニケーション —日本人大学生による悪態を中心に—
発表者	関崎 博紀 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
題目	携帯電話の会話における開始部と終結部の日台対照
発表者	黄 瓊芸 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
題目	談話レベルからみた依頼に対する『断り』の言語行動について —日本人大学生と台湾人大学生との比較—
発表者	施 信余 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

第18回研究会	
日時	2月13日(金) 13:00~15:00
場所	フランス語共同研究室 (744号室)
テーマ	言語学班(コーパス研究グループ)2003年度研究成果報告 II
題目	マレー語のピボット動詞
発表者	野元 裕樹 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
題目	マレーシア語の状態詞に関する諸問題
発表者	鶴沢 洋志 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
題目	より効率的な言語研究を目的としたスペイン語コーパス開発
発表者	結城 健太郎 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
題目	フランス語のテキストにおける構文の種類とその頻度
発表者	小藤 紘稔 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

第17回研究会 (共催 語学研究所)	
日時	2月12日(木) 18:30~20:30
場所	語学研究所 (419号室)
テーマ	言語教育学班(談話グループ)2003年度研究成果報告 II
題目	接触場面におけるコミュニケーション調整行動 —日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話より—
発表者	金 銀美 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

題目	教師と学生のインターアクションにおける日本語とポーランド語の言語行動対照分析
発表者	カチマレク ミロスワバ（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	日本語の雑談における不同意の様相 ―会話教育への示唆―
発表者	木山 幸子（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第16回研究会	
日時	2月12日（金） 13:00～15:00
場所	英語共同研究室（615号室）
テーマ	言語学班（コーパス研究グループ）2003年度研究成果報告 I
題目	初期近代英語における命令仮定法― Shakespeare の場合―
発表者	浅井 千沙子（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	言語学に活用するためのコーパス検索システムの考察と構築―英語前置詞表現の観点からの活用例とともに
発表者	石井 康毅（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	中国語の受身文と自動詞文
発表者	伊藤 大輔（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	“EVENT <sub>1</sub> + 弄得 + EVENT <sub>2</sub> ”における”弄”のプロファイル機能―分析結果報告
発表者	山根 史子（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	現代北京語の“把”と“在”の共起関係について―動詞分類からの記述―
発表者	須藤 秀樹（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第15回研究会（共催 語学研究所）	
日時	2月5日（木） 18:30～20:30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語教育学班（談話グループ）2003年度研究成果報告 I
題目	台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用 ―コミュニケーション機能を中心に―
発表者	張 鈞竹（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態
発表者	林 君玲（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第14回研究会（共催 語学研究所）	
日時	11月28日（金） 18:00～20:00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語学班（通言語音声研究グループ）2003年度研究成果報告 I
題目	ロシア語の疑問文イントネーション
発表者	五十嵐 陽介（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	韻律的特徴によるフランス語文あいまい性の解消

発表者	中田 俊介 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
-----	--------------------------

第13回研究会 (共催 語学研究所)	
日時	10月16日(木) 18:30~20:30
場所	語学研究所 (419号室)
テーマ	言語情報学研究報告 IV
題目	技能シラバスに基づいた発音練習
発表者	藤原 愛 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
題目	Gモジュール: Web サイトコンテンツ設計案報告
発表者	阿部 一哉 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

第12回研究会 (共催 語学研究所)	
日時	10月9日(木) 18:30~20:30
場所	語学研究所 (419号室)
テーマ	言語情報学研究報告 III
題目	日本語の話し言葉のコーパスを整備する過程の検討
発表者	木林 理恵他 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
題目	日本語の自然会話データと TUFSD モジュールにおける談話行動の比較分析 — 会話教育教材の開発に示唆すること —
発表者	謝 韞他 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

第11回研究会 (共催 語学研究所)	
日時	10月3日(金) 18:00~20:00
場所	語学研究所 (419号室)
	言語情報学研究報告 II
題目	TUFS 言語モジュール 開発と評価—多言語 e-Learning 教材開発の場合—
発表者	阿部 一哉 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
題目	TUFS 言語モジュール—発音モジュールの開発
発表者	木越 勉 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

第10回研究会 (共催 語学研究所)	
日時	9月26日(金) 18:00~20:00
場所	語学研究所 (419号室)
	言語情報学研究報告 I
題目	多変量解析を用いたパリ周辺地域の標準語化の研究
発表者	鐘水 兼貴 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
題目	TUFS 言語ダイアログモジュール開発と評価—多言語汎用シラバスと機能シラバスの視点から
発表者	結城 健太郎 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

第9回研究会（共催 語学研究所）	
日時	7月17日（金） 19：00～20：30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	学習者プロファイリングとポートフォリオ評価の基礎概念
発表者	山森 光陽（国立教育政策研究所研究員）

第8回研究会（共催 語学研究所）	
日時	7月4日（水） 18：00～20：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語類型論
題目	Johanna Nichols, 'Head-marking and dependent-marking grammar'
発表者	拝田 清（アジア・アフリカ言語文化研究所研究生）
題目	文法記述のスコープを巡って－支配，依存関係を例に
発表者	峰岸 真琴（アジア・アフリカ言語文化研究所教授）

第7回研究会（共催 語学研究所）	
日時	6月4日（水） 18：00～20：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	TUFS 言語モジュール Dモジュール（試作版）
発表者	林 俊成（東京外国語大学外国語学部講師）
	長沼 君主（清泉女子大学文学部専任講師）
	阿部 一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）
	結城 健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第6回研究会（共催 語学研究所）	
日時	5月30日（金） 18：00～20：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	基本文法プロフィール研究Ⅲ
題目	中国語の基本文法プロフィール
発表者	須藤 秀樹（東京外国語大学大学院博士後期課程）
テーマ	自然言語処理
題目	日本語研究用ソフトウェアとその応用例
発表者	幸松 英恵（東京外国語大学博士前期課程）
	佐野 洋（東京外国語大学外国語学部助教授）

第5回研究会（共催 語学研究所）	
日時	4月21日（月） 18：00～19：30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	言語類型論
発表者	森口 恒一（静岡大学人文学部教授）

第4回研究会（共催 語学研究所）	
日時	4月18日（金） 18：00～19：30
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	発音モジュールの評価
発表者	藤原 愛（東京外国語大学大学院博士後期課程）

第3回研究会（共催 語学研究所，外国語教育学会）	
日時	3月19日（水） 17：00～20：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	基本文法プロフィール研究Ⅱ
題目	ロシア語の基本文法プロフィール
発表者	中澤 英彦（東京外国語大学外国語学部教授）
題目	通言語的視点
発表者	拝田 清（東京外国語大学大学院博士前期課程）
テーマ	基礎語彙研究
題目	基礎語彙と英語
発表者	浅井 千紗子（東京外国語大学博士前期課程）

第2回研究会（共催 語学研究所，外国語教育学会）	
日時	3月13日（木） 18：00～20：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	基本文法プロフィール研究Ⅰ
題目	スペイン語の基本文法プロフィール
発表者	宮下 和大（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	日本語の基本文法プロフィール
発表者	志波 彩子（東京外国語大学大学院博士前期課程）

第1回研究会（共催 語学研究所，外国語教育学会）	
日時	1月23日（木） 18：00～20：00
場所	語学研究所（419号室）
テーマ	文法・語彙モジュール開発
題目	文法・語彙モジュールの設計思想・開発スケジュール
発表者	川口 裕司（東京外国語大学外国語学部教授）

## 2002年度（2002年4月～2003年3月）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第6回）	
月日	10月31日（木）
場所	東京外国語大学研究講義棟

テーマ	TUFS Language Module 設計最終案
題目	Pモジュール最終設計案
発表者	木越 勉（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	Dモジュールにおける機能50とその分類枠組み
発表者	結城 健太郎（東京外国語大学大学院博士前期課程）
	松本 剛次（東京外国語大学大学院博士前期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第5回）	
月日	10月30日（水）
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その5）モジュール教材開発に向けて： 第二言語習得研究からの示唆
題目	学習者言語分析の変遷：その成果と第二言語指導にむけての示唆
発表者	吉富 朝子（東京外国語大学外国語学部講師）
題目	学習ストラテジー研究：その成果と第二言語指導にむけての示唆
発表者	海野 多枝（東京外国語大学外国語学部助教授）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第4回）	
月日	10月25日（金）
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その4）
題目	TUFS 言語モジュールにおけるシラバスデザイン
発表者	長沼 君主（東京外国語大学大学院博士後期課程）
題目	TUFS Pモジュールにおける音韻構造の導入
発表者	中田 俊介（東京外国語大学大学院博士前期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第3回）	
月日	9月25日（水）
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その3）
題目	語単位の音習得と他のモジュールとの関連について
発表者	齋木 博（東京外国語大学大学院博士前期課程）
題目	TUFS Dモジュール開発 試作版－サイトの構築と他のモジュールとの関連性－
発表者	阿部 一哉（東京外国語大学大学院博士後期課程）

東京外国語大学語学研究所定例研究会（第2回）	
月日	8月1日（木）
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究（その2）

題目	初級日本語教科書のシラバス分析と D モジュールの設定に関する考察
発表者	松本 剛次 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
題目	言語能力の発達段階の記述について
発表者	長沼 君主 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
	和田 朋子 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
	田中 敦英 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
	鷺見 賢一 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

東京外国語大学語学研究所定例研究会 (第 1 回)	
月日	6 月 26 日 (水)
場所	東京外国語大学研究講義棟
テーマ	TUFS Language Module 研究 (その 1)
題目	TUFS P モジュール開発に関する基礎研究
発表者	中田 俊介 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
題目	D モジュール開発のための場面シラバスと機能シラバスに関する基礎調査
発表者	結城 健太郎 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

東京外国語大学大学院地域文化研究科

## 21世紀COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」出版物

論文集

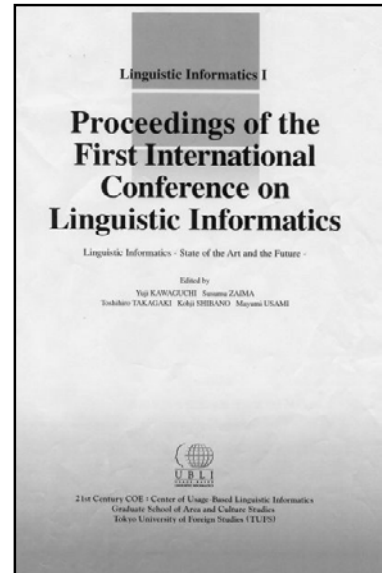
言語情報学 I

### Proceedings of the First International Conference on Linguistic Informatics

Edited by

Yuji KAWAGUCHI, Susumu ZAIMA,  
Toshihiro TAKAGAKI, Kohji SHIBANO,  
Mayumi USAMI

2003年10月発行



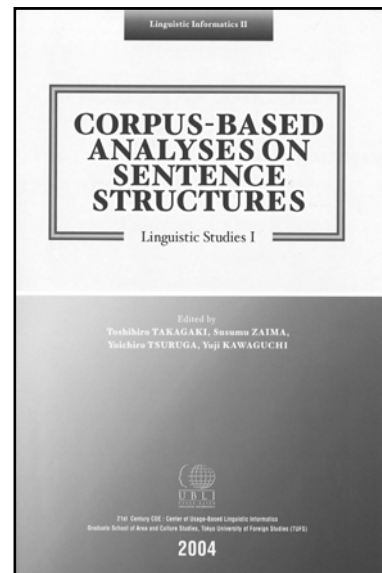
言語情報学 II

### Corpus-Based Analyses on Sentence Structures

Edited by

Toshihiro TAKAGAKI, Susumu ZAIMA,  
Yoichiro TSURUGA, Yuji KAWAGUCHI

2004年4月刊行





言語情報学 Ⅲ

The First International  
Conference on  
Linguistic Informatics

Edited by

Yuji KAWAGUCHI, Susumu ZAIMA,  
Toshihiro TAKAGAKI, Kohji SHIBANO,

Mayumi USAMI

2004年10月発行



## 研究報告集

言語情報学研究報告 1

### TUFS 言語モジュール

川口裕司, 芝野耕司, 峰岸真琴 (編)

2004年3月発行

1. IPA モジュール
2. 発音モジュール
3. 会話モジュール
4. 文法モジュール
5. 語彙モジュール



言語情報学研究報告 2

### 言語学・応用言語学・情報工学

川口裕司, 峰岸真琴 (編)

2004年3月発行

1. 言語学
2. 応用言語学
3. 情報工学



言語情報学研究報告 3

## コーパス言語学における構文分析

敦賀陽一郎，黒澤直俊，浦田和幸（編）

2004年8月発行

1. 中国語
2. マレーシア語
3. 英語
4. ロシア語
5. フランス語
6. スペイン語



言語情報学研究報告 4

## 通言語音声研究 I — 音声概説・韻律分析 —

川口裕司，森口恒一，斎藤純男（編）

2004年11月発行

1. 音声概説
2. 韻律分析



言語情報学研究報告 5

第二言語の教育・評価・習得

吉富朝子, 根岸雅史, 海野多枝 (編)

2004年12月発行

1. 教材開発
2. 評価
3. 第二言語習得
4. 資料編



言語情報学研究報告 6

自然会話分析と会話教育  
—統合的モジュール作成への模索—

宇佐美まゆみ (編)

2005年4月発行





---

言語情報学研究報告 6 2005年4月11日発行

発行： 東京外国語大学大学院 地域文化研究科  
21世紀 COE プログラム  
「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」  
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

編者： 宇佐美まゆみ

編集・校正： 木林理恵, 高森絵美, 蘇 玉萍

印刷： 三鈴印刷株式会社

---